

松山市埋蔵文化財調査年報 III

平成元年～2年度

松山市教育委員会
松山市立埋蔵文化財センター

松山市埋蔵文化財調査年報 III

平成元年～2年度

松山市教育委員会
松山市立埋蔵文化財センター



若草町遺跡出土重圈日光鏡

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センターが平成元年度・2年度に行った主な発掘調査の概要を収録した年報である。
2. 確認調査については、一覧表、付図にまとめた。
3. 各調査の報告は、調査担当者が執筆することを原則とし、文末に文責を記した。編集と調整は、田城武志の協力を得て栗田茂敏が行った。

4. 調査組織

松山市教育委員会	教 育 長 (前任)	平井 亀雄
	教 育 長	池田 尚郷
	参 事 (前任)	井手 治己
	参 事	古本 克
	次 長	井上 量公
	次 長	一色 正士
松山市教育委員会文化教育課	課 長	渡部 忠平
松山市立埋蔵文化財センター	所 長	森脇 將
	調査係長	西尾 幸則
	調査主任	田城 武志
	調査主事	栗田 正芳
	調 査 員	池田学、松村淳、栗田茂敏 梅木謙一、上田真、相原浩二 (前任) 宮崎泰好、丹下道一、藤原敏秀
	調査員補	宮内慎一、高尾和長、真木潔 河野史知、山本健一、大森一成 小笠原善治、水本完児、武正良浩

5. 整理作業等の協力者

大廻誠、加島次郎、工藤賢稔、高橋恒、玉出勝彦、宮脇和人、山本圭、吉浦正浩
今井芳美、小坂ゆかり、黒田令子、白石聖子、関正子、瀬戸恭子、仙波千秋、仙波ミリ子
高山直子、多知川富美子、中野祥子、丹生谷道代、丹生谷康恵、萩野ちよみ、檜垣芳江
藤井宏枝、藤沢真美、藤原利江子、松本美知子、丸山緑、水口あをい、緑尚美、森田利恵
森田晶子、森井美津子、矢野久子、吉井信枝、吉中美也子

6. ご指導、ご協力に感謝いたします。

愛媛大学 教授 下條 信行 氏、助教授 宮本 一夫 氏、助教授 平井 幸弘 氏
愛媛県立中央病院放射線部 渡部 昇 氏、 味口 博志 氏

7. 協力機関

奈良国立文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、愛媛大学考古学研究室

序

東西文化の交流に大きな役割を果たした瀬戸内海沿岸にあって、西瀬戸内でも最大規模の平野を有する松山市は、温暖な気候、風土に恵まれ、古くからの歴史的遺産の多い所であります。

近年の諸開発の波は、衰えを知らず、それに伴って発掘調査の件数も増加の一途をたどっているのは、ここ数年来、変わらぬ状況であります。このような状況下にありまして、調査成果の一端なりとも公開すべく、今回、『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』を刊行するはこびとなりました。

平成元年度・二年度には、松山大学構内遺跡や、若草町遺跡において、弥生時代から古墳時代にかけての集落、墳墓群が検出され、また、来住台地においては、数次の調査により、奈良時代の官衙遺跡群の様相が次第に明らかになりはじめるなど、大きな成果を上げることができました。本書には、その他にも、数多くの貴重な遺跡の調査成果が収録されております。本書が、多方面で活用され、文化財の保護、啓発のお役に立ちますようお願いしております。

最後に、調査にあたりまして、多大な御協力、御配慮を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成3年3月31日

松山市教育長

池田尚郷

本文目次

調査の概要	1
大淵遺跡 2 次調査地	2
座拝坂遺跡	4
金毘羅山遺跡	6
山越遺跡 1 次調査地	8
山越遺跡 2 次調査地	12
山越遺跡 3 次調査地	14
朝日谷 1 号墳	16
辻遺跡 2 次調査地	18
御産所権現山遺跡	20
古照遺跡第 5 次調査	24
若草町遺跡	26
道後今市遺跡 6 次調査地 (平形銅剣出土推定地)	32
松山大学構内遺跡 2 次調査地	44
祝谷本村遺跡	46
桑原西稲葉遺跡 1 次調査地	50
桑原西稲葉遺跡 2 次調査地	54
経石山古墳 1 次調査	56
榎田遺跡	58
七ノ坪遺跡	60
釜ノ口遺跡 7 次調査地	63
西天山遺跡	66
星岡登立遺跡	68
筋違 G 遺跡	70
筋違 H 遺跡	72
筋違 I 遺跡	76
福音小学校構内遺跡	78
繁成分遺跡	80
中ノ子 I 遺跡	82
今在家遺跡	84

古屋敷遺跡C調査地	86
鷹ノ子遺跡1次調査地	90
鷹ノ子新畑遺跡	94
来住町遺跡2次調査地	96
来住町遺跡3次調査地	98
南久米片廻り遺跡2次調査地	102
開遺跡	104
久米高畑遺跡8次調査地	106
久米高畑遺跡9次調査地	110
久米高畑遺跡13次調査地	112
来住廃寺8次調査地	116
久米官衙遺跡群	118
付編 松山市埋蔵文化財関係資料	130
昭和63年度確認調査一覧	130
平成元年度確認調査一覧	131
平成2年度確認調査一覧	134
平成元年・2年度本格調査一覧	136

図 版 目 次

巻頭図版 若草町遺跡出土重圈日光鏡

図版1 座拝坂遺跡 調査地全景（西より）

遺物出土状況

図版2 山越遺跡2次調査地 調査地全景（北より）

溝SD-2 鍬出土状況

図版3 山越遺跡3次調査地 北区旧河川調査状況

出土土器

図版4 朝日谷1号墳 1号墳横穴式石室

1号墳石室内遺物出土状況

図版5 経石山古墳1次調査 周溝とピット検出状況（西方上より）

周溝とピット検出状況（北西上より）

周溝内遺物出土状況（東方より）

柵列検出状況（西方より）

図版6 御産所権現山遺跡(1) 1号墳横穴式石室（閉塞石撤去後、西より）

3号墳横穴式石室（南より）

図版7 御産所権現山遺跡(2) 1号墳出土脚付子持広口壺・蓋

1号墳出土須恵器

図版8 若草町遺跡(1) 調査地西部（南西より）

円形周溝 S D—24

図版9 若草町遺跡(2) 壺棺群検出状況

重圈日光鏡 X線写真

図版10 七ノ坪遺跡 調査地全景（東より）

S D—1 土層断面（東より）

図版11 釜ノ口遺跡7次調査地 調査地全景（東より）

S B—1 完掘状況

図版12 西天山遺跡 調査地東半（南東より）

調査地西半（南東より）

図版13 星岡登立遺跡 掘立柱建物 S B—1、S B—2（東より）

掘立柱建物 S B—3（西より）

図版14 福音小学校構内遺跡(1) 1区方形竪穴住居址群（南より）

1区 S K—29遺物出土状況

図版15 福音小学校構内遺跡(2) 5区壺棺出土状況

子持勾玉出土状況

図版16 筋違G遺跡 竪穴住居址 S B—2（西より）

竪穴住居址 S B—1・3・4（南より）

図版17 筋違H遺跡 調査地北部遺構検出状況

調査地全景（東より）

図版18 筋違I遺跡 調査地全景（北西より）

掘立柱建物1（北西より）

図版19 繁成分遺跡 集石遺構 S X—2（北西より）

S K—1 遺物出土状況（東より）

図版20 中ノ子I遺跡 調査地近景（南より）

調査地近景（北より）

図版21 今在家遺跡 S B—1（南より）

S K—2、S D—3（北より）

- 図版22 鷹ノ子遺跡 1次調査地 SK—3出土和鏡
東区完掘状況(西より)
- 図版23 来住町遺跡 2次調査地 調査地全景(南より)
調査地北東部(南東より)
- 図版24 来住町遺跡 3次調査地 調査地全景(北より)
SX—1(東より)
- 図版25 南久米片廻り遺跡 2次調査地 包含層の掘り下げ
遺構検出状況(西より)
- 図版26 開遺跡 調査地全景(東北より)
SK—1遺物出土状況
- 図版27 久米高畑遺跡 9次調査地 調査地全景(北より)
SK—7遺物出土状況(東より)
- 図版28 久米高畑遺跡13次調査地(1) A区全景(東より)
B区全景(東より)
- 図版29 久米高畑遺跡13次調査地(2) SK—19遺物出土状況(西より)
SK—20遺物出土状況(西より)
- 図版30 久米官衙遺跡群(1) 正殿の建物(回廊状遺構内北中央部)
遺物出土状況(正殿的建物)
- 図版31 久米官衙遺跡群(2) 回廊状遺構区画C地区(平成元年度寺域調査)
回廊状遺構区画B地区(平成元年度寺域調査)
- 図版32 久米官衙遺跡群(3) 来住廃寺寺域調査D地区(平成元年度)
柵列区画地内の掘立柱建物(久米高畑遺跡第11次調査地)
- 図版33 久米官衙遺跡群(4) 遺物出土状況(久米高畑遺跡第11次調査地)
柵列と掘立柱建物(久米高畑遺跡第11次調査地)
- 図版34 久米官衙遺跡群(5) 久米高畑遺跡第10次調査地
西北隅部区画溝(久米高畑遺跡第10次調査地)
- 図版35 久米官衙遺跡群(6) 柵列と雨落ち溝(久米高畑遺跡第12次調査地)
久米高畑遺跡第20次調査地(北面)
- 図版36 久米官衙遺跡群(7) 遺物出土状況(久米高畑遺跡第20次調査地)
久米高畑遺跡第20次調査地(南面)
- 付図1 平成元年・2年度本格調査位置図
- 付図2 昭和63年・平成元年度確認調査位置図
- 付図3 平成2年度確認調査位置図

平成元年～2年度の調査概要

調査状況は右表が示す通りである。元年度の本格調査件数に対して2年度が減少しているが対象面積はほぼ同じである。届出要因ではマンション建設が最も多く、市街地での再開発されるケースも出始める傾向にある。開発規模的には宅地造成、公園建設、道路建設、学校建設、下水施設の順である。

埋蔵文化財調査状況

年度	種別	申請件数	試掘	立会	本格調査	面積 m ²
平成元年度	民間	131	70	43	29	95,031
	公共	57	20	25	21(10)	55,814
	計	188	90	68	50	150,845
平成2年度	民間	80	32	28	14	134,342
	公共	17	2	11	5(1)	17,463
	計	97	34	39	19	151,805

()内は国補事業

調査体制面では平成元年10月31日に同市立埋蔵文化財センターが発足し、埋蔵文化財の調査、研究並びに付属考古館による普及、啓蒙事業に対応する施設整備が計られた。

調査成果面では、重要遺構、遺物が相次いで発見された元年度に対し、2年度では、過去の調査や近接地調査との関係による成果が一部解かり始めた他、数冊の報告書出版により一端の責を果たしたことである。これらは調査員数等の体制上に問題があった中で調査担当者のためまめ努力の結晶と言える。本書についても同様である。調査の詳細は個々の報告を参照いただきたい。

概 察

松山平野北部では、大淵2次調査で同遺跡の広がりと共に後期～晩期後半にかけての土器帰属層位の確認がされたことや、谷町、平田地区においては座拝坂遺跡など初めての正式調査により弥生後期～古墳期にかけての集落存在が確認された。

道後城北地域では、松山大学構内Ⅱ次調査により弥生中期～古墳期の住居址が検出され、城北遺跡群の範囲や展開状況の確認、交流背景など新知見の他、後期土器編年の基礎資料となった。若草町遺跡からは同遺跡群にかかる弥生後期の集団墓の一形態が明らかとなると共に、前漢代の中国鏡「重圈日光鏡」出土は有力者の墓やその存在が示唆された。その他、本村遺跡調査では祝谷山間部での中期遺跡の広がりを確認し、山越1～3次調査では弥生前期の遺構や古墳期住居址を検出し、同地区初めての正式調査による新知見を得た。

城西地域では古照遺跡5・6次調査により、堰の周辺環境が解かり始めると共に、その上層にあたる南江戸くじゅめ目遺跡からは、13世紀代の一括遺物や集落存在の確認を得た。御産所権現山古墳調査からは、同群集墳の実態を含め後期古墳築造方法の一端に迫った。

桑原地域では、四反地遺跡や西稲葉遺跡からの始良火山灰検出を含め弥生後期～古墳期にかけて集落の広がりを確認し、経石山古墳では同古墳の後円部規模がほぼ明らかとなった。

久米・来住地域では、来住台地で近接地調査等の相互関係により官衙関係遺跡の一端が解かり始めた。福音寺地区では、福音小構内遺跡から古墳期の一大集落が検出され、前者の前時代背景を含め集落構造の手がかりを得た。

(西尾幸則)

大淵遺跡 2次調査地

1. 所在地 松山市太山寺町甲
474-3

2. 調査年月日 平成元年6月7日～
7月3日

3. 調査面積 251m²

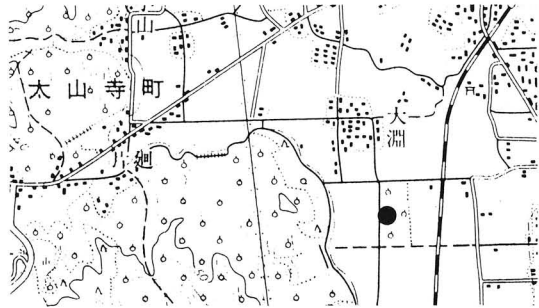


図1 調査地位置図

経過 本調査は、大淵遺跡内における宅地開発に伴う事前調査である。昭和62年度に当教委により調査された大淵遺跡においては、縄文晩期の遺物を包含する暗褐色粘質土が検出されている。本調査区は、大淵遺跡（現松山北中学校構内）東側中央に隣接し、標高3.5mに立地する。

遺構・遺物 本調査区は、茶褐色粘質土をベースに調査区中央から東に落ち込み、東壁際で若干上がる湿地状地であった。基本層序は図2である。遺構は、調査区北西部にてピット状の遺構を1基検出したのみである。遺物は、縄文後期の土器が第6層から第8層にかけて出土した。主に波状口縁の深鉢で、棒状工具による沈線文、摩消縄文系の施文を有する土器が第6層下から第7層にかけて多く出土している。縄文晩期の土器では、口縁端部に刻目突帯を施した深鉢の小片を1点出土している。又、第4層からは中世の土鍋の脚部を出土している。なお石器類は、第6層から第7層にかけてサヌカイト剥片、姫島産黒曜石の剥片が出土している。

小結 本調査における第6層以下が大淵遺跡（注1、注2文献）の基本層序第6層以下に相応する可能性があり、石手川の沖積作用によって形成された当地域を考える上での好資料となるものである。

注1 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 注2 『日本考古学年報40』 日本考古学協会1987

(武正良浩)

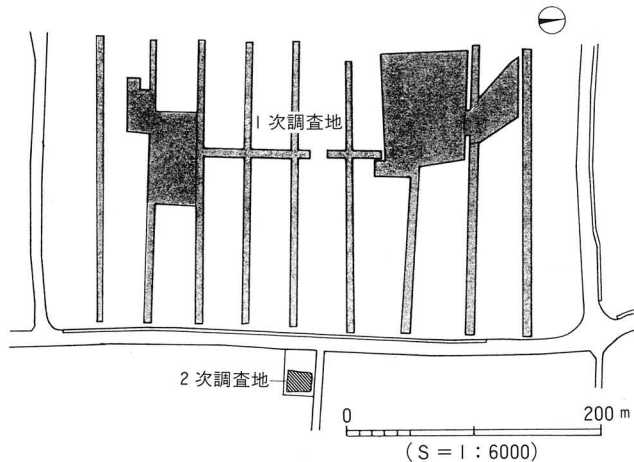
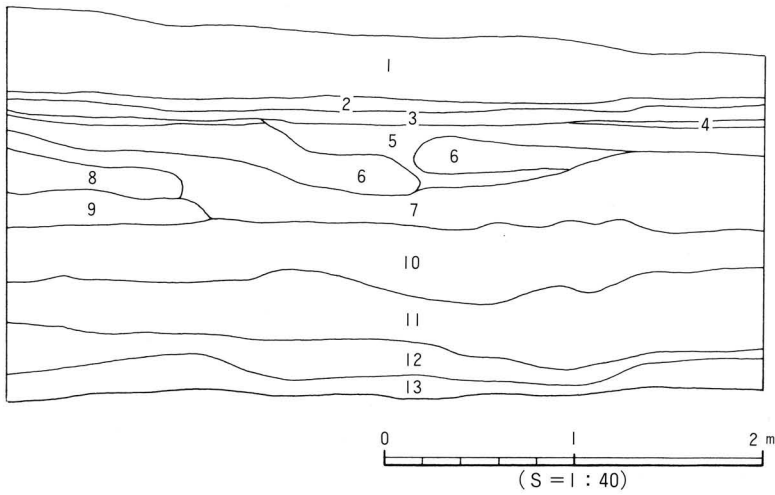


図2 1次調査と2次調査

H 4.50m



1. 耕作土 2. 床土 3. 灰褐色粘質土 4. 灰褐色砂質土 5. 乳灰褐色砂質土 6. 灰色砂質土 7. 茶褐色粘質土(遺構検出面)
8. 暗茶褐色粘質土 9. 乳灰色砂質土 10. 明灰褐色砂質土 11. 乳灰褐色微砂 12. 乳灰色粘質土 13. 緑灰色砂質土

图3 北壁土层图

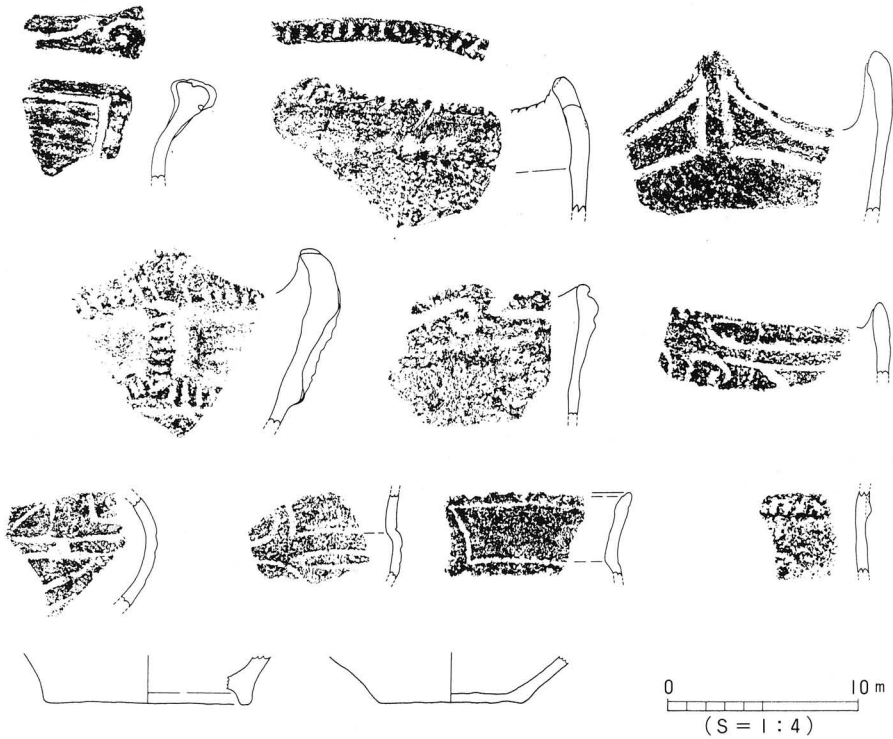


图4 出土遺物実測图

座^ざ押^い坂^ざ遺跡

1. 所在地 松山市谷町325-1
・326-1
2. 調査年月日 平成元年11月21日～
12月28日
3. 調査面積 995m²



図1 調査地位置図

経過 当調査は、宅地化申請に伴い、市教委が平成元年8月に試掘調査を行った結果に基づくものである。当地域は松山平野の北部にあって、吉藤、志津川、長戸、平田町に隣接し、東西にのびる低丘陵を背景にした住宅地である。調査地は、丘陵最西端の標高18mの南裾部に位置する。南西には独立丘陵室岡山があり、その中腹部の蓮華寺には出土地不詳ながら県内唯一の刳抜舟形石棺の身部が所在している。山頂を巡る下の坂道が座押坂と呼称されるところから遺跡名をザワイ坂とした。

遺構・遺物 検出された遺構は弥生時代後期の住居址1棟、古墳時代掘立柱建物址2棟、土壙2基、柱穴40余である。SB-1は斜面に検出された3×4間(4.7m×7.0m)の東西棟で、周囲には小柱穴が多くみられた。SB-2は1×2間(2.2m×5.4m)分が検出されている。SB-3は方形竪穴住居址で、床面から不規則な柱穴5基と、中央部には炉址が検出された。更にこれより南3mに焼土が検出された。住居址内より弥生時代後期後半の甕、長頸壺、鉢、碗、器台などが一括出土している。又、鉄製紡錘車が出土しており注目される。

小結 以上の遺構、遺物の他、包含層よりの出土であるが、弥生前期中葉の良好な遺物の出土もみており、古く前・中期の遺物を出土した潮見遺跡や、同年度調査の平田町金毘羅山遺跡等の例ともあわせて、特に弥生時代に関しては、あらためてこの地域に注目しておく必要がある。

(松村 淳・山本健一)

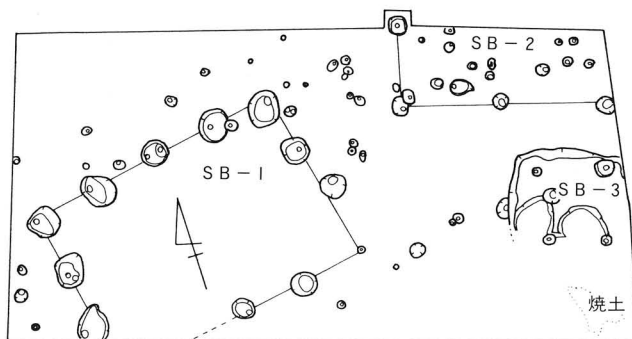
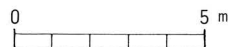


図2 遺構配置図



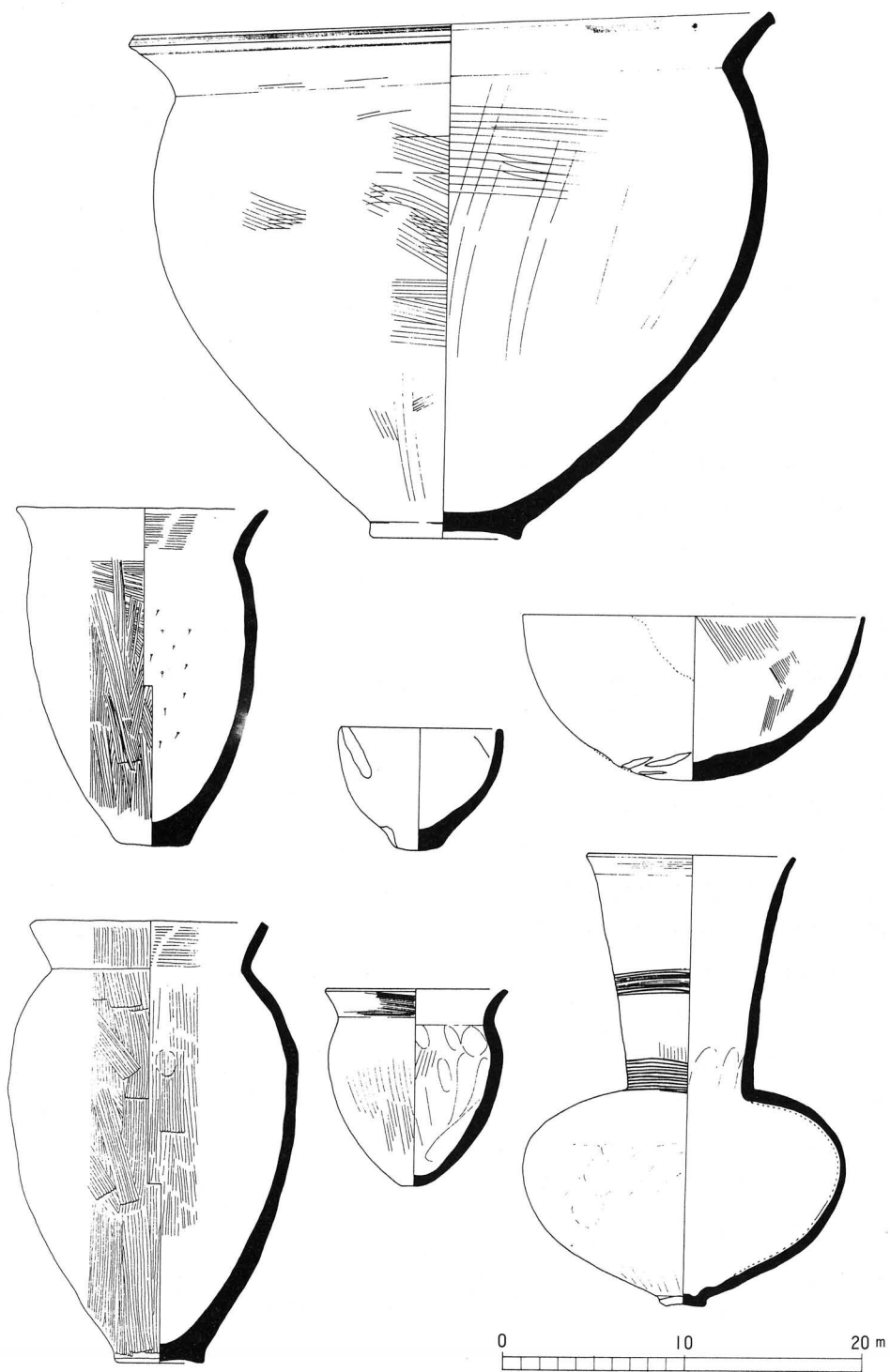


图3 SB-3出土器物

金毘羅山遺跡

1.所在地 松山市平田町824-1・2

2.調査年月日 平成2年1月18日～

4月3日

3.調査面積 1,100㎡

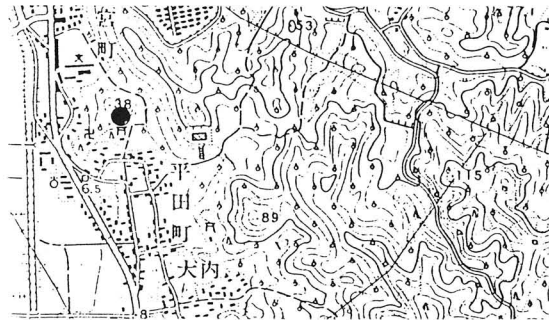


図1 調査地位置図

経過 本調査は、松山市が行う平成2年度の公園整備事業にともなって行われた事前調査である。市街地より約8km、松山平野の北東部、高縄山系分岐丘陵裾部の平田町北端には、金毘羅宮と常福寺が所在している。調査地は、その北、裏山低丘陵の南裾、標高29mに位置する。

遺構・遺物 遺構は、墳丘4基、竪穴式住居址3棟、土壙8基が検出された。墳丘部は全て大きく削平をうけており、主体部の確認はできなかったが、1号～3号墳には、一部盛土の残存が確認され、4号墳は周溝の一部と思われる溝が検出され、墳丘部と判断したものである。SB-1は、1号墳西に隣接して検出された、推定規模一辺3mの隅丸方形竪穴式住居址で、周壁溝を持っている。遺物の出土はなかった。SB-2・3は、墳丘盛土下層の地山面で検出されたものである。いずれも北側地山面をL字カットし、周壁溝を巡らすもので、SB-2は一辺3.5m推定の隅丸方形竪穴式住居址である。床面中央部には2本の柱穴が検出され、周溝内より弥生時代後期の壺、甕、鉢、支脚、石錘が出土した。SB-3は一辺4.5mの隅丸方形竪穴住居址が想定でき、床面より石庖丁1点が出土したが、柱穴は検出されていない。土壙8基はSB-2周辺に多く検出された。うち、SK-6は楕円形を示し、床面西より弥生後期後半の二重口縁壺の上半部が出土している。

小結 調査地周辺の発掘例は、さほど多いとはいえないが、弥生前期から後期にかけての遺物の出土例は、山麓部を中心に、南方2km～3kmの潮見遺跡や宮ノ谷遺跡等に散見されている。沖積低地を眼前にひかえた丘陵南西斜面という当遺跡の立地から見れば、弥生後期に限らず、更に幅広い期間の生活址の面的なひろがりも十分に推測される。高縄山系南西裾部一帯には、今後も注目しておく必要がある。(松村 淳・山本健一)

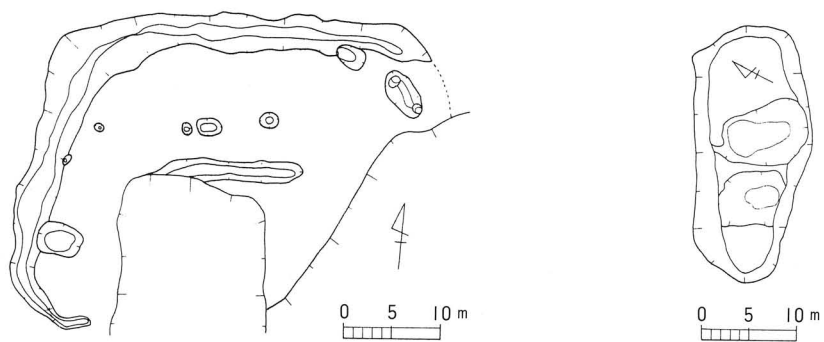
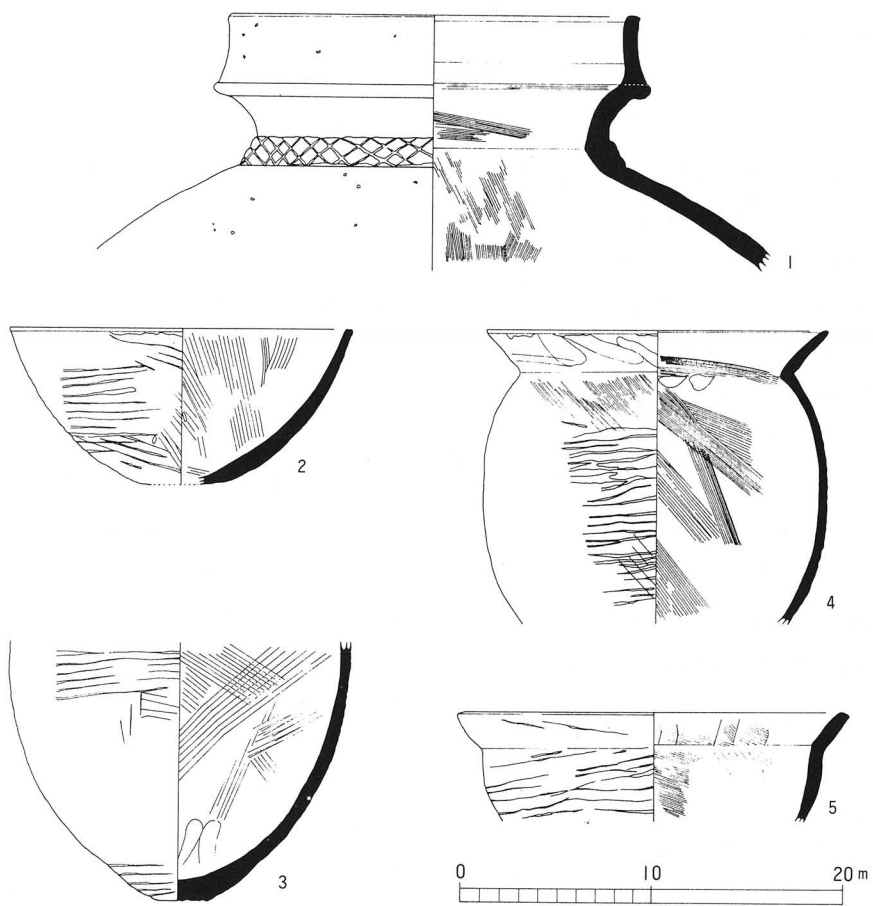


图2 遺構配置図



1 SK-6, 2・3・5 SB-2, 4 包含層

图3 遺物実測図

山越遺跡 1 次調査地

1. 所在地 松山市山越 1 丁目
267-1
2. 調査年月日 平成元年 3 月 27 日～
4 月 19 日
3. 調査面積 200m²

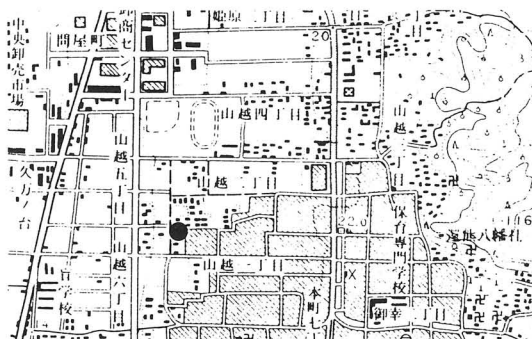


図 1 調査地位置図

経過 本調査は、山越遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。山越遺物包含地は高縄山系と太山寺山塊に挟まれた石手川旧流路右岸の沖積低地上にある。本調査地北東 2.5km には潮見遺跡（弥生前期後半～中期）又、北東 1.8km には宮ノ谷遺跡（弥生中期中葉～後期）がある。本調査区は、標高 17m に位置する。

遺構・遺物 本調査区は、現在の地名より遺跡名を山越遺跡 1 次とする。調査区は、以前は耕地整備された水田であり、その後客土が入れられた造成地であった。基本層序は（図 2）、第 I 層が造成土、第 II 層が耕作土、第 III 層が水田床土であり地表下 70cm までは開発が進められていた。第 IV 層は暗灰褐色土で 20～25cm の堆積を測る。本層が遺物包含層である。第 V 層は明灰色土で地山と呼んでいるものである。遺構は、第 IV 層中からの掘り込みであり、第 V 層におよんでいる。検出遺構は、竪穴住居址（古墳前期）1 棟、掘立柱建造物 3 棟、柵状遺構 2 条、土壇 7 基、溝状遺構 3 条、ピット 68 基、井戸（中世）を確認した。このうち掘立柱建造物 S B-3 は柱穴の一部を布掘りされている。出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、石器（石斧 2 点、石鏃 1 点）、フレイク（大分県姫島産黒曜石 1 点）等がある。又、井戸（中世）内から曲物が出土している。

1 号住居址 S B-1（図 4）は、調査区北東にて検出された。本住居址と S B-3 は重複関係にあり S B-3 が先行する。平面形は、ほぼ方形で東西 5.5m × 南北 5.3m である。壁高 1.5～7.4cm を測るが、耕作時の削平を受けているものと思われる。本住居址に伴う主柱穴は 3 基を確認しており、柱穴間は 2.6m～2.8m を測る。出土土器より当住居址は古墳時代中期に位置づけられるものである。

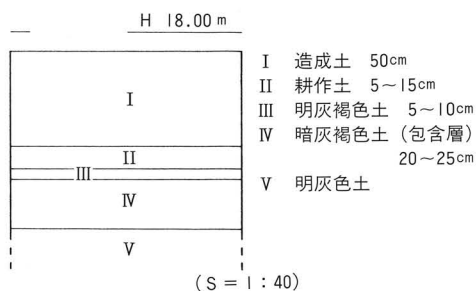


図 2 基本層序

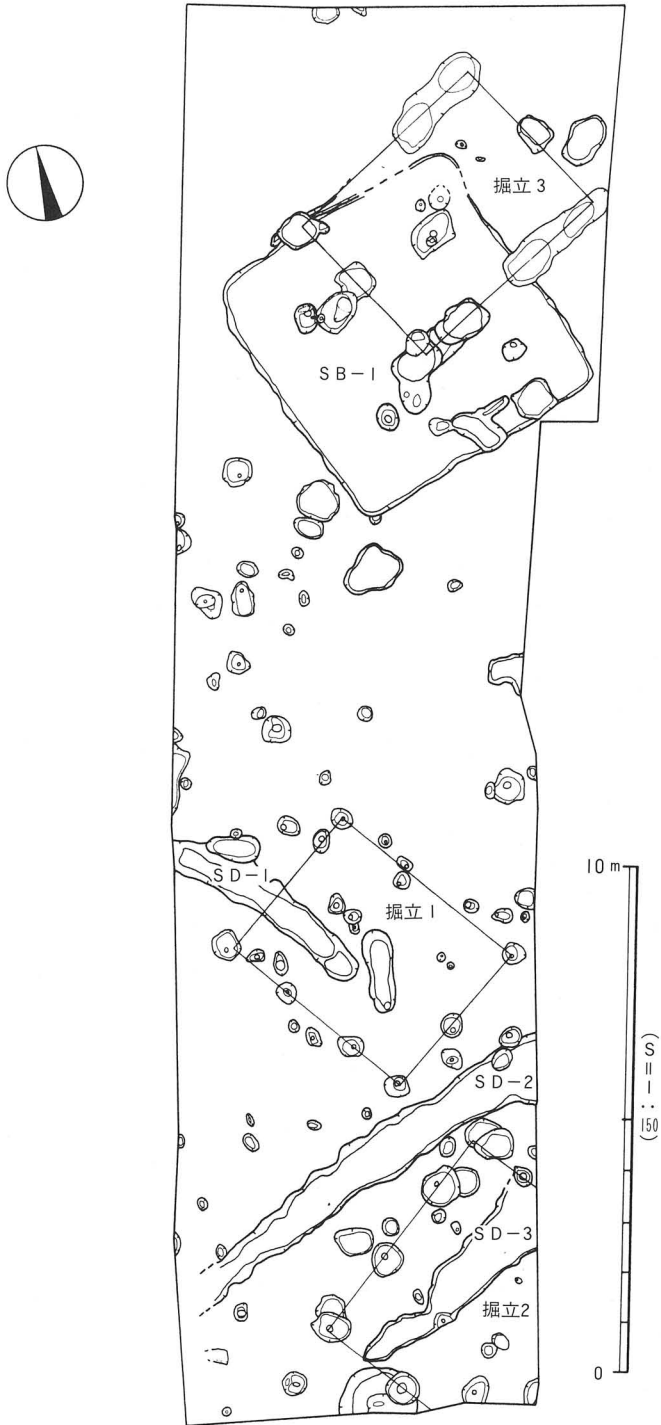


図3 遺構配置図

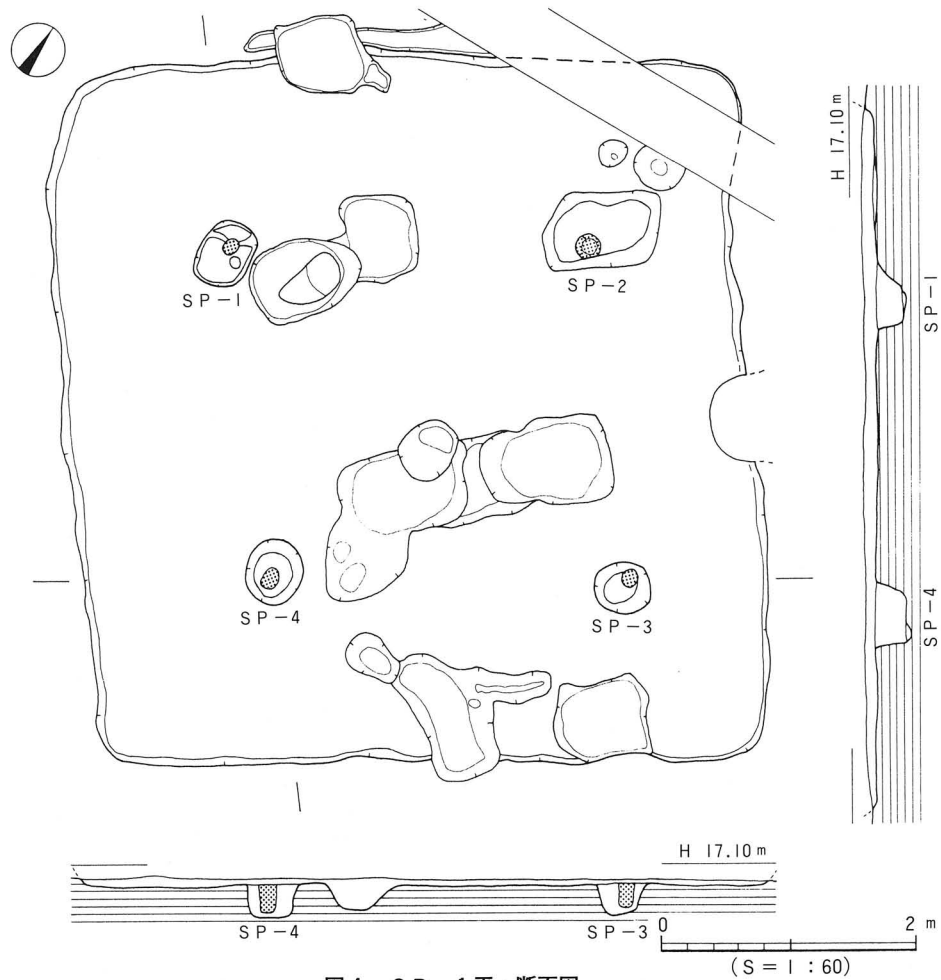


図4 SB-1平・断面図

小結 本調査により、調査対象区北端から北に向いて段落ち際を確認した。この事により当調査地が微高地上に立地し、集落を営んでいたと思われ、北側の低地を水田耕作に利用した可能性が強い。山越において古墳時代の集落址が確認できた意義は大きい。又、弥生時代前期から中世にかけての遺物が出土している事から、これからの周辺地域の調査、整理に期待したい。

(武正良浩)

表1 掘立柱建物一覧表

建物 番号	規模 (間)	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	備考
		実長(cm)	柱間寸法(cm)	実長(cm)	柱間寸法(cm)		
1	3×2	430	144・168・117	345	150・195	14.84	
2	3×(1+α)	480	132・174・174	260	186・72		一部未検出
3	3×2	456	111・173・172	350	200・150	15.96	

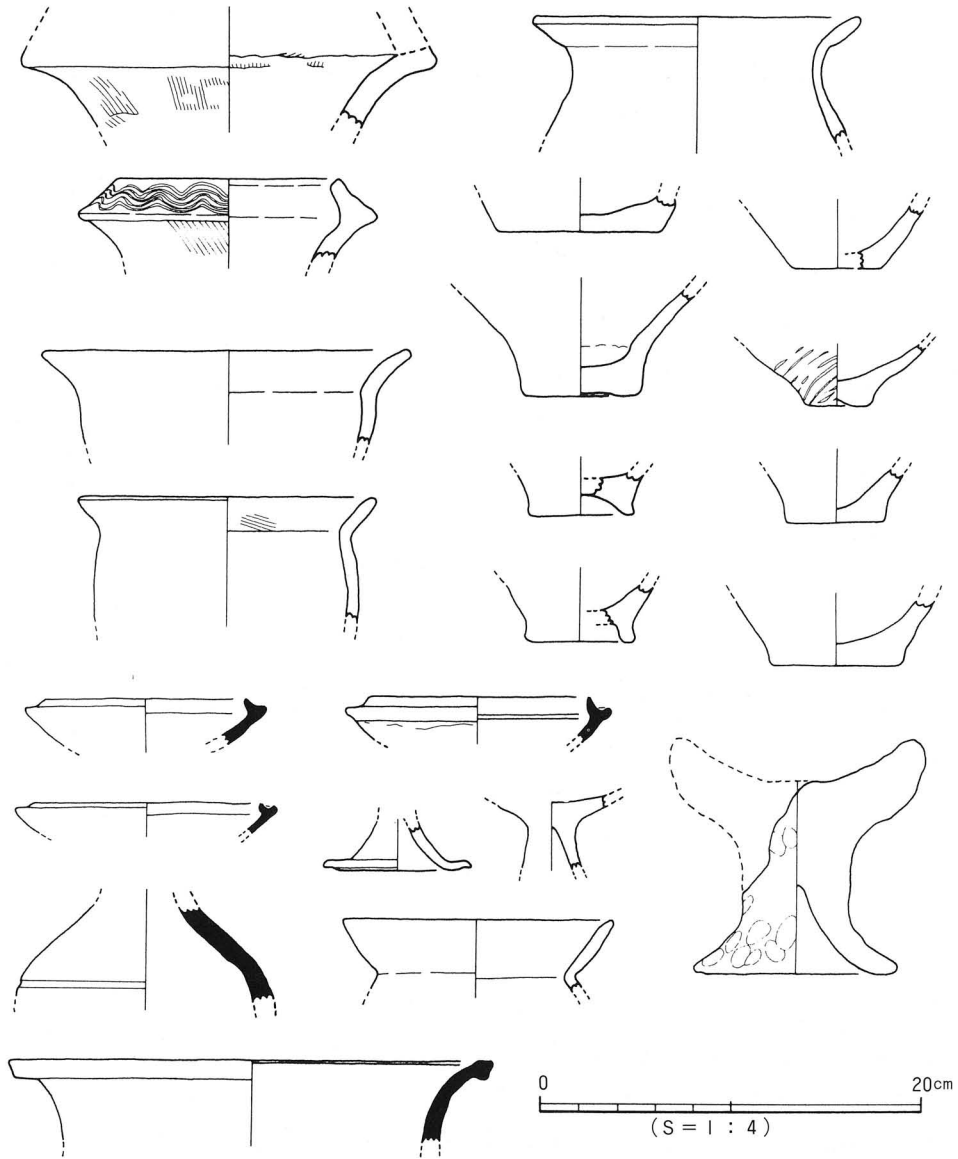


図5 出土遺物実測図

山越遺跡 2 次調査地

1. 所在地 松山市山越 1 丁目

314-1 他

2. 調査年月日 平成元年 4 月 3 日～

4 月 25 日

3. 調査面積 2,796m²

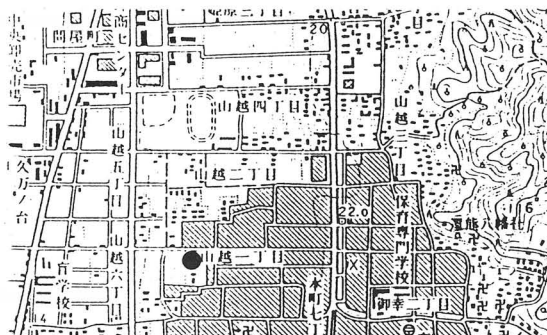


図 1 調査地位置図

経過 平成元年度は山越遺物包含地内における民間による小規模な開発に伴う調査を 3 件行っている。それぞれ、1 次、2 次、3 次調査地としているが、これらの調査地は互いに近接、または隣接しており、海拔 18m 前後の沖積低地に立地している。

遺構・遺物 層序は上より、第 1 層造成土 (30cm)、第 2 層旧耕土 (20cm)、第 3 層水田床土 (5cm)、第 4 層黄灰褐色粘質土 (30cm)、第 5 層暗灰色粘質土 (5~20cm)、第 6 層黒灰色粘質土 (10~30cm) の順になっている。このうち、第 5 層には弥生土器、須恵器を、第 6 層には弥生土器を包含していた。

検出された遺構は、溝 5 条であった。北から順に S D-1 から S D-5 までの 5 条であるが、これらのうち S D-5 を除いた 4 条は自然流路であり、溝底には細砂が堆積していた。流路は、いずれも北東から南西方向に平行して形成されているが、流れの方向までの確認はできなかった。S D-2 は、幅約 3m、深さ 50cm と最も規模が大きく、弥生前期中葉の土器類、有茎磨製石鏃とともに平鍬を出土している。S D-5 は、調査地南端で直角に曲るプランで検出された。この溝は、他の流路の埋土が砂であるのと異って、黒灰色粘質土の埋土であり、人為的に掘削された溝であると思われる。

小結 流路 S D-2 では、比較的良好な弥生前期の一括遺物を出土した。甕には、緩く外反する口縁端部に刻み目を施し、口縁下にヘラ描沈線を 1 条ないし 2 条巡らせるものと、沈線を伴わないものがある。壺は、頸部と体部中位にそれぞれ 2 条、3 条の沈線を施されるもの、肩部にヘラ描木葉文、重弧文を持つもの等がある。また、肩部に焼成後に帯状の朱彩を施されるものがある。有茎磨製石鏃は、鏃身部の破片であるが、鏃の稜はあまく、横断面は紡錘形を呈している。これらの遺物とともに、平鍬の出土をみたことが、今回の調査の大きな成果であった。全長 37.0cm、刃部幅 22.0cm、基部幅 21.0cm を測り、基部付近に 13.0×6.8cm の舟形隆起を造り出し、径 4cm の柄孔を斜めに穿っている。木取りは征目取りである。弥生時代の木製農具の出土例自体、松山平野では数少なく、前期土器類とともに貴重な資料である。

(山本健一・栗田茂敏)

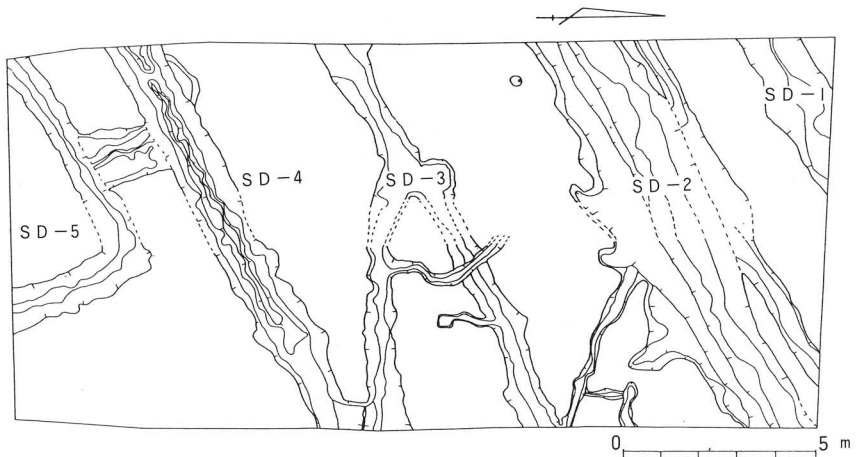


图2 遺構配置図

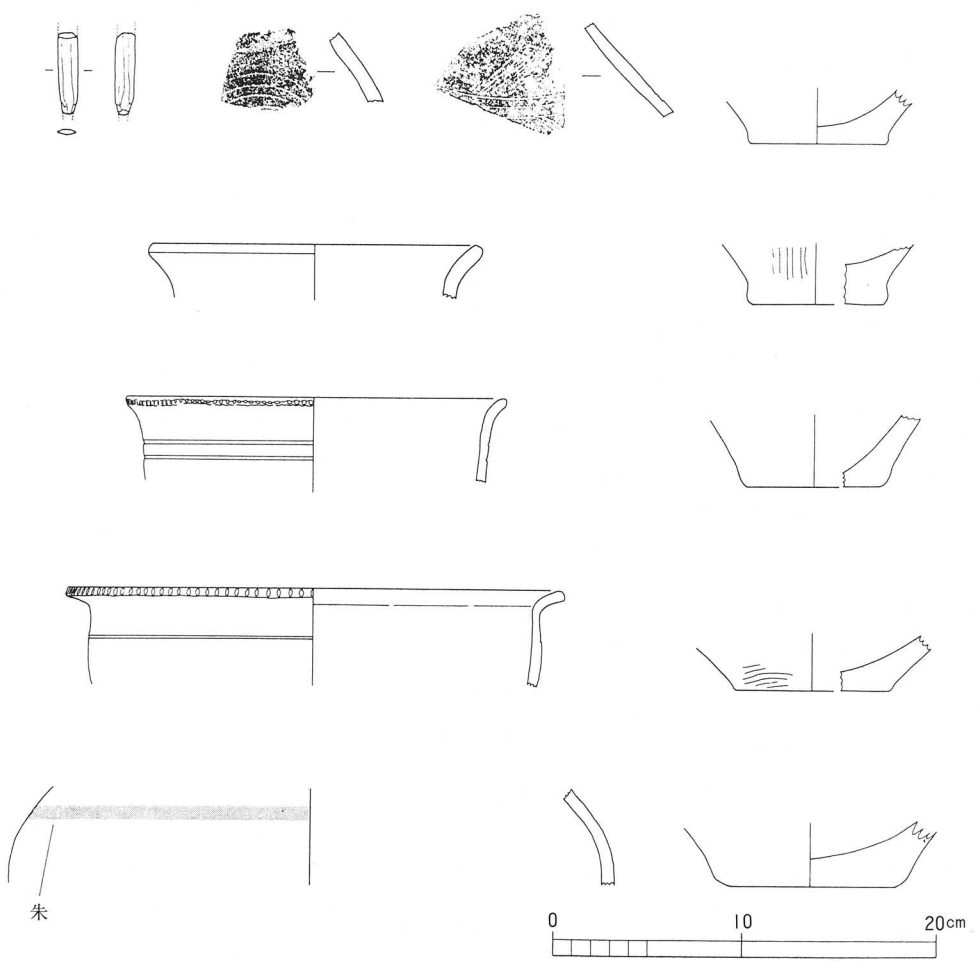


图3 SD-2 出土遺物実測図

山越遺跡 3次調査地

1. 所在地 松山市山越1丁目
268-1
2. 調査年月日 平成元年11月20日～
平成2年1月13日
3. 調査面積 367㎡

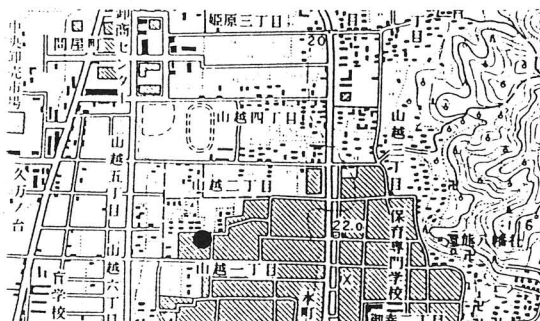


図1 調査地位置図

経過 本地点は松山市埋蔵文化財包蔵地地図所載の山越遺物包蔵地内に当たり、隣接または近接する2次・1次調査地点では、弥生時代及び古墳時代の遺構・遺物が検出されている。今回、株式会社ミツフ都市開発より共同住宅建設の申請が出され、試掘調査を行ったところ弥生時代の遺物の包含層が認められ、現状保存が望まれたが、協議の結果調査が行われることとなった。

遺構・遺物 調査は排土置き場確保の必要から発掘区を北・中央・南の3地点に分け、前後2期に分けて行った。検出された遺構は、中央区で土壇1基（SK-1）、溝状遺構、旧河川、南区でピット群、北区で土壇2基（SK-2、SK-3）、旧河川である。更にその上層の田造成土直下では、幅0.8～1m、厚さ10cm程度で、東北—南西方向に走る帯状の白色砂質土層が中央区と北区で各々検出されたが、土器碎片を多量に含み、後世の造成によるものと思われる。また、中央区北側は遺構の重複が著しくプランを確認できなかった。

出土遺物は小片が多いうえに量が少なく、全形の1/4程度まで復元できるものさえ皆無であったが、そのなかで、SK-2出土の壺形土器底部1、SK-2出土の台付鉢形土器3、北区確認面出土の甕形土器5は、10～80cm離れて出土した土器片が接合して比較的まとまるものであった。1は円板状に突出する底部から体部が直線的に立ち上がる壺形土器で内外面磨かれ、外面は赤彩が施される。3は台付鉢形土器と思われるが、器部が小さくて脚が高く、形態だけを見ると畿内第I様式の高坏に近い。5は砲弾形を呈する甕形土器で、外面に縦方向のヘラ削りが施されるものである。2は直径が3cm弱の土玉であるが、両側から穿った孔が食い違っており貫通していない。4は複合口縁の壺形土器口縁部で、外面は赤彩されている。この他、土器では弥生時代中期の貼付け突帯や凹線文を持つもの、石器では石庖丁や磨製石斧の破片が見られた。

小結 以上のような本調査地点は、集落や生産場のような当時の人々の主要な生活の場ではなかったと思われる。しかし、少量とは言え、何らかの活動の跡を示す遺構・遺物の出土が見られ、縁辺部も含めた集落の理解のうえで意義深いものと思われる。 (上田 真)

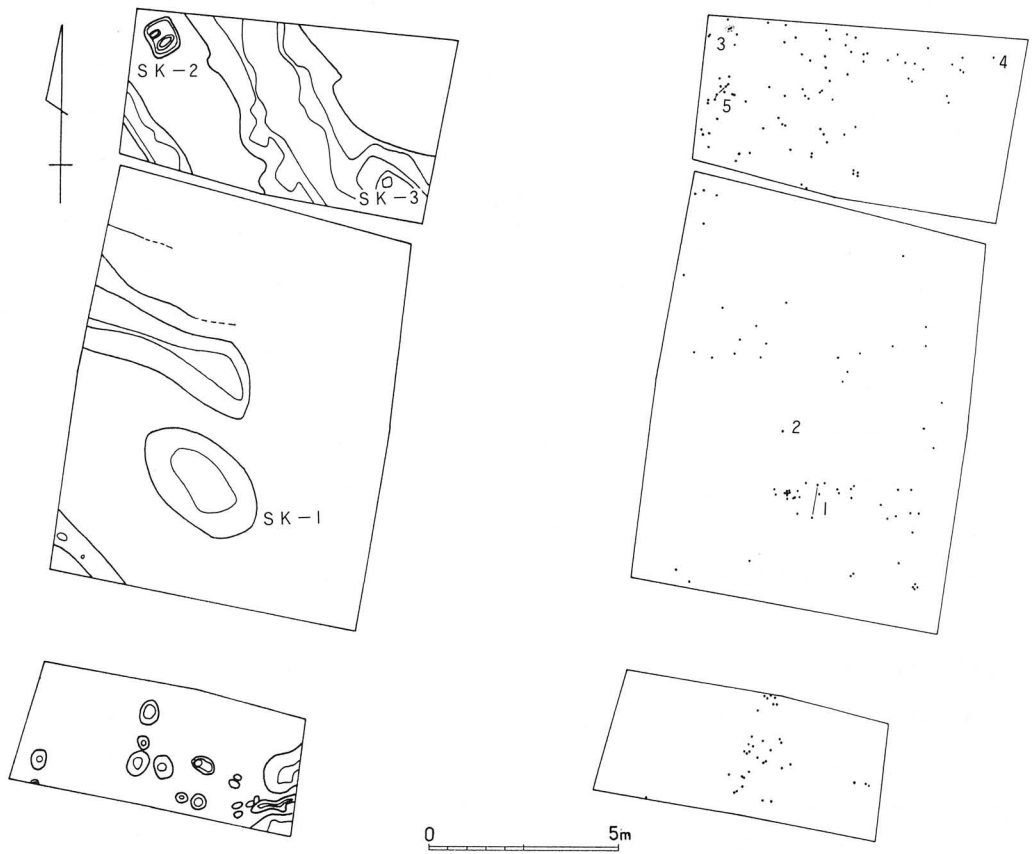


図2 遺構実測図及び遺物出土ドット図

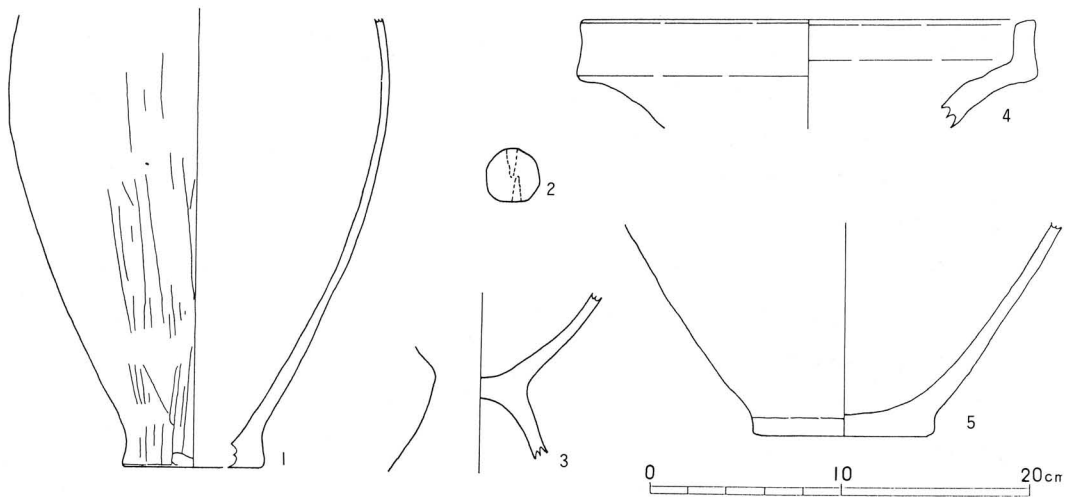


図3 出土遺物実測図

朝日谷 1号墳

1.所在地 松山市朝日ヶ丘1丁目

2.調査年月日 平成元年4月1日～
8月1日

3.調査面積 1,300㎡



図1 調査地位置図

経過 当古墳は、松山平野西部の独立丘陵大峰台の北西斜面部に立地する。標高133mを測る山頂部から派生して北西に延びる稜線上、標高62mに位置する。調査は、平成元年11月一部開園の、松山総合公園整備に伴う事前調査である。この丘陵上には、弥生時代中期の高地性集落や数多くの古墳が分布することが知られており、総合公園整備に伴う一連の調査により、その実態も明らかになりつつある。高所より望むと、高縄山系、斎灘、伊予水道に浮かぶ忽那、釣島、興児島の各伊予灘諸島が、東から西に向って大きく展開している。

遺構・遺物 1号墳丘は既に流失し、調査前の段階で、横穴式石室の奥壁上面が一部露出していた。山腹斜面をL字カットして掘り込み、石室を構築している。天井部はすでに破壊され不明で、残存する高さは奥壁部で90mを測る。石室の主軸はN60°Eを指向している。石室全長5m、玄室長2.5m、同幅1.05m、羨道長2.0m、同幅70cmを測り、南西に開口する。玄門部をやや絞ってはいるが、明確な袖は持たない。墳丘径13m前後が推定されるが、周溝は検出されていない。羨道部から玄室へは30cmの段を降りる構造になっている。玄室床面には、一面に河原石が敷かれ、奥壁より1.8mの部分には、更にこの上に割石が敷かれており、床面は段差をもって明確に区画されている。区画された奥部には人骨、歯牙が遺存し、副葬品として直刀、鹿角装刀子、鉄鏃、鎌、轡、玉類（棗玉、水晶玉、ガラス玉）が出土した。前部には須恵器広口壺1、短頸壺2、坏蓋5、坏身4、台付椀1、提瓶2、土師器壺1点等の土器類がまとまって置かれていた。

小結 1号墳石室出土の遺物は、6世紀末頃に比定される。石室は、羨道部から玄室へ段を降りる構造をとっている。閉塞は、玄門部で行われたものと思われ、数個の閉塞石と考えられる石が、この部分に残存していた。羨道部側壁は、閉塞のための補助的なものであり、天井石の架構はなかったものと思われる。この種の石室はこの地方の後期から終末期の小規模な横穴式石室に特徴的なものであり、その出自、系譜の解明が今後の課題である。

(松村 淳・高尾和長)

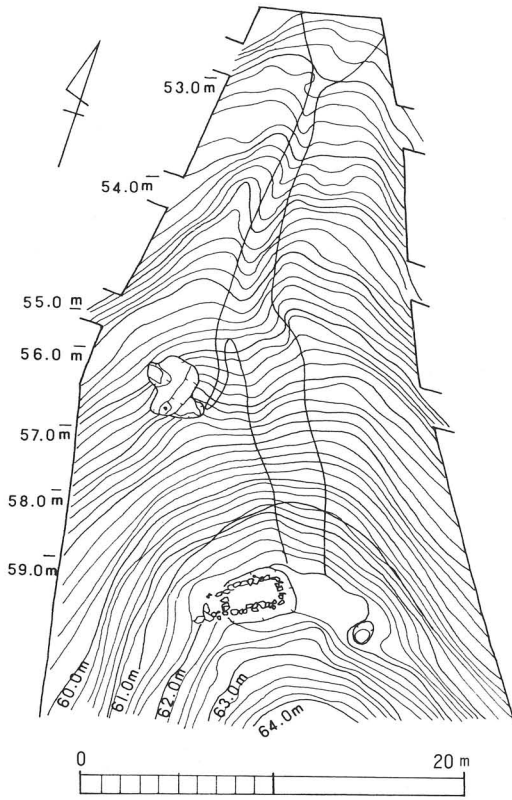


図2 調査地全測図 (調査後)

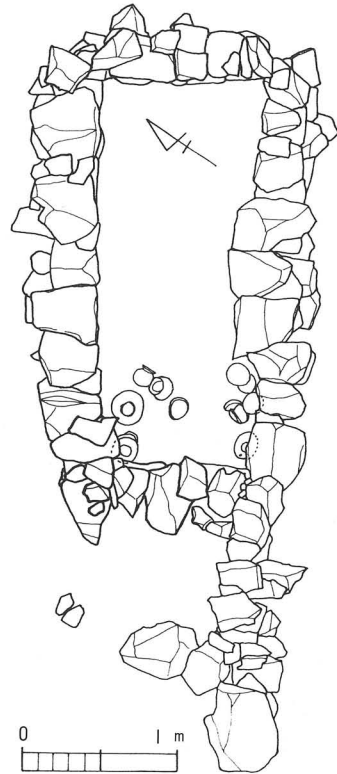


図3 1号墳横穴式石室

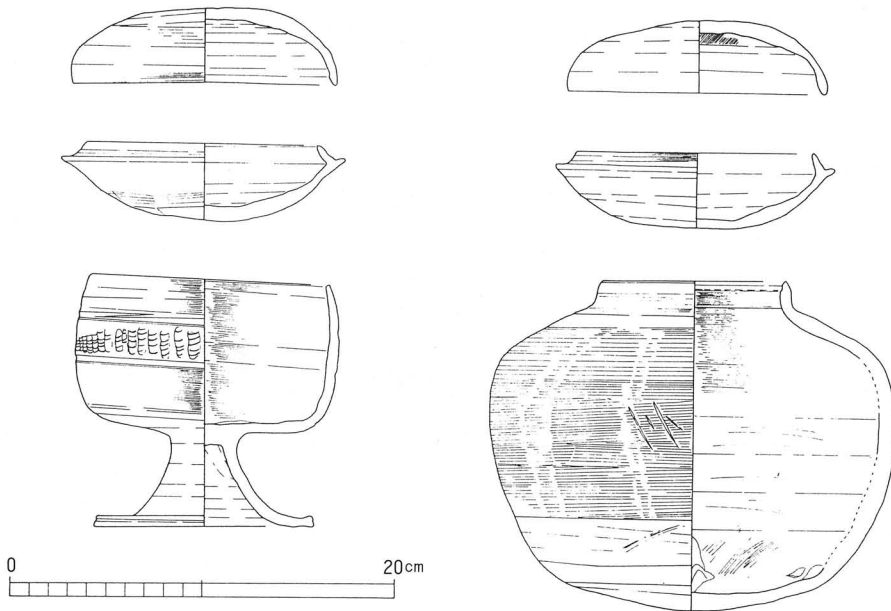


図4 1号墳石室内出土遺物

辻遺跡 2次調査

1. 所在地 松山市南江戸5丁目
1544-1・2・3他
2. 調査年月日 平成元年7月15日～
7月31日
3. 調査面積 186m²



図1 調査地位置図

経過 本遺跡は松山平野西部、大峰台丘陵東麓、標高24～26mに位置する。大峰台丘陵には弥生時代から中世城郭花見山城址に至るまで各期の遺跡の所在が知られており、近年の松山総合公園整備にともなう事前調査によって、山頂部の弥生中期高地性集落や、2面の舶載鏡、40本を越える銅鏃等を出土した前期古墳朝日谷2号墳、後期群集墳客谷古墳群等が相次いで調査されている。また、北西100mの辻遺跡1次調査では、弥生後期の大量の土器類が投棄された状況で出土し、一方南方500mの低地部に所在する古照遺跡では、古墳時代前期の取水堰が発掘されており、松山平野においては南部の来住台地、北部の城北遺跡群と並んで、重要な地域の一つとなっている。今回の調査は、民間の開発にともなう緊急発掘調査である。

遺構・遺物 調査地は果樹園としての利用の際に既に削平を受けているものと思われ、約20cmの表土直下が黄褐色シルトの遺構面となる。調査の結果、掘立柱建物2棟、その他の柱穴34基、土壇2基が検出された。掘立柱建物のうち、北側のS B-1は桁行柱間1.8m、梁行柱間1.5mの南北棟と思われる。梁間3間、桁行2間以上になることが確認されている。南側のS B-2は桁行柱間3.0m、梁行柱間2.2mの東西棟になるものと思われ、梁行2間、桁行2間以上となる。これらの建物は、その柱穴から古墳時代後期の須恵器片、土師器片を出土しており、上限をこの時期に比定できる。土壇は調査区北西端付近で東西に並んで検出された。西側のS K-1は2.0m×0.8m、S K-2は1.1m×0.6mの隅丸長方形ないし楕円形に近いプランを呈し、いずれも深さ30cmを測る。S K-1からは底部糸切りの土師器小皿を出土しており、中世土壇墓と思われる。

小結 大峰台丘陵の弥生・古墳時代を中心とする遺跡分布に対して、丘陵をとりまく裾部平野部では、松山西部環状線にともなう調査をはじめとする近年のいくつかの発掘調査によって、11世紀代から近世に至るまでの生活域や、墓域がかなり広範囲に拡がっていることが明らかになりつつある。本調査検出の遺構群もその一部である可能性は高いものと思われる。これら各調査の有機的関連を解明する上でも、該期の土器の編年研究が急がれる。

(栗田正芳)

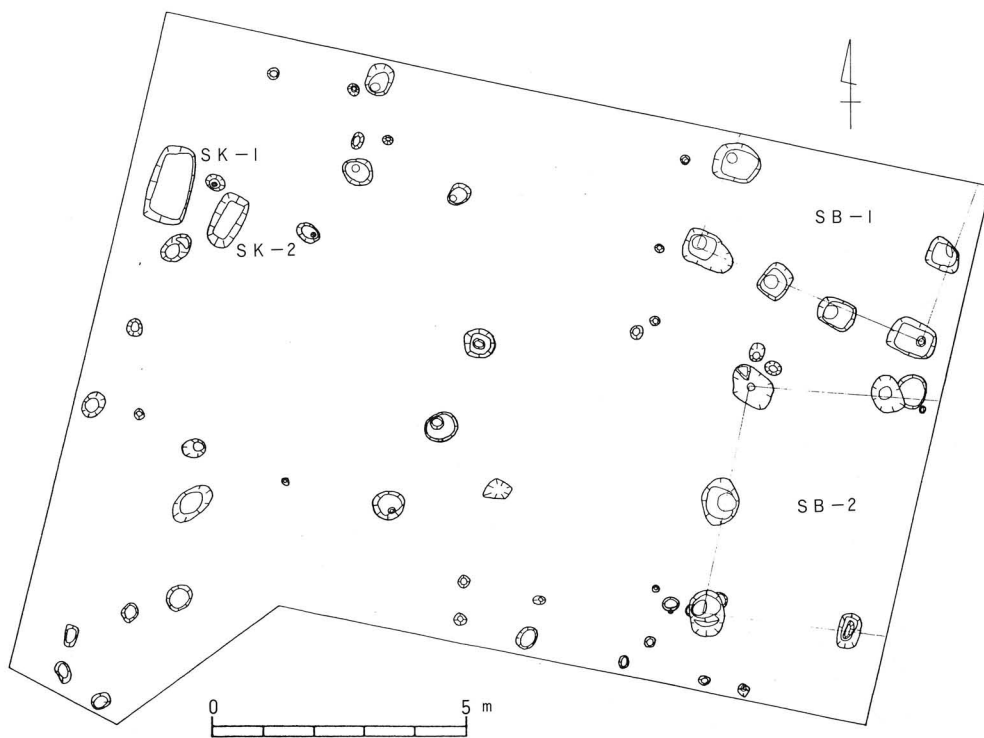


図2 遺構配置図



写真1 調査地全景 (東より)

御産所権現山遺跡

- 1.所在地 松山市山西町1358—
8 他
- 2.調査年月日 平成元年8月1日～
2年5月31日
- 3.調査面積 87,700m²



図1 調査地位置図

経過 調査地は、松山市文化財地図掲載の30番包蔵地、御産所古墳群とされる丘陵部の主要な一角を占める総面積80,000m²を越える丘陵地帯である。調査地の南東500mの大峰台丘陵には、前期古墳朝日谷2号墳や、後期群集墳客谷古墳群に代表される数多くの古墳を中心として、弥生時代から中世城郭花見山城址に至るまで、各期の遺跡が分布している。また、南西500mを中心として宮前川流域の低地には、弥生時代前期から古墳時代前期までの多量の遺物・遺構が検出された宮前川遺跡が所在する。

御産所古墳群内では、昭和48年に分布調査が行われ、計12基の古墳の所在が確認されており、そのうちの1基を御産所11号墳として松山市教委による調査が行われ、報告されている。昭和63年12月、この包蔵地内において造成行為ありとの通報をうけ、当教委は開発者に対して、即時工事の中止を求め、文化財保護法違反行為に対する嚴重注意を含めた指導を行い、今後の処置について両者間にて協議を行った。協議の結果、まず用地全域で確認調査を行うこととし、確認結果により本格調査の要ありと認められた部分については、すべての確認行為終了後、速やかに調査を実施するとの合意に達し、平成元年8月1日より確認調査を実施、平成2年1月より本格調査を行った。

遺構・遺物 工事中止の段階で開発行為は、既に大きく進んでおり、遺跡の立地に好条件なかなりの部分は削平され、遺構等の遺存は望めない状況であった。図2に示した地形は、開発前の状況であり、現状地形は大きく改変されている。したがって、残された限られた部分での確認とならざるを得ない状況であった。調査方法としては、丘陵分岐部を単位に、大きくA区からG区にまでブロック割りし、ブロックごとに順次トレンチによる確認を行った。E区では円墳2基が南北に並んで、表面観察上でも明らかな状態で遺存しており、特に南側の1基は盛土の流失により、横穴式石室の天井石の一部が露出していた。その他、トレンチ調査によってB区稜線裾部、C区丘陵斜面においてそれぞれ1基ずつの古墳の存在が確認された。D区においては、奈良時代前期の須恵器蓋、土師器坏、皿、甕等が出土しているが、明確な遺構の存在はみられなかった。

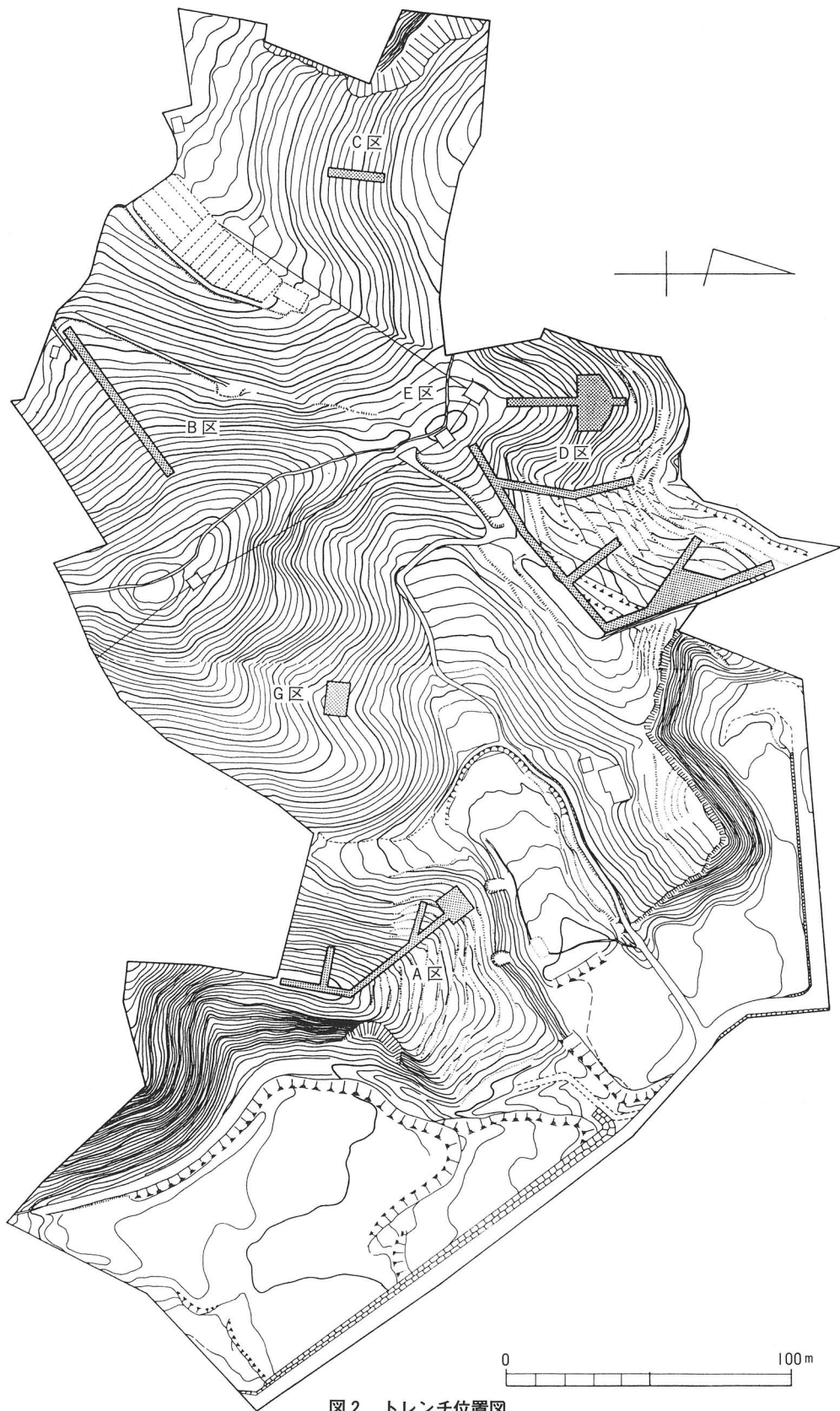


図2 トレンチ位置図

以上の確認調査結果をもとに検討した結果、4基確認された古墳のうち、2基は保存が難しく、本格調査を行うこととなった。2基の古墳は、E区の2基のうちの南側の1基、C区の1基で、それぞれ御産所権現山1号墳、3号墳としている。1号墳は、丘陵最高所を北に下った尾根線突端、標高約50mに立地する直径14mの円墳で、主体部は西に開口する横穴式石室である。調査前の段階で、天井石5枚が原位置を動いた状態で、さらに原位置にとどまった状態で2枚、墳丘上に露出していた。調査の結果、この2枚は奥壁側に横架されたものであり、さらにもう1枚の天井石が石室内に落ちこんでおり、都合8枚の天井石が本来載せられていたことになる。石室全長4.5m、玄室長3m、幅1.2m、高さ1.5m、玄門幅0.7mの両袖型横穴式石室である。石室主軸はN92°41'00" Eをとる。先述の計8枚の天井石は玄室奥から玄門部の間にだけかかっていたものと思われる。閉塞は玄門部で行われており、竪穴系横口石室の形態をとっている。玄門部と玄室部の間に階段状の石積みを有し、両袖を形成する柱状の石材は、この階段状石積みの上に据えられている。玄室奥左隅部から脚付子持壺と蓋のセット、壺、提瓶等の須恵器類と、土師器高坏、左袖部から須恵器甗、高坏、壺を出土している。また、直刀、鉄鏃、刀子等の鉄器類、杏葉、鞍の輪の縁金具等の馬具の出土もみている。これらの遺物から、1号墳は6世紀末頃の古墳と判断される。なお、玄門左袖の柱状石材には蠣の殻が付着しており、この石材が海岸で採取されたことを物語っている。

2号墳は、1号墳が所在する稜線からさらに西へ延びる丘陵の南斜面に造営されている。玄室部の腰石から1～3段目の、しかも一部しか遺存していないが、1号墳と同規模の横穴式石室である。安全対策等の制約のため、墳形の全容を把握するまでには至らなかったが、1辺10m内外の小方墳となる可能性が高い。南に開口する石室内より、須恵器平瓶、高坏、鉄鏃を、周溝より短頸壺を出土しており、7世紀前半期の古墳である。

小結 今回確認された4基の古墳のうち、昭和48年の分布調査により、その存在が把握されていたのは1基のみである。本調査の1号墳がその1基、御産所8号墳に相当するものと思われるが、確実に同一墳であるとの証を得られなかったため、新たに丘陵の通称をとって、権現山1号墳とした。この1号墳という、比較的良好な残存状況の古墳を、保存が難しいという条件もあって、最終的に解体するところまで調査を行った結果、後期の1小古墳の構築方法のかなり微細な部分までを追究し得たことは、大きな成果であった。

(栗田茂敏・大森一成)

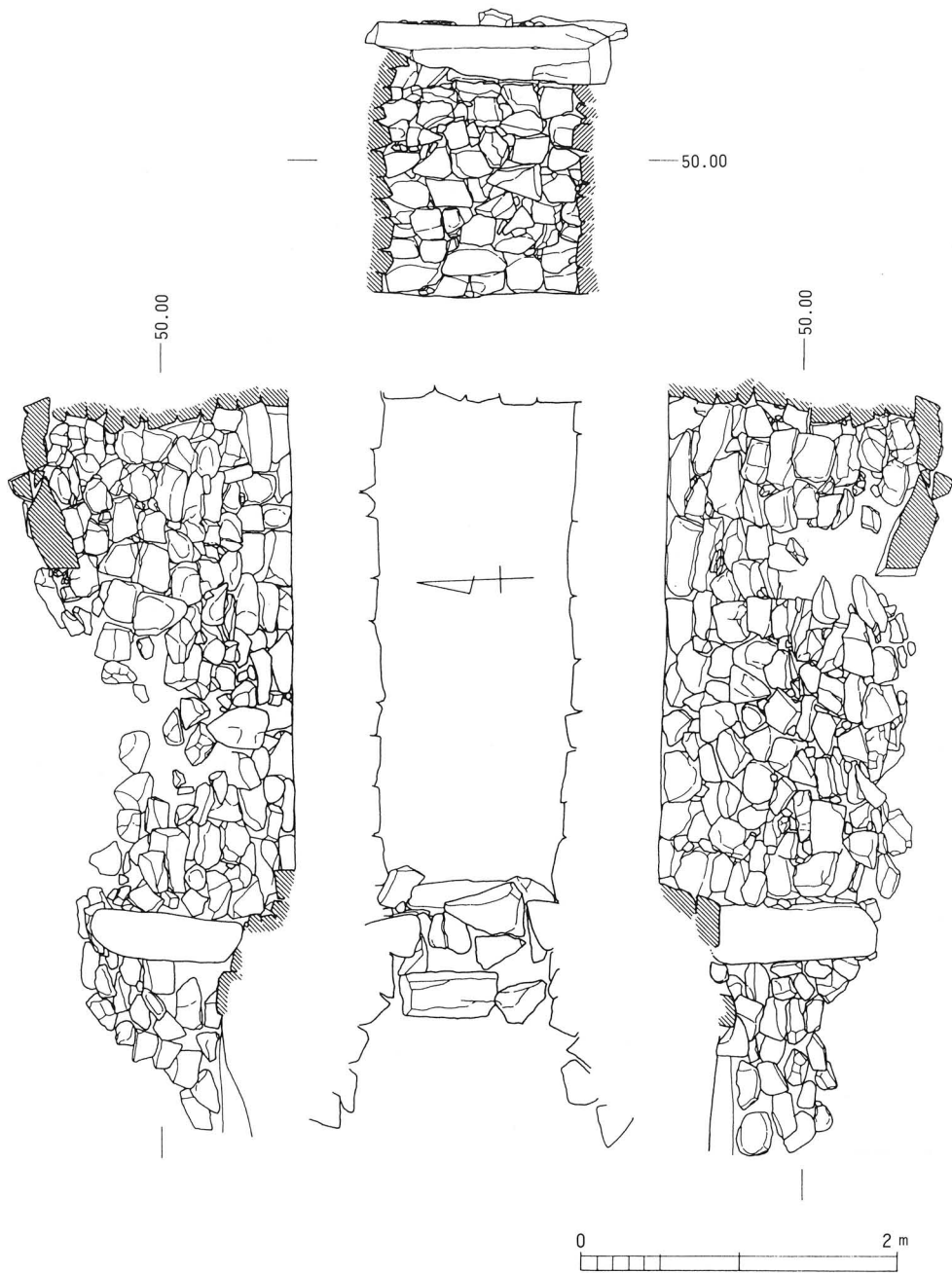


图3 1号填横穴式石室

古照遺跡第5次調査

1. 所在地 松山市南江戸4丁目
1-1
2. 調査年月日 平成元年8月21日～
9月30日
3. 調査面積 384m²

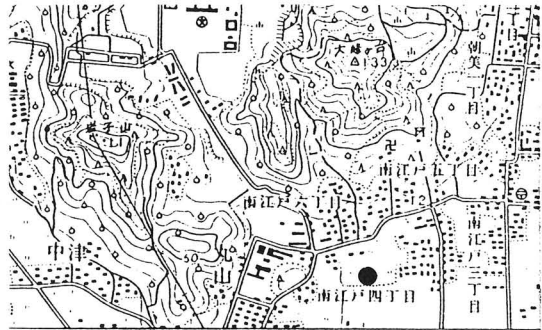


図1 調査地位置図

経過 昭和47年、下水道中央処理場建設工事中発見された木組みの遺構は、翌年の本格的な第1次調査によって2基の灌漑用の堰であることが確認された。その後も第4次までの調査が同処理場内において行われ、特に第2次調査では、更にもう1基の堰と取水口が検出され、4世紀後半代の大規模な農業土木工事であったことが判明している。これらの堰検出地点の南方50mに新たな処理施設の建設が計画され、これに伴う緊急発掘調査として、本調査が行われた。

遺構・遺物 既往の調査において、堰の検出された海拔約8mのレベル付近の青灰色粘土、ないしはシルト層を中心に精査を行ったが、当初期待された水田等の遺構を検出することはできなかった。堰は、氾濫の繰り返しによる砂礫によって埋没し、この砂礫層やブロック状にとりこまれた青黒色粘質土中から遺物を出土するのがこれまでの調査の例であったが、今回の調査においても、古墳時代前・中期の遺物を主として、弥生式土器、縄文後期の土器等が出土している。

(松村 淳)

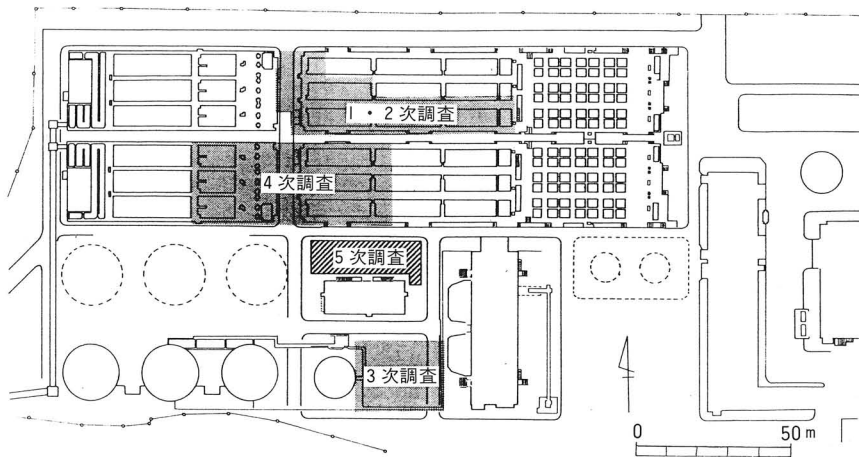


図2 既往の調査と5次調査

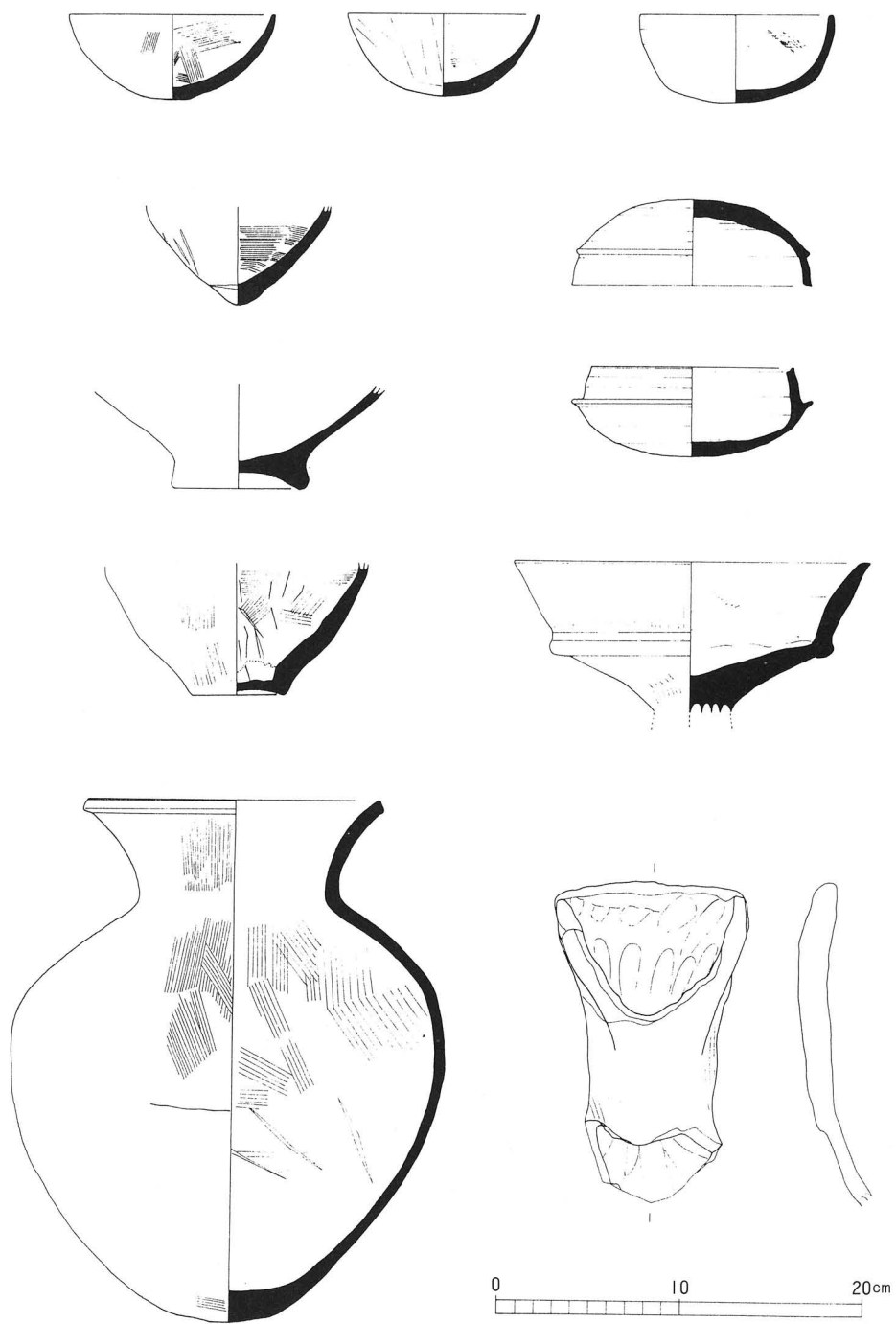


图3 遗物实测图

若草町遺跡

1.所在地 松山市若草町8番地

2.調査年月日 平成元年1月5日～

10月31日

3.調査面積 9,000m²

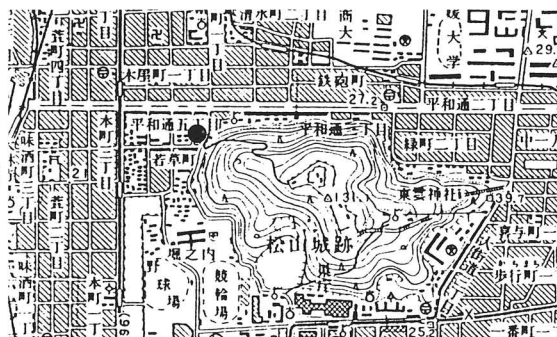


図1 調査地位置図

経過 若草町遺跡は、松山平野のほぼ中央に所在する平山城の松山城北西麓に位置する。調査地東方には縄文時代後期から近世にわたる遺構、遺物の集中する道後城北遺跡群（道後城北RNB遺跡、文京遺跡、松山大学構内遺跡、松山城北郭遺跡等）が所在し、また、南方約150mのカキツバタ遺跡では弥生時代後期後半の壺棺を出土している。松山城の所在する独立丘陵上には、本丸関連の建築が現存する他、昭和59年より3次にわたって調査が行われ、多くの成果をあげた二の丸等の近世城郭関連遺構をはじめとして、弥生中期の東雲神社遺跡や古墳群が分布している。調査地は江戸時代（宝暦、嘉永）の絵図によれば松山藩家中御免地の域内に含まれ、家臣団屋敷地の北西端にあたっている。調査は松山市総合福祉センター建設にともなう緊急事前発掘調査として行われた。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、第1層・表土、第2層・明灰褐色砂質土・近代、第3層・暗灰褐色砂質土・近世、第4層・黒褐色砂質土・弥生中期～古墳である。第4層は、調査区全域にわたって近世以降の造成、攪乱を受けており、安定した遺存状況ではなかったが、多量の遺物を出土している。この第4層下面より古墳時代前期の竪穴住居址、土塋、柱穴、溝や弥生時代後期後半の複数の壺棺群を主体部とする円形周溝墓1基をはじめとする周溝群、竪穴住居址、土塋を検出している。また、土塋SK-3よりほぼ完形の前漢鏡（重圈日光鏡）を1面、他の土塋SK057より小型仿製鏡を1面出土している。以下、注目される遺構、遺物について略記する。

◎前漢鏡（重圈日光鏡） 調査区南西部において円形周溝SD-2に囲まれた部分で、長径2.7m、短径1.7m、深さ0.3mの不整楕円形の土塋SK-3から出土した。鏡面径8.4cm、鈕座形は車輪形を成し、4小乳と4斜田文の間に「見日之光長母

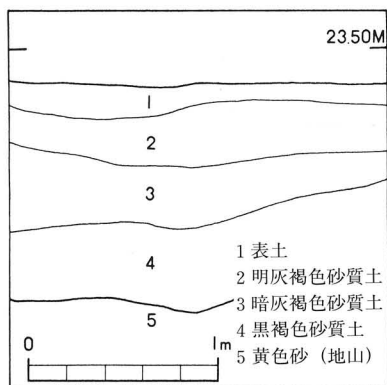


図2 基本層序

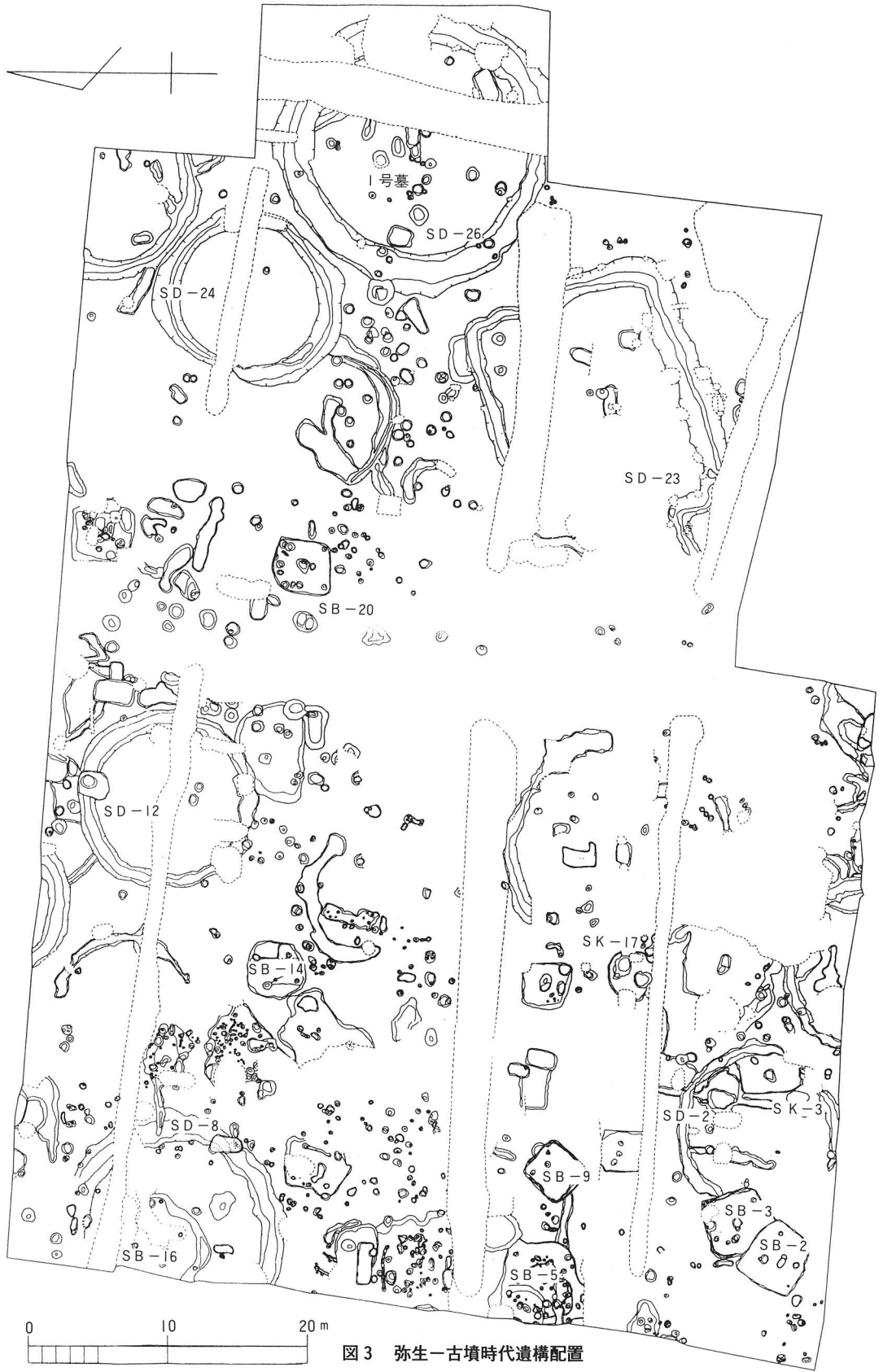


图3 弥生—古墳時代遺構配置

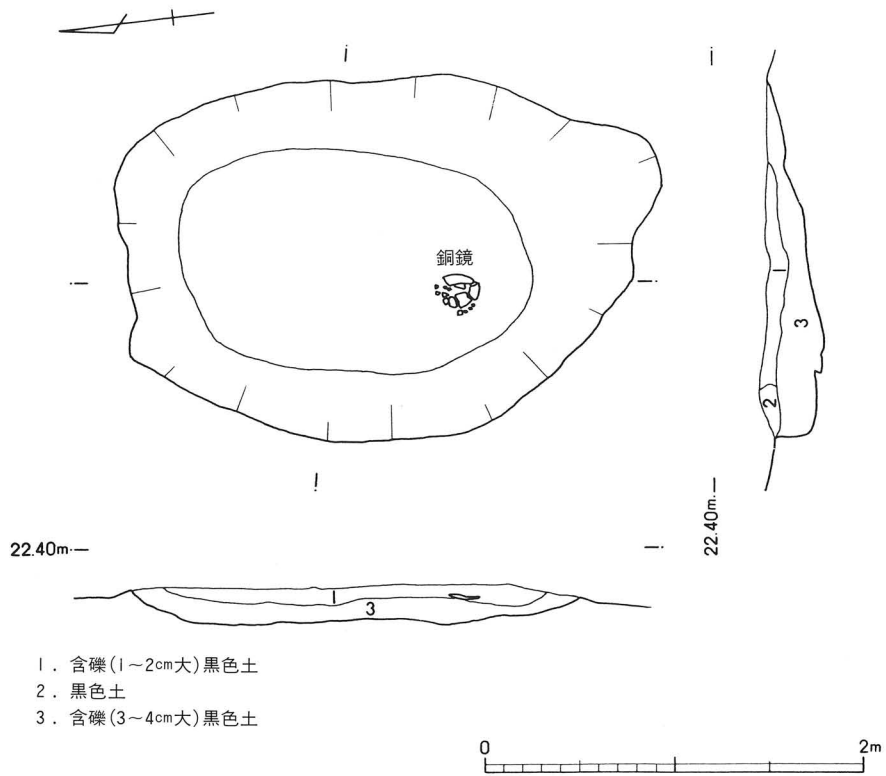


図4 SK-3平・断面図



写真1 重圈日光鏡出土状況

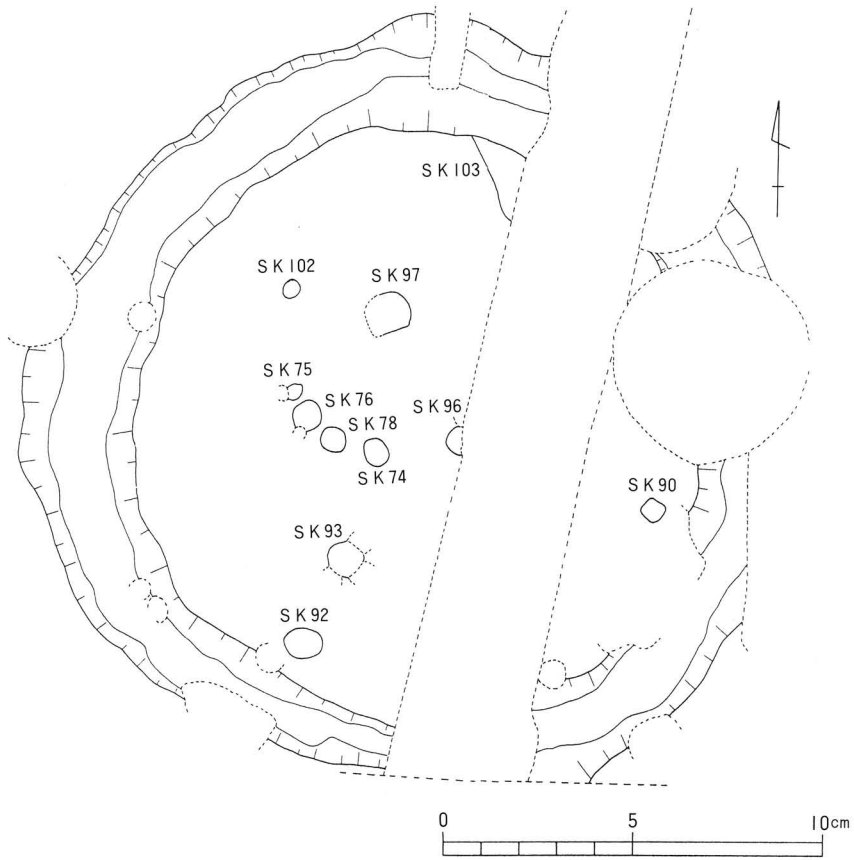


图5 壶棺葬1号圆形周沟墓

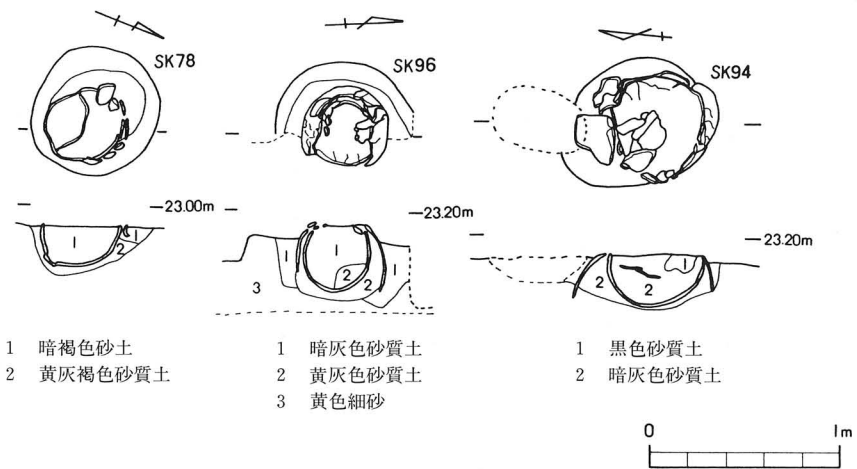


图6 1号墓壶棺平·断面图

忘君」の銘文をもつ。この鏡の車輪形鈕座及び「長母忘君」の銘をもつ日光鏡は国内初の例であり、中国でも出土は稀である。また、S K—3の脂肪酸分析の結果は再埋葬の可能性を示すものであった。

◎周溝墓 調査地で検出した周溝は、円形周溝12条、方形周溝1条であり、そのうちの円形周溝S D—26に区画された域内に壺棺11基を数える主体部を検出した。S D—26は直径約16m、幅2m～3m、深さ0.4m～0.8mを計り、なだらかな断面U字型をなす。近世以降の攪乱土壌に切られているが、全周すると思われる。壺棺は、土壌に1基ずつ埋葬されており、土壌は壺棺が丁度納まるように掘られている。近世以降の造成等により、殆どが上部を欠損しているが、出土状況から蓋として半截土器を使用しているのが数基認められる。壺内部については、人骨、副葬品等は認められなかった。また方形周溝S D—23に区画された域内には近世遺構が密集しており、壺棺は認められないが、北側溝部内に4基出土している。他の周溝についても周溝内外に壺棺と見られる土器片多数を検出している事から、調査地において周溝墓群を形成しており、その域は周辺に広がるものと思われる。

小結 今回出土の日光鏡については遺構内での遺物の共伴はなかったが、周囲の包含層中から弥生時代中期末～後期初頭の遺物が出土している。調査地で検出した周溝墓は切り合いが殆どなく、弥生時代後期後半の一時期に、ある程度の計画性をもって営まれた様相がうかがわれ、松山平野における、当期の葬制の一端を示す貴重な資料といえる。

(相原浩二・栗田茂敏)

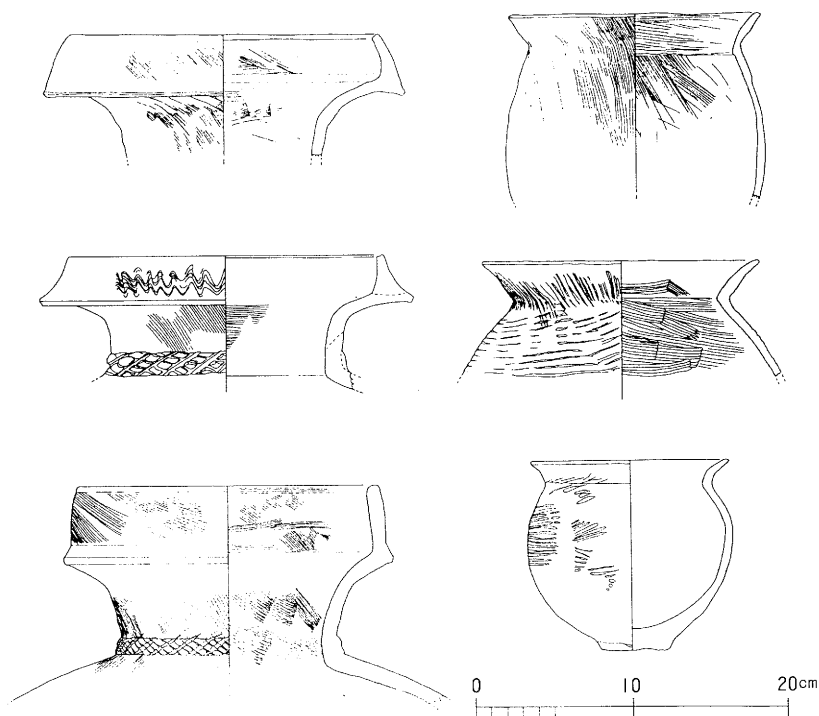
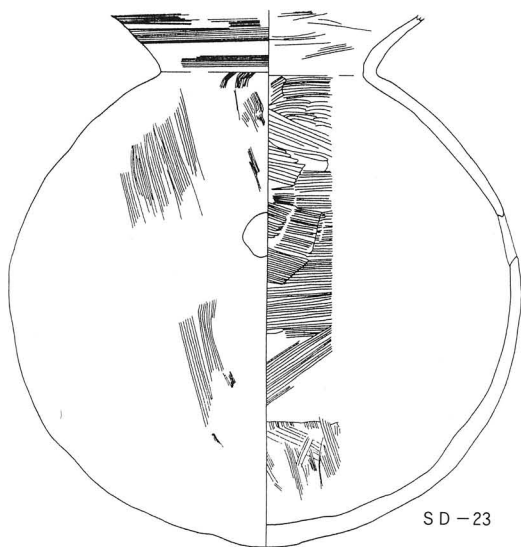
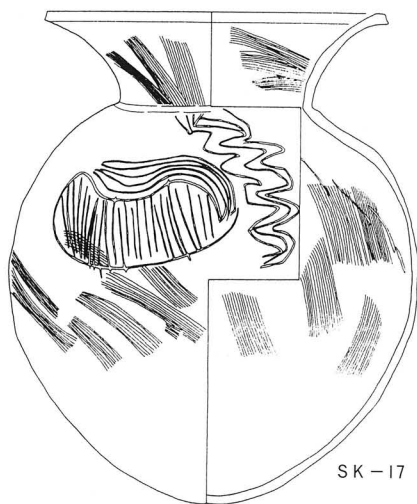


図7 SB16出土遺物



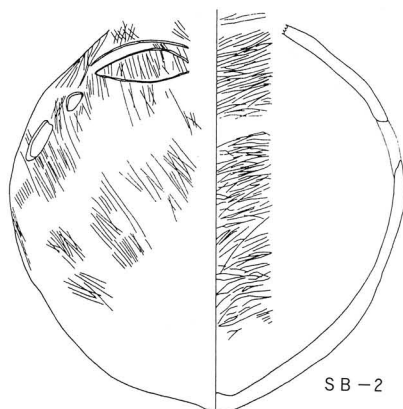
SD-23



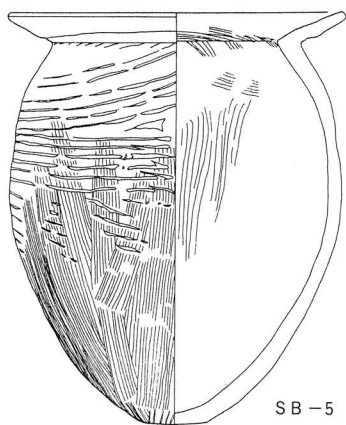
SK-17



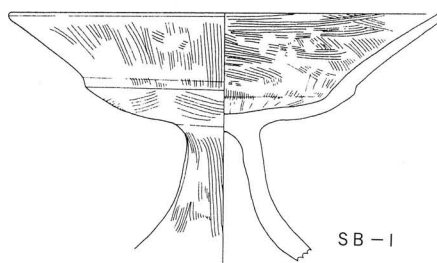
SD-8



SB-2



SB-5



SB-1

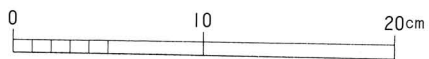


图8 各遺構出土遺物

道後今市遺跡 6 次調査地（平形銅剣出土推定地）

1. 所在地 松山市道後今市1053
— 1
2. 調査年月日 平成元年 7 月 31 日～
9 月 14 日
3. 調査面積 238m²



図1 調査地位置図

経過 本調査は、今市遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。

今市遺物包含地は、松山平野北部の石手川扇状地左岸の標高31mにある。石手川扇状地左岸は、特に道後城北遺跡群と呼称され弥生時代の松山平野における拠点集落として知られている（注1）。今市遺物包含地は、道後城北地区の南東部にあたり、既に5次の調査が実施され弥生時代～古墳・中世の集落関連遺構を多数確認している（注2）。

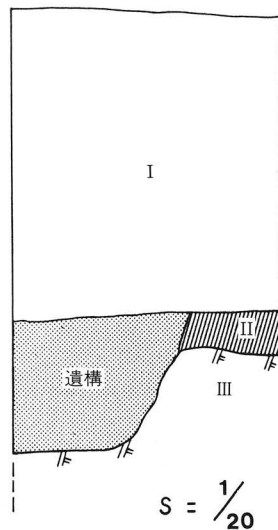
本調査地は、今市遺物包含地の西端標高37.1mにあたり、明治42年に平形銅剣10口と壺1点が出土した地として古くから知られている（注3）。

本調査では、平形銅剣納埋に関する資料存在の有無と今市包含地内に存在する古墳～中世の集落の範囲確認を主目的とし、平成元年7月31日より調査を開始した。

遺構・遺物 基本層序は図2である。第Ⅰ層には、水田耕作土と攪乱土をあてている。攪乱土には、第Ⅱ層土が多量に含まれており、この土壤中より、弥生土器（中期末～後期初頭）、須恵器、石庖丁他が出土した（図9）。第Ⅱ層暗褐色シルトは近現代の宅地開発によりその多くは削平されており、検出は調査区東半部（A1～4区、B2～4区）に限られ、しかも堆積（残存）は10cmを測るにすぎなかった。本層中からは土師器の細片がわずかに出土している。第Ⅲ層黄色シルトは、無遺物層である。

遺構は、第Ⅲ層上面の検出で、竪穴式住居址（SB1）1棟、ピット14基を確認した。ただし、竪穴式住居址（SB1）は、調査地東壁で掘り方を精査したところ、第Ⅱ層を切っていることを確認した。また、ピット14基についても第Ⅱ層を切って掘り込まれていた可能性が高い。

L = 31.600 m



- I 表土 75～80cm
II 暗褐色シルト（遺物包含層） 10～15cm
III 黄色シルト（地山）

図2 基本層序

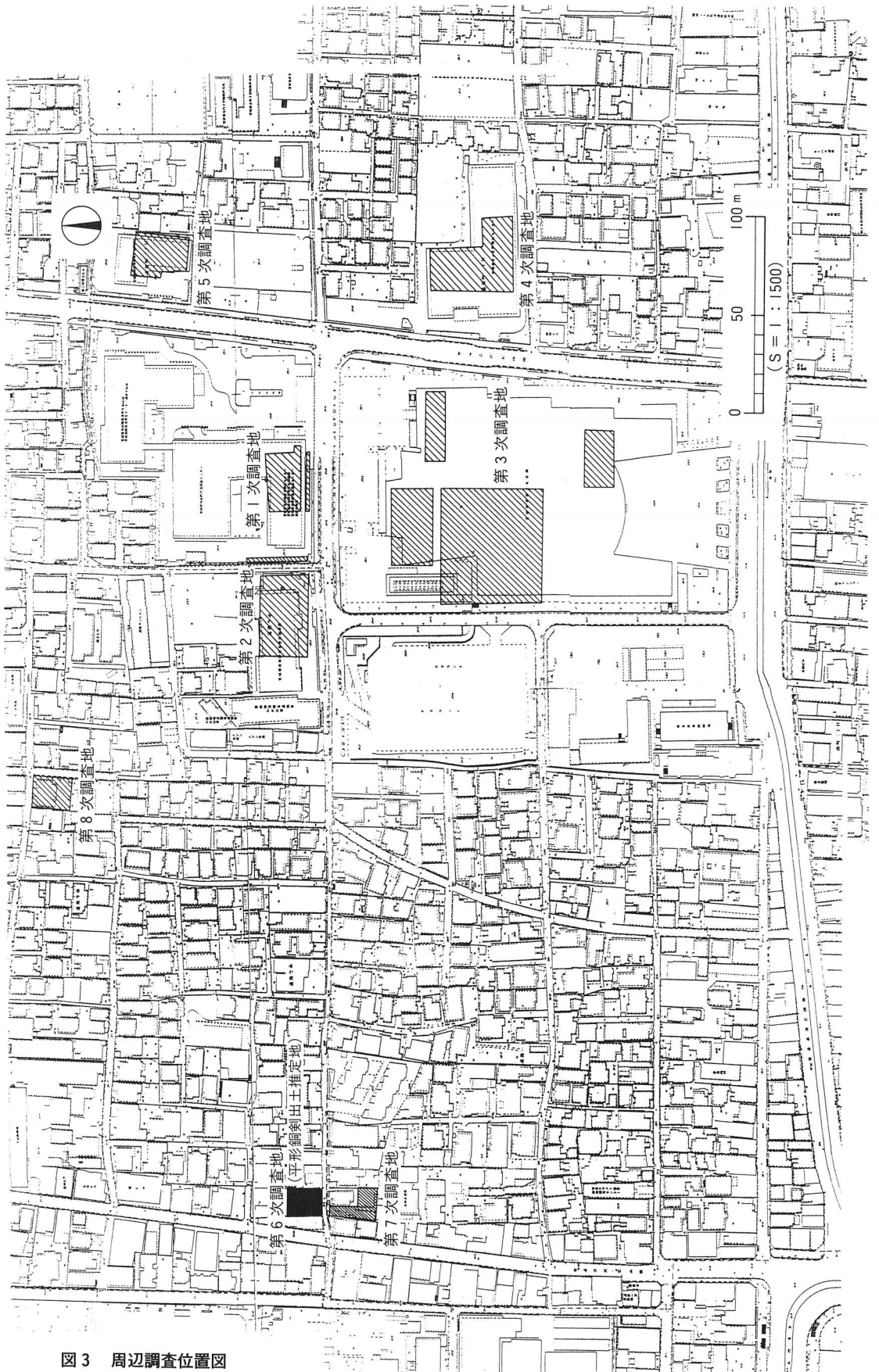


図3 周辺調査位置図

ピットはいずれも時期を確定できる遺物の出土がなく、その時期・性格は不明である（竪穴式住居址2基を除く）。

S B 1（図6）調査区中央東端（A 2—3区、B 2—3区）に位置する。西隅・北壁は攪乱をうけ、東は調査区外にあたるため全様は不明である。ただし、北西部と南端にて壁体及び壁体溝を検出しており、平面形は方形もしくは隅丸方形になるものと考ええる。規模は、北西—南東で2.4m、北東—南西で1.75m、壁高30cmを測る。壁体溝は幅15cm、深さ5cmで、溝底に小ピット（径10cm、深さ5～16cm）が15cm前後の間隔で存在する。火所は、付設及び掘り込み式のもの未検出であるが、住居址中央部で焼土及び炭を確認した。さらに、この周囲には、幼児頭大の石が弧状に配置されて検出された。

この他、本住居址内からは、ピット3基を検出した。S P 14は、本住居址の主柱穴と考えられるもので、S P 13は本住居址を切っており（時期不明）、S P 12は本住居址に伴うかは不明である。

出土遺物は、中央部の焼土及び炭上で群集して出土したもの（図7・8）と壁体付近で出土したもの（図7—5）がある。

本住居址の時期は、甕形土器の外面の刷毛目調整が雑であること、高坏形土器坏部の屈接部が丸みをおびているものであること等より5C代に時期比定されよう。

包含層出土遺物（図9）20～32は、いずれも第Ⅰ層攪乱土より出土したものである。

小結 本調査では、遺物包含層と集落関連遺構を確認した。

第Ⅱ層遺物包含層は、現況の堆積は希薄であるが、第Ⅰ層攪乱土中に多量に含まれることより本来はかなり厚い堆積であったことが知れる。さらに、攪乱土中出土の弥生土器（中期末～後期初）、須恵器（6C）は、第Ⅱ層土に混入して検出されることが多く、第Ⅱ層中の遺物であった可能性が高いと考えている。また、S B 1は第Ⅱ層を切り込んで築造されている。以上のことより第Ⅱ層は5C以前に既に堆積しはじめていたものと考えられる。

S B 1は、全様は不明であるが、第Ⅱ層の形成時期や当地が5C代に居住地であったことを示す資料であり、当地の集落経営を知り得る数少ない資料として重要な意味をもつ。

本調査では、平形銅剣埋納に関する直接資料は得られなかったが、当地が古墳時代には居住地であったことを確認できたことは一つの成果である。

（注1） 1988年古代学協会四国支部シンポジウム『松山市道後城北地区の弥生集落』

（注2） 愛媛県教育委員会 愛媛県埋蔵文化財センター『道後今市遺跡』1989

（注3） 考古学会『考古界』第8篇第5号 明治42年

なお、『考古界』中に記述のある壺1点は、今回の調査資料より推察すると弥生中期末～後期初頭ないし5C代の土師器の壺形土器である可能性が高いと考える。

（梅木謙一・宮内慎一）

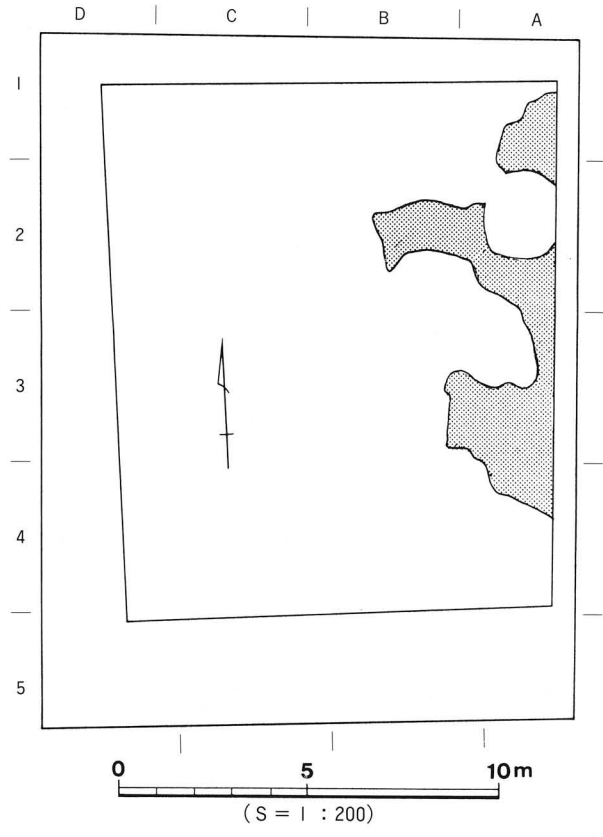


図4 全測図

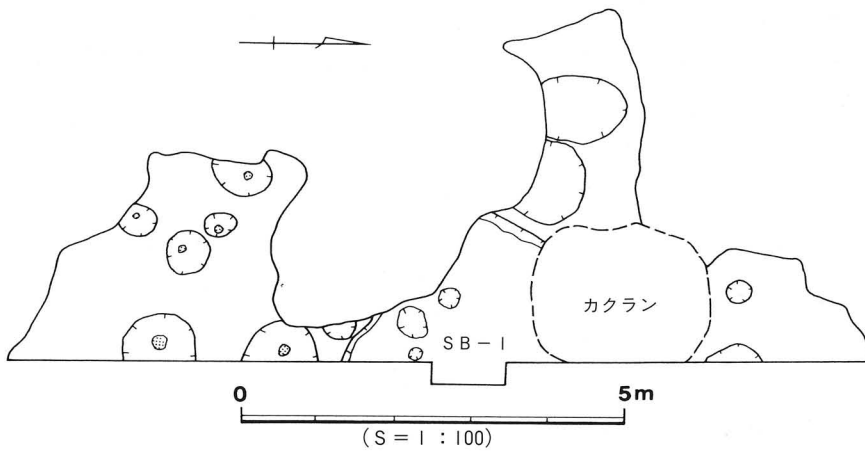


図5 遺構配置図

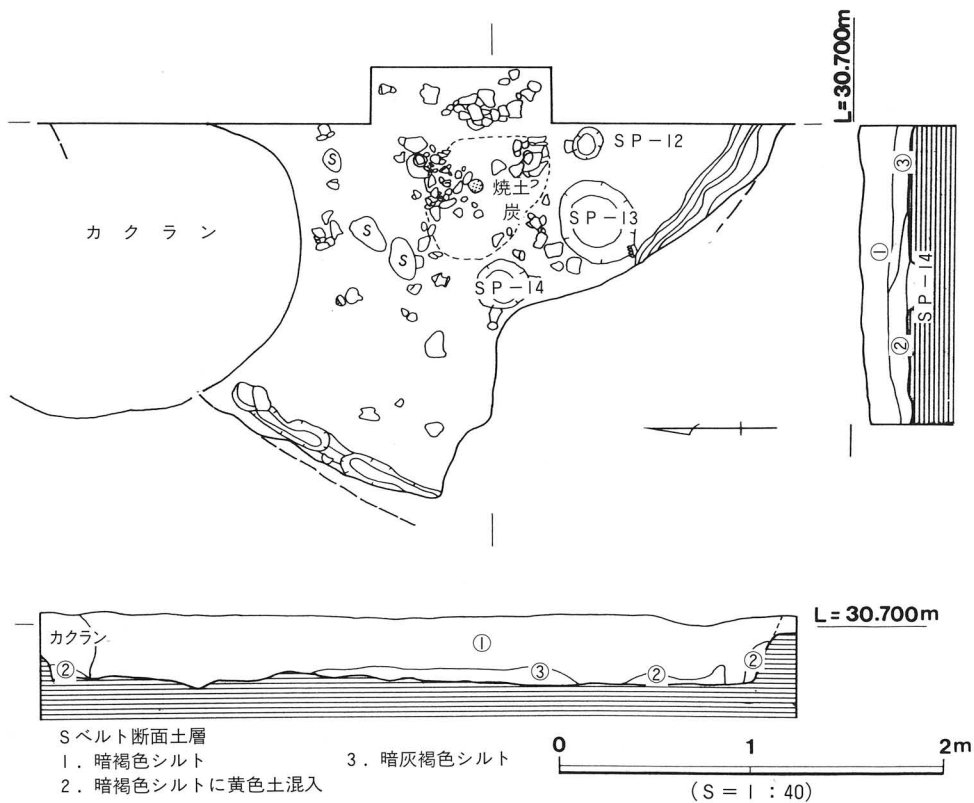


図6 SB-1平・断面図

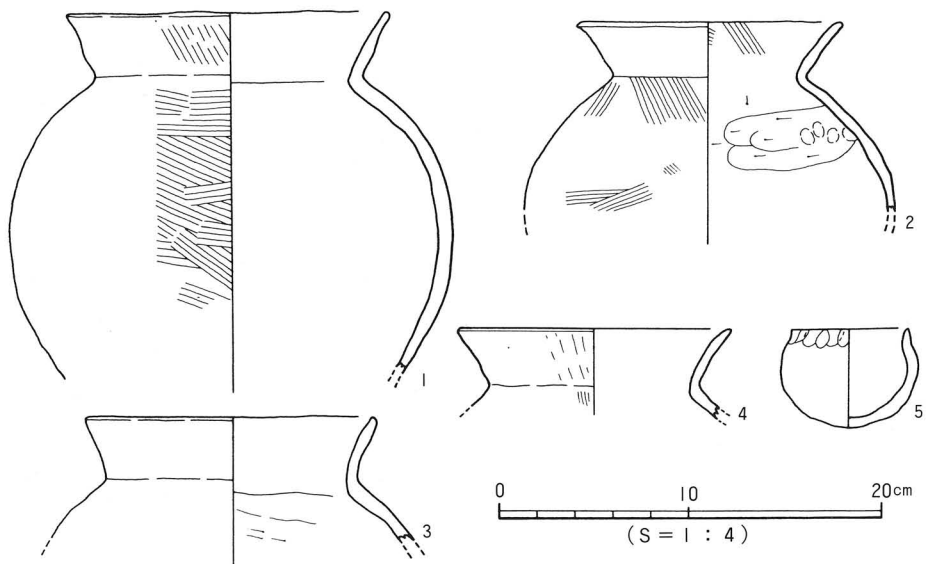


図7 SB-1出土遺物実測図(1)

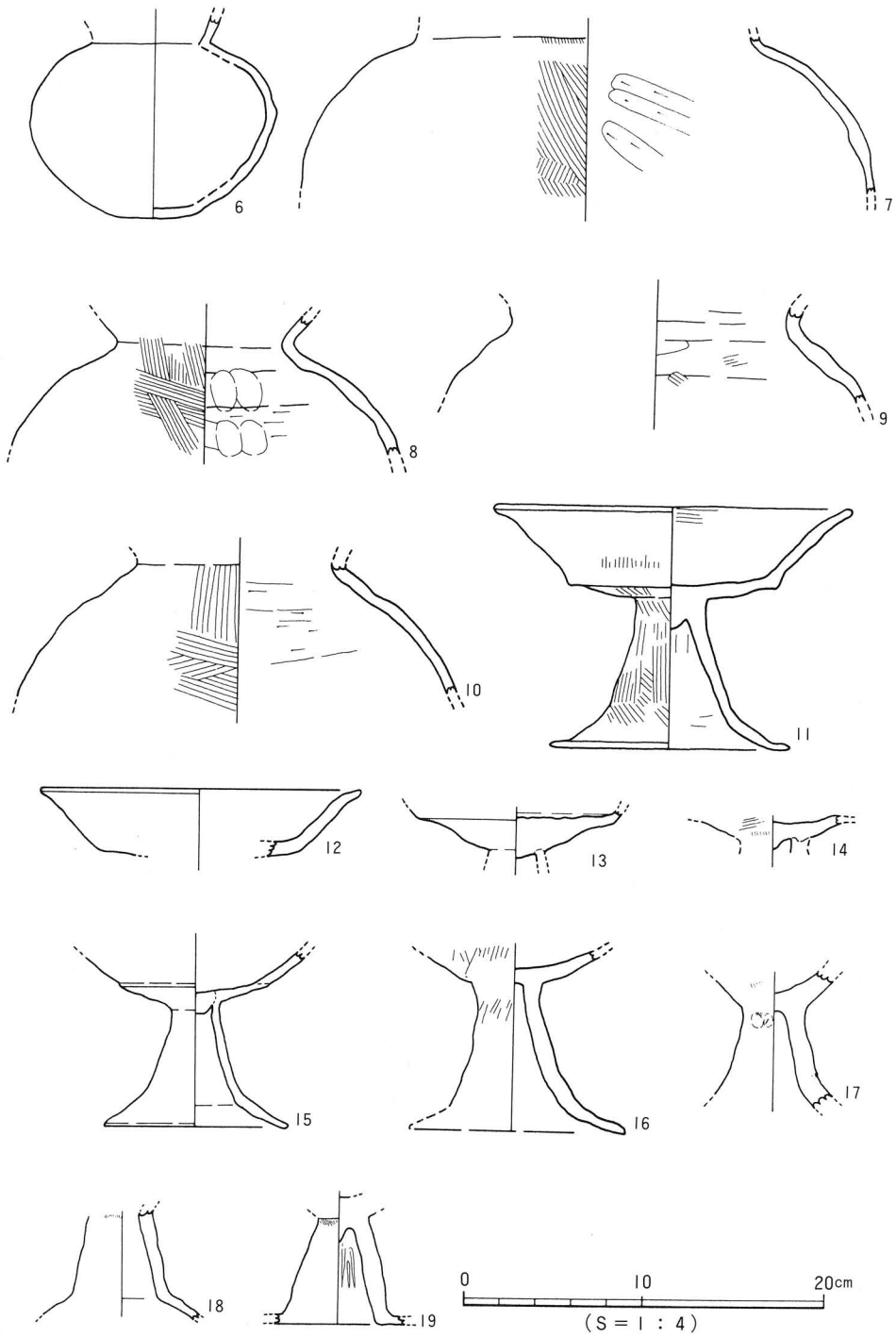
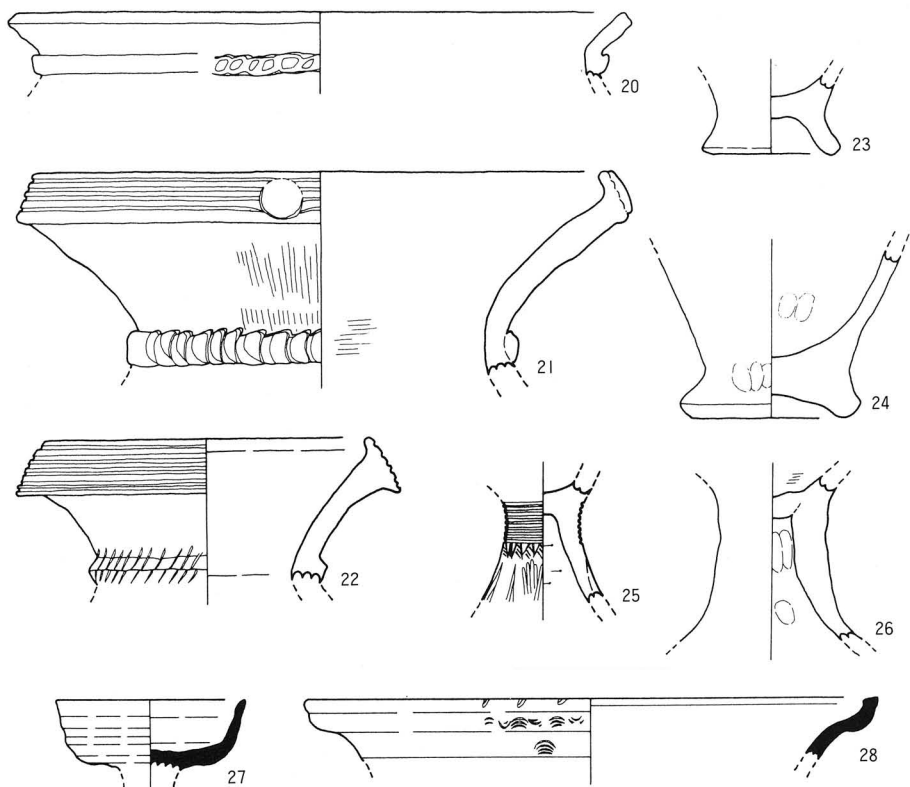
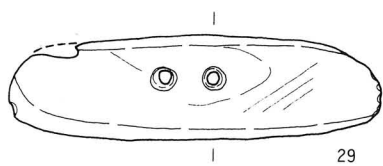


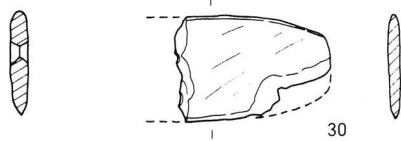
图8 SB-1 出土遺物実測図(2)



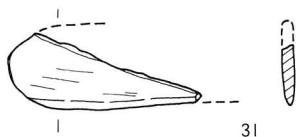
0 10 20cm
(S = 1 : 4)



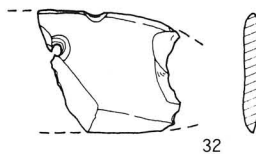
29



30



31



32

0 5 10cm
(S = 1 : 3)

图9 出土遗物实测图

道後今市遺跡・6次調査地出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土・焼成	備考	写真
				外 面	内 面			
1	甕	口径(16.5)	口縁部内面に稜を持つもので口縁端部は丸く収める。	①-ハケ→ヨコナデ ②-ハケ(5本/1cm)	①-ヨコナデ ②-板ナデ	・砂粒 金 ・◎	黒 斑	
2	甕	口径(13.2)	口縁部は頸部で「く」の字にくびれた後外反して開く。	ハケ	①-ハケ ②-ケズリ	・石・長 (1~4) ・◎		5
3	甕	口径(15.0)	口縁部はやや内湾ぎみに外反し端部は丸く収める。	①-ヨコナデ ②-磨滅のため不明	①-ヨコナデ ②-ケズリ	・石・長 (1~3) ・◎		
4	甕	口径(14.0)	口縁部はやや外湾ぎみに開き端部は丸く収める。	①-ハケ→ヨコナデ ②-ハケ	①-ヨコナデ	・密・金 ・◎		
5	鉢	口径(6.0) 器高(5.2) 底径(1.0)	口縁部は手捏ね土器。口縁部つまみ出しによる指頭痕顕著。	①-ナデ(指頭痕顕著) ②-ヘラ又は板状工具のナデ	①-ナデ ②-ナデ上げ	・密 ・◎		5
6	壺	残高(11.3) 頸径(6.5)	不安定な底部をもつもので胴部は球形状を呈する。頸部は強くくびれる。	①-ハケ→ヨコナデ ②-ハケ(5本/1cm) (指頭痕顕著)	①-ナデ ②-ナデ上げ ③-ナデ	・砂粒 ・◎	黒 斑	5
7	壺	残高(8.6)	肩部の張るものである。	①-ハケ→ヨコナデ ②-タテハケ (7本/1cm)	①-ケズリ→ナデ ②-ケズリ (ヘラケズリ顕著)	・砂粒 ・◎	黒 斑	
8	壺	頸径(9.4)	肩部の張るものである。	①-ハケ→ヨコナデ ②-ハケ(3本/1cm)	①-ナデ ②-ケズリ (指頭痕顕著)	・密 ・◎		
9	壺	頸径(15.6)	肩部の張るものである。	ヨコナデ	①-ナデ ②-ケズリ	・石・長 (1~3) 金 ・◎		
10	壺	残高(7.2)	肩部の張るものである。	ハケ(4~5本/1cm)	①-ナデ ②-ケズリ	・砂粒 ・◎		
11	高坏	口径(19) 器高(13.5) 底径(13.2)	接合部に段をなす。中空で裾広がりの脚柱部に外反して開く裾部を持つ。					5
12	高坏	口径(17.6)	接合部に稜を持たないもので、口縁部外湾ぎみに大きく開く。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	・密・金 ・◎		
13	高坏	残高(2.5)	坏底部肉厚、差し込み技法か。	ヨコナデ	剝離のため不明	・密 ・◎		
14	高坏	残高(1.8)	充填法が、擬口縁を看取。	ハケ(8本/1cm)	ナデ	・密 ・◎		
15	高坏	残高(9.8) 底径(10)	接合部に稜を持つ。中空で裾広がりの脚柱部に外反して開く裾部を持つ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	・石・長 (1~2) ・◎		5
16	高坏	残高(10.1)	中空で裾広がりの脚柱部組み合せ技法か。	①-ハケ ②-柱上-ハケ ③-柱下-ハケ→ナデ	①-ハケ ②-ケズリ ③-ヨコナデ	・石・長 (1~2) ・◎		5

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土・焼成	備考	写真
				外 面	内 面			
17	高坏	残高(6.1)	中空の脚柱部を持つ。	磨滅のため不明	(柱)ーケズリ (施)ーナデ	・密 (石・長1) ・◎		
18	高坏	残高(7.1)	充填法。内面脚柱部と裾部の境に強い稜を持つ。	(柱上)ーハケ (柱)ーナデ	(柱)ーケズリ (施)ーケズリ	・密 ・◎		
19	高坏	残高(7.5)	組み合わせ技法か。	ナデ	ヨコケズリ→ヨコナデ	・砂粒 (石・長1) ・◎		
20	壺	口径(31.4)	頸部に断面台形状の貼り付け凸帯→凹帯上を押し。	(口端)ーヨコナデ (口)ーヨコナデ	(口)ーヨコナデ (頸)ーナデ	・砂粒 ・◎	黒 斑	
21	壺	口径(29.2)	口縁上方に拡張。端面は4条の擬凹線→円形浮文。頸部貼り付け凸帯→押し文。	(口)ーヨコナデ→施文 (頸上)ーハケ→ヨコナデ (頸中)ータテハケ	(口)ーヨコナデ (頸)ーヨコハケ	・石・長 (1~4) ・◎	黒 斑	
22	壺	口径(16.8)	口縁部上方に拡張。端面は6条の沈線文。頸部断面三角形の貼り付け凸帯→刻み目。	(口)ーヨコナデ→施文 (施)ヨコナデ	(口端)ーヨコナデ (頸)ーナデ	・石・長 (1~3) ・◎		
23	甕	底径(6.6)	くびれの上げ底状を呈する。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	・砂粒 ・◎		
24	甕	底径(7.9)	厚手でくびれの上げ底状を呈する。体部へは直線的に斜上方へ立ち上がる。	(施)ー不明 (底)ナデ・ヨコナデ	ナデ	・石・長 (1~4) ・◎	黒 斑	
25	高坏	残高(6.4)	脚上部8条の沈線文。ヘラ描文。矢羽根文。	ヘラミガキ→施文	(環底)ーナデ (柱)ーケズリ	・石・長 (1~2) ・◎		
26	高坏	残高(8.6)	充填技法、器壁やや厚い。	磨滅のため不明	(環底)ーナデ (柱)ーナデ	・石・長 (1~4) ・◎		
27	高坏	口径(9.8)	口縁部やや外反ぎみにのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	・密 ・◎	自然釉	
28	器台	口径(29.8)	口唇に刻み目。口縁・頸部に櫛描文。	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	・密 ・◎		

道後今市遺跡6次調査地出土石器観察表

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備 考	写 真
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)		
29	石包丁	完形	緑泥片岩	14.5	4.1	0.65	66.5		
30	石包丁	1/2	緑泥片岩	6.0	4.2	0.50	22.9		
31	石包丁	1/4	緑泥片岩	7.4	2.7	0.50	15.4		
32	石包丁	1/3	緑泥片岩	5.5	4.8	0.60	25.6		



写真1 遺構検出状況(1) (南西より)



写真2 遺構検出状況(2) (南より)



写真3 SB-1 検出状況 (西より)



写真4 SB-1 炉検出状況 (西より)

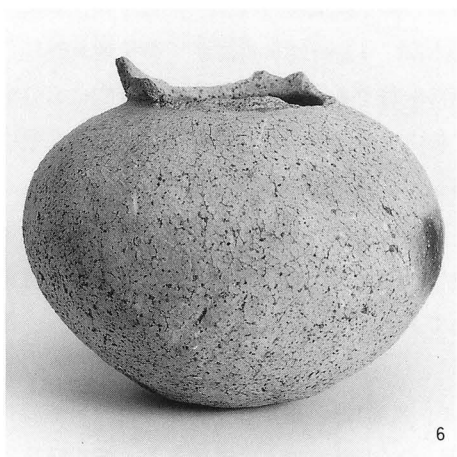


写真5 SB-1 出土遺物

松山大学構内遺跡 2 次調査地

1. 所在地 松山市文京町 4 番 10
号他
2. 調査年月日 平成元年 11 月 26 日～
平成 2 年 2 月 28 日
3. 調査面積 2,300m²



図 1 調査地位置図

経過 松山大学構内遺跡がある松山市文京町は、松山平野北部、松山城（城山・勝山）の北に位置する。松山城の北より道後温泉に至る扇状地には、縄文時代後期～中世・近世までの遺物・遺構が多数確認されている。近年、この地域は、『道後城北遺跡群・道後城北地区』と呼ばれ、弥生時代において松山平野の主要な集落地帯であったことが調査・研究により明らかとなり、注目される遺跡地帯となっている。松山大学構内遺跡は、この地域の西北部の標高 25.5m にあり、文京遺跡（愛媛大学城北キャンパス）、松山北高校遺跡に接する。

遺構・遺物 本調査では、縄文土器（晩期後半）・弥生土器（前期・後期）・土師器（古墳時代）を含む包含層、土師器・須恵器を含む包含層、中世の土師器を含む遺物包含層を確認した。いずれも近現代の造成工事により削平されており、遺存状況は良好でない。また、遺物の包含量は少なく、かつ小片であった。

検出遺構は（図 2）、竪穴式住居址 16 棟（弥生 4、古墳 12）、掘立柱建物址 1 棟（古墳時代前期以前）、土塋 11 基、溝 18 条、自然流路 1 条、ピット 358 基である。このうち、弥生時代後期の S B 7 からは、200 点余りの土器と石庖丁、紡錘車（石製 1・土製 3）、ガラス玉 14 点他が出土している。また、古墳時代中期の S B 1 からは、二重口縁を有する壺をはじめとする土師器 20 点余りと有孔円板（滑石製・双孔）、ミニチュア土器他が出土しており、屋内施設として炉とカマドをもつことを確認した。

小結 本調査では、縄文晩期～中世の遺物・遺構を確認した。これまで、道後城北地区では弥生時代後期と古墳時代中期の生活関連遺構の検出例は稀少だっただけに、本調査資料は、これを補充・充実させる資料となり、評価されるものであろう。この他、調査面積が 2,300m²であったが、弥生後期～古墳時代後期の間の集落様相が一部ではあるが明らかにされたことは、今後の周辺地の調査に大きく影響するものとなるであろう。

なお、本調査の詳細は報告書にて行うものとする。 (梅木謙一・宮内慎一)

(文献) 梅木謙一 『松山大学構内遺跡 — 第 2 次調査 —』 1991

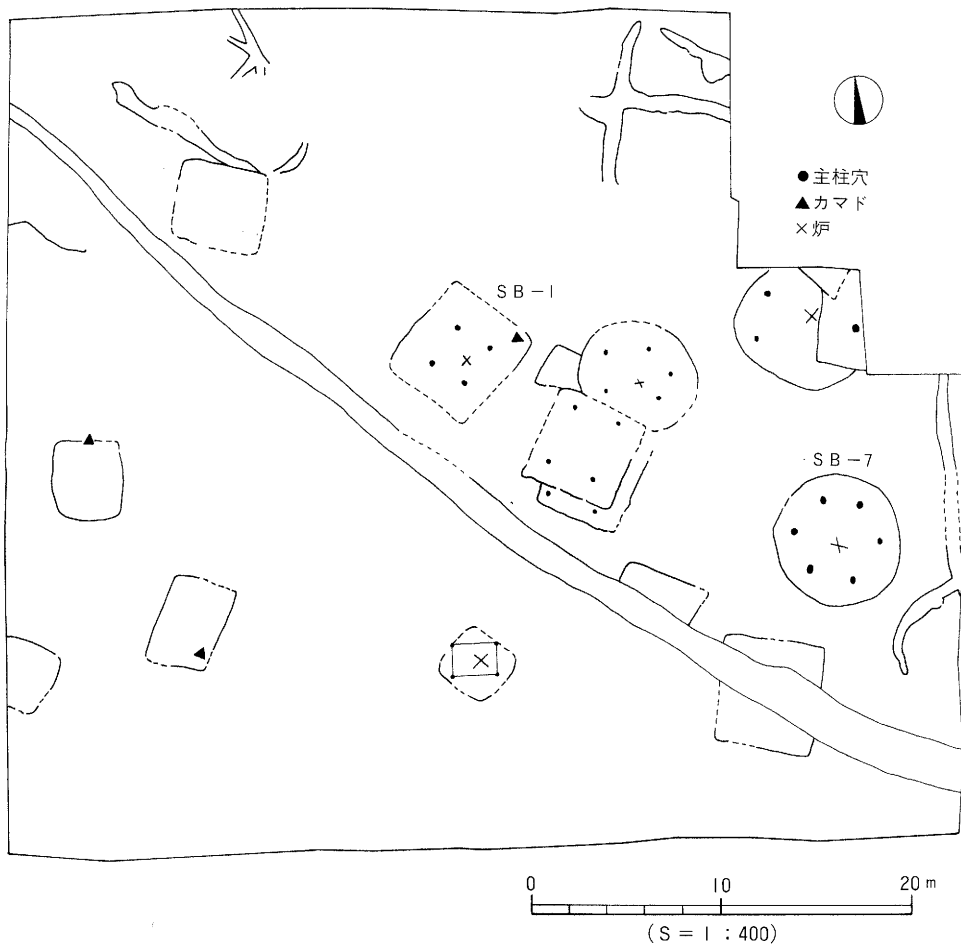


図2 松山大学構内遺跡2次遺構配置図

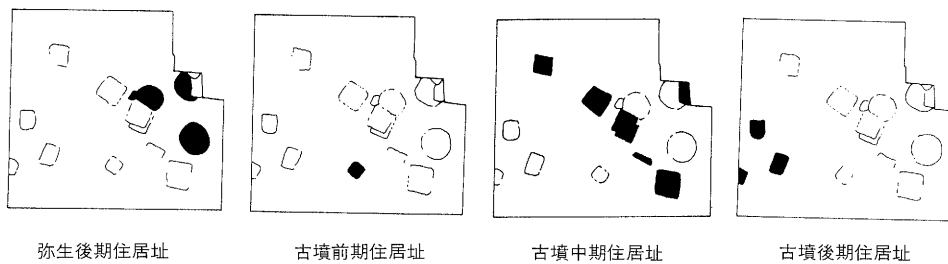


図3 住居址変遷図

祝谷本村遺跡

1. 所在地 松山市祝谷5丁目

745-1・753-2

2. 調査年月日 平成2年7月6日～

9月5日

3. 調査面積 661m²

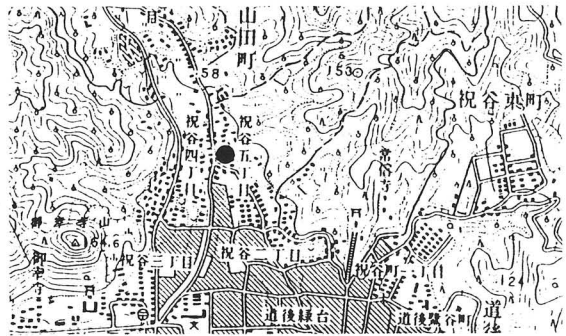


図1 調査地位置図

経過 本調査は、道後北代遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。平成2年2月に試掘調査を実施した。調査の結果、柱穴4基、土壇1基を確認した。

調査地である松山市祝谷地区は、高縄山地西縁に発達した松山丘陵裾部、台地上に位置している。本調査区は、道後城北遺跡群の北部にあたり、高縄山地の丘陵裾部、標高約45m上に立地する。周囲には、道後今市遺跡（平形銅剣出土）、祝谷六丁場遺跡、丸山遺跡等、松山平野でも有数の弥生時代の遺跡がある。

本調査は、調査区が造成時の段カットのため、南側の低い地区をA区、北区の高い地区をB区とし分区して調査を行った。平成2年7月6日、ユンボによる表土掘削を開始し、同年7月11日からA区の発掘作業を開始した。その結果、包含層及び種々の遺構を検出した。8月20日、B区調査開始。A区同様、ユンボによる掘削をし、併行して排土を場外へ搬出した。B区は造成等のた

H 44.400 m

I層	30~40cm	第I層	表土
II層	15~20cm	第II層	水田床土
III層	20~30cm	第III層	褐色土
IV層	20~30cm	第IV層	暗褐色土
V層	30~35cm	第V層	黄褐色土
①		①	明黄褐色 砂質土
②		②	緑黄色土
③		③	暗褐色土

S = 1/40

図2 基本層序

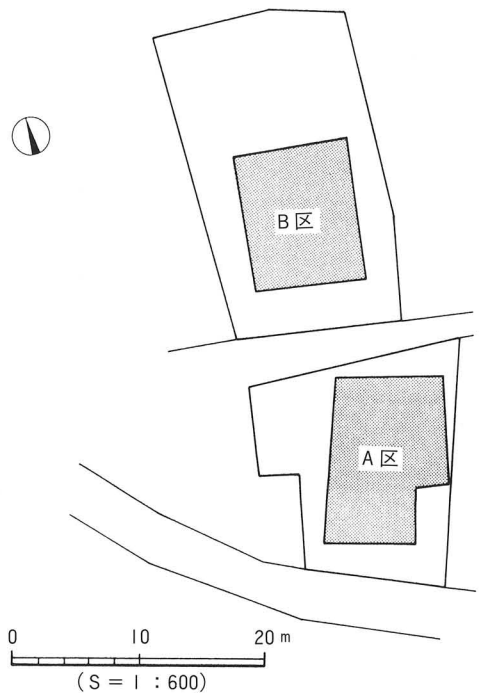


図3 全測図

め、遺構面及び包含層は削平されたものと考えられ、遺構は検出されなかった。土層確認のため、数カ所にトレンチを掘りA・B両区の土層を照合し、土壌サンプルを採取した。同年9月5日、発掘作業を終了した。

遺構・遺物 基本層序は図2である。第Ⅰ層表土（耕作土・攪乱土）、第Ⅱ層水田床土、第Ⅲ層褐色土、第Ⅳ層暗褐色土、第Ⅴ層黄褐色土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層は地表下30~60cmまで開発が進んでいる。第Ⅲ層、第Ⅳ層は共に遺物包含層で、各々20~30cmの堆積であり、第Ⅲ層は土師器、須恵器を、第Ⅳ層は弥生土器・須恵器を包含する。第Ⅴ層は無遺物層である。遺構は（図4）すべて第Ⅴ層上面での検出であり、掘立柱建物2棟、土塋2基、溝状遺

検出遺構一覧表

掘立柱建物

番号	規模(間)	桁行(cm)	梁行(cm)	時期
①	2×1	370	220	不明
②	2×1	300	160	中世

土塋

番号	平面形	断面形	規模(cm)	時期
1	楕円形	舟底状	90×125×18	古墳後期
2	不定形	皿状	160×240×40	中世

溝

番号	断面形	規模(cm)	時期
1	皿状	20×700×5	中世

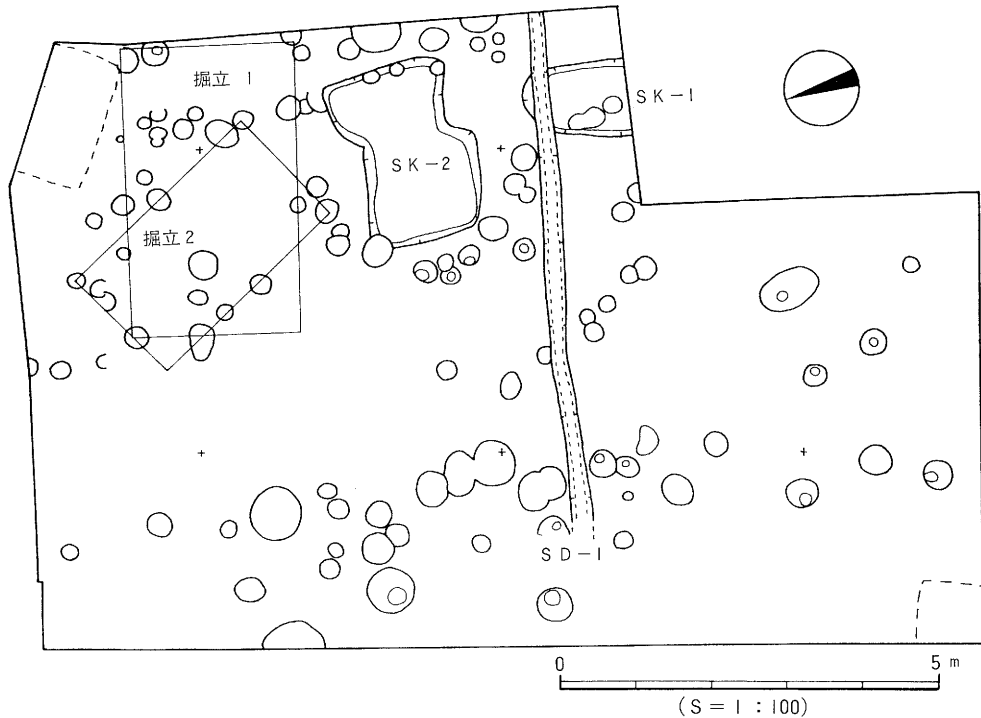
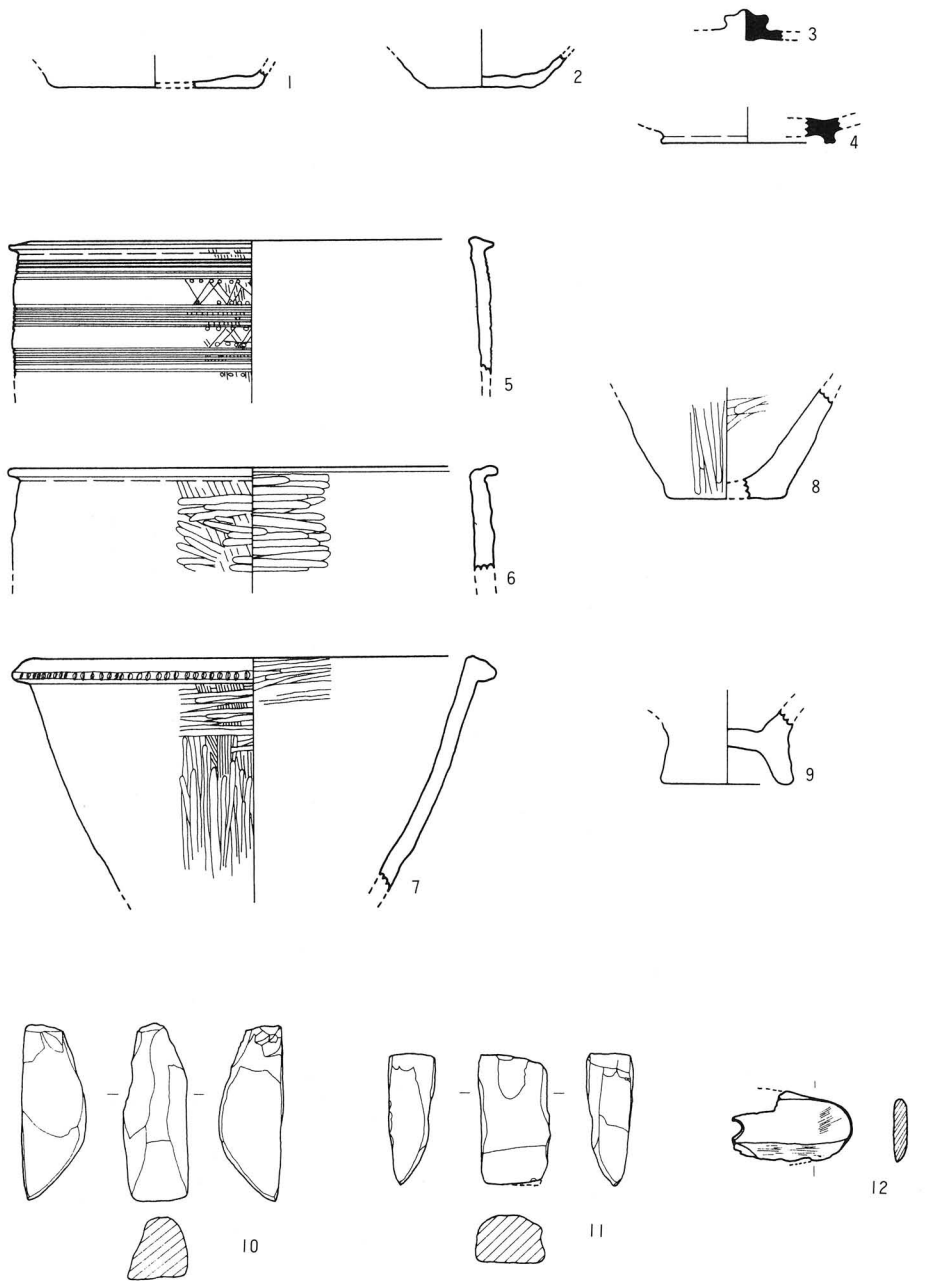


図4 A区遺構配置図



1 ~ 4 第III層出土
5 ~ 12 第IV層出土

0 10 20cm
(S = 1 : 4)

图5 出土遺物実測図

構1条、柱穴104基、他である。

遺物は(図5)第Ⅲ層より土師器、須恵器、第Ⅳ層より弥生土器(弥生前期末～中期初頭)須恵器、石斧(柱状片刃、扁平片刃)、石庖丁他が出土した。

小結 本調査では、弥生時代から中世の遺構と、古代から中世の集落関連遺構を検出した。弥生土器は包含層からの出土で、流入遺物と考えられ、本調査区から上の丘陵上～中腹部に同時代の集落が存在していたことをうかがわせるものである。これは対面する祝谷六丁場遺跡を含め、祝谷地区の弥生時代中期における同時代の集落構造を考えるうえでの好資料となり得る。また、祝谷地区での古代から中世の遺構の検出は初例であり、本地区の集落研究の基本的資料の一つとなりうるであろう。(宮内慎一・梅木謙一)



桑原西稲葉遺跡 1次調査地

1. 所在地 松山市桑原2丁目1
他
2. 調査年月日 平成元年4月25日～
9月30日
3. 調査面積 2,300m²



図1 調査地位置図

経過 本調査は、桑原遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。調査地は、石手川左岸の沖積扇状地上の標高38m上に立地する。周囲には弥生時代～古墳・古代・中世までの複合遺跡である樽味遺跡・樽味立添遺跡等があり、東部～南東部の丘陵地には前方後円墳の経石山古墳・三鳥神社古墳・群集墳の東野お茶屋台古墳群がある。

遺構・遺物 基本層序は図2である。第Ⅲ層は弥生土器(中期・後期)、土師器(古墳・古代・中世)、須恵器(古墳・古代)を包含する。第Ⅳ層上面の地形測量では、調査区中央が高く、南東及び北面に緩傾斜をもつことを確認した。さらに調査区西半部において第Ⅴ層と第Ⅵ層の間に火山灰が25cm堆積していることを確認した。この火山灰層中及び上下層からの遺物の出土はない。

遺構は、第Ⅳ層上面での検出で、掘立柱建物2棟、柵列1基、溝・自然流路12条、土壇27基、ピット114基がある。遺構はいずれも近現代の造成により上部を削平されており、遺存状況は深さ10cmに満たないものが多い。また、遺構中には遺物がないため時期の特定はできない。

調査区の北西隅地点は、第Ⅳ層堆積以前に既に北西に向けて緩傾斜をなしている。このため同地の第Ⅳ層及び第Ⅲ層は、他の調査地点よりも厚い堆積となっている。この地が傾斜地でなくなったのは第Ⅲ層堆積終了時以降であり、かつ現在のような平坦地になったのは近現代の耕地整備時以降である。この地点は第Ⅲ層堆積中及び堆積後において、自然流路、溝が6条形成されている。このうち最古の流路からは、5C末～6C前半の須恵器が床面上より出土している。

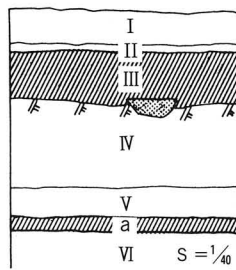
小結 本調査では、弥生時代以降中世までの集落関連遺構と遺物、旧地形(第Ⅳ層上面)、火山灰を確認した。

当地域の弥生時代～中世の集落関連遺構は、本調査地の北の地帯において多数確認されており(樽味遺跡・樽味立添遺跡・樽味高木遺跡等)、本例は当地域の各時代の集落領域の南限を考える上での一資料となるものである。さらに、本調査において、竪穴式住居跡が未検

出であることは、樽味四反地遺跡（本調査地北東50m）、
 試掘調査地（本調査地北東20m）においても同様であり、
 弥生時代～古墳時代の当地域の集落内構造、特に本調査
 地近隣の土地利用を考える上で好資料となるものであ
 る。本調査地北西隅の自然流路・溝は、生産址（水田跡）
 が近隣に存在することを示唆するものである。

本例検出の火山灰は、樽味四反地遺跡検出のA T火山
 灰に出土状況が近似しておりA T火山灰の可能性が高
 い。
 （梅木謙一）

L = 38.500 m



- I 表土
- II 黄灰色土（水田床土）
- III 黒～黒褐色土（遺物包含層）
- IV 暗茶褐色土（地山）
- V 暗茶褐色砂礫
- a 火山灰（黄色）
- VI 褐色土（含微砂）

図2 基本層序

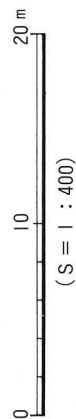
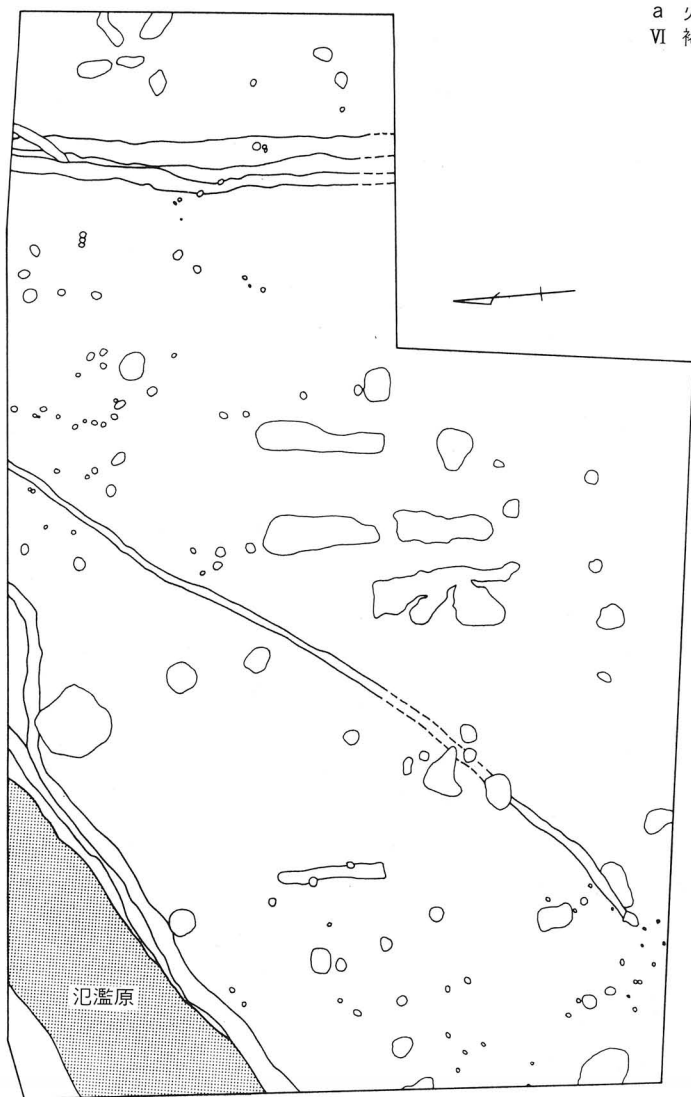


図3 全測図

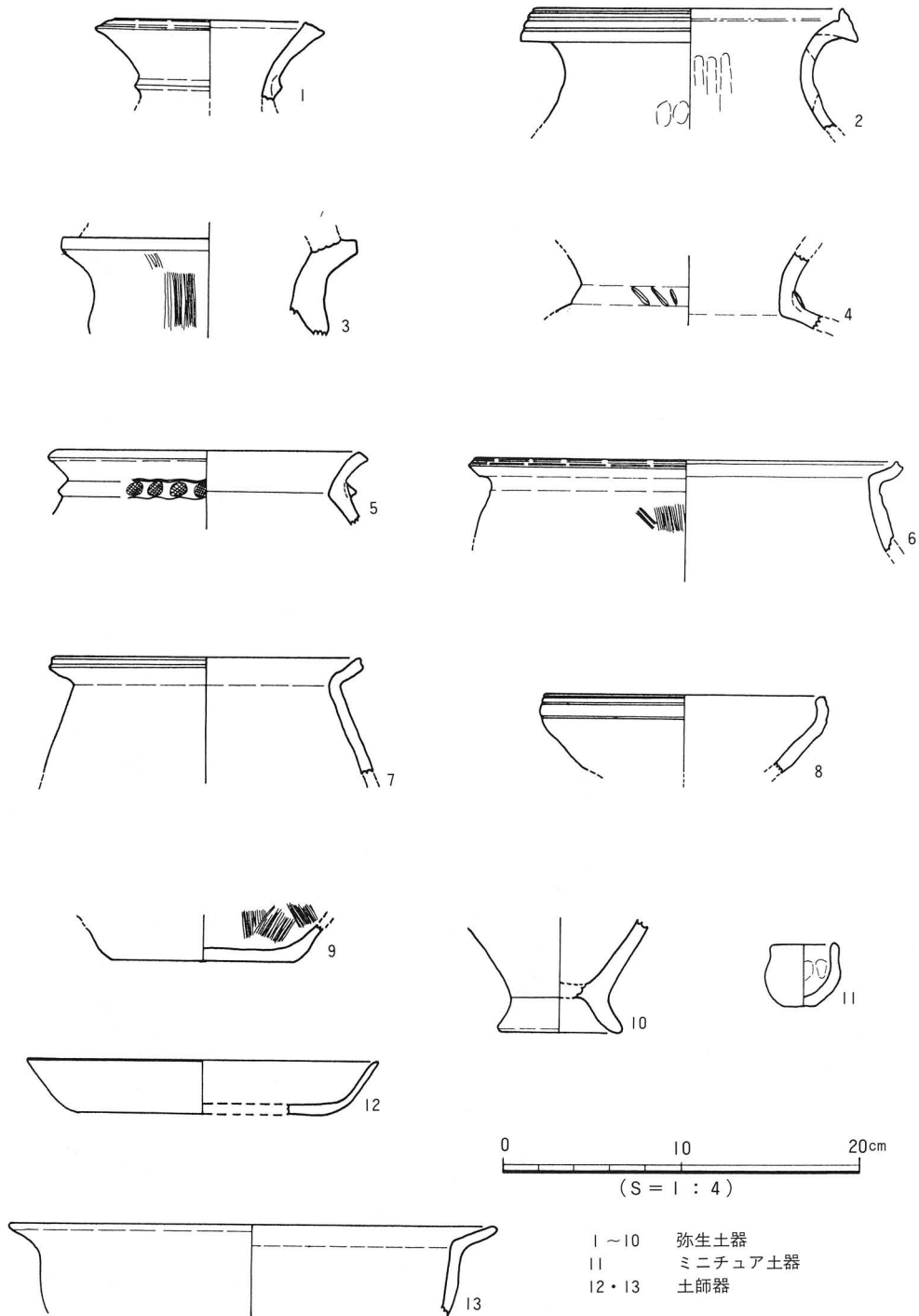


图4 自然流路・包含層出土遺物実測図(1)

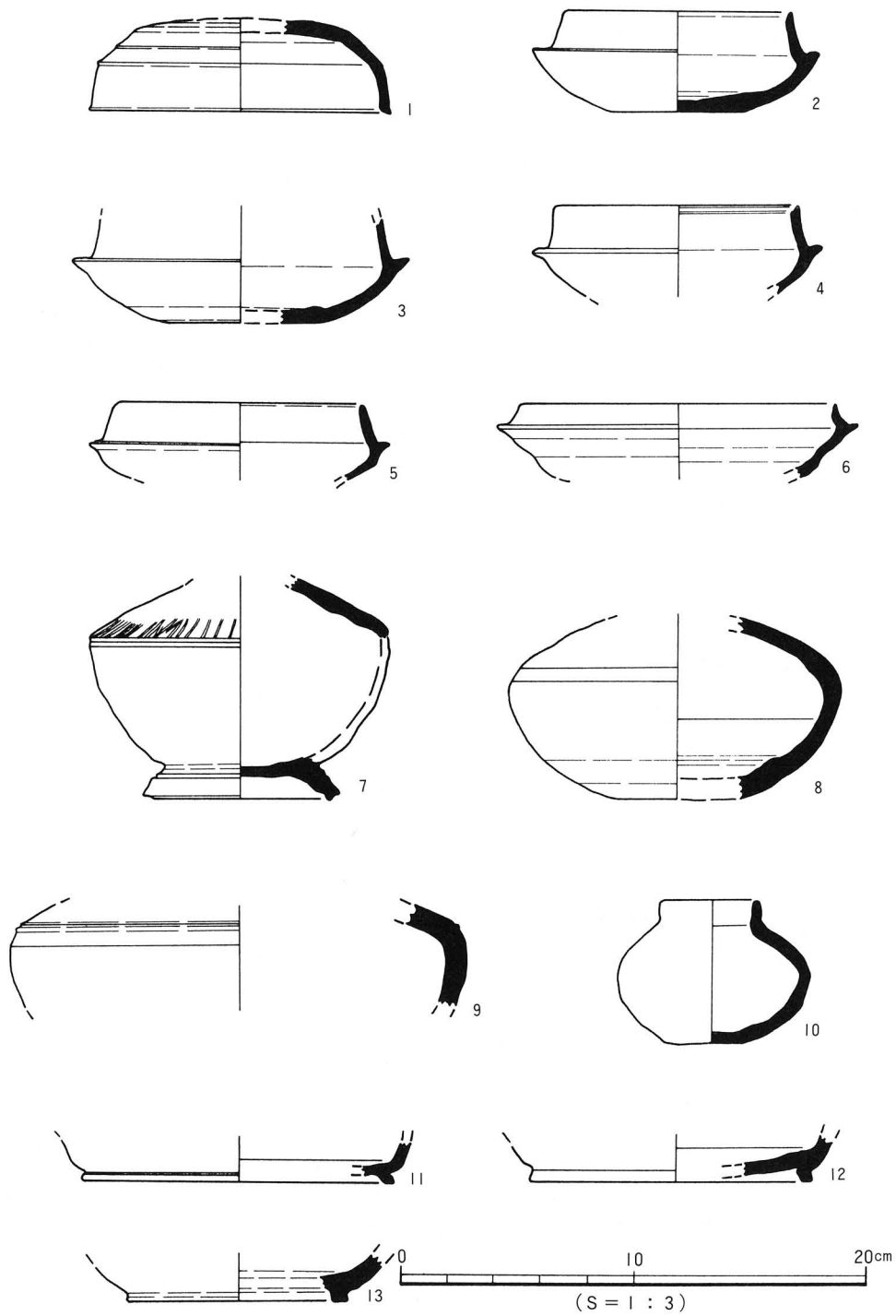


图5 自然流路・包含層出土遺物実測図(2)

桑原西稲葉遺跡 2 次調査地

1. 所在地 松山市桑原 2 丁目

971-2

2. 調査年月日 平成 2 年 7 月 14 日～

9 月 17 日

3. 調査面積 1,143m²



図 1 調査地位置図

経過 本遺跡は、松山平野を流れる石手川左岸の沖積扇状地上（標高38m）に立地し、周囲には樽味遺跡、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、桑原田中遺跡、また平成元年度に行われた当地西隣の西稲葉遺跡 1 次調査地など、弥生期から古墳期に至る複合遺跡が散在する地域に位置している。平成 2 年 1 月、松山市指定の「桑原遺物包含地」内における宅地開発に伴う試掘確認調査を実施し、その結果、弥生土器、土師器、須恵器などの遺物と、遺物包含層（2 層）、溝状遺構 1 条が検出されたため、上記の期間本格調査を実施した。

遺構・遺物 検出遺構は、土壙状遺構 9 基（弥生 1 基、時期不詳 8 基）、溝状遺構 2 条（中世 1 基、時期不詳 1 基）、柱穴 4 基（時期不詳）、円形特殊遺構 1 基（時期不詳）である。特に、弥生中期後半から後期にまたがる土器を確認した土壙 S K-1 の南側より検出された円形特殊遺構については、直径 4 m の円形のなかに幅 50cm～100cm のドーナツ形溝状遺構を形成する特異なプランであるため、今後の周辺地域の調査結果に依るものとする。遺物は、口縁部に凹線紋を有する壺、器面に叩き痕を顕著に残す壺などがあり、これらの遺物から、弥生中期から後期末という時期設定ができる。ただ、ほとんどが遺構に伴わない遺物であるため、自然の流れ込みにより堆積した土器溜りと考えられる。また、第 VI 層上面において旧石器を 1 点検出していることを付記しておく。

小結 隣接する西稲葉遺跡 1 次調査において確認された第 III 層（遺物包含層）は、本調査では第 IV・V 層と対応し、IV 層からは弥生土器、須恵器、V 層からは弥生土器がそれぞれ検出された。但し、本調査区の東側 3 分の 2 は、近現代の耕地整理のため全てその上部を削られており、北西約 10m 四方しか IV・V 層の確認はできなかった。即ち、東部から西部にかけて緩傾斜となっており、流れ込みによる土器溜りを形成したものと思われる。また、1 次調査同様火山灰を確認したが、断定までには至っておらず、周辺の遺跡などから水田跡の可能性も高く、両者とも土壌分析による結果を待たねばならない。本調査は、遺構に関し不明瞭な点が多く、1 次調査を含めた今後の検討が必要と思われる。

（高尾和長・田城武志）

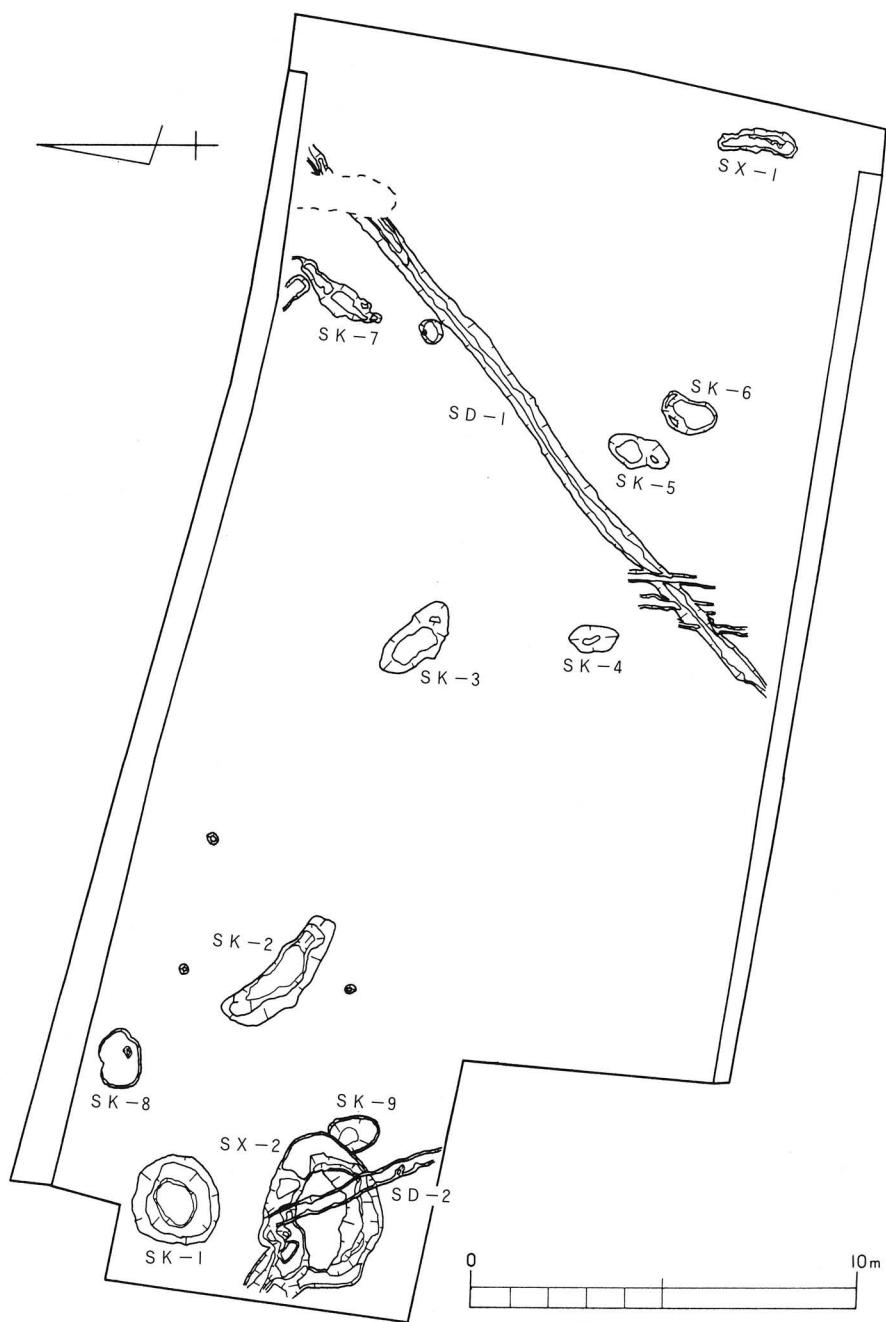


图2 遺構配置図

経石山古墳 1 次調査

1. 所在地 松山市桑原 4 丁目

410-1

2. 調査年月日 平成 2 年 10 月 17 日～

12 月 19 日

3. 調査面積 567m²



図 1 調査地位位置図

経過 本調査地は、県指定史跡経石山古墳の後円部北東裾部にあたり、東野洪積台地の先端部（海拔40m）に位置している。周辺地域には、畑寺竹ヶ谷古墳、東野お茶屋台古墳、溝辺古墳、また本墳とほぼ同規模の三島神社古墳などが点在する。平成 2 年 6 月、松山市指定の「桑原経石山古墳包含地」内における宅地開発に伴う試掘確認調査を実施し、その結果、経石山古墳の周溝と思われる溝状遺構が検出されたため、上記の期間本格調査を行った。

遺構・遺物 検出遺構は、本墳の周溝と考えられる溝状遺構（SD-1）、土壙状遺構 2 基、ピット状遺構 53 基である。SD-1 は、幅 7～11m で西壁より南東壁に向かって広がり、深さ 20～50cm を測り、溝底は南東方向に傾斜している。土壙は、不整形のプランであり、自然又は本墳築造以後に形成された凹地と思われる。ピット状遺構についても、ほとんどが不規則なプランであり、掘立柱建造物等に関連性の薄いピット群であると考えられるが、ただ SD-1 内北東部より検出された柵列状遺構は、長軸 70cm、短軸 40cm の南北に長い楕円形状ピットが約 30cm の間隔で東西に延びたものであり、本墳周溝との関連について今後の課題としたい。ちなみに、平成元年度に実施された福音寺小学校遺跡調査においても同様の柵列遺構が確認されている。出土遺物は、一定時期のまとまりが見られず、殊に須恵器に関して言えば、従来定説とされてきた本墳の築造時期（5 世紀末～6 世紀初）とはかなりの時代の隔たりが見受けられる。よって SD-1 内出土土器より本墳の時期設定は困難と思われるが、本墳と直接関連性を窺わせる鉄鍬や鉄斧なども検出しており、今後の分析結果に期待したい。

小結 現在最も新しい本墳の実測図は、1972 年発行『三島神社古墳』報告書に掲載されているもので「主軸全長 48.5m、主軸方向 W0.2 度 N、前方部全長 20m、後円部高 5m、前方部高 3m」と計測されている。今回調査で検出した SD-1 の内側より現墳丘裾部までの間に平坦面約 7m を確認した。この平坦面は、近・現代に削平されたものと考えられ、この部分は従来墳丘であったと推察できる。このことから、本墳主軸全長は少なくとも 55.5m 以上であったことが今回の調査で明らかとなった。また、SD-1 は、空濠の可能性も考えられ、今後の調査で解明していきたい。

（大森一成・田城武志）

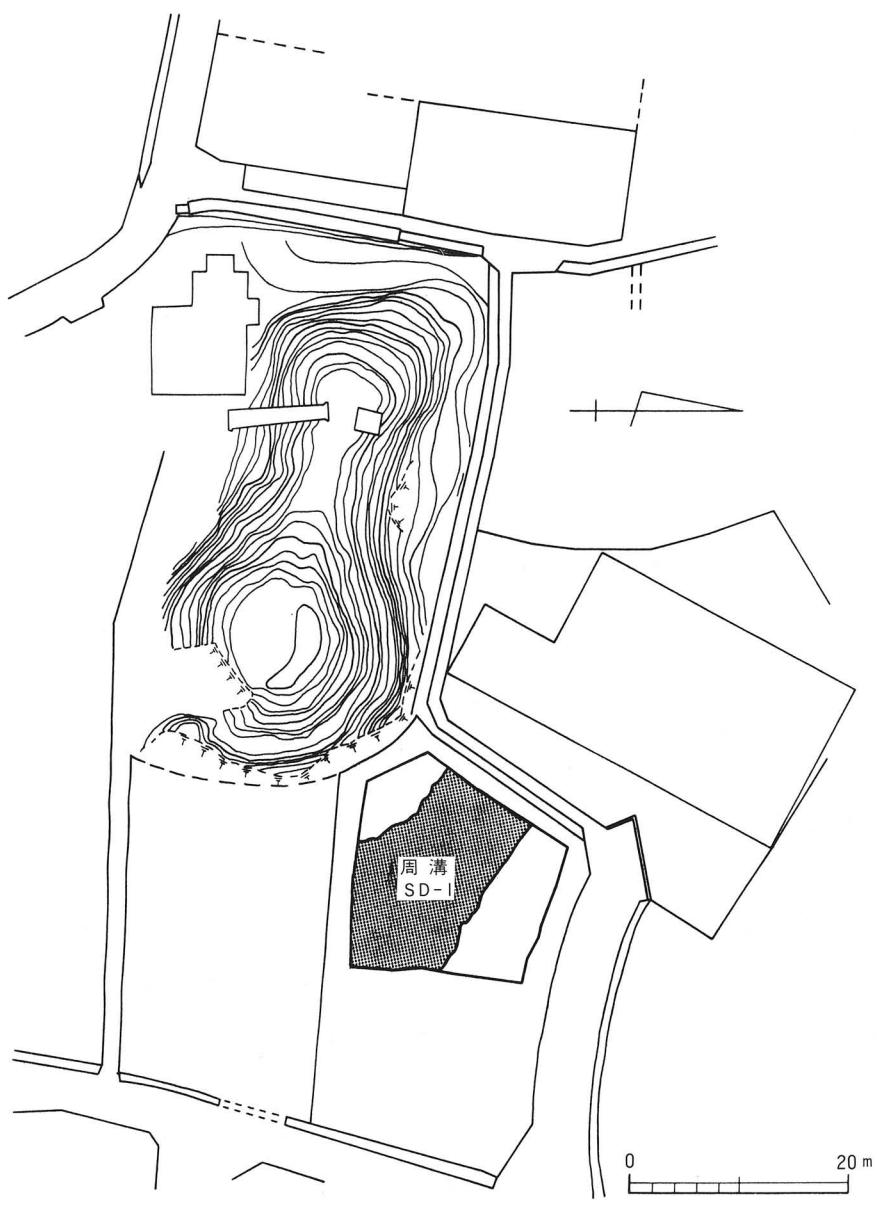


図2 検出された周溝と墳丘

榎田遺跡

1. 所在地 松山市小坂5丁目
295-1・2他
2. 調査年月日 平成元年5月29日～
6月30日
3. 調査面積 5,058m²

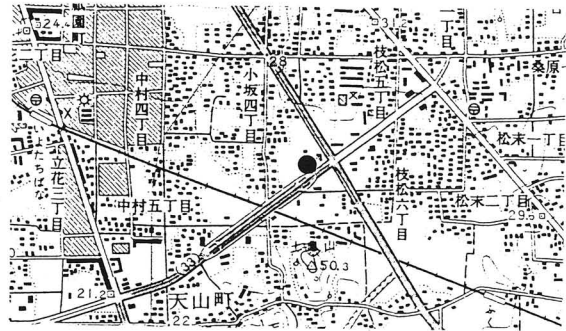


図1 調査地位置図

経過 小坂5丁目遺物包含地における店舗駐車場建設に先立ち、試掘調査を実施したところ、多数のピットを検出すると共に土師器片が出土した。協議の結果、約一ヶ月の予定で事前発掘調査を行うことになった。

本遺跡は松山平野東部の沖積低地に立地し、標高約25mを測る。国道11号線・33号線の交差点のすぐ西側に位置しており、北東約150mに釜ノ口遺跡が存在する。

遺構・遺物 調査区の北半部は、かつて水田造成がなされた際に黄褐色シルト層（地山）まで削平されており、遺物包含層は南半部でのみ確認された。遺物包含層は黒褐色を呈し、層高4～10cmを測る。旧地形は北から南へ向かって若干傾斜している。

遺構は全体的に調査区のやや西側に偏在しており、また南側も減少する傾向にある。ピット60基・土壇7基・溝3条・掘立柱建物跡1棟が検出された。ピットは、概ね径10～30cm、深さ7～50cmを測る。S K-4の平面プランは長径1.1m・短径0.9mの楕円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がり、深さ30cmを測る。土壇内より中期後葉～後期初頭の弥生土器（図3）・河原石5・木片1が出土した。S K-6の平面プランは径90cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。断面形は掘り鉢状を呈し、土壇内には径5～10cm前後の多量の灰黄褐色粘質土ブロックが詰め込まれていた。S K-7の平面プランは長径78cm・短径57cmの楕円形を呈し、深さ34cmを測る。壁面は垂直に立ち上がり、内部にはS K-6と同様に直径10cm前後の灰黄褐色粘質土ブロックが充填されていた。底面直上より土師器片が出土した。S B-1は、桁行2間（3.7m）・梁間1間（2.5m）の東西棟掘立柱建物であり、柱穴の掘方プランは、径23～37cmの円形を呈し、深さ23～30cmを測る。遺物包含層の出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器などの小破片であり、コンテナ約1箱分であった。土師器が最も多く、弥生土器がこれに次ぎ、須恵器はごく少量である。

小結 検出された遺構より判断すると、当地点は集落の縁辺部に相当するのではないかと推測され、本遺跡の北東に近接する釜ノ口遺跡で確認された弥生時代後期の集落範囲を考える上での一資料にもなるであろう。

（藤原敏秀）

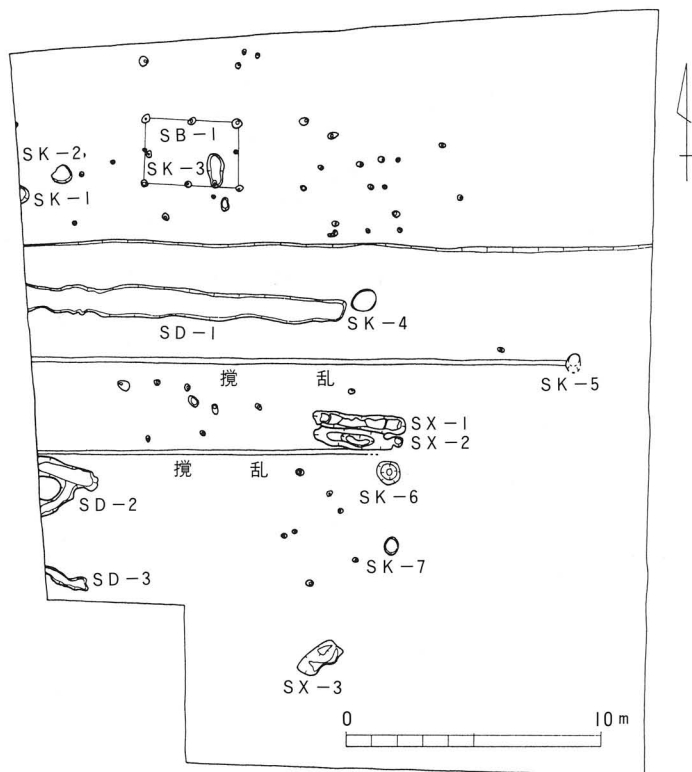


图2 遺構配置図

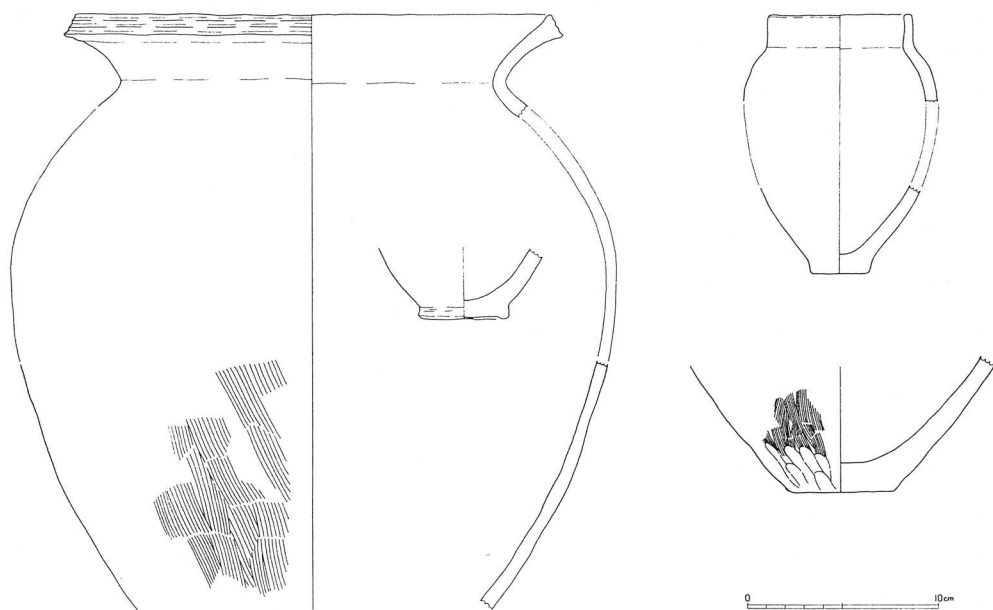


图3 SK-1 出土遺物実測図

七ノ坪遺跡

1. 所在地 松山市小坂2丁目
471-1他
2. 調査年月日 平成元年6月27日
～8月5日
3. 調査面積 847m²

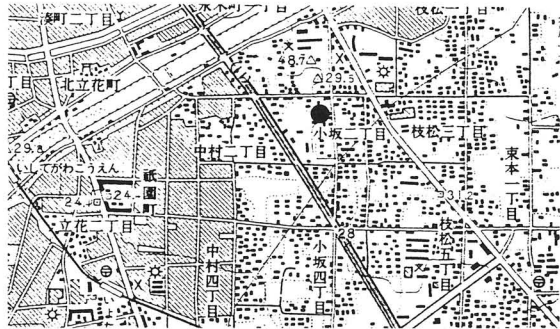


図1 調査地位置図

経過 当遺跡は、松山平野を西流する石手川の左岸約300mの扇状地上に位置する。西方約300mには、昭和62年の調査によって弥生時代後期の集落および、奈良時代の掘立柱建物が検出された中村松田遺跡、さらに北西200mには、古墳時代中期を盛期として弥生時代から平安時代に至るまでの複合遺跡、素鷺小学校遺跡をはじめとして、弥生時代中・後期中村遺跡、後期中村長正寺遺跡、小坂釜ノ口遺跡等、各時代にまたがる数多くの遺跡が周辺に分布している。民間開発に伴う試掘調査を同年3月に行い、溝状遺構を検出するとともに、須恵器、土師器を包含する土層が確認されたため、上記の期間本格調査を行った。

遺構・遺物 遺物包含層は、第7層暗褐色シルト、遺構は溝3条、土壇3基、柱穴37基で、この第7層下面の黄褐色シルト面で検出された。ただし溝SD-1は、後の土層観察によって、第7層を切っていることが確認されている。したがって、これらの遺構群のなかでこのSD-1が最も新しいものである。SD-1は調査区の北西四半分の区域で直角にL字状に検出されているが、ほぼ方位に沿っている。幅2m、深さ20～40cmを測り、U字または、逆台形状の断面をなす。一応、溝として扱ってはいるが、溝内と同じ覆土が区画内の部分にも被っており、また、この覆土には地山と同じ黄褐色シルトがブロック状に入っていることから、人為的に埋められ、また、盛られた可能性がある。何らかの地業が行われたのかもしれない。覆土からの遺物の出土はなく、時期は不詳であるが、第7層を切ることから8世紀以降のものである。SD-2は自然流路であり、SD-1に切られている。他に柱穴、土壇等が点在するが、建物を復元することはできなかった。また、土壇からの遺物の出土もなく、したがって図示した遺物はすべて包含層からの出土である。主体は7世紀末から8世紀代の須恵器で、陶硯を一点出土している。底部ヘラ切りのロクロ土師環片が若干出土しているが、現在のところ当地域では、黒色土器、灰釉陶器との遺構内での共伴関係から、9世紀末から10世紀前半に比定される例が最古例である。

小結 素鷺小学校遺跡の調査の時点で、中村1丁目を中心として濃密に分布していた弥生時代中・後期の遺物分布が東寄りに次第に希薄になることはある程度予測されていたが、今回

の調査によって、さらに南東に位置するこの地域が弥生時代に関しては全くの空白地帯であることが改めて確認された。国道11号バイパス関連調査および、その後の周辺地域の試掘データを総合してみると、中村遺跡とその南方約1.5kmの釜ノ口遺跡の間には当該期において、北東から南西にかけての低地部分が存在することが判明しつつある。当遺跡は、この低地の北縁辺部付近にあたると思われ、したがって当遺跡は集落内における一部の空白地帯というのではなく、中村弥生遺跡の南東限に近い部分にあたるものと考えられる。周辺地域のさらなるデータの積み重ねによって、弥生期の遺跡の動態、旧地形等、より詳細な事実が明らかとなろう。また、包含層とはいえ奈良時代の遺物の出土により、出土遺物の年代幅の広さ（弥生前・後期、古墳中期、奈良・平安時代）が時期比定を困難にさせていた素鷲小学校遺跡の掘立柱建物群の時期にも間接的な示唆を与えるものと評価できる。中村松田遺跡の奈良時代掘立柱建物も含めて、当該期に盛期を持つ集落が存在したことはほぼ間違いなからう。白鳳寺院址中村廃寺の具体的な位置も含めて、当遺跡周辺に残された課題は多い。

(栗田茂敏・大森一成)

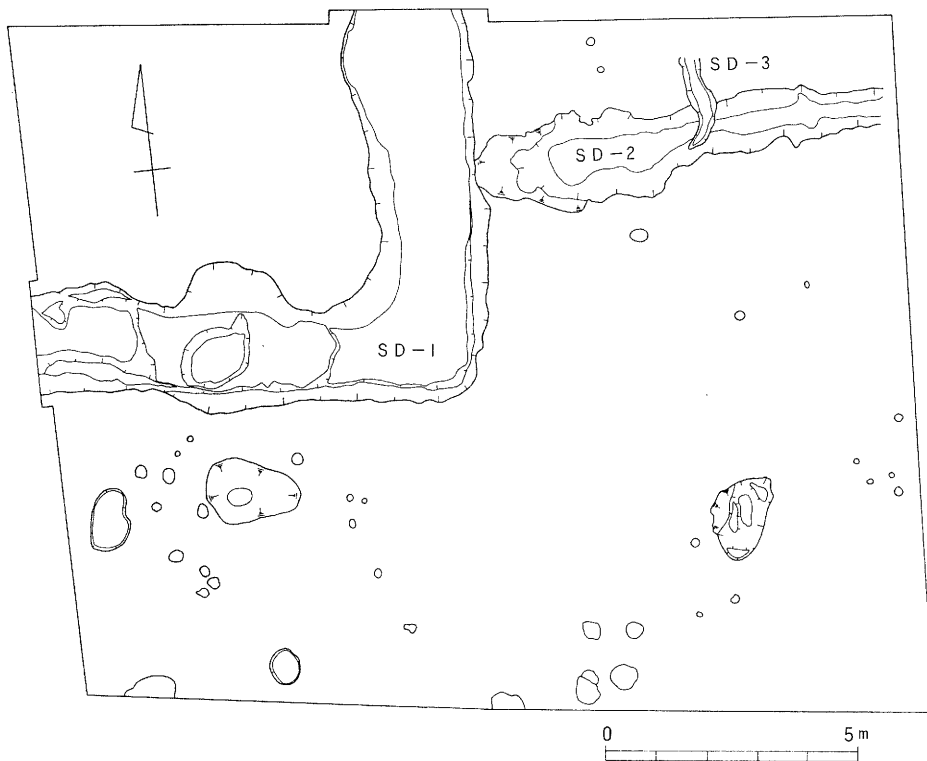
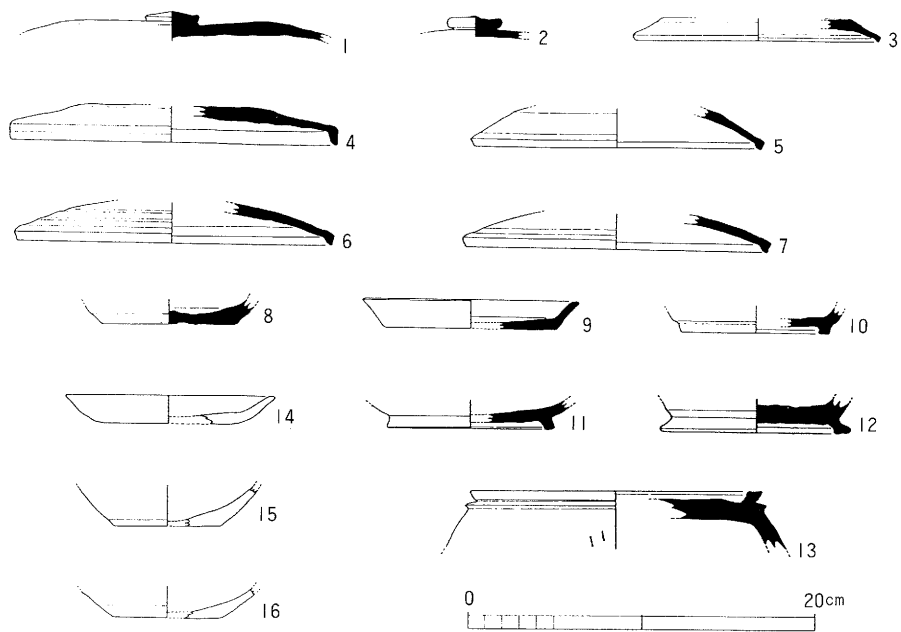


図2 遺構配置図



包含層(7層)出土遺物 (1~13・須恵器、14~16・土師器)

図3 包含層(7層)出土遺物

釜ノ口遺跡 7次調査地

1.所在地 松山市小坂4丁目19

—5

2.調査年月日 平成2年5月1日～

7月13日

3.調査面積 707㎡



図1 調査地位置図

経過 国道11号線の石手川にかかる永木橋より南方約300mに本遺跡は位置する。周辺に拓南中学校遺跡、釜ノ口遺跡、中村松田遺跡などが点在し弥生期の竪穴式住居址や溝など集落にまつわる多数の遺構が検出されている地域である。平成元年10月、松山市指定「釜ノ口遺物包含地」内におけるマンション建設に伴い試掘確認調査を実施したところ、住居址、土壙、ピットを検出したため、上記の期間本格調査を行った。

遺構・遺物 竪穴式住居址4基、ピット25基の遺構と石鏃、石斧、石庖丁、ガラス玉3点、ほかに弥生土器200点などの遺物を検出した。1号竪穴住居址は、東西5.3m、南北5.2mの円形プランを有し、上面は削平されてはいたものの壁高10cmを残し、壁面より30～40cmのベッド状を形成する焼失住居である。住居址内における炭化木材の残存状況は良好で、放射状に倒れた様相を明確に残している。この炭化材に混じって炉跡からは、ガラス玉、高環などの弥生土器を検出、また床面より検出した柱穴4基の中からは、直径15cmの丸い柱材が焼失を免れ残存しており、その柱表面には手斧を使ったと思われる加工痕が丁寧に施されていた。2号住居址においては、南半分のプランを確認、東西6.4mの隅丸方形で20～50cmのベッド状を持ち、炉跡からは1号住居址と同様にガラス玉を検出した。この住居址もまた、炭化材や焼土の確認によって焼失住居と考えられ、2基の柱穴からはやはり2本の柱材を検出した。そのうち、1本は角材であった。北側半分は調査区外となる。3号住居址もまた、東半分のみを検出であったが、出土遺物などから焼失住居と思われ、1辺5mの方形プランの中央部炉跡からはガラス玉を検出している。最後に4号住居址は、3号住居址を切る形で造られており、床面から柱穴の確認はされなかったものの、土壙(炉跡)などに焼け残った木材があったことから他の住居址と同じく焼失住居と推察できる。なお、床面よりさらに下層で、AT火山灰を確認したことを付記しておく。

小結 本調査において生じた課題は3点。ひとつには、住居が何故焼失したのか。二つには、3点出土したガラス玉すべてが何故住居址内の炉跡から検出されたのか。三つには、弥生住居の復元である。1号住居址の資料をもとに松山地方における弥生住居の復元が可能なのと考えられ、今後の調査によって、これらの問題点を解明していきたい。(高尾和長・真木 潔)

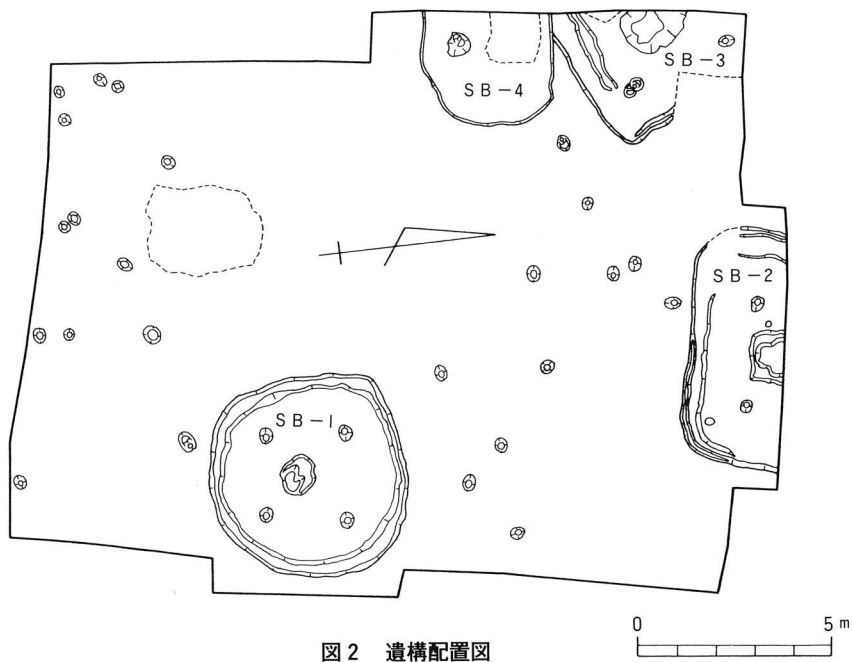


図2 遺構配置図

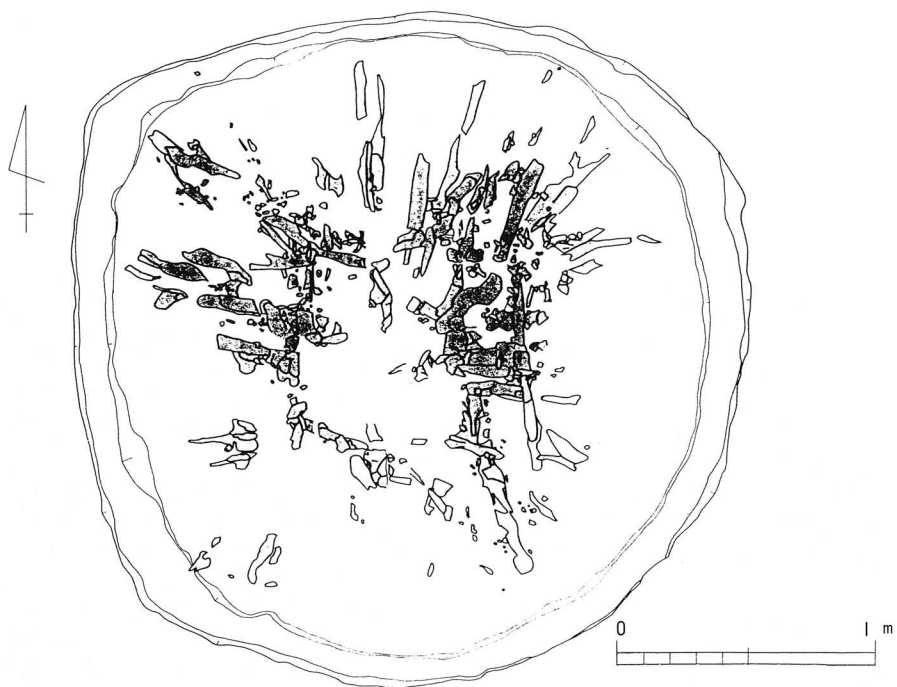


図3 SB-1炭化材検出状況

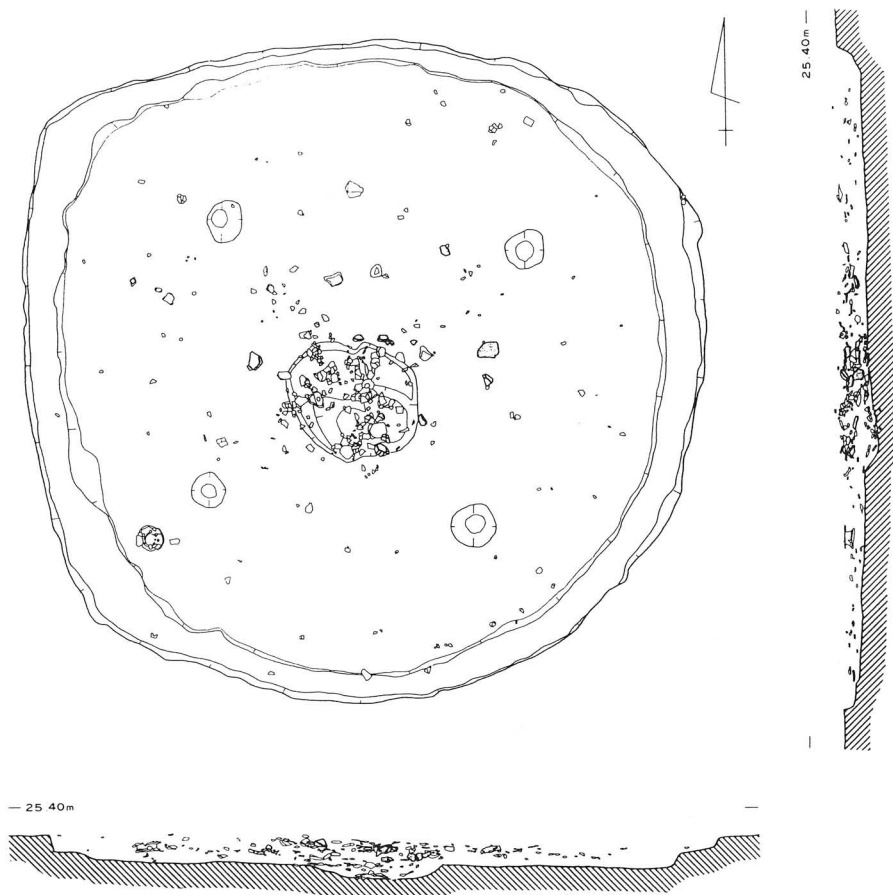


図4 SB-1 遺物出土状況



写真1 SB-1 断ち割り

西天山遺跡

1. 所在地 松山市小坂5丁目
336-3、338-3
2. 調査年月日 平成元年9月20日～
11月16日
3. 調査面積 1,208m²

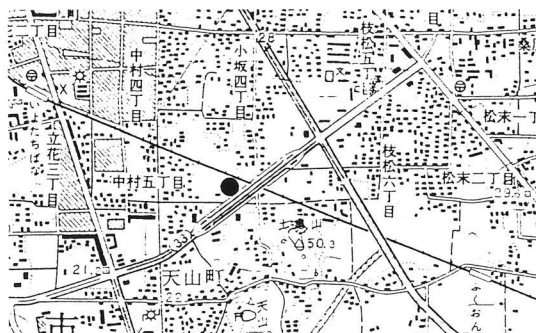


図1 調査地位置図

経過 小坂5丁目遺物包含地における宅地開発に先立ち、試掘調査を実施したところ、ピット・土壙・溝状部分を検出すると共に弥生土器片・須恵器片が出土した。協議の結果、約2ヶ月の予定で事前発掘調査を行うこととなった。

本遺跡は松山平野東部の沖積低地に立地し、標高約23mを測る。すぐ南隣を伊予鉄道横河原線が走り、北東約150mに榎田遺跡（P.58～59）が位置している。

遺構・遺物 基本層序は、第Ⅰ層表土（耕作土）・第Ⅱ層明褐色土（床土）・第Ⅲ・第Ⅳ層灰褐色土・第Ⅴ層茶褐色土・第Ⅵ層黒色土である。旧地形は北から南へ緩やかに傾斜し、地表より灰白色シルト層（地山）までの深さは北側で約40cm、南側で約0.7～1mを測る。

検出された遺構は、ピット49基・土壙16基・溝3条である。ピットは径20～30cm・深さ10～20cmのものが多い。SK-1の平面プランは長さ3.8m・最大幅0.9mと細長く、最深63cmを測る。底部は西寄りの部分でピット状に約20cm落ち込み、その東西両側はテラス状を呈する。SD-1は長さ7m・幅40cm・深さ10cmを測り、調査区外へさらにのびる。なお、調査区中央部と北東部の灰白色シルト層に掘り返されたような顕著な凹凸が認められ、中央部より加工木片1点が出土した。その他、調査区南東部において旧河川が検出され、調査区の東端からのびるものは長さ12m・最大幅4m・最深0.8mを測る。

出土遺物は、土師器片・須恵器片・石鏃3・鉄製品1・加工木片3などである。土器片は第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層より出土したが、その大半は第Ⅳ層出土であり、須恵器片に比べ、土師器片が圧倒的に多かった。旧河川の最深部の河床より11世紀前半の土師質土器が出土した。

小結 旧河川が検出されたことから、かつては当地点が周辺よりも相対的に低い地形を呈していたと想像され、平安時代中期頃はまだ河川の流れる低地ないしは低湿地であったと考えられる。当地点に継続的な人間活動が及ぶようになるのは早くても古墳時代以降であろう。

（藤原敏秀）

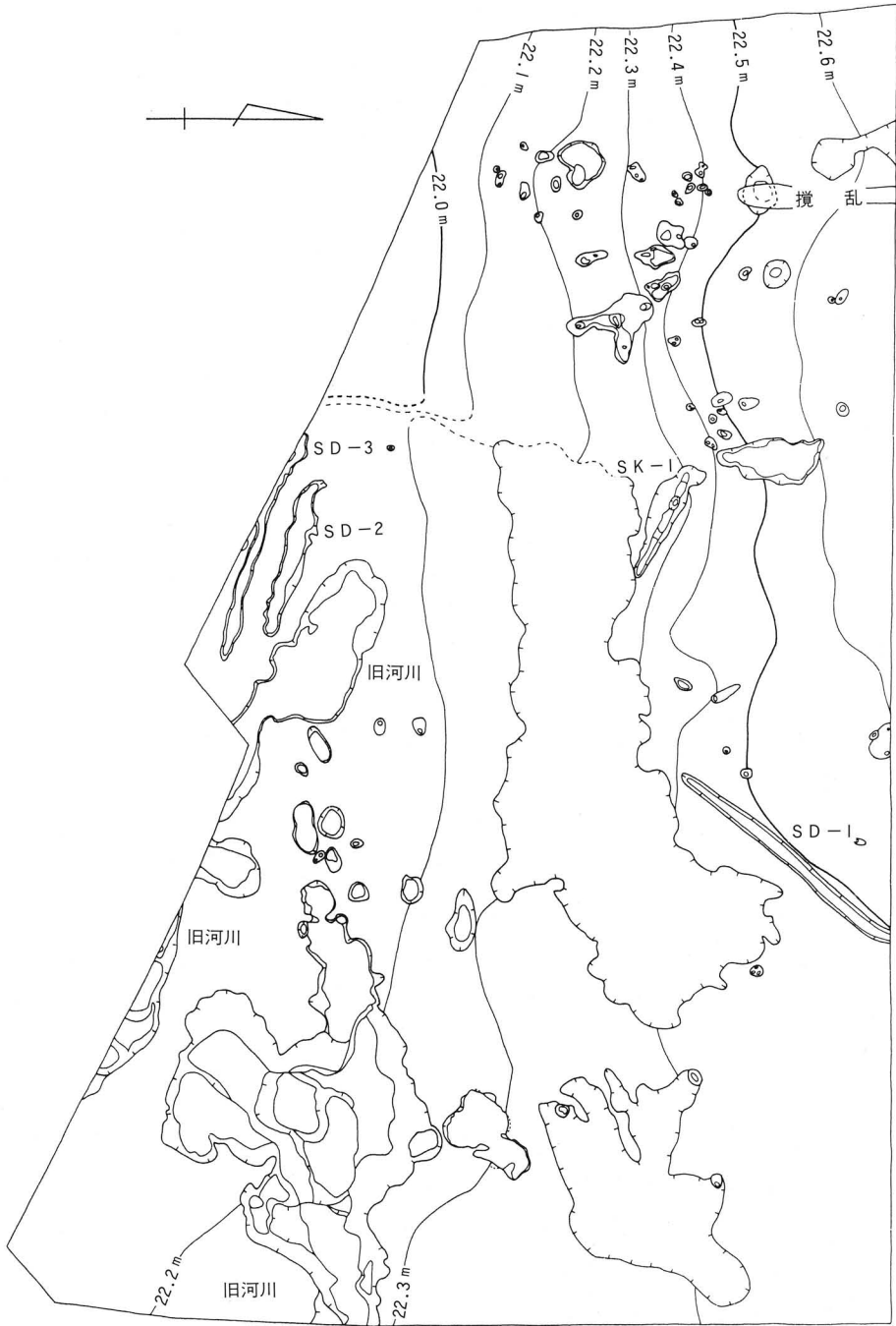


图2 遺構配置図

のぼりたて
星岡 登立遺跡

1. 所在地 松山市星岡町597・

601-1・601-3

2. 調査年月日 平成元年8月18日～

9月30日

3. 調査面積 1,124㎡

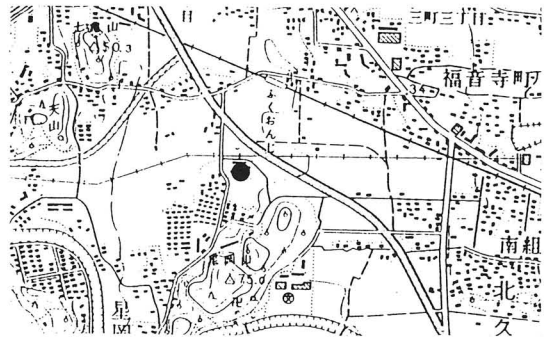


図1 調査地位置図

経過 本遺跡は、星岡丘陵北方の標高25m～26mに位置している。周辺の天山、星岡、東山等の独立丘陵上には多くの古墳群が、また調査地をとりまく微高地上や微高地縁辺部には、筋違・竹ノ下・旗立遺跡等をはじめとして古墳時代を中心とする遺跡群が数多く立地している。

民間開発に伴い確認調査を実施した結果、須恵器片・土師器片を含む遺物包含層及び土壙・溝状遺構を確認したため本格調査を実施した。

遺構・遺物 東西に長い調査区内は、南下がりに傾斜し、南西部は一部攪乱をうけている。検出された遺構は、掘立柱建物跡（S B）3棟、溝（S D）2条、柱穴92基、土壙1基である。

S B-1は、梁行3間、桁行3間分以上が検出された。削平され、立ち上がりを失ったと考えられる南西コーナーの柱穴位置では、基底部に据えられたと思われる根石が検出された。梁行柱間1.5m、桁行柱間2mを測る。S B-2は、北東角2間×1間分を検出した。S B-1、S B-2ともに磁北より10度東西にふれられている。S B-3は、S D-1を切って検出され、また、この建物に平行してS D-2が検出されている。このS D-2もS D-1を切っている。S B-3は、2間×2間の正方形の建物で、柱間は1.8m前後を測る。

S D-1・2からは、弥生式土器・須恵器の細片が出土している。

包含層より、石庖丁1点、ガラス小玉1点、弥生時代後期の壺口縁部・器台、須恵器坏身・蓋、甕、土師器などの細片、中世の羽釜口縁部・底部片などが出土している。

小結 当遺跡周辺は、古くは国道11号線関連、新しくは新設小学校用地として大規模調査が、その間にも幾つかの調査が行われ、古墳時代中・後期に盛期を持ちながら弥生時代から中世まで存続した大規模集落であることが明らかになりつつある。本調査で検出された遺構が、この集落を構成する建物群であることはほぼ間違いなく、集落の南西部へのひろがり、動態を知るうえでの好資料のひとつとなり得るものである。

(栗田正芳・小笠原善治)

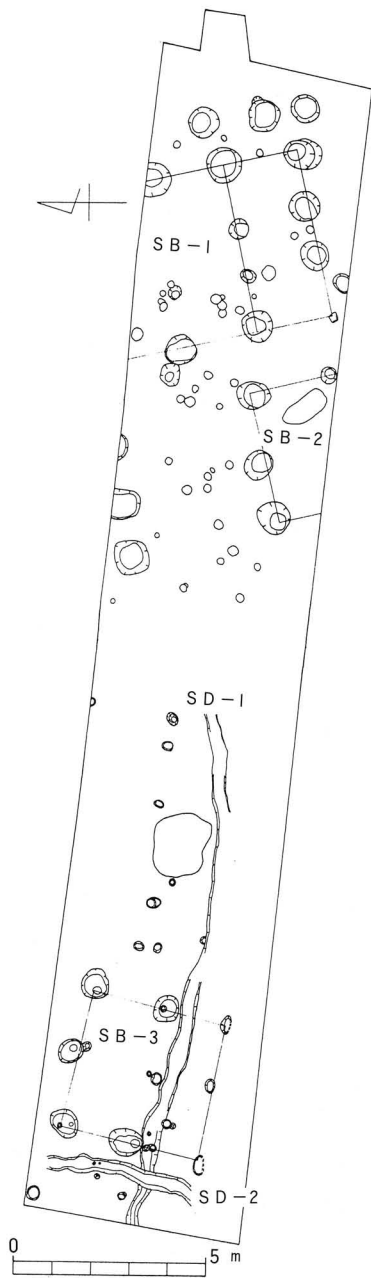


图2 遺構配置図

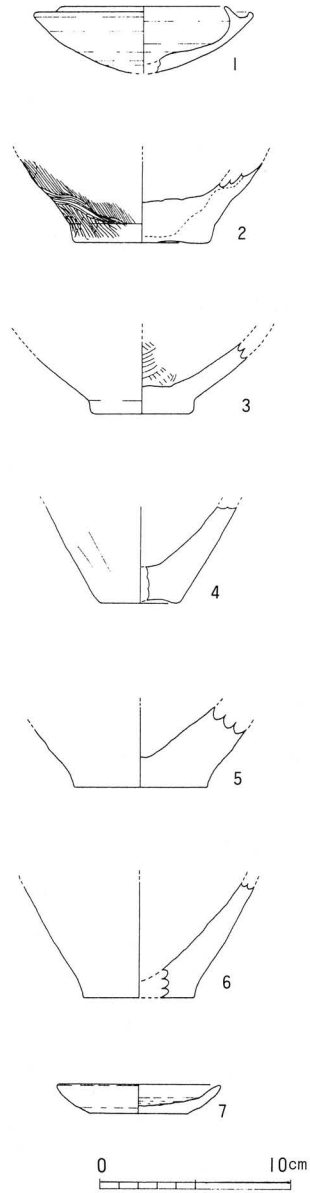


图3 出土遺物実測図

筋違 G 遺跡

1. 所在地 松山市福音寺町455

— 1、456

2. 調査年月日 平成元年5月24日～

7月8日

3. 調査面積 1,546㎡

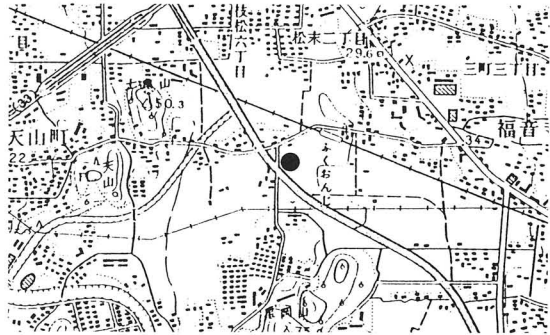


図1 調査地位置図

経過 本調査地の位置する福音寺地区は、竹ノ下遺跡、筋違A～F遺跡等をはじめとした弥生時代から中世にいたる遺跡群の集中する地域である。また、周辺に点在する独立丘陵上には、天山、星岡等の古墳群が分布し、南東にひろがる来住台地上には久米高畑遺跡、来住廃寺等の官衙関連遺跡、寺院址を中心に縄文時代後期から古代の遺跡が分布している。調査地は、伊予鉄道福音寺駅南西150mの国道11号線星岡交差点東側、海拔27mの微高地上に立地する。民間開発にともなう緊急発掘調査である。

遺構・遺物 調査は、排土の関係で東側の1区、西側の2区の2調査区にわけて行った。調査地は、北下りの緩傾斜をなすが、調査地南部は地山面まで削平を受けている。比較的遺存状況の良い調査地北部の層序は、第1層灰色粘質土（水田耕土）20cm、第2層黄褐色土（水田床土）5～10cm、第3層暗褐色土（遺物包含層）15～20cm、第4層黄色シルト（地山）となっている。検出された遺構は、竪穴住居址4棟、掘立柱建物3棟、土壇5基、井戸2基、溝2条、敷石状遺構1基である。竪穴住居址は4棟ともに2区で検出された。これらのうちSB—2は、4.5×5.2mの隅丸長方形のプランで、やや南西に偏った位置に4本の主柱穴を持つ、壁高5cmを測り、周壁溝は持たない。出土遺物から弥生時代後期の遺構である。その他の3棟の竪穴式住居址は、2区北部でそれぞれ切り合って検出された。いずれも方形ないしは隅丸方形であるが、調査区の限界のため、詳細な構造を明確にするまでには至らなかった。最も新しいSB—4からは5世紀末の須恵器坏身を出土しているが、その他については僅かな細片のみの出土である。掘立柱建物は、1区でSB—5・6が、2区でSB—7が検出されている。SB—5は1間×2間の東西棟で、桁行、梁行ともに柱間2.2mを測る。SB—6・7ともに一部のみを検出である。SB—6は柱間1mの小規模な建物で、北西コーナー部分が検出されている。また、SB—7は桁行北辺の3間分を検出した。柱間1.8m、柱穴径60～70cmを測り、本調査検出の掘立柱建物のなかでは最も大規模なものである。これらの建物は、柱穴内より底部糸切りの土師皿、瓦器碗等を出土しており、13世紀代を遡るものではない。また、2基の井戸もこれら掘立柱建物と同時期のものと考えられる。敷石状遺構

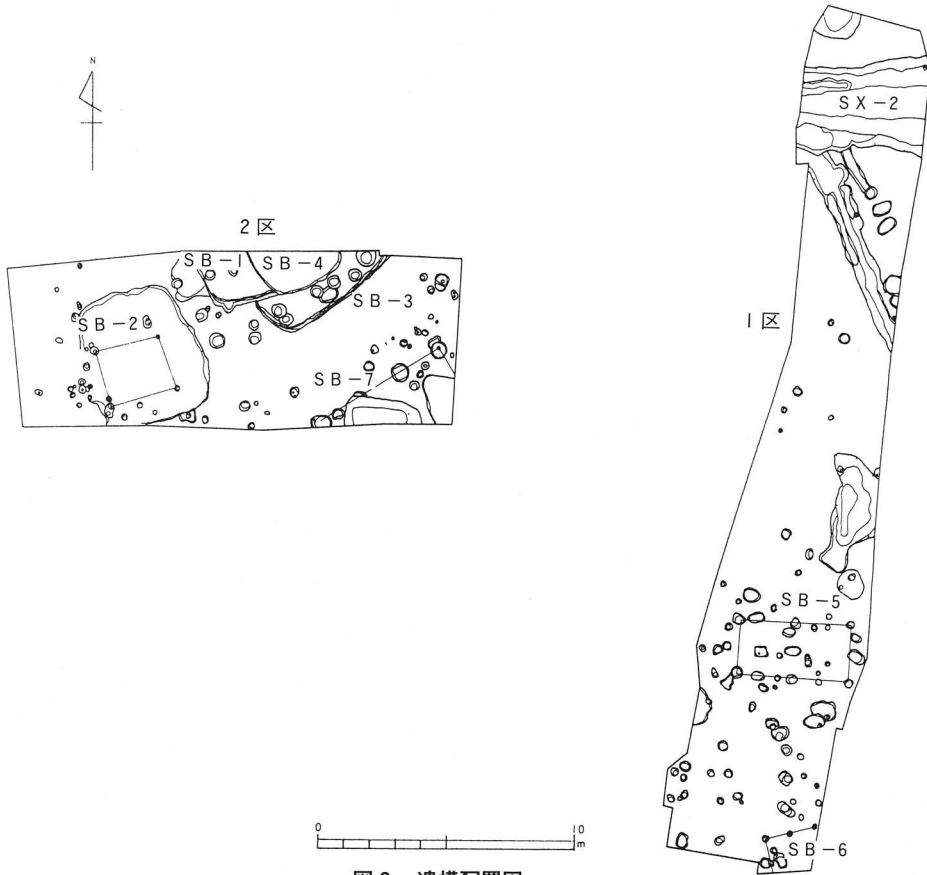


図2 遺構配置図

SX-2も同時期の遺構であるが、遺構としての性格を明確にすることはできなかった。東西に帯状に延びる浅い窪みの中に、拇指大から拳大の河原石が敷きつめられており、道路の可能性もある。

小結 本調査検出の遺構群は、この福音寺地区の微高地に弥生時代後期以降、中世まで営まれた大規模集落の一角を構成するものである。今回の調査では、特に瓦器、土師器等の中世遺物の比較的良好な状態での出土が成果のひとつとしてあげられる。

(山本健一)

筋違H遺跡

1. 所在地 松山市福音寺町428、
429—4
2. 調査年月日 平成元年7月4日～
9月17日
3. 調査面積 1,540m²

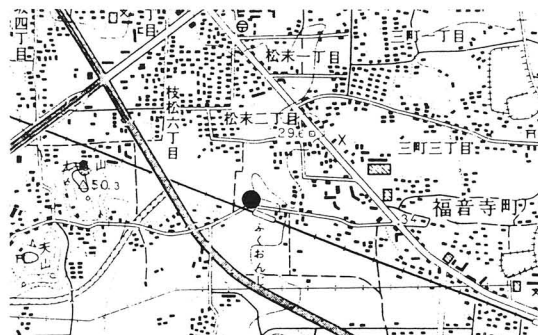


図1 調査地位置図

経過 本調査は、松末遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。松末遺物包含地内には調査地南西36mの地点に筋違E遺跡、調査地北西に隣接して筋違F遺跡があり、主に弥生時代から古墳時代の生活関連遺構と遺物を確認している。調査地南西750mには星ノ岡、天山、東山の独立丘陵を核とする遺跡群、北東1,000mに前方後円墳の経石山古墳がある。枝松遺物包含地は石手川中流域左岸と小野川右岸に挟まれた洪積台地上にある。本調査地は、この洪積台地上南西、標高30mに位置する。

遺構・遺物 調査地は、調査以前は耕地整備された水田であった為、耕作時の削平を受けており、遺物包含層（黒灰色シルト）は調査区南側1/3を残すのみで、他は耕作土を除去すると遺構検出面であった。全体的に南に下がる地形であった。基本層序は（図2）、第I層が耕作土（現水田）、第II層が水田床土であり、第III層は暗灰色シルト、第IV層は灰褐色シルト、第V層は灰茶褐色シルト、第VI層は黒灰色シルトで15～25cmの堆積を測る。本層が遺物包含層である。第VII層は黄褐色シルトで地山である。遺構は、第VI層からの掘り込みであり、第VII層におよんでいる。検出遺構は、竪穴式住居址8棟、掘立柱建造物10棟、土壇36基、溝3条、ピット400基余りである。遺物は、第VI層及び遺構内からの出土であり、土器（弥生時代後期～近世）、石器（ナイフ1点、石鏃1点、フレーク、チップ、石斧片）、鉄器（鉄鎌、鉄片）、玉類（勾玉2点、管玉1点、ガラス玉3点、小玉1点）、土製品（紡錘車）がある。SB-2に先行するSK-4、SK-15は、壁面が焼成を受けており、覆土に炭化物の面が一層かんでいた。またSD-1は、48～136cm、深さ22～38cmを測り、断面は逆台形状を呈す。又、調査区東のSD-2は幅26～54cm、深さ12cmを測る溝で、隣接するI調査区のSD-1に続くものと

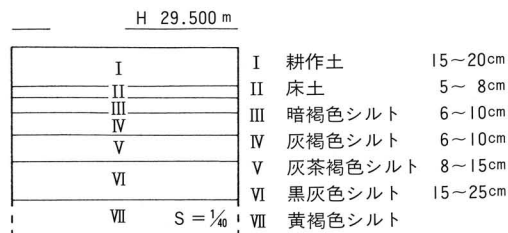


図2 基本層序



図3 遺構配置図

思われる。注目すべき遺物として、SK-30内から韓式系須恵器壺の上半部が出土した。又、掘立柱建物跡を構成している柱穴SP-430内から勾玉1点を出土している。又、包含層からの出土であるが、瀬戸内地域特有の横長剝片素材のナイフ形石器ではなく、縦長の剝片素材の基部にブランディングが施された剝片尖頭器的様相を持つナイフ形石器1点がある。

調査区東側中央にて検出された2号住居址SB-2(図4)は、平面形は方形で一辺6.2mを測る。耕作時の削平を受けており、壁高9cmのみの遺存であった。主柱穴は4基を確認しており、柱穴間は3m~3.5mを測る。柱穴埋土は黒灰色土であった。炉址は北側中央に位置していたと思われ、長楕円形プラン(76cm×128cm)の焼土塊及び炭を確認している。床面直上より土製の紡錘車1点が出土している。埋土は、黒褐色土である。

小結 今回の調査で検出された遺構は、古墳時代中期から後期を中心としており、福音寺周辺の大集落の一角をなしている。また、この調査によって韓式系須恵器壺の出土をみたこと

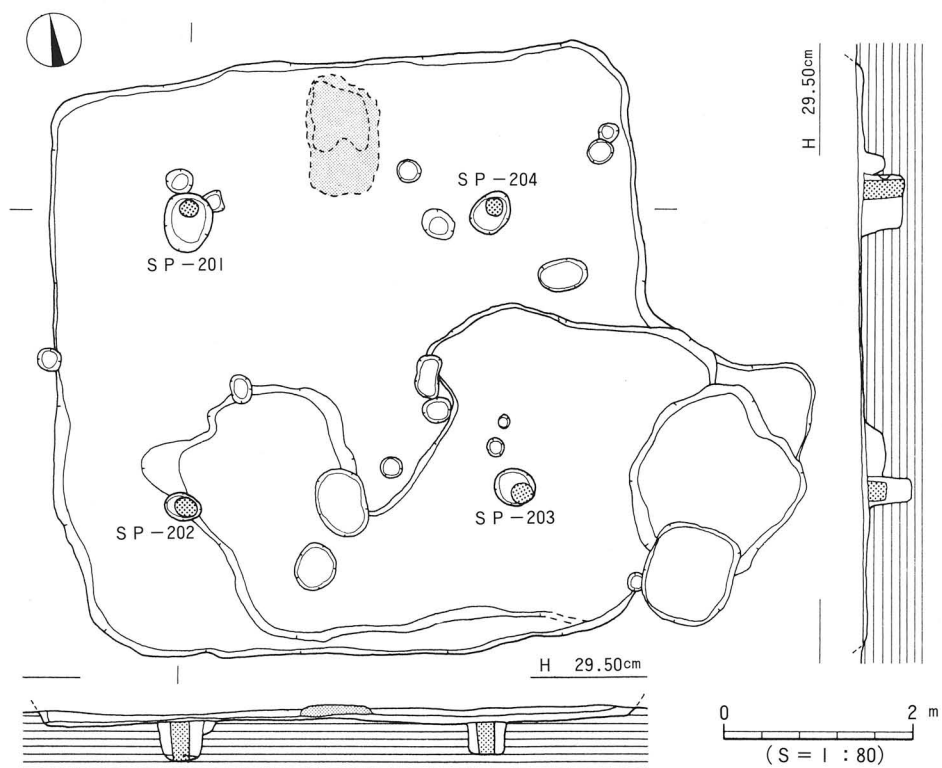


図4 SB-2平・断面図

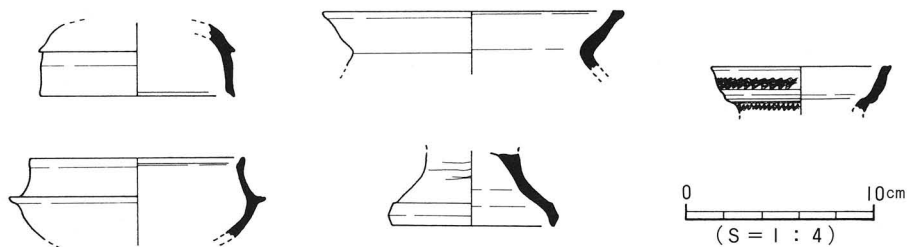


図5 SB-2出土遺物実測図

は大きな成果のひとつであった。この地域は、当平野でも最も古い時期の須恵器を多く出土する地域であり、これを契機に既往の調査の遺物についても再度掘りおこしの必要があろう。

(武正良浩)

掘立柱建物一覧表

建物 番号	規模(間)	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	備 考
		実長(cm)	柱間寸法(cm)	実長(cm)	柱間寸法(cm)		
1	2 × 1 + α	340	159・180	270	210・60		一部未検出
2	3 × 2	550	180・186・183	440	225・213	24.2	
3	4 × 2	665	174・150・171・168	430	234・195	28.6	
4	2 × 2	420	231・189	345	159・186	14.5	
5	2 × 1	375	201・174	235	234	8.8	
6	2 × 2	335	189・144	335	180・153	11.2	
7	2 × 2	440	204・228	350	150・201	15.4	
8	2 × 2	450	249・201	430	216・213	19.4	

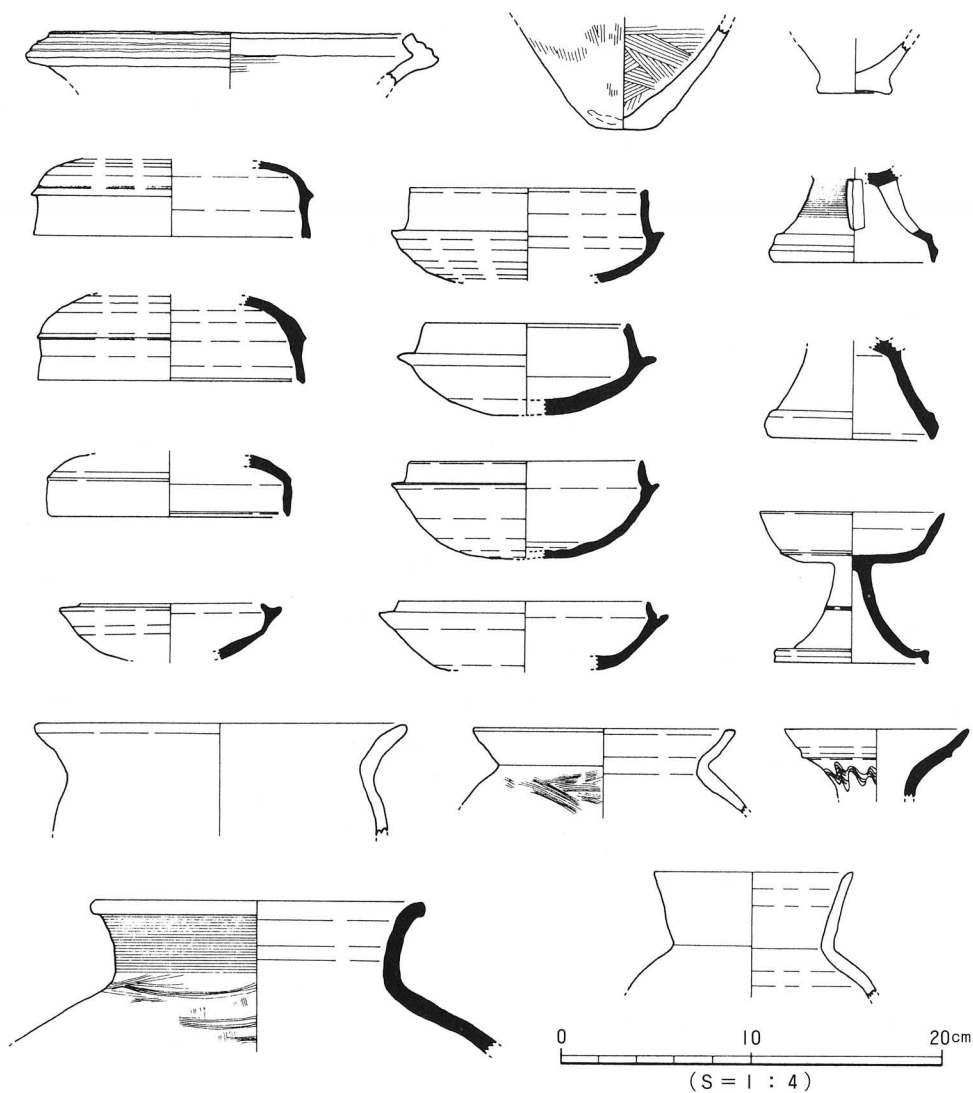


図6 出土遺物実測図

筋違 I 遺跡

1. 所在地 松山市福音寺町429
— 1
2. 調査年月日 平成元年10月2日～
11月11日
3. 調査面積 462m²

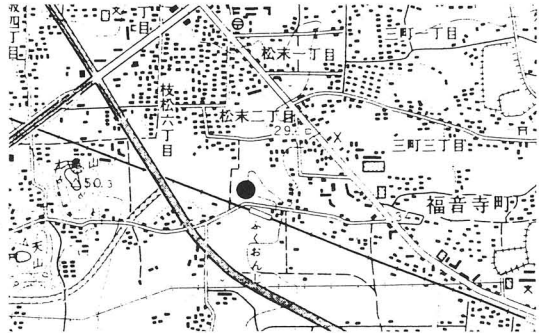


図1 調査地位置図

経過 本調査は、松末遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。本調査区は、筋違H遺跡北東に隣接しており、標高29.5mに位置する。

遺構・遺物 調査前は水田であった為、耕作時の削平を受けており、遺物包含層（暗褐色土）は調査区南側に一部を残すのみで、他は耕作土を除去すると遺構検出面（礫混じりの黄褐色土）であった。基本層序は（図2）、第I層耕作土、第II層水田床土、第III層黄褐色土が地山となっている。検出遺構は、竪穴住居址1棟、掘立柱建物跡2棟、土壇7基、溝2条、ピット154基である。竪穴住居（SB-1）は、調査区南西隅に位置し、1/4を検出した。住居址内からは北壁に幅6～36cm、深さ5～10cmの周壁溝を検出した。出土遺物は、床面直上から頸部に断面三角形の突帯を貼り付けた壺の破片、石庖丁1点が出土し、弥生時代後期後半に比定される。掘立柱建物跡（SB-2）は、調査区東側に配置する東西棟で、梁間3間（5m）、桁間4間（7m）を測る。柱穴プランは円形及び楕円形で径40～80cm、柱痕は径8～15cmを測る。柱穴内からは須恵器片、土師器片が出土した。掘立柱建物跡（SB-3）は、調査区南西に位置する2間×2間の建物である。又、調査区西のSD-1は幅16～36cm深さ10cmを測る溝で、H調査区の東端検出の溝の延長と思われる。出土遺物は、弥生時代中期から古墳時代のものである。この他、石庖丁3点、石斧片1点、フレーク5点、ガラス小玉が1点出土している。

小結 本調査ならびに筋違F遺跡、H遺跡と一連の調査は、福音寺周辺
の古墳時代の集落構造を考える上で
の好資料となるものである。

（武正良浩）

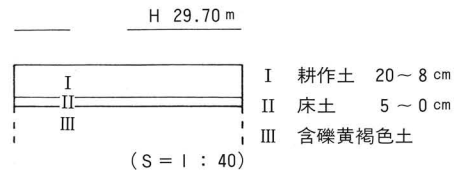


図2 基本層序



图3 遺構配置図

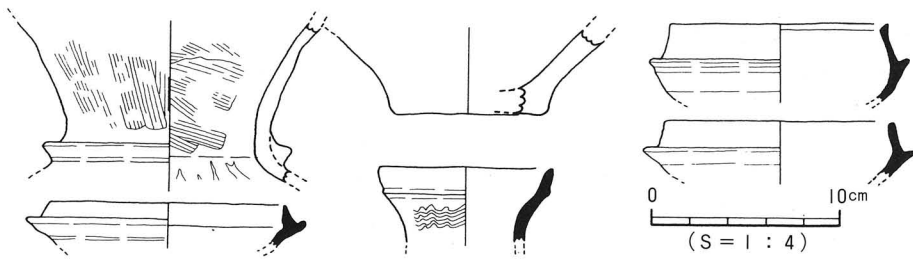


图4 出土遺物実測図

福音小学校構内遺跡

1. 所在地 松山市福音寺町362
— 1 他45筆
2. 調査年月日 平成元年7月11日～
平成2年3月31日
3. 調査面積 23,000m²

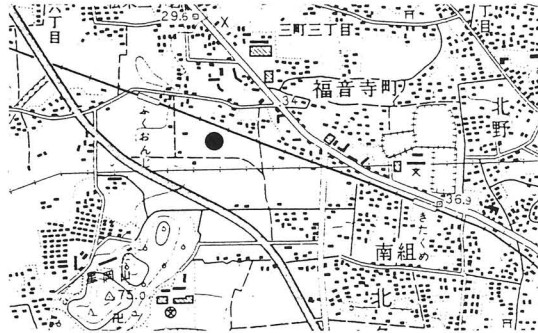


図1 調査地位置図

経過 本調査は、平成3年度開校予定の福音小学校建設に伴う発掘調査である。本調査区は、松山平野南部、松山城より南東約2.9km、国道11号線と伊予鉄横河原線に挟まれた低丘陵の平坦面に立地し、国道11号バイパス調査・筋違C～I各遺跡・星岡登立遺跡・福音寺川付遺跡など、近年特に調査例が多くなった地域にある。調査区を5区に分け、周辺遺跡のデータをふまえ、古墳時代の集落構成の解明を主眼において調査を進めた。

遺構・遺物 調査の結果、竪穴住居址110棟、掘立柱建造物71棟、溝65条、竪穴状遺構17基、柵状遺構7条、井戸3基、土壙150基、性格不明遺構32基、ピット1,1000基、塚3基、壺棺5基など、弥生時代から中世にかけて多数の遺構を検出した。弥生中期後半の遺物で注目されるのは、分銅形土製品である（住居址内1点）。また弥生後期中頃の遺構で注目されるのは、大規模な溝と壺棺群と土器溜りである。大溝は調査区西側に幅1.2～1.4m、深さ0.8m、断面はU字状で検出長150mを測る大規模なもので、一丘陵を直線的に区画するものと考えられる。また、この溝の南東沿い（5区）に、壺棺が5基まとまって出土した。この壺棺群の近辺には10m×8mの範囲で土器溜りが検出された。また、古墳時代の竪穴住居址や掘立柱建造物跡は、松山平野での須恵器出現前段階の住居址で集落を構成しているものと、それ以降の住居址で集落を構成しているものの大きく2つに分けられる。後の段階の竪穴住居址には、造りつけのカマドが多く見られる。古墳時代の遺物で注目されるのは、県内で6例目となる子持勾玉の出土である。

小結 本遺跡は、弥生時代から中世まで続く複合遺跡であった。特に、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構・遺物が多く検出された。また、2区で検出された布掘状遺構は、近辺の筋違E遺跡（注1文献）からも検出されており、利用方法、構築方法など検討が必要な遺構だと思われる。

（注1）『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』

（武正良浩）



图2 調査地全測図

ばんじょうぶ
繁成分遺跡

1. 所在地 松山市今在家町272

— 1

2. 調査年月日 平成元年 2月27日～

5月28日

3. 調査面積 1,157.12m²

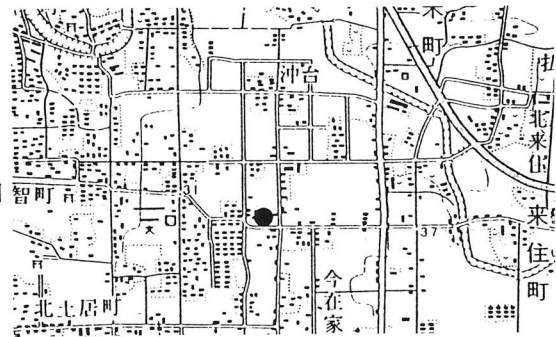


図1 調査地位置図

経過 松山平野を西流する小野川と重信川の間にひろがる沖積地は広範囲の氾濫原となっている。この沖積地の一角、今在家遺物包含地内における宅地開発にともない試掘調査を行った結果、弥生時代後期の遺物包含層が確認された。この試掘結果をふまえて上記の期間本格調査を行った。西方400mには弥生前期の壺棺墓や古墳時代の住居址を検出した石井東小学校遺跡が知られているが、この包含地内における調査例は決して多いものではない。

遺構・遺物 現耕作面床土の下層に第3層黒褐色シルトが25～30cm堆積しており、この層が包含層となっている。遺構は、この第3層下面の暗緑褐色シルト層を基盤面として検出された。このシルト層は下位に向けて漸移的に砂質を帯び、その下層には拇指大から拳大の円礫が堆積しており、この沖積地が氾濫によって形成されたことを物語っている。検出された遺構は弥生後期の土器溜1基、時期不詳の集石遺構2基、自然流路6条である。土器溜は長径2m、短径0.5mの三ヶ月状の平面プランを呈し、深さは20cmを測る。弥生後期の甕、小型鉢、高坏脚等を出土している。集石遺構は調査区の北寄りの弥生後期の包含層下層で検出された。それぞれの集石内より縄文期と考えられる礫器を1点ずつ出土している。

小結 本調査によって検出された弥生後期土器溜の遺物出土状況は比較的安定してはいるものの、調査区内において有機的関連をうかがえる遺構は認められなかった。また、集石遺構及び、集石内出土の礫器についても現段階で時期云々をはじめ、資料的な評価を下すには早急に過ぎるものと考えている。ただ、近年になって東方の来住台地縁辺部において縄文後、晩期の遺物を出土する遺跡、森元遺跡、片廻りⅡ遺跡等が知られるようになってきており、このような集石遺構が必ずしもこの地点において忽然と出現したのではないであろうという見通しは持てる状況にある。周辺地域は、今後急速に宅地化が進行するものと予想される。調査例、資料の増加を待ちたい。

(栗田茂敏・高尾和長)

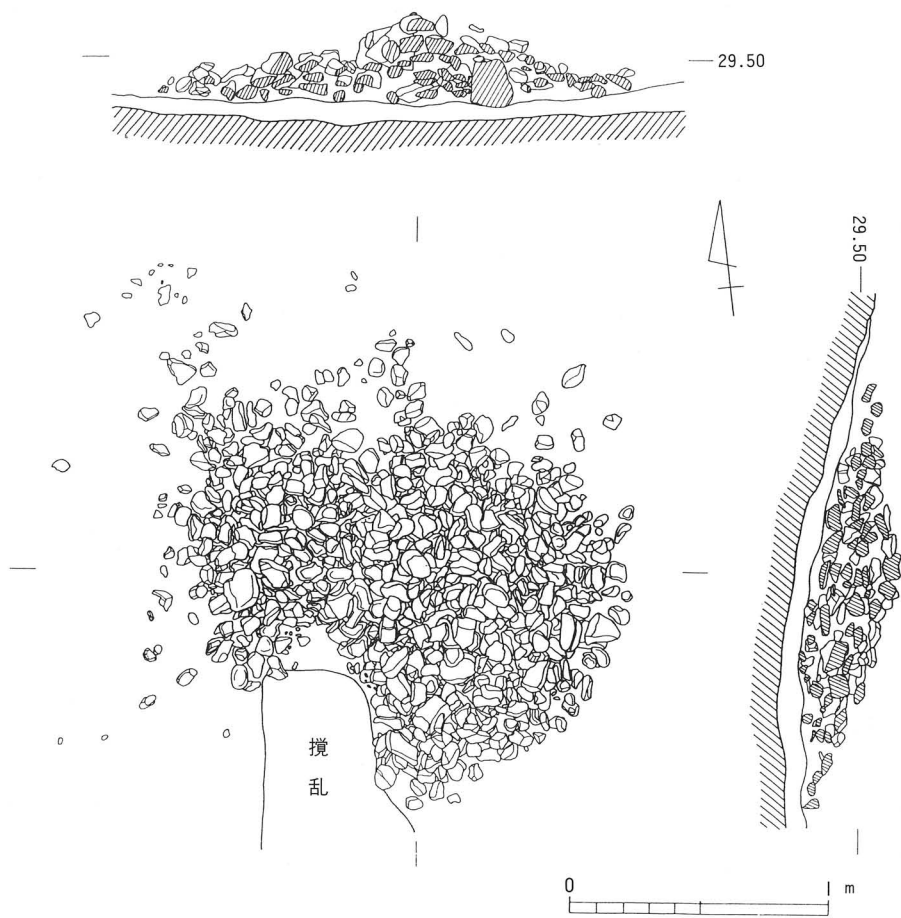


图2 集石遺構 SX-1

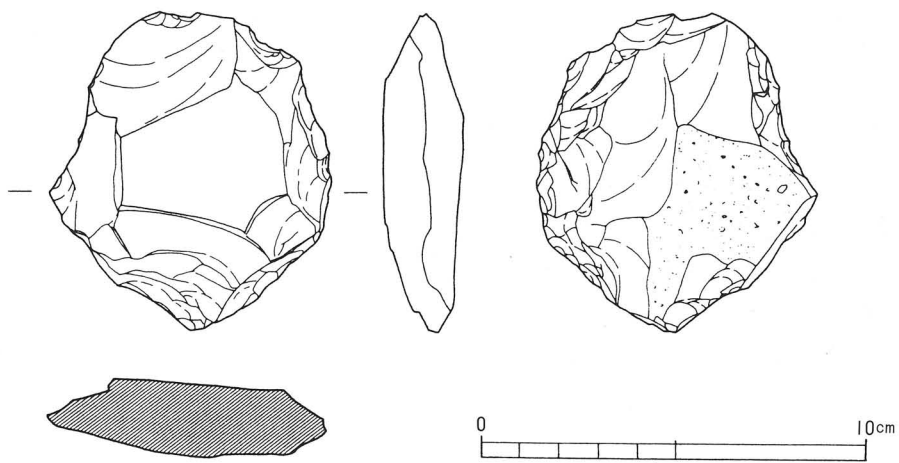


图3 SX-1 出土石器

中ノ子 I 遺跡

1. 所在地 松山市南土居町304

— 3

2. 調査年月日 平成元年10月4日～

10月26日

3. 調査面積 426.58m²



図1 調査地位置図

経過 当遺跡は、松山平野の東部にあって、平野部を西流する小野川、重信川などの河川により形成された沖積地の中央部に立地する。調査地は、古くは久米村大字土居小字中ノ子に在って、白鳳寺院址の中ノ子廃寺址とされるところで、標高36m～37mの田園地帯に位置する。明治末頃までは土壇も存在したといわれ、その礎石の一部が調査地の西方100mの五十鈴神社の拝殿付近と、境内に今も置かれている。調査は、農耕地の宅地変更に基づく、事前調査である。

遺構・遺物 耕作土下、20mに基盤面があり、掘立柱建物址6棟、溝状7条、柱穴21基を検出した。建物址の平面プランは、SB-1からSB-4まで順に、2×3間、2×2間、1×3間、1×3間となる。SB-5、SB-6はその一部が検出された。これら建物群は、SB-1と3、4と5、2と6というように軸方向により3グループに分類でき、建造時の時間差が考えられる。柱穴径は50cm～70cmのものが多くみられる。溝状遺構のうち、SD-1と4は逆L字状に曲折し立ちあがり高4～5cmを呈している。この2条の溝は他の溝とは性格を異にしており、区画溝と考えられる。SD-7は深さ7～12cmを測り、中間部がやや深く西流する流路で、拳大の河原石20箇余りとともに弥生後期の壺底部、須恵器甕、土師器の各細片が出土している。遺構の調査終了後、調査地東端に南北トレンチを入れた結果、遺構面より70cm下層に拳大の礫層の堆積がみられ、本調査地が氾濫原に立地していることがあらためて確認された。

小結 石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址の研究』には「松山市の東南1里余り……台地において一帯に古瓦の散布をみる。」とあり中ノ子廃寺の存在を示されているが、今回の調査においては、それにかかわる古瓦等の検出はみられなかった。本調査検出の遺構も寺院との直接の関連を示すものではなく、廃寺そのものに関しては、課題として今後に残された。

(松村 淳)

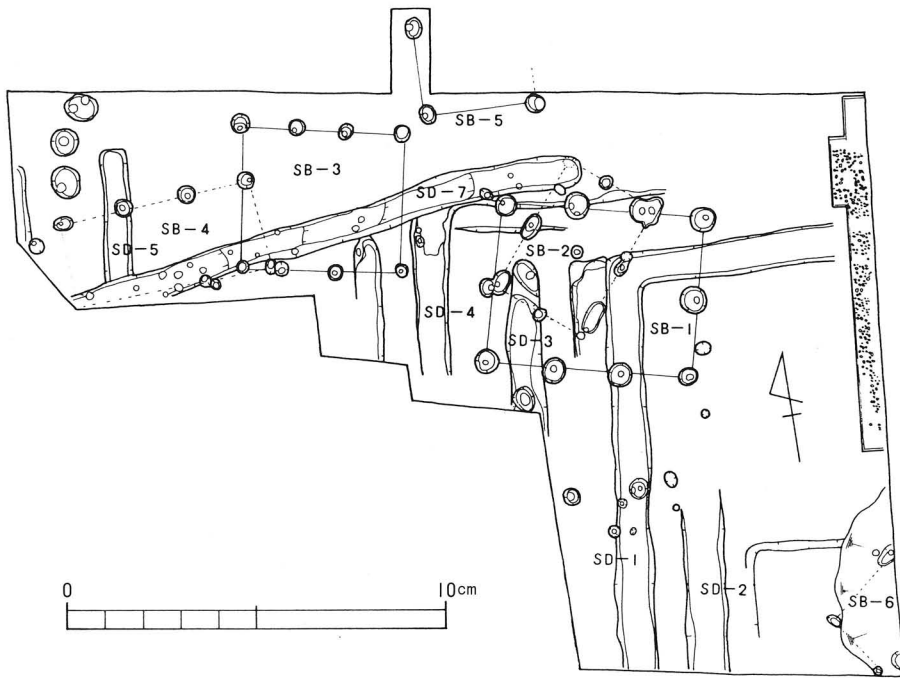


図2 遺構配置図

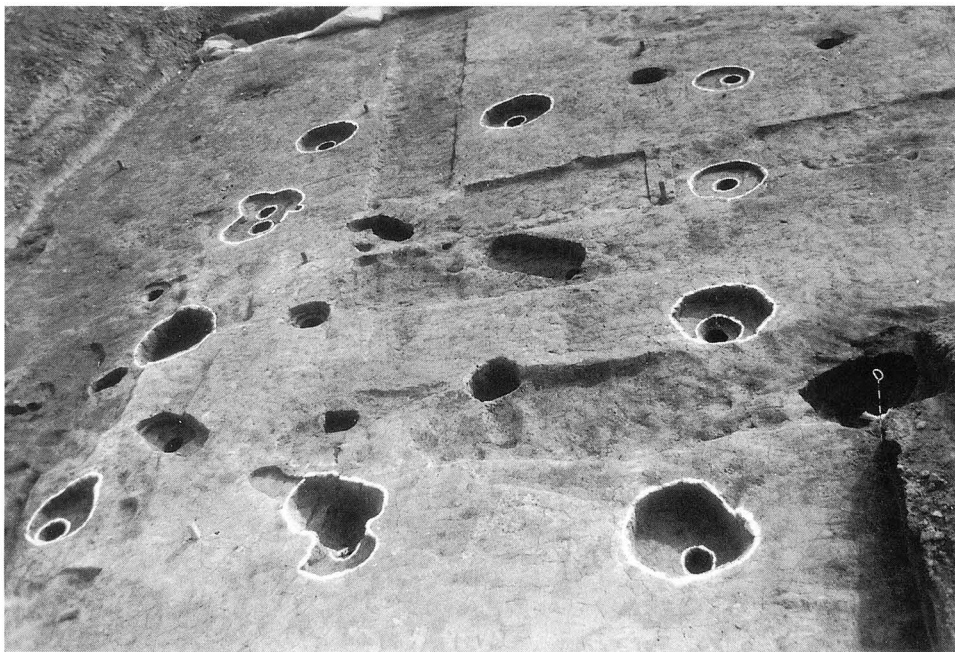


写真1 SB-1全景

今在家遺跡

1. 所在地 松山市今在家町55・70・71・72
2. 調査年月日 平成2年11月3日～12月28日
3. 調査面積 2,016m²

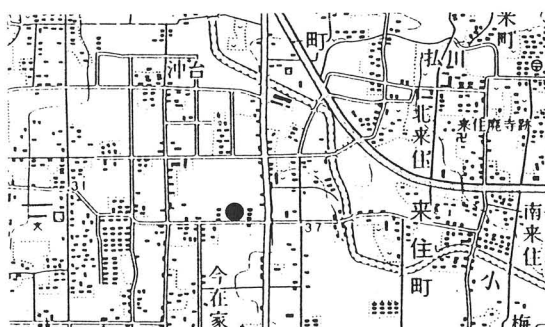


図1 調査地位置図

経過 今在家遺跡は、久米高畑遺跡1次～20次、来住町遺跡1次～3次、来住廃寺寺域確認調査など多くの調査が行われてきた来住舌状台地南西端より西方約500mの沖積平野上に立地する。本遺跡西600mの石井東小学校遺跡(昭和52年度調査)では、弥生時代前期の壺棺と、古墳時代前期の竪穴住居址、古墳時代中期の周溝を伴う円墳を検出している。また、北1kmには弥生時代～古墳時代の遺跡が分布する星ノ岡丘陵が所在する。

本調査は延長360mの道路新設に伴い立会調査を行った結果、遺構、遺物を確認した140mの区間について行った緊急調査である。

遺構・遺物 調査区は耕作時の削平の為、包含層は見当たらなかったが、耕作土直下の黄灰色土上面より、竪穴住居址1棟(SB1)、土壙2基(SK1・2)、溝状遺構7条(SD1～7)を検出した。隅丸方形を呈する住居址(SB1)は北西コーナー部分の検出ではあったが、周壁溝と支柱穴1基とともに壺、甕、器台が出土している。また、土壙SK2は溝SD2に切られているが一括して多量の遺物が出土した。器種は複合口縁壺、甕、器台、高環、台付壺、石器では石庖丁1点を検出しており、当該期の土器編年に有効な資料となるものである。本調査地の溝については、溝底に砂礫層を認めるのはSD5～7の3条であり、明らかに流路と思われるが、他の溝については砂礫層がなく、埋土は褐色土の単一層である。この他、調査区に沿って南北に延びる溝と、これに並列するピット列を検出しているが近世以降の遺構と思われる。

小結 本遺跡で検出した遺構の時期については、出土遺物から竪穴住居址SB1は弥生時代終末～古墳時代初頭、土壙SK1・2は弥生時代後期中葉～後葉、溝SD1～7は古墳時代中期～後期である。土壙SK2は、台付壺、器台、高環など供献遺物が多いうえ、石庖丁の出土もみており、農耕祭祀に伴う遺構

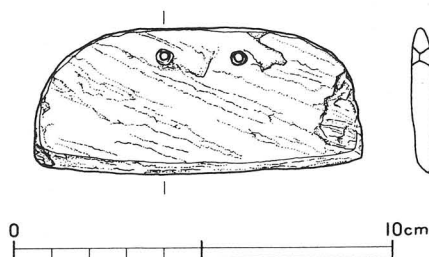


図2 SK-2出土石庖丁

であると思われる。なお、土壙SK 2出土の台付壺は天山北遺跡（昭和46年度調査）に出土例がある。また、石井東小学校遺跡で古墳時代前期の住居址を検出していることから、本遺跡周辺には弥生時代終末～古墳時代初頭にかけて集落の広がりが想定される。（相原浩二）

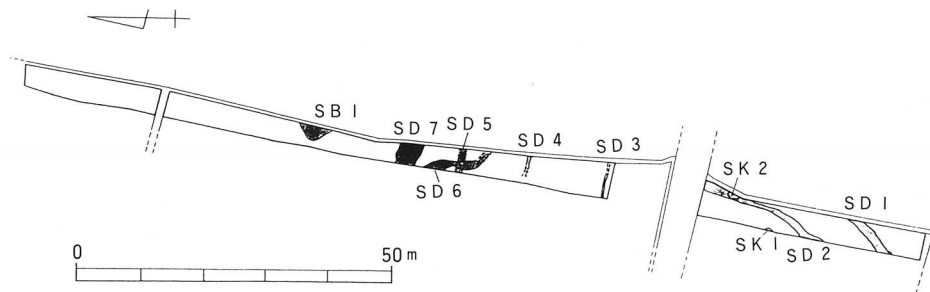


図3 遺構配置図

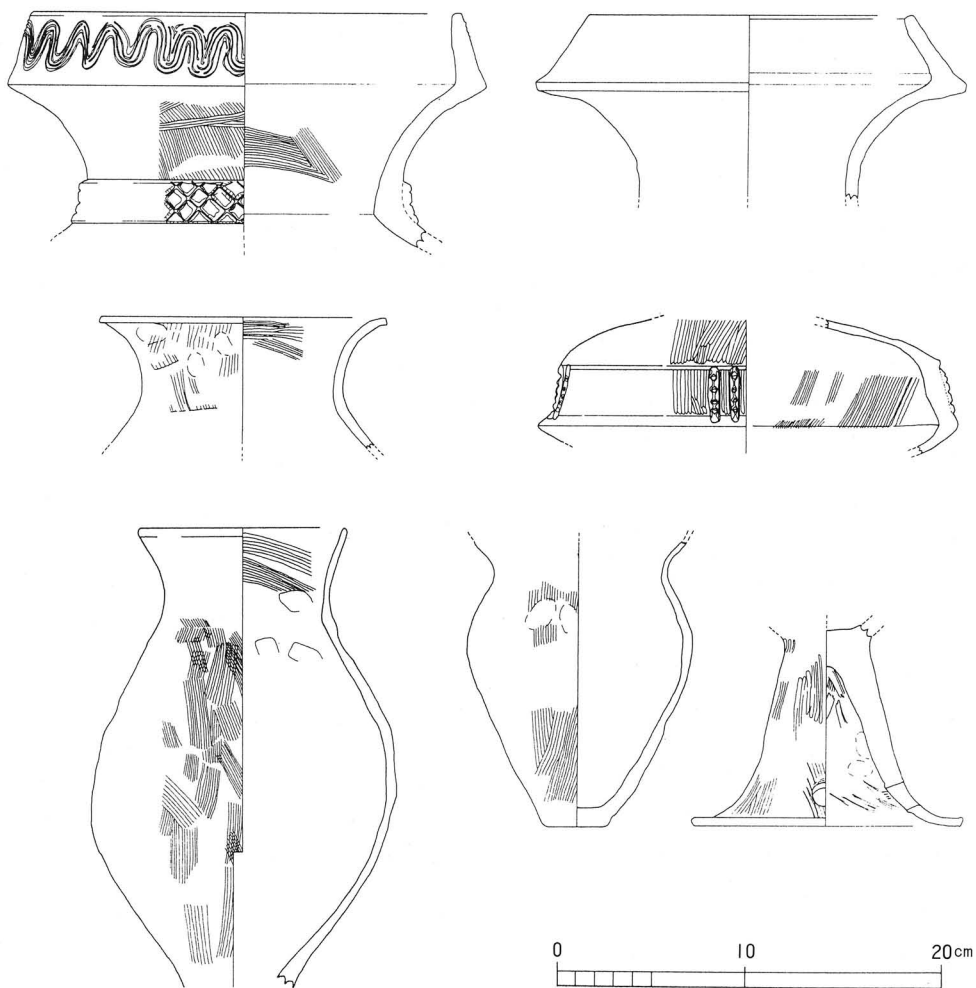


図4 SK-2 出土遺物実測図

古屋敷遺跡C調査地

1. 所在地 松山市久米窪田町
844-1他
2. 調査年月日 平成元年6月5日～
8月10日
3. 調査面積 1,035㎡

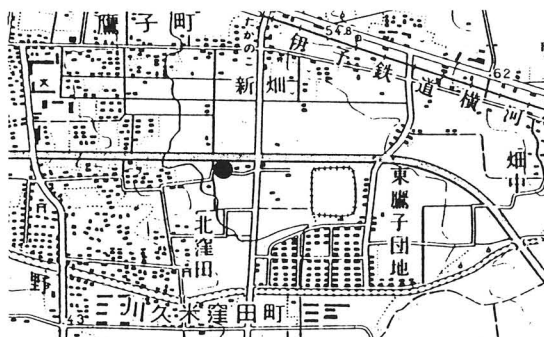
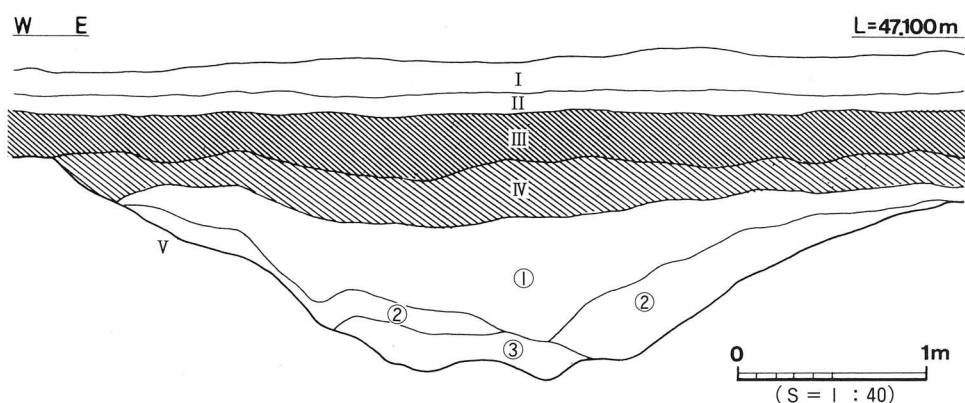


図1 調査地位置図

経過 本調査は、鷹ノ子遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。調査区は、松山平野北東部の低位段丘(来住台地)の南東縁、標高47m上に立地する。調査区東北東100mに久米窪田古屋敷遺跡(弥生・7C)、西北西120mに久米窪田森元遺跡(縄文後期・7~10C)がある。

遺構・遺物 層序は、第I層表土、第II層水田床土で地表下35cmまで開発が進んでいる。第III層明褐色シルトは古墳時代~中世の遺物を包含する。第IV層暗褐色シルトは弥生時代の遺物を包含する。第V層黄色シルトは無遺物層である。調査区南西部では、第IV層が検出されず、第V層上に第III層が堆積する。さらに、第III層下部は調査区内において、ほぼ同じレベルを測る。このことは、第III層堆積前に当地においてなんらかの耕地整備が行われたことを推察させるものである。

遺構は、第III層上面で中世の溝3条(SD1~3)を、第IV層上面で弥生時代の溝1条を



第I層 表土、第II層 水田床土、第III層 明褐色シルト(古墳~中世)、第IV層 暗褐色シルト(弥生)、第V層 黄色シルト、①黒色~黒褐色シルト ②明灰色砂 ③青灰色粗砂(1~3cmの小角礫を含む)

図2 土層図

検出した (図3)。

SD1 調査区の東端に位置する。断面「凹状」で幅80cm、深さ20cmである。溝底は平坦で、南から北に緩傾斜 (比高差14cm) をもつ。遺物の検出はない。

SD2 SD1の西2.5mに位置し、SD1に平行である。断面「凹状」で幅80cm、深さ12cmである。溝底はやや中央が凹んでおり、南から北に緩傾斜 (比高差9cm) をもつ。出土遺物は、土師器環の破片 (中世) が少量ある (図示せず)。

SD3 調査区の北端に位置する。断面「凹状」で幅80cm、深さ12cmである。溝底は平坦で、東から西に緩傾斜 (比高差8cm) をもつ。出土遺物は、土師器の細片が数点ある。

SD4 調査区の南及び西に位置する。調査区の南西部でほぼ直角に屈曲する。断面は、ゆるやかな「U字状」で幅3.6~5.7m、深さ80cmを測る。埋土は (図2) 三分層され、下層は青灰色粗砂層で1~3cmの小角礫を含んでおり、この溝が水利に関連する遺構であることがわかる。上層と中層の境に厚さ2~3cmの炭層が全面にみられ

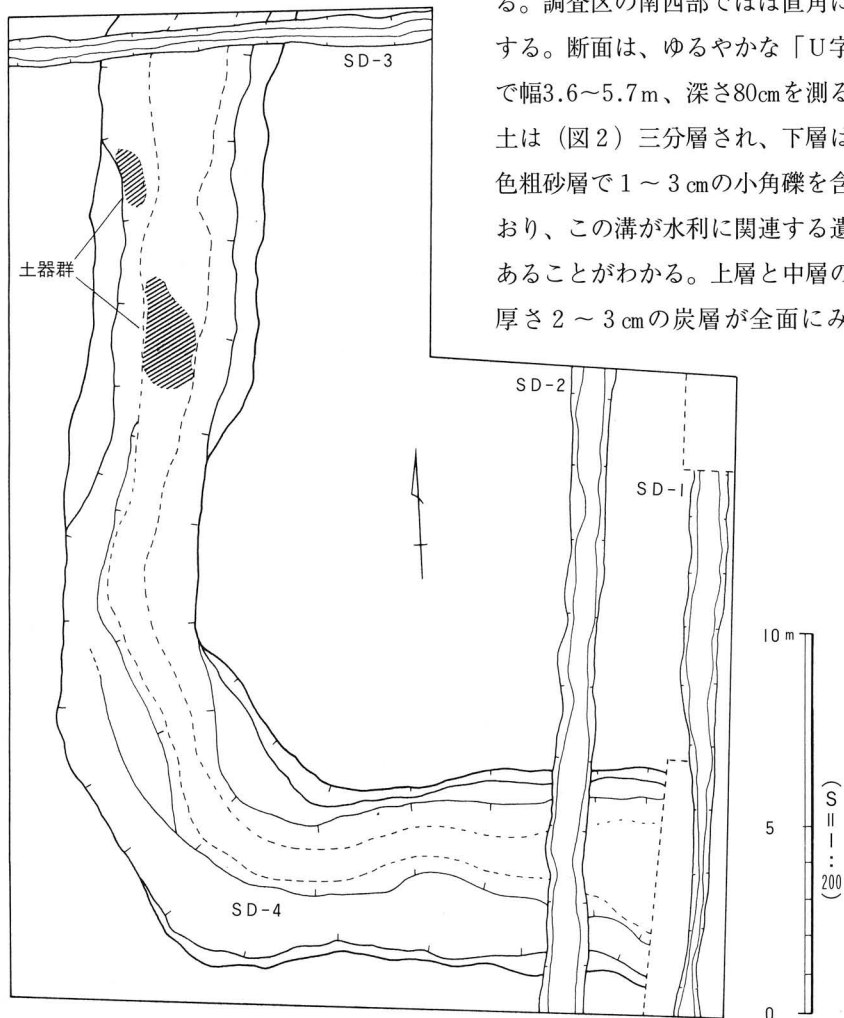


図3 全測図

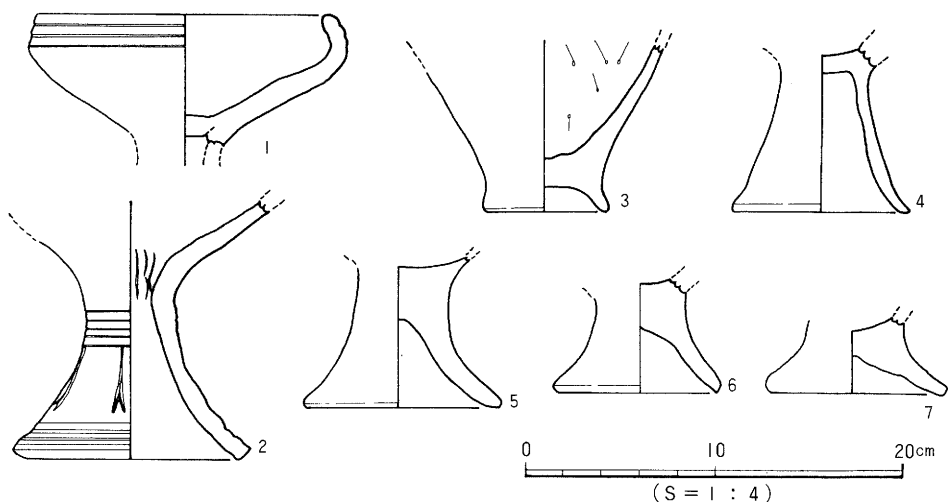


図4 SD-4出土遺物実測図

た。残存する木片を観察したが、加工痕もなく自然木であり、流木が炭化して形成されたものとする。遺物は南側中央部の上層、 2.8×1.6 mの範囲で弥生時代前期後半の土器片（細片）が、西側北部の中層下部に 7.1×6 mの範囲で弥生時代中期後半～後期初頭の土器片（図4）が集中して出土した。この二地点以外では下層に石庖丁1点が出土しているが、この外には遺物の出土はない。弥生時代前期後半の土器片は細片で散乱した状況であり、流れ込みの様相が強い。一方、弥生時代中期後半の土器片は、破片は大きく、磨滅も著しくなく、群集して出土しており、破損品の一括投棄の可能性が高い。本遺構の時期は弥生時代中期後半～後期初頭とする。

小結 本調査では、弥生時代と中世の遺構と遺物を確認した。

弥生時代の小野川低位段丘（来住台地）上には、来住遺跡、久米高畑遺跡、鷹ノ子遺跡等があり、弥生時代を通じ集落が継続的に営まれていたことが近年の調査で具体的に明らかになってきた。中期後半の集落関連遺構は、鷹ノ子遺跡で土壙2基（SK1、SK15）が報告されているにとどまっており、本例のSD4は当地域の中期後半の集落研究にとって貴重な資料となるものである。さらに、SD4は低位段丘の南東縁に位置すること、最大幅5.7mの規模を有すること等より環濠の可能性が高い。松山平野の中期後半の溝（環濠）は、祝谷六丁場遺跡で確認されているだけであり、SD4はこの点においても貴重な資料といえよう。

中世の当地域の集落関連遺跡には、鷹ノ子遺跡、久米小学校遺跡等がある。本調査のSD1～3は、形状・規模・埋土等において、酷似しており、同時代のものとする。ただし、性格や遺構の関連性は不明である。本例は、低位段丘上の中世集落の南側の広がりを知る資料であり、今後の同地域の基礎資料となるものであろう。

（梅木謙一・宮内慎一）

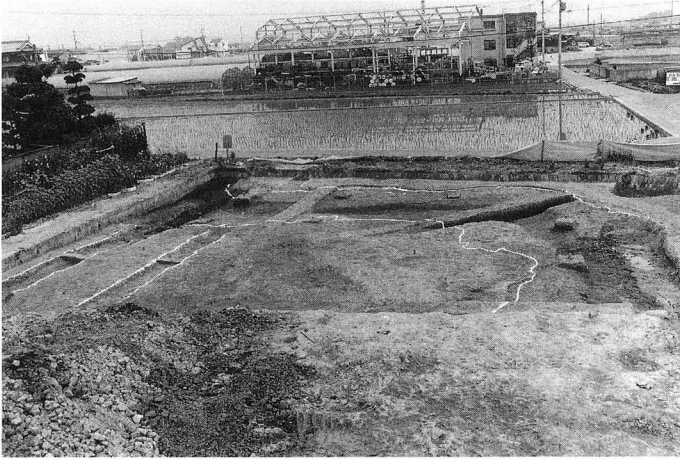


写真1 遺構検出状況（北より）



写真2 SD-1 検出状況
（北東より）

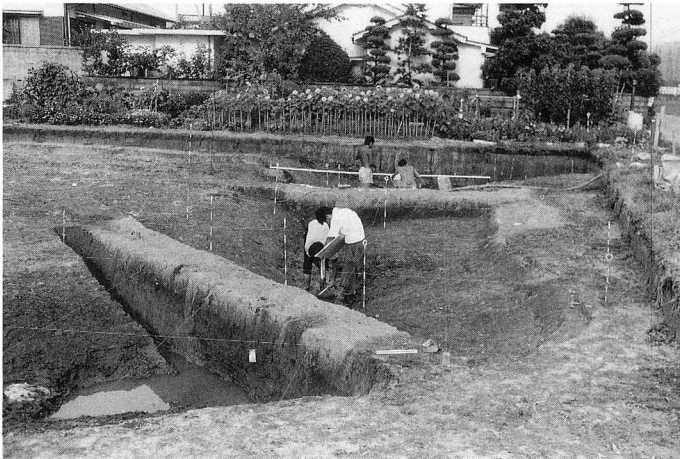


写真3 調査状況（東より）

鷹ノ子遺跡 1次調査地

1. 所在地 松山市鷹ノ子町94—

3

2. 調査年月日 平成元年 4月10日～

5月13日

3. 調査面積 289㎡



図1 調査地位置図

経過 本調査は、鷹ノ子遺物包含地内における宅地開発に伴う事前調査である。鷹ノ子遺物包含地は、松山平野北東部にある所謂来住台地の東縁部にあり、本調査区は包含地内の44.5mに立地する。来住台地は、平野内において有数の遺跡地帯であり、久米窪田V遺跡（ナイフ形石器出土）、久米窪田森元遺跡（縄文後期一括資料）、来住V遺跡（弥生前期末～中期初頭の環濠）、久米高畑遺跡群、来住遺跡群（古代集落）等が知られている。

遺構・遺物 層序は（図2）第Ⅰ層表土、第Ⅱ層水田床下で地表下25mまで開発が進んでいる。第Ⅲ層暗褐色シルトは遺物包含層（弥生～中世）であり25cmの堆積である。第Ⅳ層黄色シルト及び第Ⅴ層灰白色粘土は無遺物層である。

遺構は（図3）Ⅲ層上面及びⅠ層上面にて掘立柱建造物7棟、溝状遺構3基、土壇6基、ピット277基他を検出した。SK-3以外は遺構中に遺物がほとんどみられず、各遺構の時期や性格は不明である。ただし、掘立柱建物及びピットは方位・埋土により少なくとも3グループに分けられる（図示せず）。

SK-3（図4）は調査区の北東隅に位置する。平面形は、隅丸長方形で西側がややひろがる。床面で長さ185cm、幅70～80cm、深さ12cmを測る。近現代の造成工事のため遺構上部は削平されている。床面の東側で木口痕跡をわずかに確認した。出土遺物は、床面直上の黒色土（粘質強い）より和鏡一面、褐色土（黄色混り）より土師器の鍋1点、土師器環1点、釘6点がある。和鏡は、遺構の中央部の床面直上の位置でこなごなに割れた状況で出土した。土師器の鍋は西端で一部を欠いた状況で、土師器環は東端で完形で出土した。

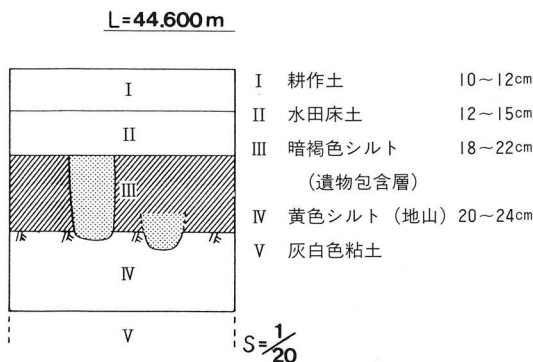


図2 基本層序

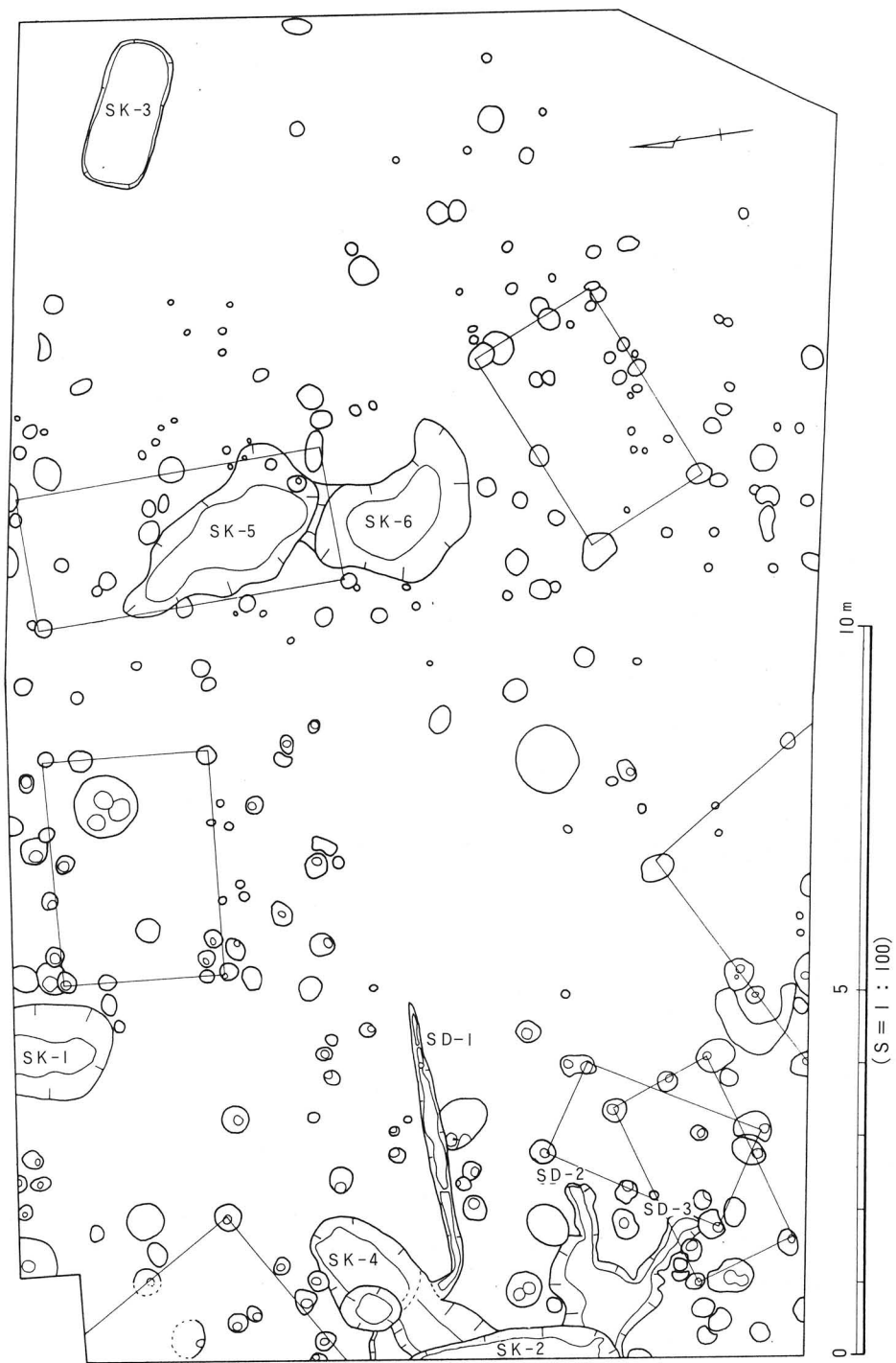


図3 遺構配置図

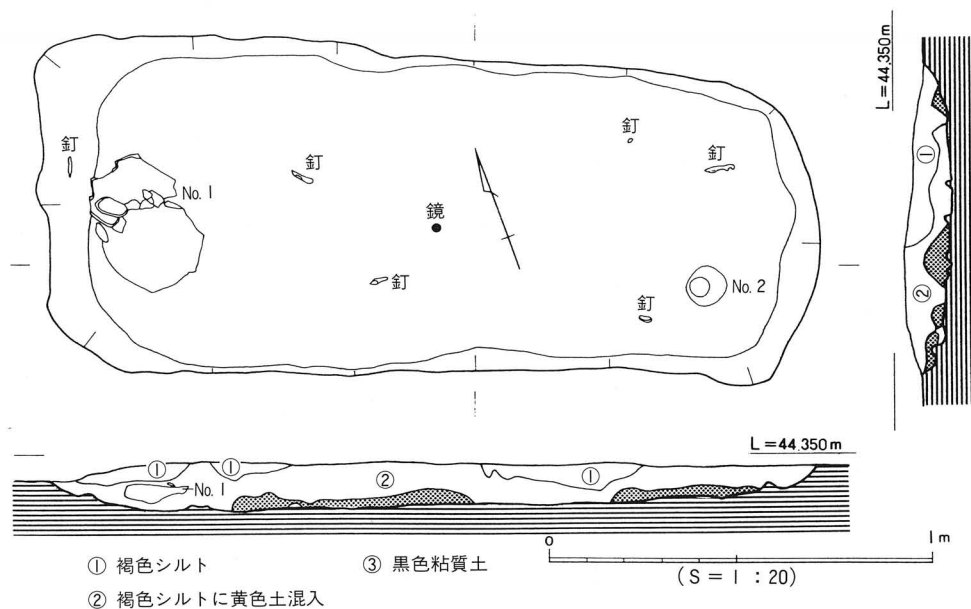


図4 SK-3平・断面図

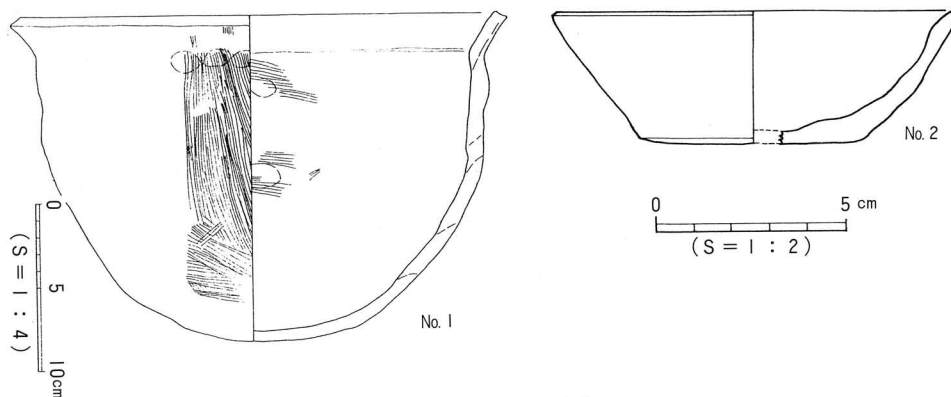


図5 SK-3出土遺物

釘は、主軸を中心に対称的位置にて出土した。和鏡は（図版22）、八稜鏡で直径7.4cmであり、内区に、草文をもつ。本遺跡は、遺物やその出土状況他より平安時代後期（10C代）の木棺墓と考える。

小結 本調査では、木棺墓と古代～中世の集落址の一部を確認した。特に平安時代の木棺墓の確認は平野内では例がなく、本例は松山平野の古代墓研究の基礎資料となるものであり重要な資料といえる。また、掘立柱建物の検出は、来住台地の東部地域の古代～中世の集落構造を考えるうえでの好資料となるものである。

（梅木謙一・宮内慎一）

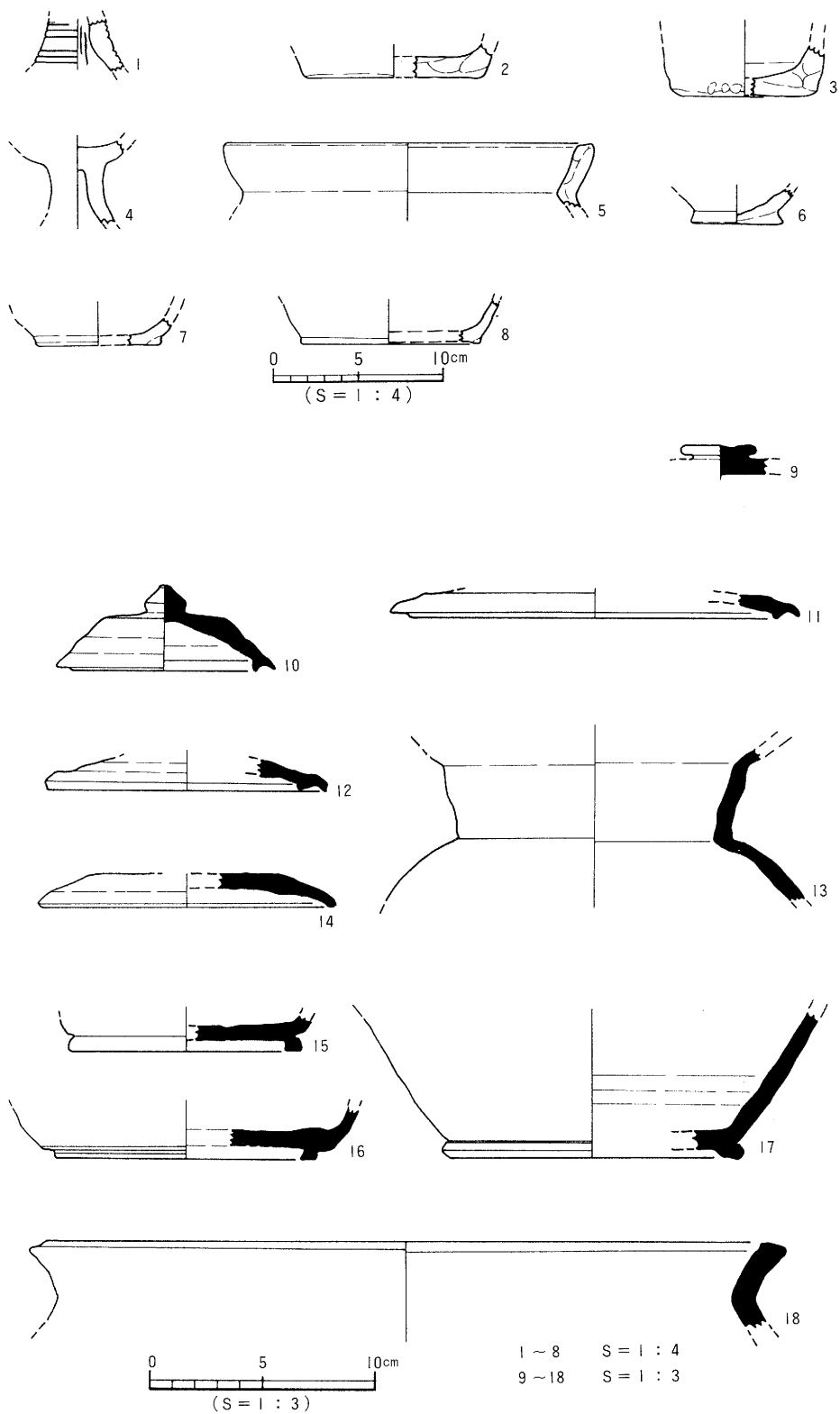


图6 出土遺物実測図

鷹ノ子新畑遺跡

1. 所在地 松山市鷹ノ子町582

— 2

2. 調査年月日 平成元年10月4日～

10月16日

3. 調査面積 44.5㎡



図1 調査地位置図

経過 本遺跡は、来住台地上の遺跡範囲として北東の一角をなし、標高48mに位置する。北方に連なる丘陵上には、芝ヶ峠・五郎兵衛谷古墳群等の古墳群が分布し、南400mには縄文時代後期から中世にかけての久米窪田遺跡、南西約500mには古墳時代の掘立柱建物3棟を検出した久米小学校遺跡、更にその西方約500mには国指定史跡来住廃寺跡がある。

個人住宅建築に伴い国庫補助事業として試掘調査を実施した結果、第1層造成土・第2層旧耕作土・第3層暗灰色シルト・第4層黄灰色シルトの層序が確認された。包含層である第3層からは、弥生土器片・須恵器片等が出土し、第4層上面において、溝状・柱穴遺構を確認したため原因者の協力を得て本格調査を実施した。

遺構・遺物 検出遺構は、方形竪穴住居跡1棟、溝3条・柱穴12基である。住居跡は、東西の溝2条を切る状態で検出された。一辺約3m、壁高10cmを測る。周壁溝、支柱穴は検出されなかった。床面より坏蓋1点を出土している。

東西溝2条のうち、北側の溝SD-1は、緩やかに北東に曲がり、南側の溝SD-2は、方形状に南に曲がる北東隅が確認されている。南北溝SD-3は、住居跡に平行して検出された。溝3条ともに埋土は暗灰色シルトである。溝・柱穴とも遺物は土器細片のみの出土であり、明確な時期を云々することはできないが、少なくとも東西溝2条は、住居跡に先行するものである。

住居跡床面出土の須恵器坏蓋(図3-1)は、器高4.1cm、口径11.9cmを測る。口縁部と天井部の境に鈍い屈曲部を持つ。天井部の外面2/3程度の範囲に逆時計方向のヘラ削りを施され、その他の部位は内外面ともに回転撫で調整されている。7世紀初頭に位置づけられる。

第3層からは、剥片(図3-6)、細片ながら弥生時代の壺の底部、口縁部、須恵器坏蓋片、土師器片等が出土している。

(栗田正芳)

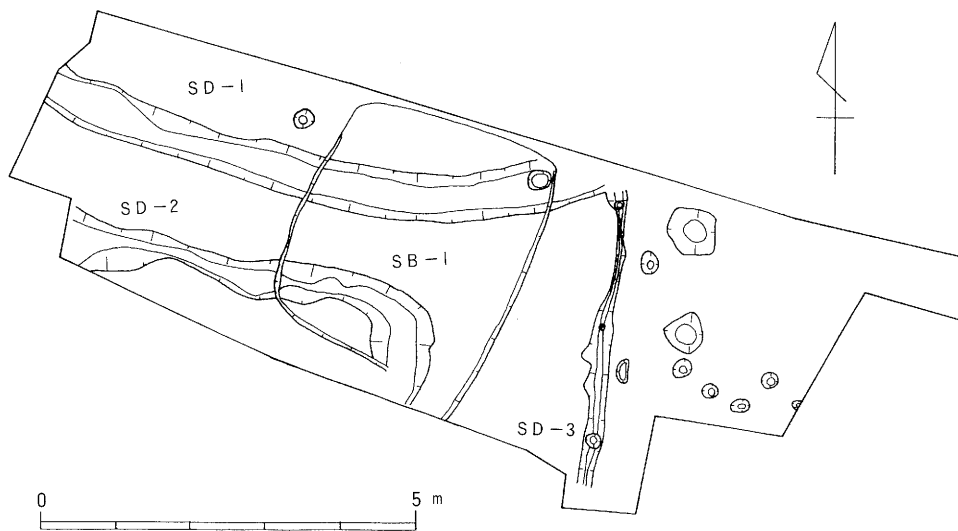


图2 遺構配置図

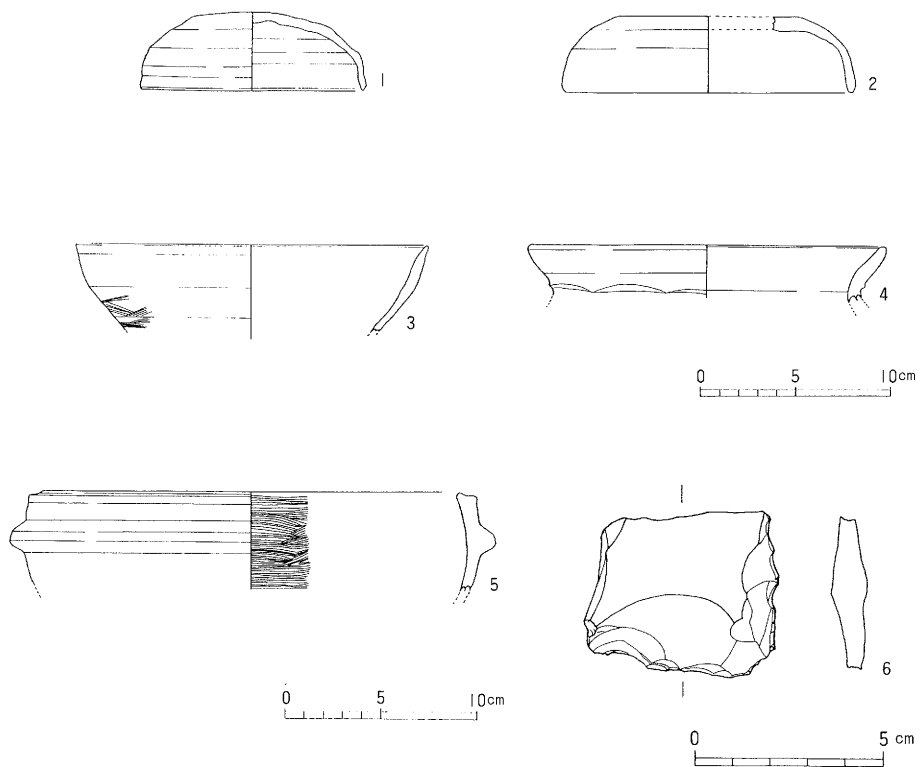


图3 出土遺物実測図

来住町遺跡 2次調査地

1. 所在地 松山市来住町535・
536

2. 調査年月日 平成元年7月3日～
9月12日

3. 調査面積 1,666m²



図1 調査地位置図

経過 来住廃寺遺物包含地における幼稚園運動場建設に先立ち、試掘調査を実施したところ、ピット・土壙・溝を検出すると共に遺物包含層より弥生土器片が出土した。協議の結果、約2ヶ月の予定で事前発掘調査を行うこととなった。

本遺跡は松山平野東部に広がる来住台地上に立地し、標高約39mを測る。南西約200mに来住廃寺、南東約200mに1次調査地、北東約100mに3次調査地（P.98～99参照）がそれぞれ位置している。

遺構・遺物 検出された遺構は、ピット62基・土壙2基・溝4条・井戸1基・竪穴状遺構（SX-1）1基である。SX-1は、SD-1が2条から1条になる地点に位置しており、両者は何らかの関連があると考えられる。また、旧地形が南から北西へ緩やかに傾斜し、かつては小河川が蛇行しながら南東から北西へ流れていたことが確認された。出土遺物は、弥生土器片（前期後半～）・土師器片・須恵器片・瓦片・石庖丁5・磨製石斧2・磨石2・石鏃1などであり、弥生土器片は主に第Ⅵ層（黒色土）より、土師器片・須恵器片は主に第Ⅴ層（黒褐色土）より出土した。井戸跡の覆土下層より8世紀前半の須恵器蓋（図4-4）・同甕片・土師器甕片が、SX-1の底面直上より7世紀前半の須恵器坏が出土している。

小結 調査の結果、旧地形が概ね北向きの緩斜面を形成し、かつ浅い鞍部が南東から北西へ走っていたため、当地点が溝・井戸といった水利施設用地として利用されていたことが明らかとなった。

（藤原敏秀）

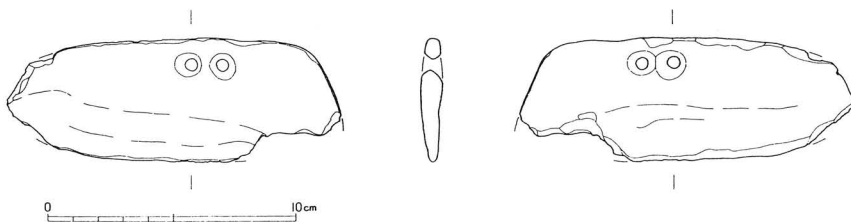


図2 遺物実測図(1)

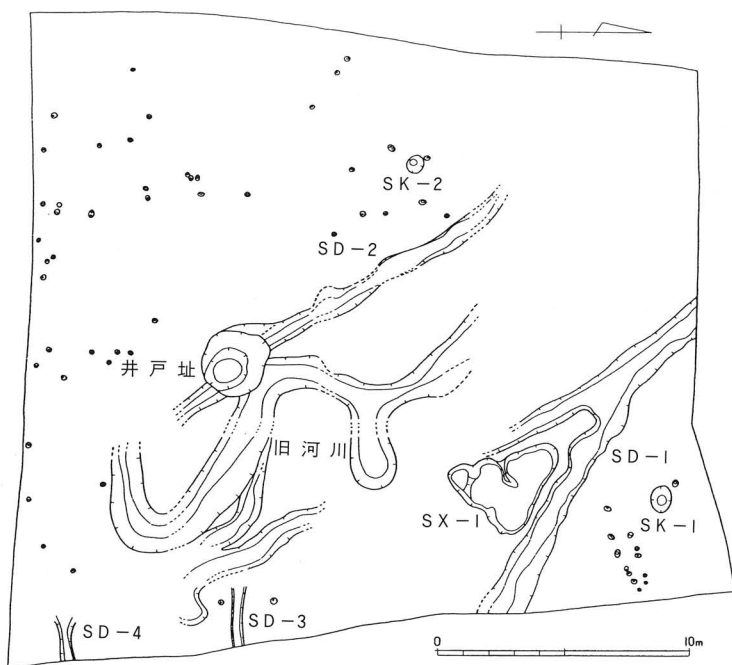


図3 遺構配置図

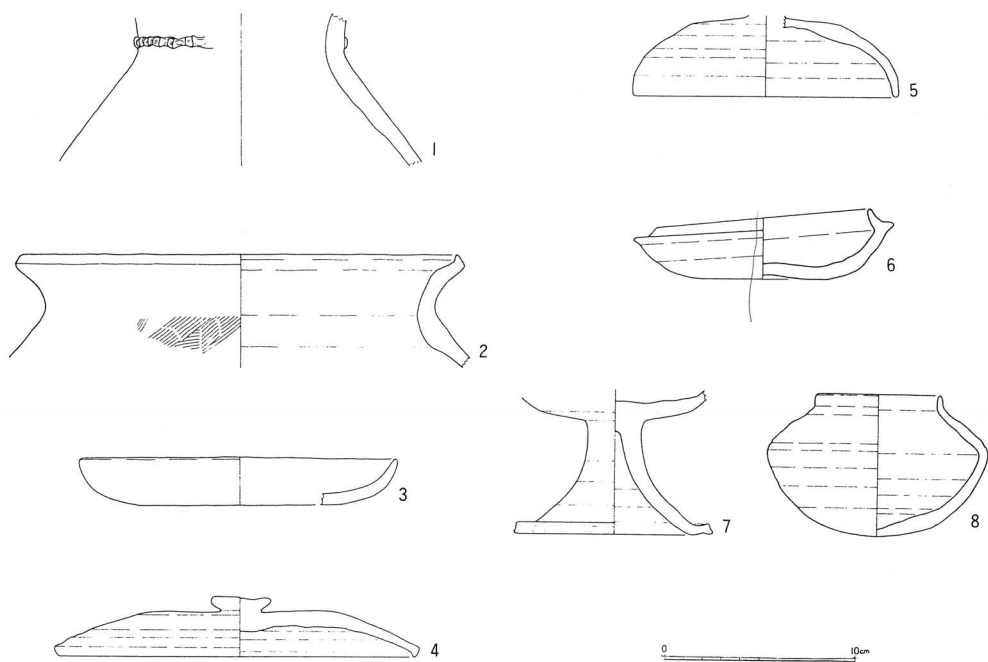


図4 遺物実測図(2)

来住町遺跡 3次調査地

1. 所在地 松山市来住町534—
1
2. 調査年月日 平成元年11月14日～
12月20日
3. 調査面積 773.61㎡

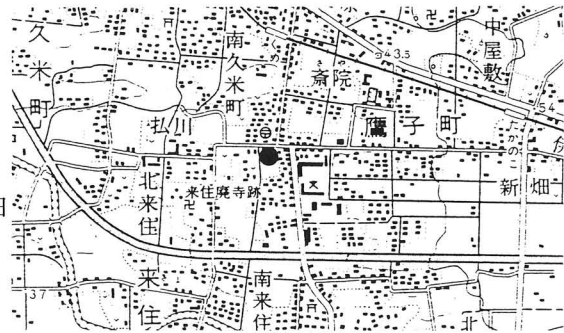


図1 調査地位置図

経過 来住廃寺遺物包含地における宅地開発に先立ち、試掘調査を実施したところ、ピット・土壇・溝を検出すると共に遺物包含層より弥生土器片・須恵器片が出土した。協議の結果、約1ヶ月の予定で事前調査を行うこととなった。

本遺跡は松山平野東部に広がる来住台地上に立地し、標高約39mを測る。南西約300mに来住廃寺、南約250mに1次調査地、南西約100mに2次調査地（P.96～97参照）がそれぞれ位置している。また、北約400mには伊予鉄道横河原線の久米駅がある。

遺構・遺物 基本層序は、第Ⅰ層表土（耕作土）・第Ⅱ層明褐色土（床土）・第Ⅲ層褐色土・第Ⅳ層灰暗褐色土・第Ⅴ層黒褐色土・第Ⅵ層黒色土である。遺構確認面である黄褐色シルト層（地山）上面は北から南へ緩やかに傾斜しており、地表からの深さは北側で約40cm、南東端で約60cm、南西端で約90cmを測る。

検出された遺構は、ピット168基・土壇8基・溝3条・掘立柱建物跡1棟（S B—1）・竪穴状遺構1基（S X—1）・土壇状遺構1基（S X—2）であった。

P—1は調査区北端やや西寄りにおいて検出された。平面プランは一辺約90cmの隅丸方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、深さ約40cmを測り、覆土中より弥生土器片・土師器片が出土した。

P—2は調査区北端やや東寄りにおいて検出された。S D—1を切っており、覆土中より土師器片が出土した。P—1と形態がよく似ており、両者は掘立柱建物跡等の一部である可能性も考えられる。

P—3は調査区北端東寄りにおいて検出された。平面プランは径約95cmの円形を呈し、深さ30～37cmを測る。壁面は急角度で立ち上がり、底面には凹凸がみられる。覆土中より弥生土器片・土師器片が出土した。

S K—1・2は調査区北西隅において検出された。S K—1はS K—2に切られており、東西約1.6m・南北約1m・深さ36cmを測る。断面形は船底形を呈し、出土遺物は皆無であった。S K—2は調査区外にまだかなり広がると思われ、平面プランは不明であるが、最深47cm

を測る。出土遺物は弥生土器片・土師器片・須恵器片・河原石などがあり、遺構の時期は須恵器坏より7世紀中葉と考えられる

S K—6は調査区南西部において検出された。平面プランは東西約2.4m・南北約1.6mの不整形を呈し、深さ約15cmを測る。出土遺物は弥生土器片・土師器片・須恵器片・礫であり、遺構の時期は須恵器皿・蓋（図3—6・9）より7世紀後半と考えられる。

S D—1は調査区北側において検出された。長さ4.9m・幅50～60cm・深さ約10cmを測り、ほぼ南北に走る。調査区北端においてP—1に切られ、さらに調査区の外側にのびている。

S D—2は調査区中央東側において検出された。その東端部は未調査であるが、平面プランは南北径7.8m・推定東西径約7mの楕円環状を呈し、幅40cm前後・深さ10cm前後を測る。北半部をS B—1に切られており、出土遺物は弥生土器片・土師器片などであった。

S B—1は調査区中央東側において検出された。桁行3間（約4.7m）・梁間2間（約3.7m）の東西棟掘立柱建物跡で、柱穴の掘方プランは一辺約60～90cmの隅丸方形を呈し、深さ10～25cmを測る。出土遺物は根石に使用したと思われる河原石1点・弥生土器片・土師器片・須恵器片であった。

S X—1は調査区北東隅において検出された。平面プランは東西約3.6m・南北約3.2mの不整隅丸長方形を呈し、深さ約15cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が見られ、平坦ではない。出土遺物は弥生土器片・土師器片・須恵器片・砥石片などであり、遺構の時期は須恵器坏より7世紀中葉と考えられる。

S X—2は調査区中央東側において検出された。平面プランは長さ4.1m・最大幅1.5mの半月状を呈し、最深85cmを測る。東壁がほぼ垂直であるのに対して、西壁は緩やかに立ち上がる。主軸方向には緩やかに傾斜するテラス状の部分が両側にあり、底部との段差は23cm前後を測る。覆土上層より弥生土器もしくは土師器と思われる小片が出土した。

遺物包含層の調査は、調査期間上の制約から調査区の北側約3分の1においてのみ実施された。第IV層出土土器は弥生土器（前期後半以降）・土師器・須恵器であり、出土量をみると弥生土器が全体の約3分の2を占め、ついで土師器・須恵器の順であった。

小結 検出された遺構の内、時期を推測し得たものは土壇2基・竪穴状遺構1基である。いずれも7世紀代の中葉以降と考えられ、来住廃寺が創建された頃の同寺北東側近接地の様相がわずかながら窺われた。

（藤原敏秀）

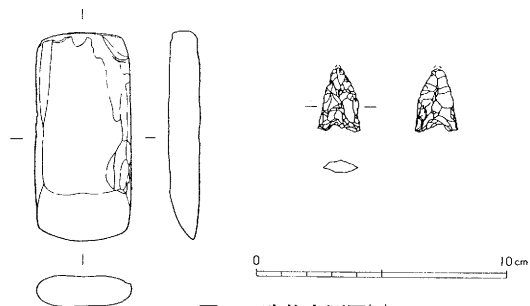


図2 遺物実測図(1)

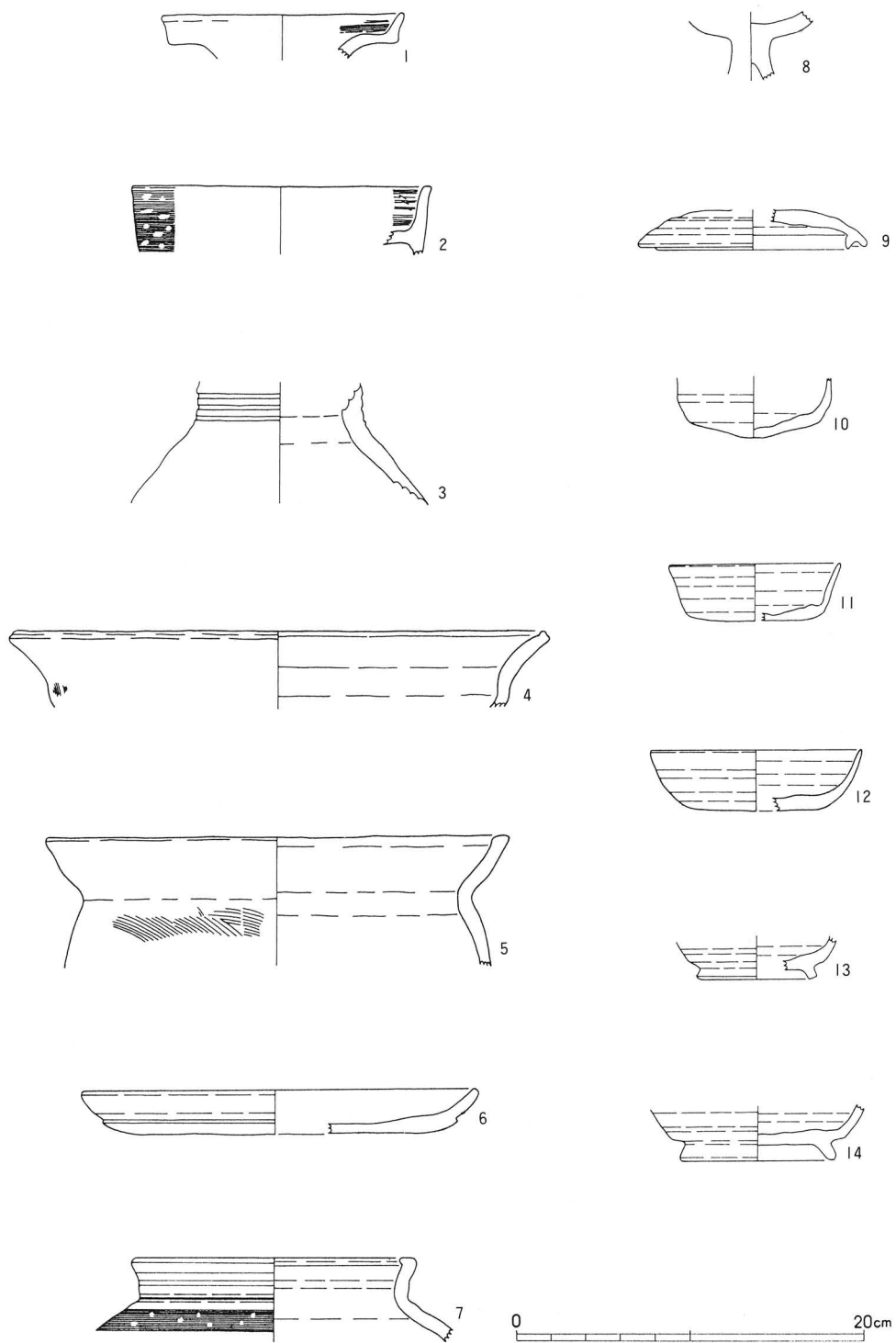


图3 遗物实测图(2)

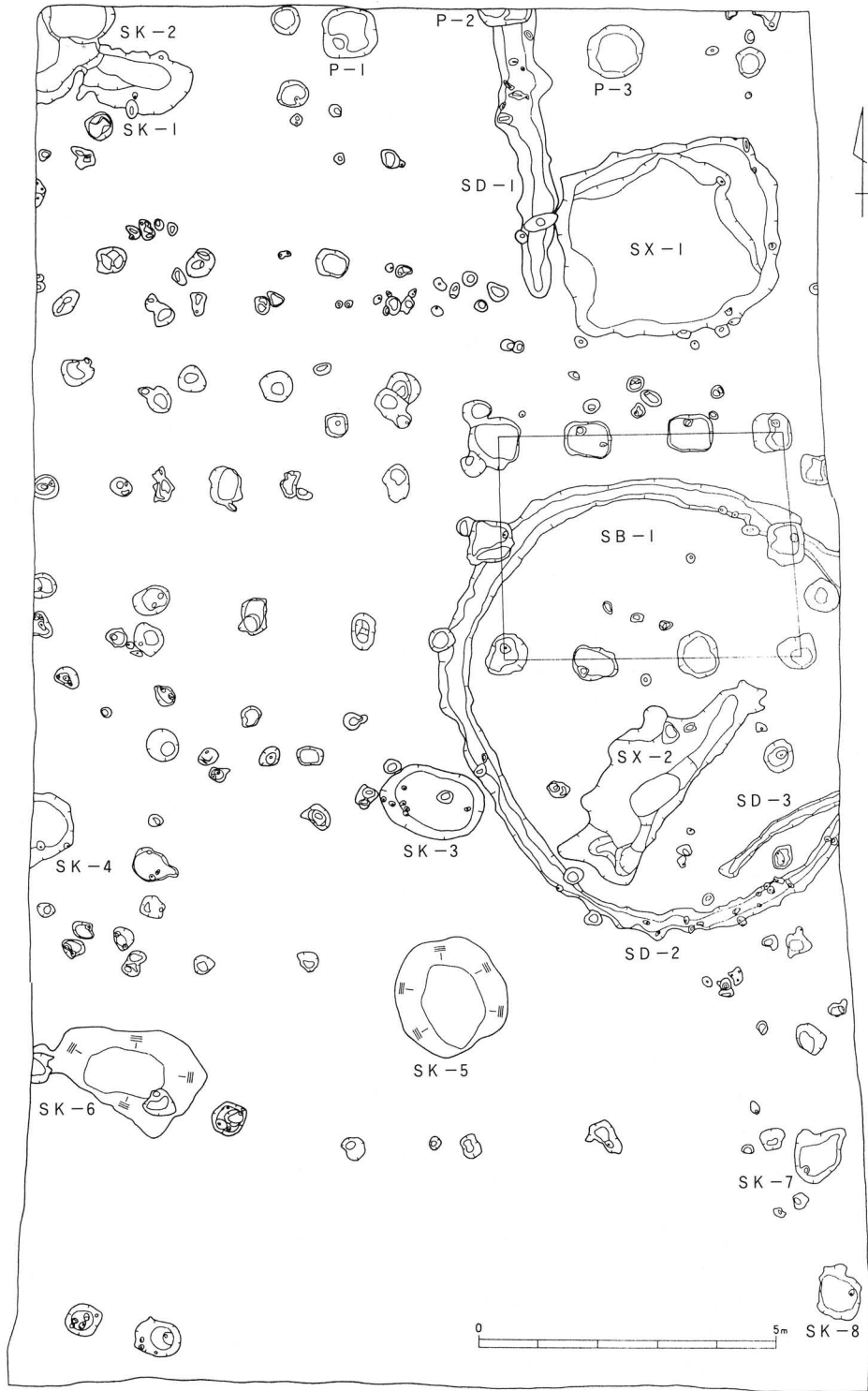


図4 遺構配置図

南久米片廻り遺跡 2次調査地

1. 所在地 松山市南久米町534

—1、534—3

2. 調査年月日 平成元年2月8日～

4月2日

3. 調査面積 901m²



図1 調査地位置図

経過 昭和60年に市教委によって調査が行われた1次調査地は、国道11号関連、前川Ⅰ遺跡の東に隣接しているが、本調査地は、その前川Ⅰ遺跡の西に隣接しており、現在、国道11号線を間に挟んで1次調査地と2次調査地が東西に相対する位置関係にある。共同住宅建設に伴う緊急発掘調査である。

遺構・遺物 SB-1は、一辺3.2mを測る方形竪穴住居址であるが、削平され、立ちあがりを僅かに残すのみであった。北辺に焼土が検出され、カマドを付設されていた可能性がある。掘立柱建物は4棟検出されている。SB-2、SB-5は調査地西端で、それぞれ、1×3間分、1×2間分が検出されているが、更に西へ延びるものである。SB-3は1×2間の南北棟、SB-4は1×1間のほぼ正方形をなす。調査地は、その中央部付近を変換点として、北下りの緩傾斜をなしており、出土遺物の多くは、この傾斜部に堆積した包含層か

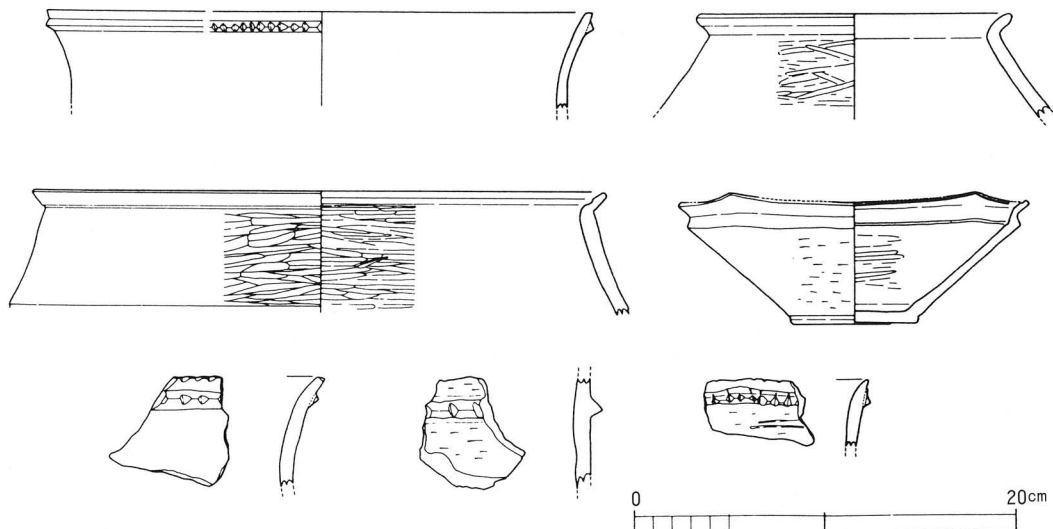


図2 SK-5出土遺物

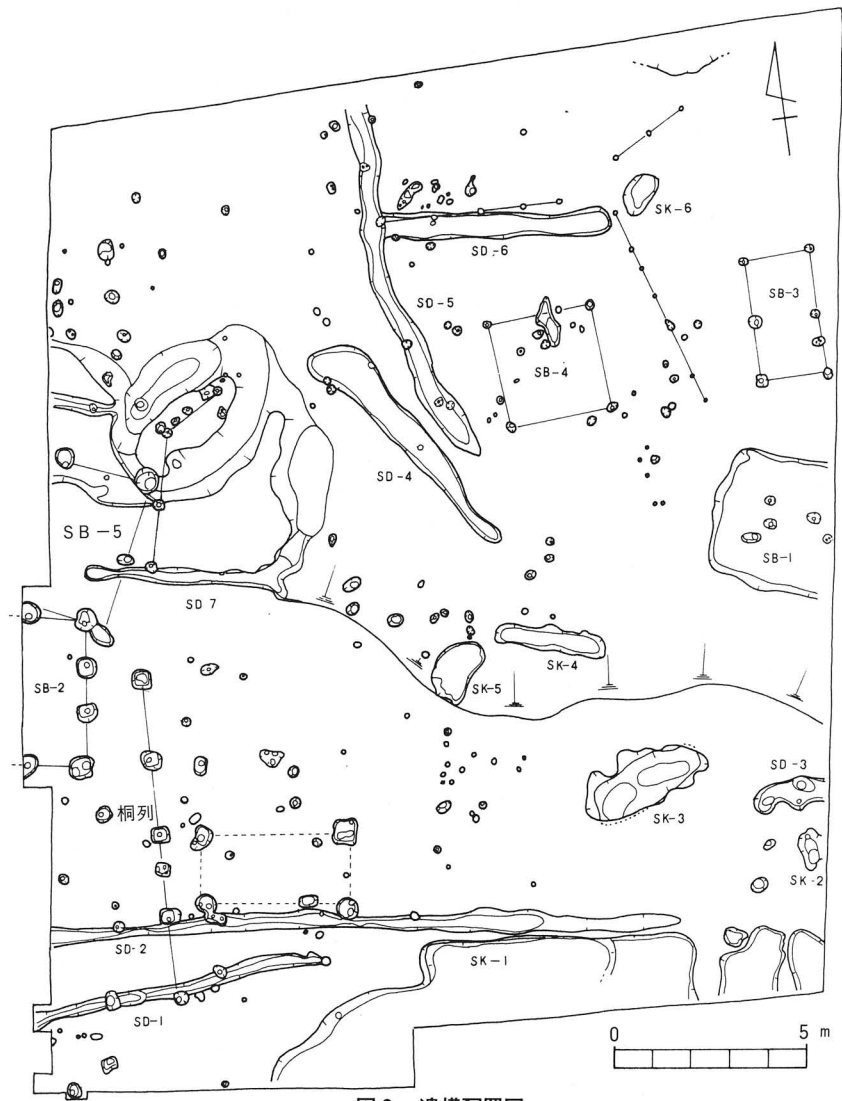


図3 遺構配置図

ら出土している。遺物には、石鏃、石庖丁、土師器、須恵器、平瓦、丸瓦等、各期の遺物が混淆状態で出土しており、氾濫等の要因により堆積したものと考えられる。不整楕円形土壇SK-5は、立ち上り5cm程度の遺存であるが、縄文晩期後葉の土器類を出土している。

小結 SK-5出土の遺物は、深鉢口縁下に刻み目突帯を有する段階、縄文晩期後葉の一括遺物である。これらの中には、胴部突帯を持つもの、口唇部を刻まないもの等が含まれており、また、浅鉢、壺の口縁形態から、晩期後葉でも終末に近い段階の遺物と考えられ、久米・来住地域でのこれに続く弥生集落の成立を考えるうえでの好資料のひとつとなり得るものである。

(松村 淳・山本健一)

ひらき
開遺跡

1. 所在地 松山市南土居町70-1
2. 調査年月日 昭和64年1月6日～
平成元年3月7日
3. 調査面積 869m²

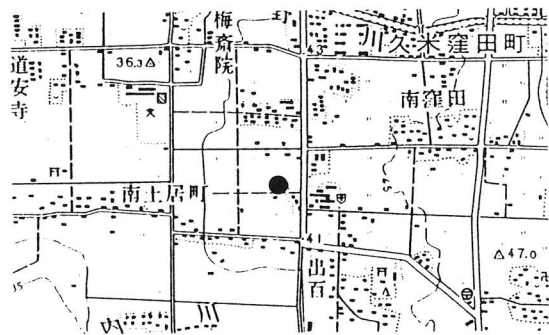


図1 調査地位置図

経過 久米官衙遺跡群、来住廃寺をはじめとした各期にまたがる遺跡の集中する松山平野東南部、来住舌状台地の南方約1.2km、重信川右岸の氾濫原、標高40.5mに当遺跡は立地している。西方300m付近には、白鳳寺院址中ノ子廃寺の比定地が、また、南東500mには全長62mと松山平野最大規模の前方後円墳、波賀部神社古墳が所在している。

今回、医療法人慈強会により寄宿舎建設が計画され、これに伴う緊急発掘調査として本調査が行われた。

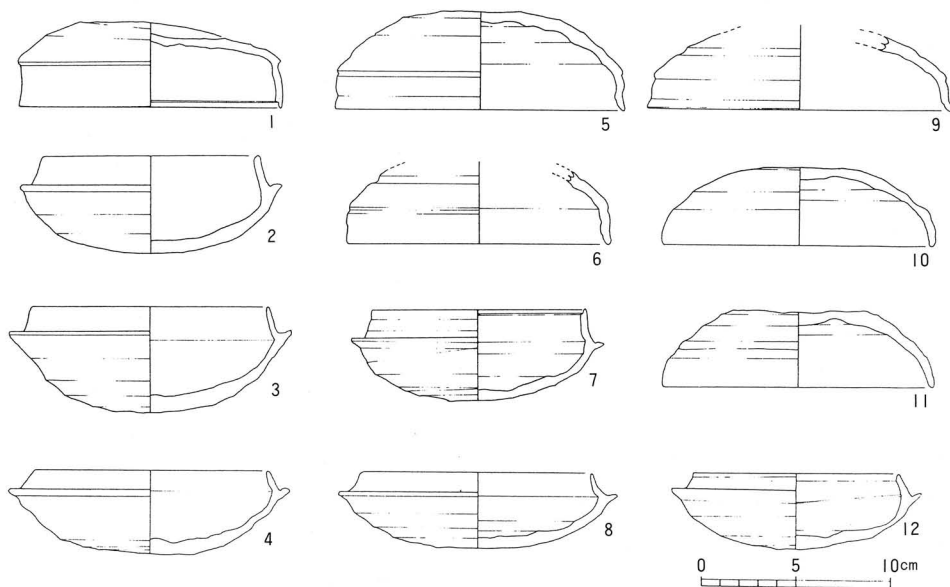
遺構・遺物 検出された遺構は、竪穴住居址5棟、掘立柱建物跡4棟、土壇4基、柱穴60基である。竪穴住居址S B—1～5は、いずれも方形プランをとっている。S B—1は1辺6.6m、立ちあがり20cmの遺存である。立ちあがり基部には周壁溝を巡らせている。南西隅部に2.5×1.3m、高さ10cmの貼り付けによるベッド状施設を設けられている。床面ほぼ中央部で炉と考えられる焼土が検出された。S B—2は調査地北西隅で、その一部のみを検出である。S B—3、S B—5ともに本調査中では最大規模の住居址で1辺8.3m前後を測る。S B—5がS B—3を切っている。S B—5の北辺寄り床面で、焼土が3箇所集中して検出されている。S B—4は1辺6.5mを測り、他の住居址と同様、床面より焼土の検出をみている。S B—1を除く各住居址からは須恵器蓋環が出土している。

4棟の掘立柱建物は、いずれも竪穴住居址を切って検出されている。また、S B—7はS B—6を切り、S B—9はS B—8を切っている。

小結 以上の各遺構からの遺物を検討してみると、S B—2がこれらの中で最も古く5世紀末頃に、次いでS B—6に切られる6世紀前葉の土壇S K—1、6世紀中頃のS B—3、更に6世紀後葉のS B—4、後葉から末のS B—5と約1世紀の間、継続的に生活が営まれていた変遷をたどることができる。S B—1については、時期決定に有効な遺物の出土を欠くが、この間のいずれの時期かにおさまるものと思われる。更なる隣接、周辺地域の調査によって、竪穴から掘立への移行も含めて、古墳時代後期以降の集落変遷をたどるモデルケースとなる可能性が高く、今後とも注意を払っておくべき地域となった。(池田 学)



图2 遺構配置図



1~3 SK-1, 4 SB-4, 5・6 SB-3, 7 SB-2, 8・9 SB-8, 10・12 SB-5

图3 出土遺物実測図

久米高畑遺跡 8 次調査地

1. 所在地 松山市南久米町
2. 調査年月日 平成元年 2 月 9 日～
3 月 15 日
3. 調査面積 240m²

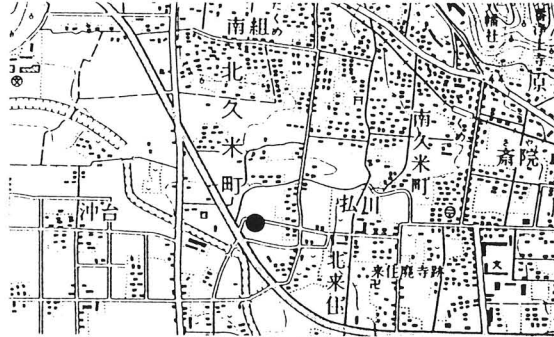


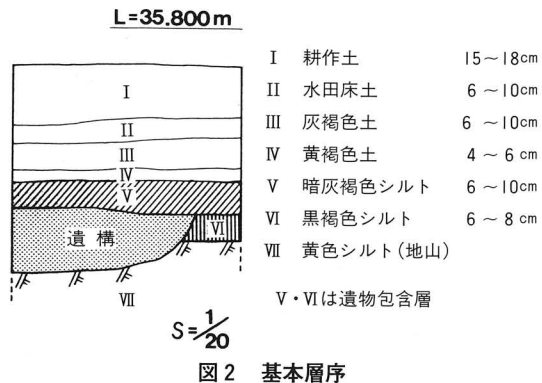
図1 調査地位置図

経過 本調査は、来住遺物包含地内における市道拡幅工事に伴う事前調査である。

本調査区は松山城の南東約4.5km、来住舌状台地上に位置し、標高は36mである。調査区東方には、白鳳時代寺院跡の来住廃寺があるほか、北方には「久米評」線刻須恵器出土地（久米高畑遺跡7次調査地）があり、本調査の隣接地では、久米高畑10次調査地（P123～125参照）として調査が行われている。

遺構・遺物 層序は、(図2) 第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層黄褐色土（水田床土）で地表下20～30cmまで開発が行われている。第Ⅲ層は灰褐色土、第Ⅳ層は淡黄褐色土であり、第Ⅴ層暗褐色シルト及び第Ⅵ層黒褐色シルトは遺物包含層であり約10～20cm堆積している。遺物は、第Ⅴ層より中世、第Ⅵ層より弥生後期～古墳時代の土器が出土している。他に第Ⅵ層上面にて石器類（石庖丁3点）が出土している。第Ⅶ層黄色シルトは無遺物層であり、地山とよばれるものである。

遺構は、第Ⅴ層及び第Ⅵ層上面で検出され、東区では掘立柱建造物2棟、土壙6基、溝状遺構1基、ピット106基（掘立柱建造物柱穴を含む）、西区では土壙3基、溝状遺構5基、ピット59基を検出した。全般に、遺構からの遺物の出土は少なかったものの特に注目すべき遺構はSK-4（図5）である。本土壙は、東区中央部南隅に検出されたものである。南隅は調査区外であり、東隅は攪乱によって切られている。平面形は、隅丸方形になるものと考えられ、規模は東西約2m、壁高は12cmを測る。埋土は暗褐色シルトである。床面は、遺構中央部付近がやや盛り上がっているものの、全体的にはほぼフラッ



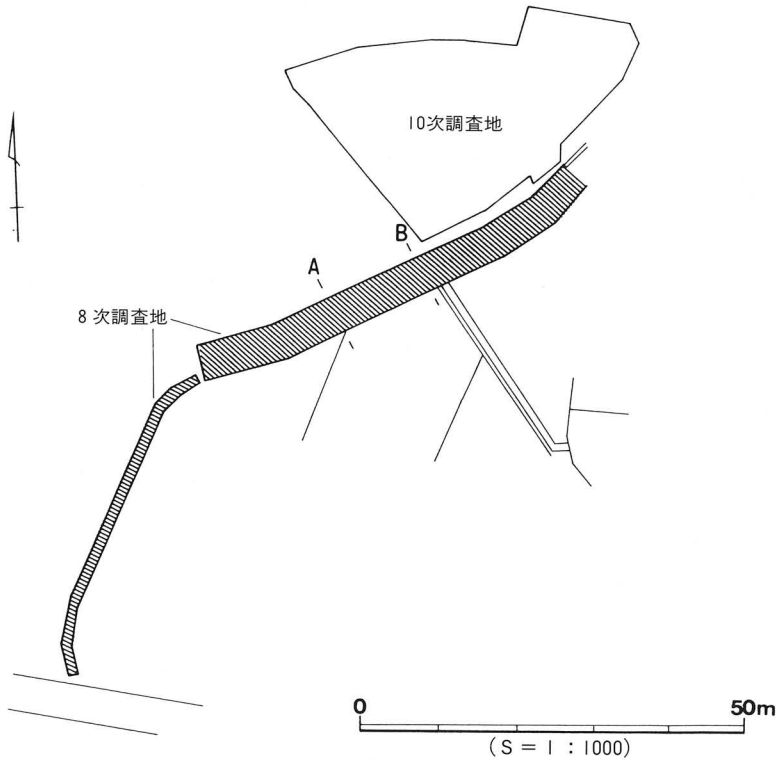


図3 全測図

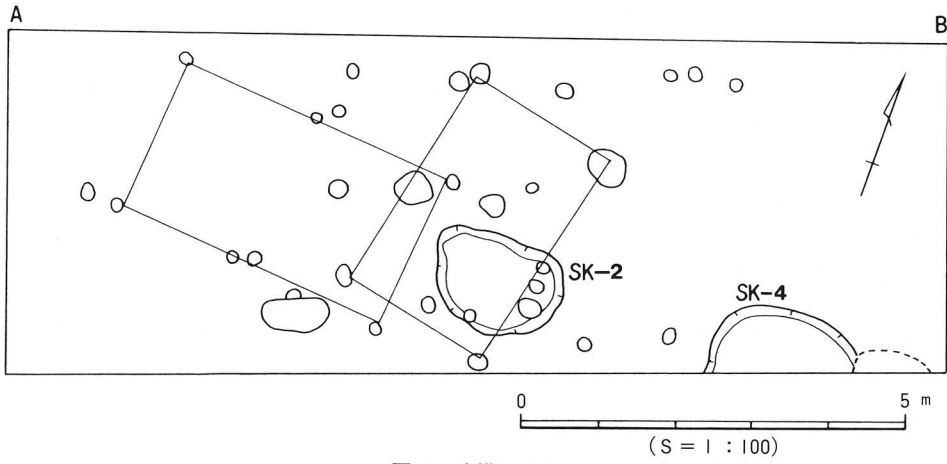


図4 遺構配置図

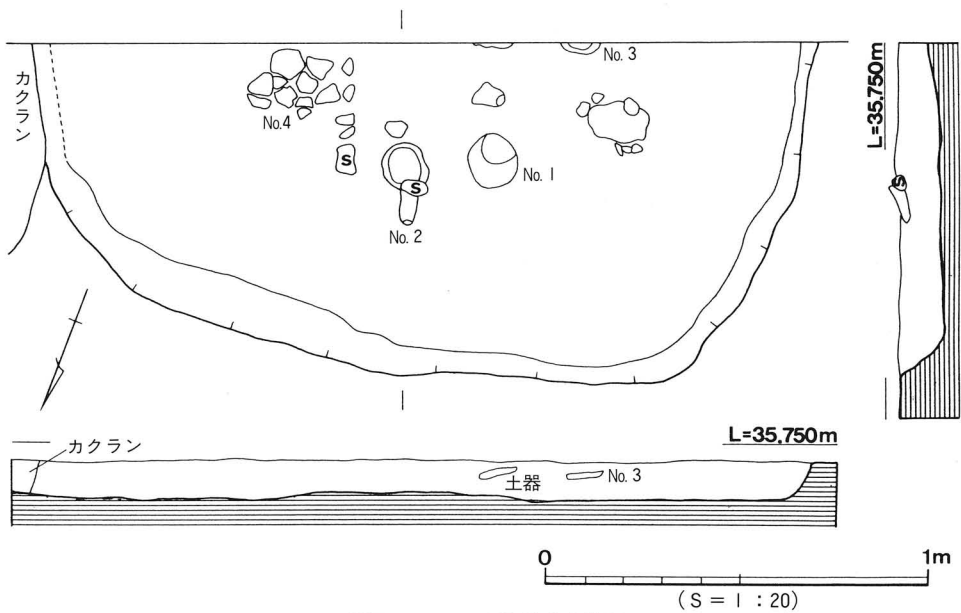


図5 SK-4 遺物出土状況

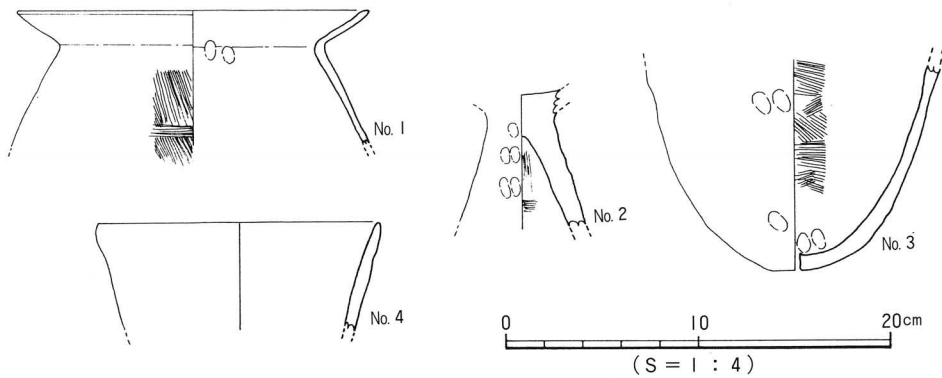


図6 SK-4 出土遺物

トに近い状態である。遺物は(図6)、遺構中央部付近に集中しており、遺構上層部より高坏の脚部、下層部より甕などが出土している。出土遺物等により本土壤は5世紀代のものと推定される。

小結 今回の調査では、久米高畑遺跡10次調査で検出されている溝状遺構の延長部や、「久米評」に直接関連する資料は得られなかったものの、本調査により弥生後期から古墳時代を通して当地及び周辺地域に集落が営まれていることが明らかになった。これは同時代のこの地域における集落構造を考えるうえで、好資料となるものである。

(宮内慎一・梅木謙一)

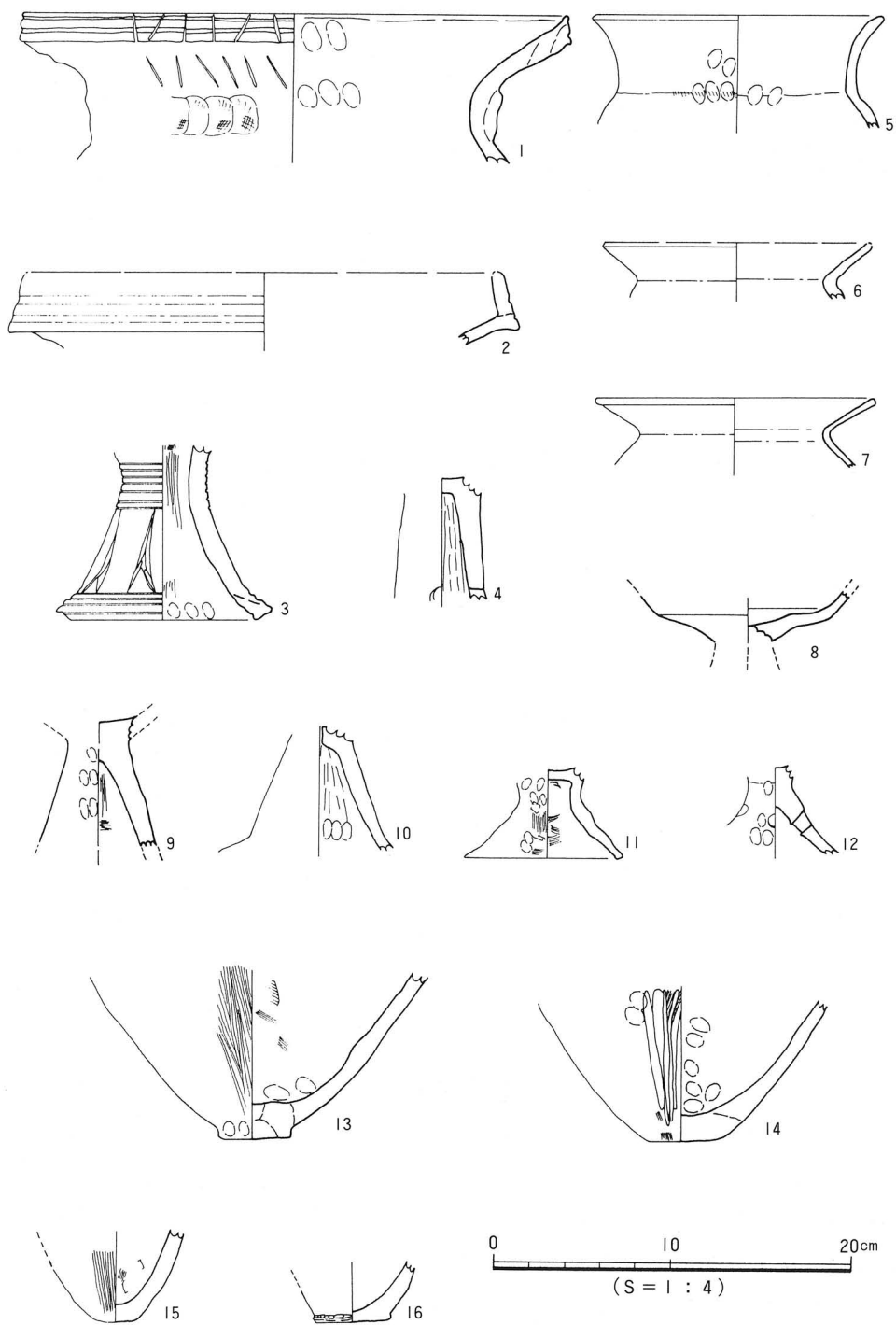


图7 出土遺物実測図

久米高畑遺跡 9次調査地

1. 所在地 松山市来住町913
2. 調査年月日 平成元年2月10日～
4月7日
3. 調査面積 448m²



図1 調査地位置図

経過 来住廃寺の西部に隣接して検出された回廊状遺構は、その後の数次にわたる断続的な調査によって方1町に及ぶことが確認されている。この回廊状遺構の西列よりも更に60mの西方に位置するのが本調査地である。住宅建築に伴う試掘調査の結果、包含層とともに遺構の存在が確認されたため、上記の期間本格調査を行った。

遺構・遺物 主な検出遺構は、竪穴住居址5棟、掘立柱建物3棟、方形竪穴状遺構12基、柱穴等である。円形住居址SB-3は径6mを測り、弥生前期末の遺物を出土している。その他の方形住居址は、いずれも一辺3～5m、残存壁高3～10cmを測る。これらの方住居址からは、6世紀末から7世紀代の須恵器が少量出土した。方形竪穴状遺構は1×2m程度の隅丸長方形プランを呈するものが多く、弥生時代前期後半から、中期初頭までの遺物を出土している。これらの竪穴の性格は、現在のところ定かではないが、一般に来住台地周辺では前期後半から中期初頭に出現頻度が高く、中期中葉以降になるとその他の集落においても多く検出されるようになる。本調査でもこの例に洩れず、前期後半から中期初頭の遺物の出土をみている。

(池田 学)



図2 遺構配置図

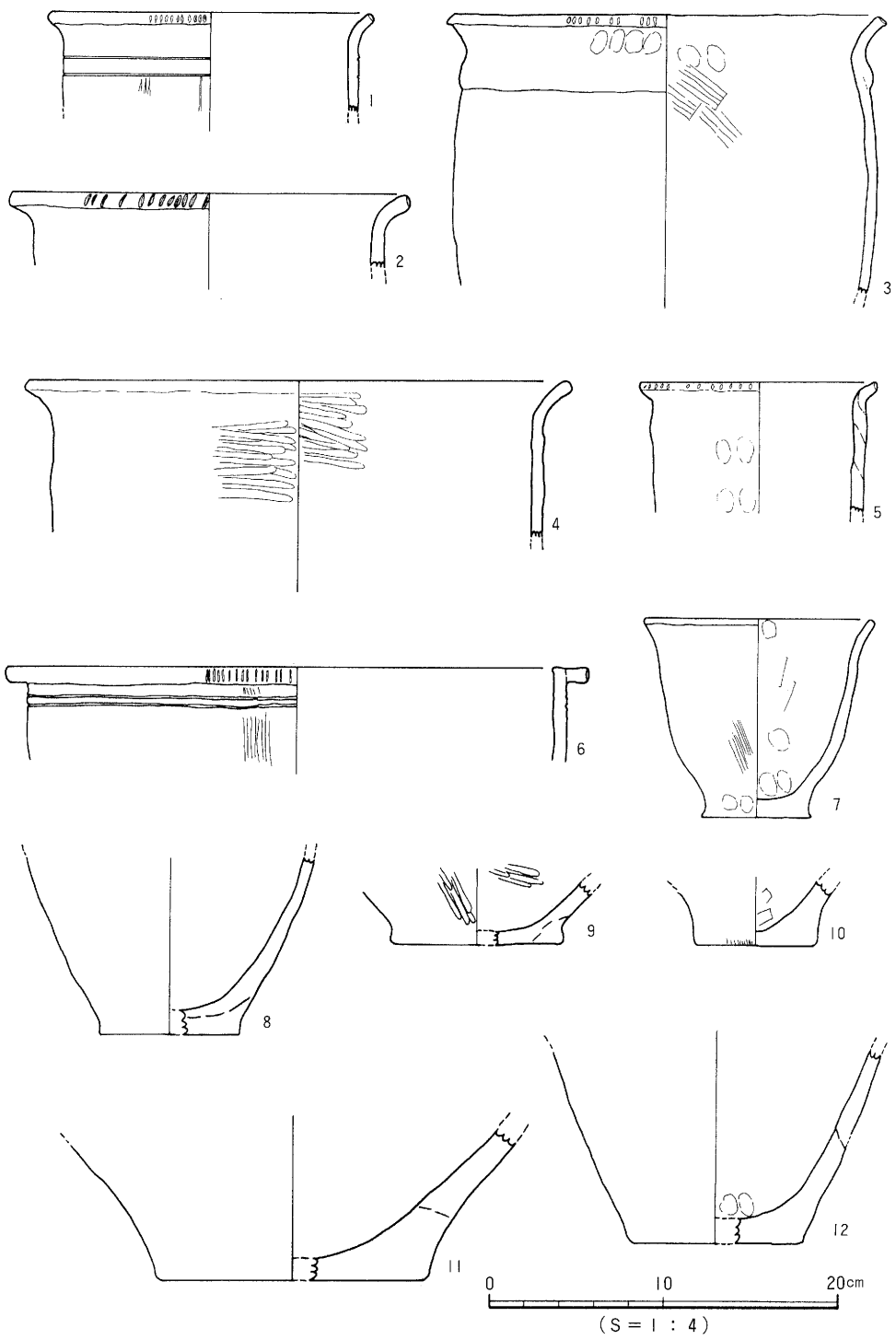


图3 SK-7·12出土遗物

久米高畑遺跡13次調査地

- 1.所在地 松山市来住町846
- 2.調査年月日 平成元年7月26日～
10月18日
- 3.調査面積 1,400m²

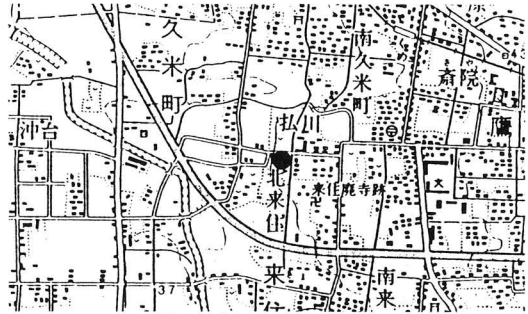


図1 調査地位置図

経過 昭和60年から61年にかけて当教委により行われた、久米高畑遺跡1次調査において検出された大規模な掘立柱建物群は、官衙の様相を濃厚に示すものであった。またこの1次調査地の南東250mでは、白鳳寺院址来住廃寺の西に隣接して、方一町に及ぶ回廊状遺構が検出され、注目を浴びている。本調査地は、この2地点を結んだほぼ中間点、海拔38mに位置している。分譲宅地開発に伴う緊急発掘調査である。

遺構・遺物 検出された遺構は竪穴住居址1棟、掘立柱建物7棟、柵列2条、方形竪穴状遺構9基、土壇18基、溝11条、柱穴300基余りである。

竪穴住居址S B—1は、4.4×5.1mの隅丸方形で、北東コーナー付近を溝S D—5に切られている。残存壁高5cm前後と遺存状況は悪い。埋土中より弥生後期の細片遺物を少量出土している。7棟の掘立柱建物のうち、S B—6を除いた6棟は南北棟である。これらを方位によって分けてみると、S B—3、5のようにほぼ磁北を向くもの、S B—4のように真北を向くもの、S B—7、8のように磁北から25°前後東へ振るもの、これらのいずれにも属さないS B—9という4つのグループに分けることができる。S B—7、8は、その規模、方位から同時期の建物と考えられるが、S B—4、S B—3に切られており、掘立柱建物群の中では最も古いグループになるものと思われる。調査地東端付近に2条の南北溝を伴って、柵列と考えられる柱穴列が検出されているが、この柵S A—1はほぼ真北方向を指しており、S B—4と同時期に存在したのと考えられる。また、調査地北端では東西柵列S A—2が検出されている。

方形竪穴状遺構は、来住台地上では弥生前期後半から中期初頭の遺物を伴って多くみられるものであるが、本調査地でも9基が検出されている。特にS K—19では中期初頭の良好な遺物を出土している(図4)。甕の口縁は、短かく水平に貼り付けられ、端部に刻み目を施される。口縁下に10条を越える多条の沈線と刺突文を、更にやや下って浅く、不明瞭な爪形文を施されている。外面は刷毛目、内面は刷毛目の後撫でられている。壺はいずれも口縁部内面に1条又は2条の押圧突帯を貼り付けられ、外面頸部、胴部を突帯や多条沈線、刺突文

で施文される。口頸部外面には、縦刷毛目が残るが、胴部は刷毛目調整の後、入念にヘラ磨きされている。同様の遺物は、SK-20、21、23でも出土している。

小結 本調査地では比較的規模の大きい掘立柱建物が多く検出された。これらの建物は、弥生時代、古墳時代後期の包含層を切って構築されており、したがって柱穴埋土には弥生土器、須恵器の細片が含まれている。掘立柱建物のうち、古いグループに属すると考えられるSB-8の柱穴内出土遺物の中で、時期比定の可能な最も新しい遺物は、7世紀初頭段階の須恵器蓋坏片である。また、このSB-8に切られる溝状遺構SD-9から斜格子叩き目の、平瓦としては比較的古いタイプの瓦片を数点出土している。今回の調査で最も注目されるのは、溝2条を伴った南北柵列SA-1である。削平のため、溝や柱穴の遺存は必ずしも良好とい

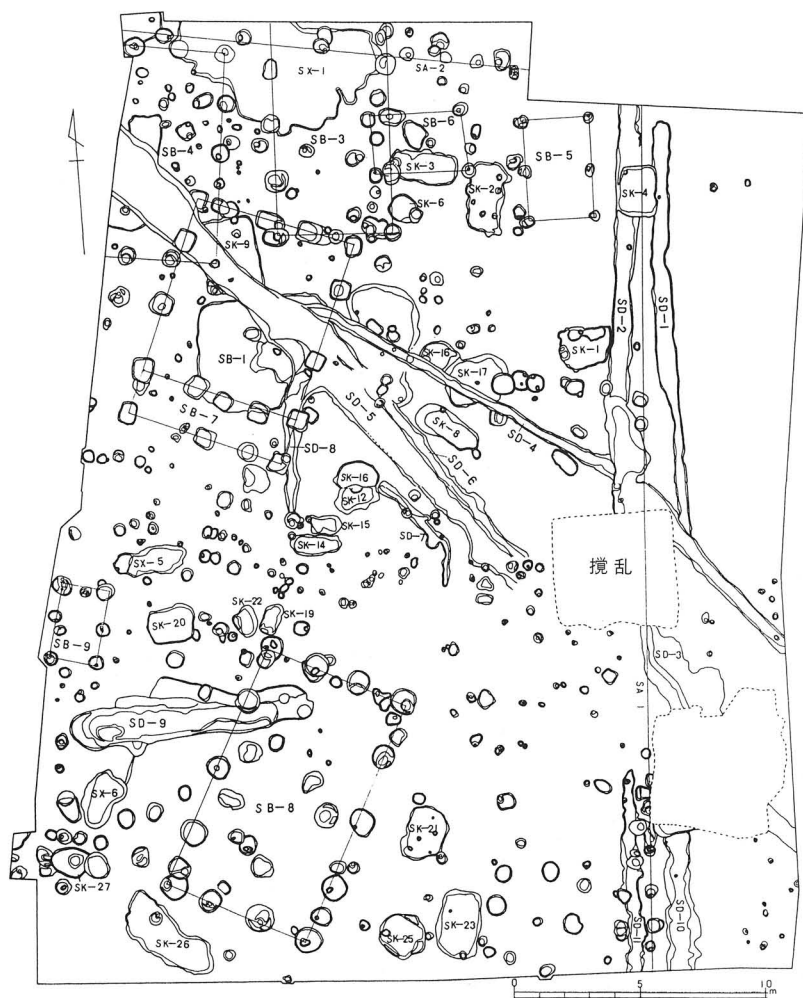


図2 遺構配置図

えるものではないが、このS A—1の東約10mの平行線延長上、南70mに方一町区画の回廊状遺構西列がほぼ載る結果となっており、調査地東端、柵列東の部分が道路であった可能性がある。しかも、この部分は現存する農道ラインと一致しており、また、同様の現象は、回廊状遺構西列、南列等にもみることができ、今後も注意を払っておく必要がある。

(池田 学・河野史知)

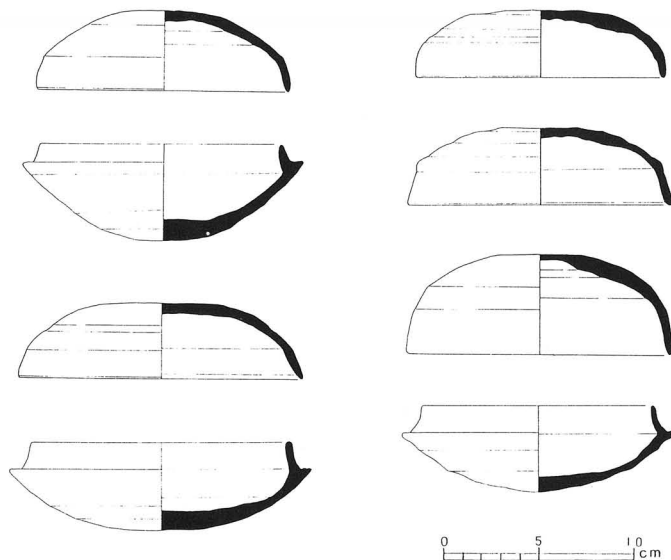


図3 包含層出土須恵器

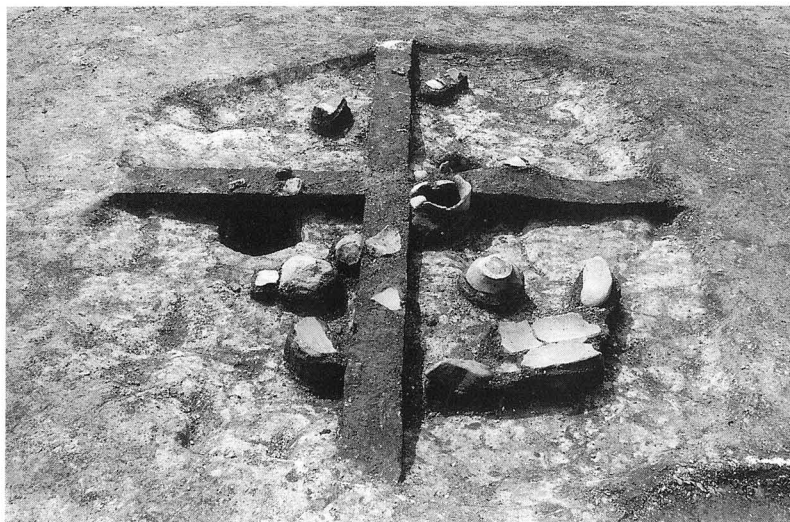


写真1 SK—21遺物出土状況

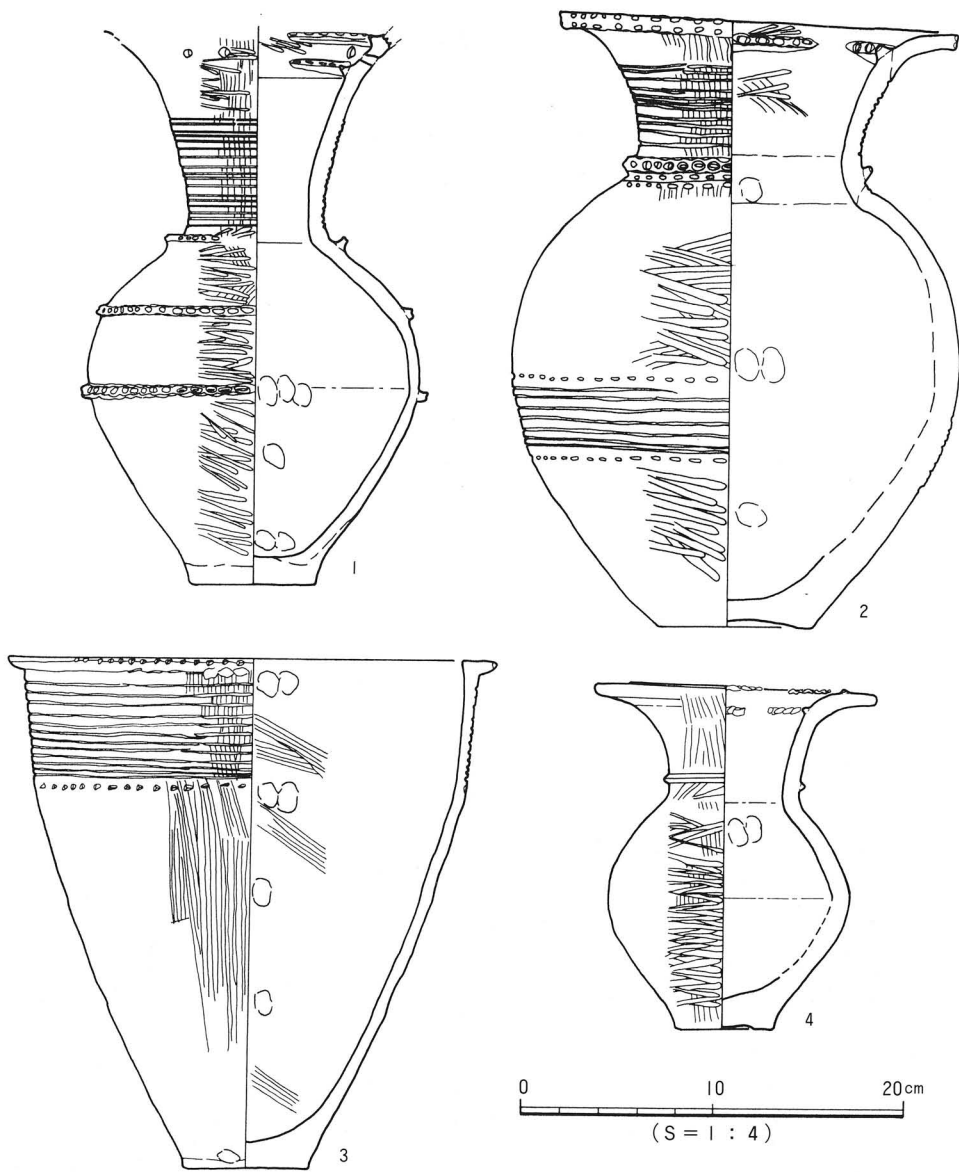


图4 SK-19出土弥生土器

来住廃寺 8 次調査地

1. 所在地 松山市来住町561-

1

2. 調査年月日 平成元年 4 月10日～

4 月26日

3. 調査面積 698m²



図1 調査地位置図

経過 来住廃寺では、主に1次から3次までの調査で講堂基壇、僧坊と推定される建物等が検出され、金堂は未検出ながら、現存する塔址と講堂との関係から、法隆寺式伽藍配置を持つ白鳳寺院址と推定されている。しかし、従来、寺院の西を限る回廊状遺構と目されていた全長100m近くを測る柱穴列が、その後の調査によって、寺院の西方に隣接する区域を方一町にわたってとり囲むものであり、寺院との直接の関連を持たないことが明らかとなり、寺域を限る四周の施設に関しては不明確なまま今日に至っている。本調査地は、この来住廃寺塔址の北東100mに位置しており、寺域の北限、ないしは東限を限る何らかの遺構の検出が期待された。民間の開発に伴う緊急発掘調査である。

遺構・遺物 調査の結果、竪穴住居址1棟、掘立柱建物跡1棟、土壙7基、柱穴62基が検出された。調査地西端で、その1/3が検出された方形竪穴住居址S B—1は、1辺6.3mを測る。遺存は悪く、立ちあがりもほとんど残っておらず、遺物の出土もなかった。掘立柱建物S B—2は3×2間分を検出している。柱間隔からみて、梁間3間の南北棟になるものと思われる。土壙は、概ね径1～1.5mを測る円形、或いは楕円形のプランを呈している。このうちS K—5・7からは、弥生中期初頭の、また、S K—4からは後期の遺物を出土した。

小結 本調査地では、期待された寺院関連の遺構は検出されず、この地点が域外にあたる可能性が高い。また、今回は、主に弥生時代中期初頭の遺物を出土する円形土壙が数基検出されている。来住台地では、このような円形プランのもの他に、同じく前期後葉から中期初頭の遺物を出土する1×2m程度の隅丸長方形、ないしは楕円形の竪穴が普遍的にみられるが、いずれもその性格は良くわかっていない。また、これらの竪穴の出現頻度に比して、該期の確実な住居址の検出例が極めて少ないことも、この時期の来住台地の特徴である。これらの遺構の性格を反映しているのかもしれない。

(池田 学・水本完児)

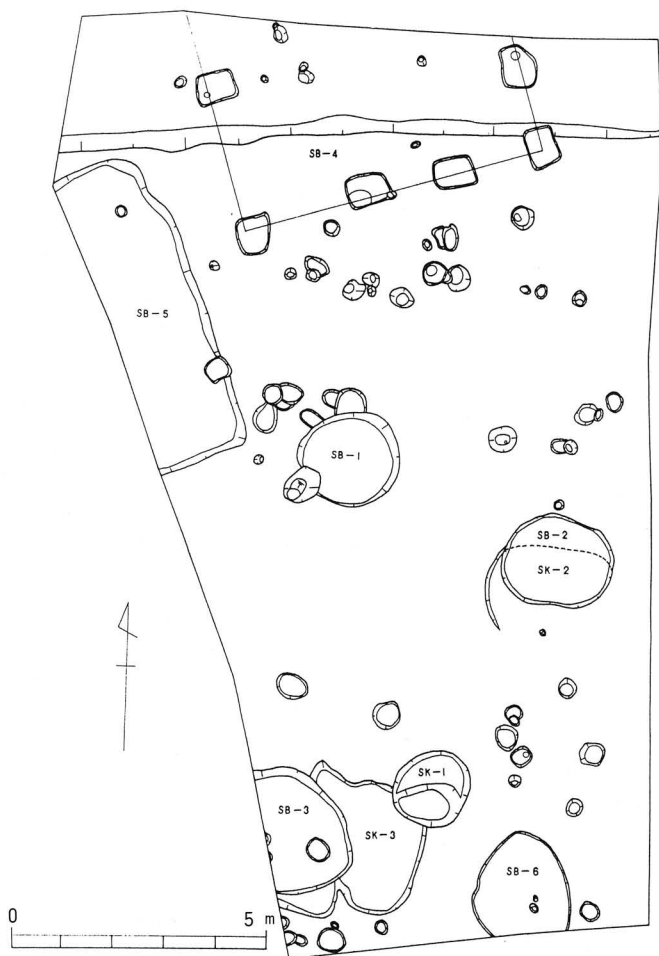


图2 遺構配置図

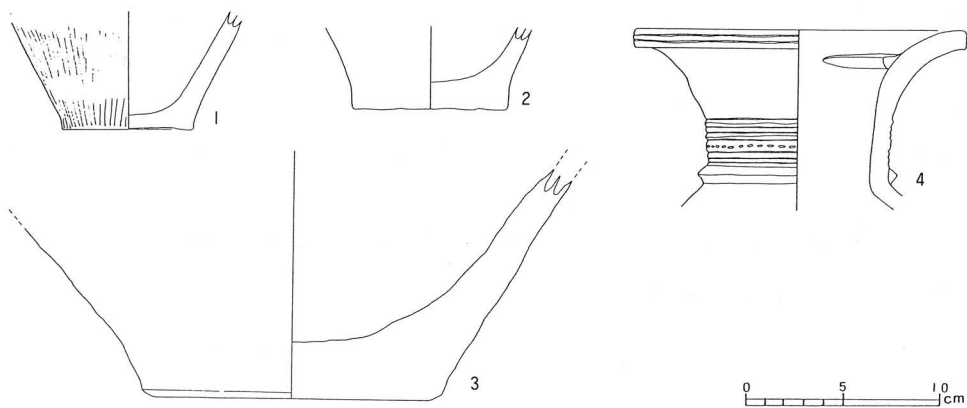


图3 SB-1 出土遺物

久米官衙遺跡群

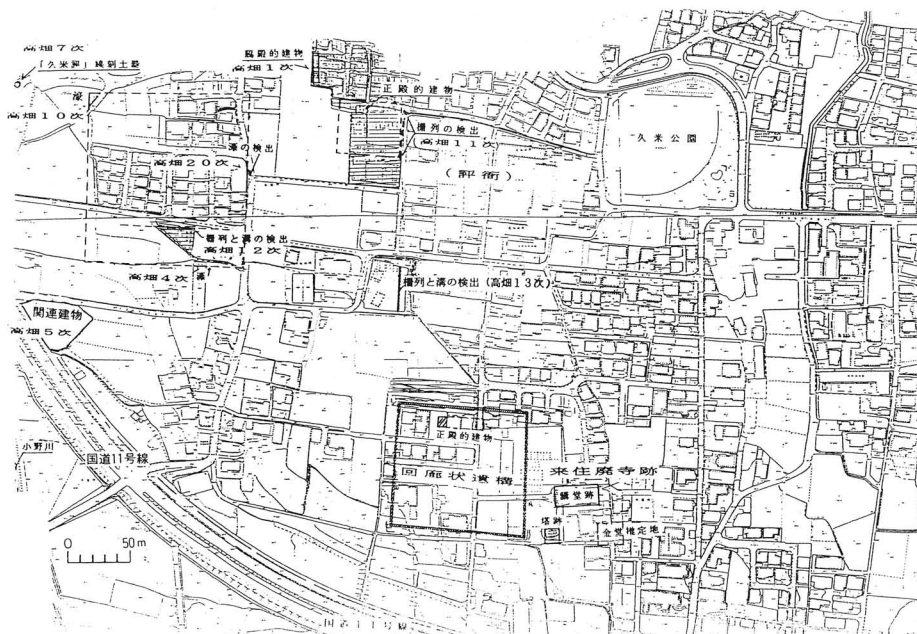


図1 官衙関係遺跡 (来住台地)

本遺跡群は松山平野東部、小野川右岸面に開かれた来住舌状台地の西端近く（標高32～39m）に立地する。同台地は、小野川、堀越川の両河川に囲まれ、周辺地より一段高くなり周辺が見渡せる地形を呈している。

周辺遺跡には、星岡西山古墳、二ツ塚古墳、波賀部神社古墳、たんち山古墳など後期の前方後円墳が集中するとともに久米古墳群がある。平成元年には、同台地西方1.6km地で古墳期の大集落（福音寺遺跡群）が発見されている。

近年、著しい諸開発に伴う調査の結果、来住台地上において、7世紀代の官衙に関係する遺跡が相次いで発見された。遺跡は、少なくとも東西6町、南北5町範囲にその広がりが認められるもので複数以上の方形区画地の形成や関係遺構が確認されている。台地西先端部の久米高畑

表1 検出遺構比較表 (来住台地)

遺跡名	柱間(cm)	建物方向(真北より)
高畑1次(柵列)	175～177	北で4°東に偏す
高畑11次(〃)	173～175	北で4°東 〃
高畑10次(溝)	北西隅溝30m	〃 3°東 〃
高畑20次(〃)	南北 溝22m	〃 4°東 〃
高畑4次(〃)	南西 溝 8m	〃 3°東 〃
高畑12次(柵列)	140～160	〃 5°東 〃
高畑13次(〃)	120～150	〃 2°30′東 〃
回廊遺構内正殿的建物		〃 2°東 〃

表2 回廊状遺構の復原

遺構名	全長	桁行柱間	梁間
東面(復原)	98.50	1.79 m×55間	1.79m (1間)
西面	97.50	1.95 m×50間	1.91m (1間)
南面	103.50	1.815 m×57間	1.81m (1間)
北面(復原)	99.60	1.81 m×55間	1.99m (1間)

7次調査からは、「久米評」線刻須恵器出土をはじめ、久米高畑4・10・20次調査では、同一軸方向をなす溝が検出され、100mを越す方形区画地を形成する可能性がでてきている。また同区画地域の12次調査からは、雨落ち溝付随の柵列25m分が検出された。

同区画の東側地になる高畑1・11次調査では、脇殿風の長大な掘立柱建物検出を含め、一辺44mの柵列によって方形区画地を形成する可能性が強くなっていると共に、区画地内からは中心的建物や数棟の整然とした建物配置が確認されている。さらに同地より東部に位置する来住廃寺西側地においては、方一町規模の回廊状遺構による区画地の形成と共にその中から大規模な掘立柱による正殿の建物の他、数棟の建物が確認されている。（西尾幸則）

回廊状遺構による区画地（寺域調査での官衙関係遺跡）

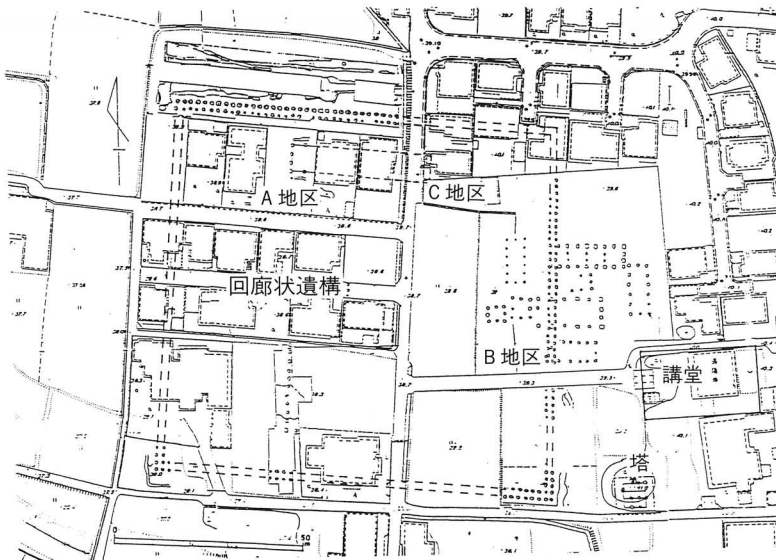


図2 回廊状遺構と来住廃寺

昭和62年度（1987）の寺域調査によって奇跡的に発見された掘立柱による回廊状遺構（東西総長58m）は、昭和52年～53年度（1977～78）発見の東西回廊状遺構と接続し、さらに昭和63年度調査で同遺構の南東隅及び南西隅の屈折部とその中間位置をそれぞれ確認した。これにより同遺構は、来住廃寺の主要堂塔西側（塔址西方14m）地で同寺院に一部重複し、方一町規模でめぐる回廊状遺構（年報Ⅱ参照）になることが明らかとなった。

A地区の調査 6AKA - GA29～GM33地区（平成元年度、寺域調査）

来住廃寺講堂の西北方100m地にあたる宅地用地を調査実施した。

本調査は、昭和62年度（1987）の寺域調査（6AKA - GA22～GF41）によって発見

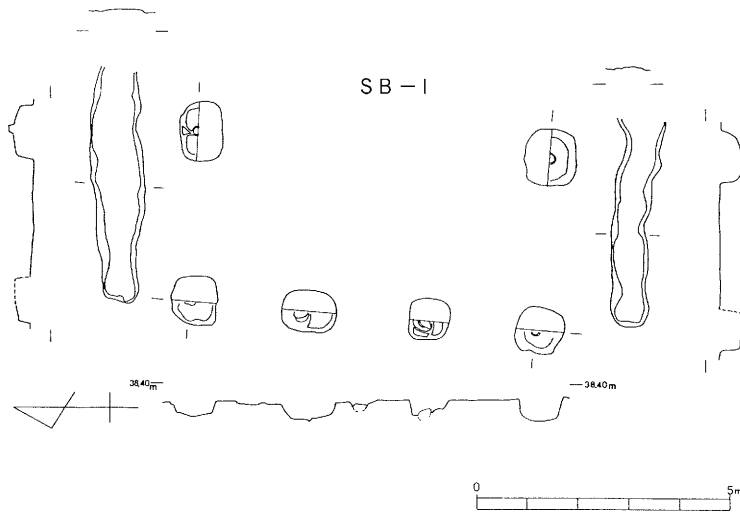


図3 A地区の検出遺構（正殿的建物）

された北面回廊状遺構検出地の南隣接地になり、同遺構による区画地内の北中央部やや西寄り部にあたる。

検出の遺構は、北面回廊状遺構内側柱列より南方7.4mで検出した桁行1間以上（東西3.4m）梁間3間（南北7.1m）の東西棟の掘立柱建物であり、建物の北側と南側にそれぞれ雨落溝（幅0.7～1m、長さ4m）が付随し、なお東へ続くことが確認された。柱掘り方は、幅1m、長さ1.1m規模の長方形プランをなし、柱痕は21～31cm級になり、両者とも回廊状遺構に比較し、ひと回り大きく、平面プランや柱掘り方が建物方向にそって長くなることは共通している。

これらのことを含め同遺構は、北面回廊状遺構と同一軸方向をなす建物であり、回廊状遺構による区画地内の北中央部に中心的建物として計画的に配置された可能性が高いと言える。

同遺構の推定規模としては、検出建物の西端部と回廊状遺構の東西中心線との距離により、桁行11間（東西総長37m）規模が考えられる。またその反転位置（C地区）からは、同遺構の南東隅部にあたる可能性のある柱穴1個が検出されている。

出土遺物は、同遺構の柱掘り方より須恵器片2点があり、うち1点は6～7世紀前葉の特徴を持つ坏身として考えられるが、前時期のものが同掘り方に混入したことも合わせて推察されることからなお今後における同遺構の残り部の調査研究が必要である。

B地区の調査 6AKA - GN12~15 - GY12~15

調査地は、回廊状遺構による区画地内の東部中心付近になり、来住廃寺講堂より西方30m位置の水田地を調査した。

検出層序は、第1層耕作土10cm内外、第2層灰茶色土3cm、第3層茶褐色土14cm、第4層黒褐色土45cm内外、このうち出土遺物は、第4層包含層から、弥生土器、須恵器類（7～8世紀）、土師皿、瓦片などが出土している。

検出遺構は、掘立柱建物4棟と溝1条を検出した。

検出の掘立柱建物のうちSB-1の東側柱列とSB-06については昭和62年時の検出遺構であり、今回その補足確認したものとなった。

掘立柱建物SB-1は東面（南北）回廊状遺構から6.5m位置の区画位置に同遺構と平行して建つ南北棟で、第4層上面において桁行5間（南北総長10.7m）

梁行2間（東西総長4.7m）を検出した。柱穴は直径30cm前後が検出されたが、明瞭な柱掘り方は検出されなかった。時期的にはSB-06より下層遺構になることと合わせ、回廊状遺構と同一軸方向をなす建物であり、同遺構との共存関係にある様相をもっている。

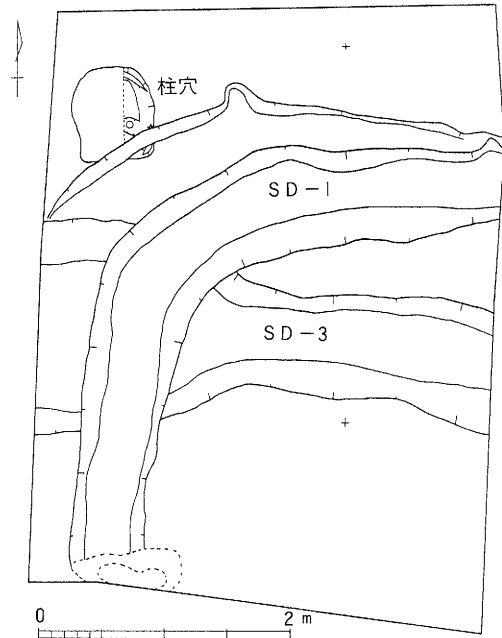


図4 C地区の検出遺構

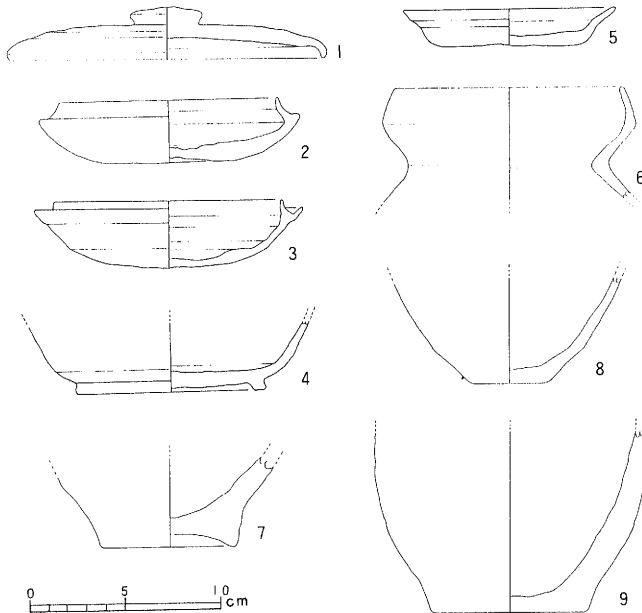


図5 B地区出土遺物実測図

掘立柱建物SB-06は、第3層上面から検出されたもので東西2間（総長4.7m）、南北2間（総長4.7m）の建物である。柱穴は、直径60～70cmの円形をなし、西側柱穴（3個）には荒縄もしくは細縄叩きの瓦が敷かれていた。

掘立柱建物SB-3は、第3層上面から検出されたもので桁行2間（東西総長4.7m）、梁間2間（南北総長3.5m）

規模になり、前述のSB-06と類似する建物である。その他、東西4間（総長8.5m）分の
 柵状遺構を検出した。 (西尾幸則・池田学)

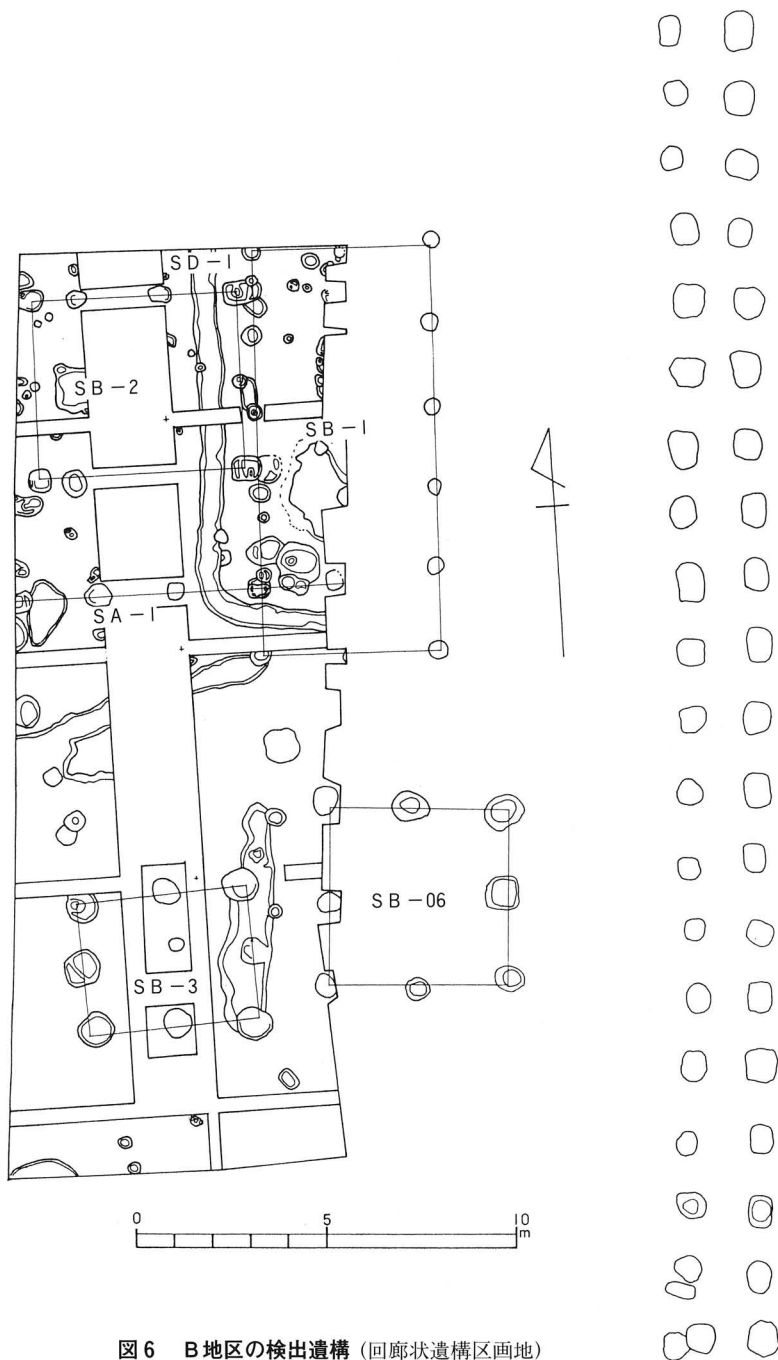


図6 B地区の検出遺構（回廊状遺構区画地）

久米高畑遺跡10次調査地

1. 所在地 松山市南久米町782-1
2. 調査年月日 平成元年4月1日～4月28日
3. 調査面積 1,118㎡

調査の概要

調査地は、来住舌状台地の北西端近く（標高35.7mに位置し、対象地は北西下り地形を呈した水田地である。基本層序は、第1層 耕作土、第2層 茶褐色土、第3層 黒褐色土（北

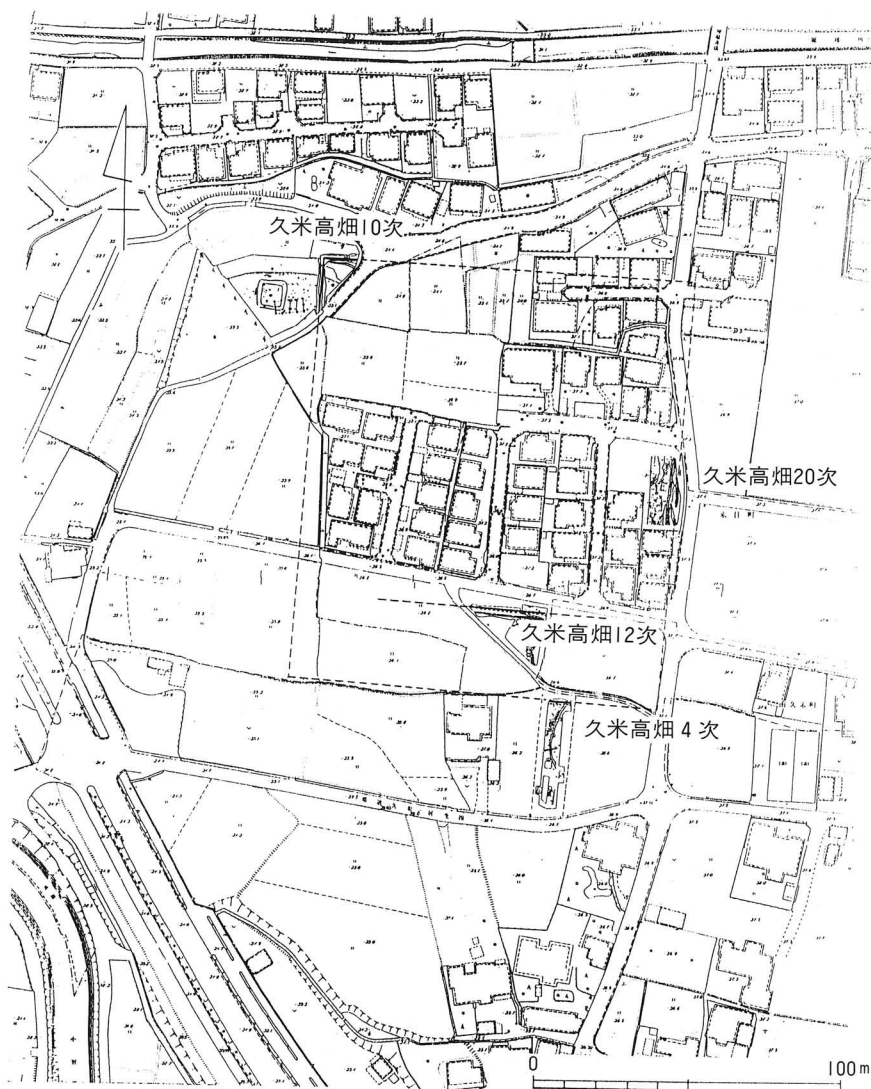


図7 方形区画（西部）の形成推定

下り地には部分的に残存する)、第4層 黄褐色土 (多くの礫を含む地山) である。

検出遺構は、弥生後期壺棺葬2基、掘立柱建物2棟、柱穴76基、土坑6基、方形周溝1基、

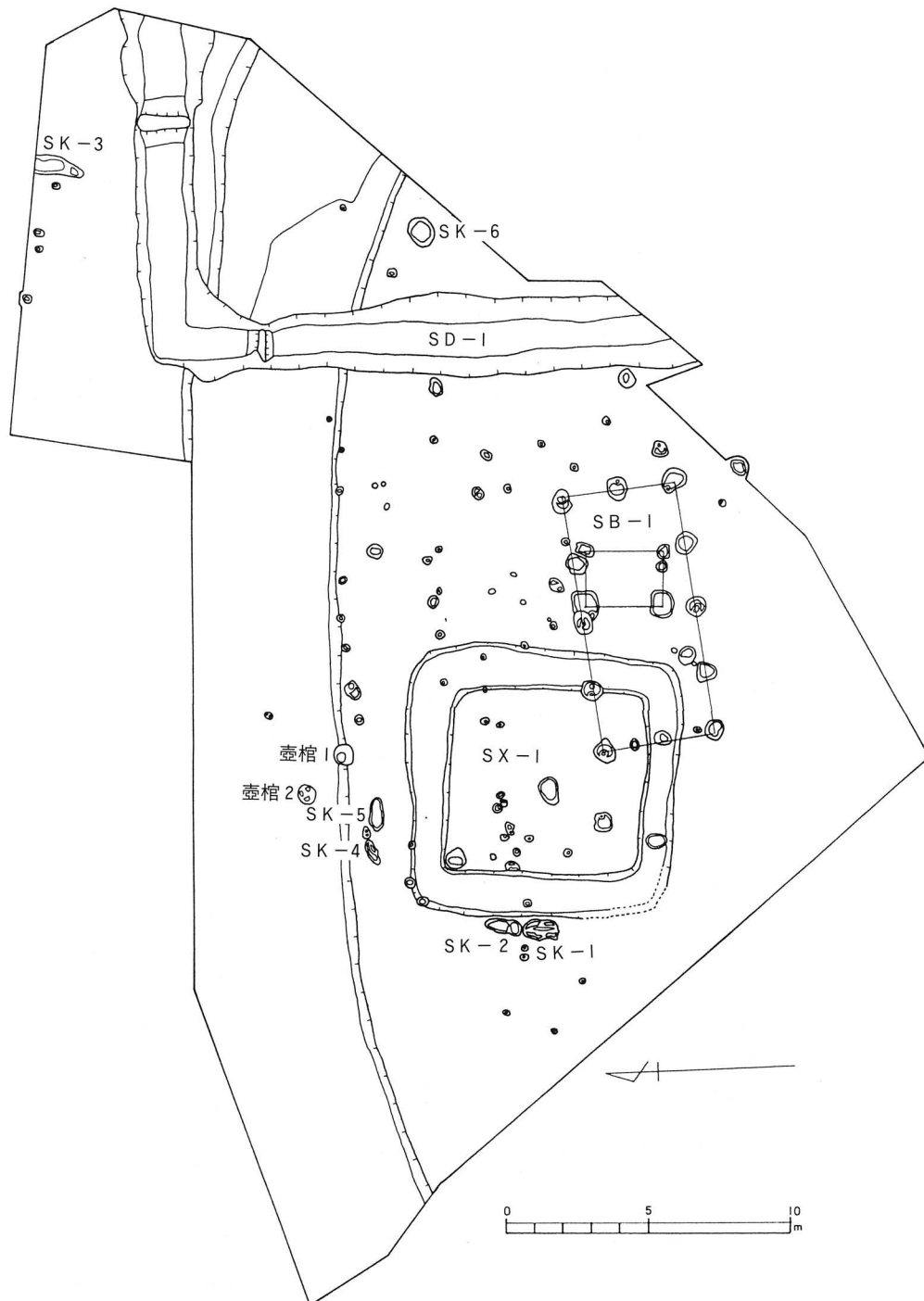


図8 久米高畑遺跡10次調査地検出遺構図

これらのうち、掘立柱建物S B-1は、桁行4間（東西総長9.1m）、梁間2間（南北等長4m）規模である。方形周溝S X-1は（上場幅1.5m、下場幅1m、深さ30cm）東西6.5m、南北6.8m規模で方形に溝が一周する。前述のS B-1を切った遺構である。土壌S K 1・2は、長径1.2m、深さ30cmの楕円形土壌になり、中から焼土を検出している。S X-1の西中央部に接して検出されており、同遺構に付随する可能性がある。

特筆すべきは、調査地東部から、北西隅部を区画する溝S D-1、（上場幅2～2.5m、下場幅1.3m、深さ0.7m）東西12m分、南北15m分を検出した。同溝はなお東、南方、ともに延びるものである。

出土遺物は、S X-1の溝から須恵器片数点、S D-1の溝より坏蓋、中型甕など須恵器類が出土した。時期的には、後者が駄場姥ヶ懐1号窯の後続時期であり、前者は不詳で今のところS B-1建物以降の時期としか言えない。（西尾幸則・池田学）

久米高畑遺跡20次調査地

1.所在地 松山市来住町1156-5外

2.調査年月日 平成2年2月14日～3月24日

3.調査面積 340m²

調査の概要

調査地は、来住舌状台地の西端近く（標高37m）に位置し、前述の久米高畑10次調査地から東方120mの宅地造成地にあたる。

基本層序は、第1層 耕作土、第2層 茶褐色土、第3層 暗灰色土、第4層 黄褐色土である。検出遺構は、掘立柱建物2棟、土壌2基、溝7条、柱穴99基である。このうち掘立柱建物S B-1は、桁行3間（総長5.4m）、梁間3間（総長4.3m）規模で、溝S D-3及び4に先行する遺構である。掘立柱建物S B-2は、桁行3間分（総長4.65m）、梁間2間（総長3.9m）を確認した。検出の溝関係では、溝S D-1・2・3が他の溝より先行し、次に4・6の順に切っている。溝S D-7は、調査地の関係で西側肩部からの落ち込みのみであるが、南北方向の溝になる可能性があると同時に、その方向性を含み、溝の上場状況や埋土から見て、先述の久米高畑10次調査検出溝S D-1と共通する特徴も含め同一区画地に伴う溝としての可能性があるが、遺構全体の確認不足や時期的裏づけを含め、なお今後の調査研究が必要である。

出土遺物は、S D-1及び2から7世紀の要素をもつ提瓶、高坏、坏蓋など須恵器類が出土し、S D-3で中型甕の須恵器、注目のS D-7からも破片であるが駄場窯より後続時期の坏身、坏蓋など須恵器類出土がある。（西尾幸則・池田学）

久米高畑遺跡12次調査地

- 1.所在地 松山市来住町1151-1
- 2.調査年月日 平成元年7月7日～7月28日
- 3.調査面積 393.99m²

調査の概要

調査地は、来住舌状台地の北西端近く（標高36.6mに位置し、久米高畑20次調査地の南西方60mにあたる。

基本層序は、第1層 耕作土（20cm前後）、第2層 暗灰色土（20cm前後）、第3層 黄褐色土（地山）である。

検出遺構は、柵列1条、付随溝1条、掘立柱建物1棟である。このうち柵列S A-1は、東西方向のもので東西17間分（東西総長25m分）を検出した。付随の支柱穴はなく、柱間は、1.4～1.6m間隔である。柱穴は、径0.6～1mの円形を呈し、柱痕は、14～20cm規模である。付随溝S D-1（上場幅50～60cm、下場幅30～40cm、深さ15～20cm）は、前述の柵状柱穴の南側1.5mより平行して検出されたもので、雨落ち溝として考えられる。

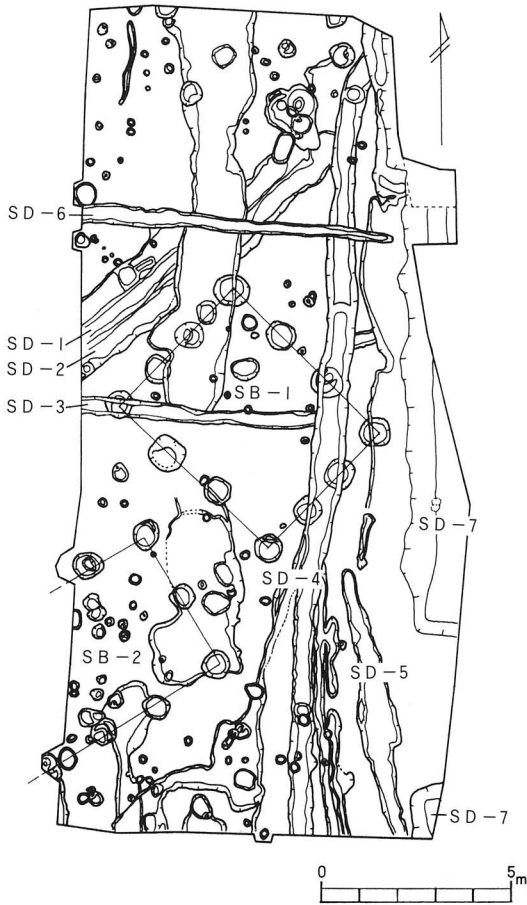


図9 久米高畑遺跡20次調査地検出遺構

掘立柱建物は、前述のS D-1に対し角度を異にした建物で、同遺構の南側2mから南北2間（総長6.5m）、東西1間分（総長3m）を検出した。柱間から見て東西棟の様相がある。柱掘り方は、1m内外の方形を呈している。

出土遺物は、柵状柱穴の柱掘り方より7世紀前半代の要素を持つ蓋環の出土がある。

なお、本遺跡での検出柵列S A-1及び付随溝S D-1は、出土遺物的に見て、先述の久米高畑10次及び20次での検出溝よりの出土須恵器に対して、若干先行する要素があるが少量の出土物であることを含め、遺構全体確認がされてなく、なお今後の調査研究を要するものである。

（西尾幸則・池田学）

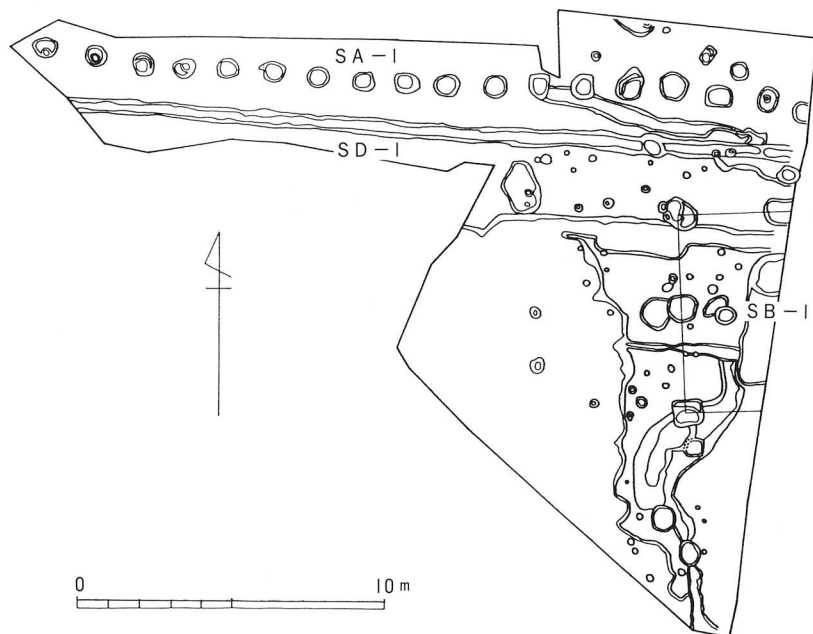


図10 久米高畑遺跡12次調査検出遺構

久米高畑遺跡11次調査地

1. 所在地 松山市南久米町758～同市来住町761外
2. 調査年月日 平成元年4月17日～7月7日
3. 調査面積 1,904m² (宅地造成)

調査の概要

本遺跡は、来住舌状台地の西端近く(標高38m)に立地する。調査地は、久米高畑20次調査地から東方70m、回廊状遺構から北方200mに位置し、久米高畑遺跡1次調査地の南隣接地にあたる。基本層序は、第1層 耕作土(23cm)、第2層 茶褐色土(10cm内外)、第3層 黒褐色土(0～30cmで東北部はなく、西南下り地に厚く堆積する)、第4層 黒色土(西南下り地を中心に第3層が分層された。)、第5層 黄褐色土(地山)である。

検出遺構は、円形竪穴居址(弥生期)1棟、土壇14基、掘立柱建物12棟、柵列2条、溝3条、柱穴435基などである。

特筆すべきは、柵列(SA-3)で、途中5m途切れ、東西総長32.7m分を検出した。同遺構は、久米高畑遺跡1次調査(年報Ⅰ・1986)による検出柵列SA-1に対して、表1(P118)が示すように柱間、方向性含めて共通性があり、同一遺構の可能性が強く、柵列によ

る方形区画を形成したことが考えられる。これにより規模的には、南北柵列間が43.5mであるので、一応同規模による方形区画が推定されるが東西中心線位置を含めて、同遺構の東部、南部共に屈折位置の確認を要すものであり確定的でない。

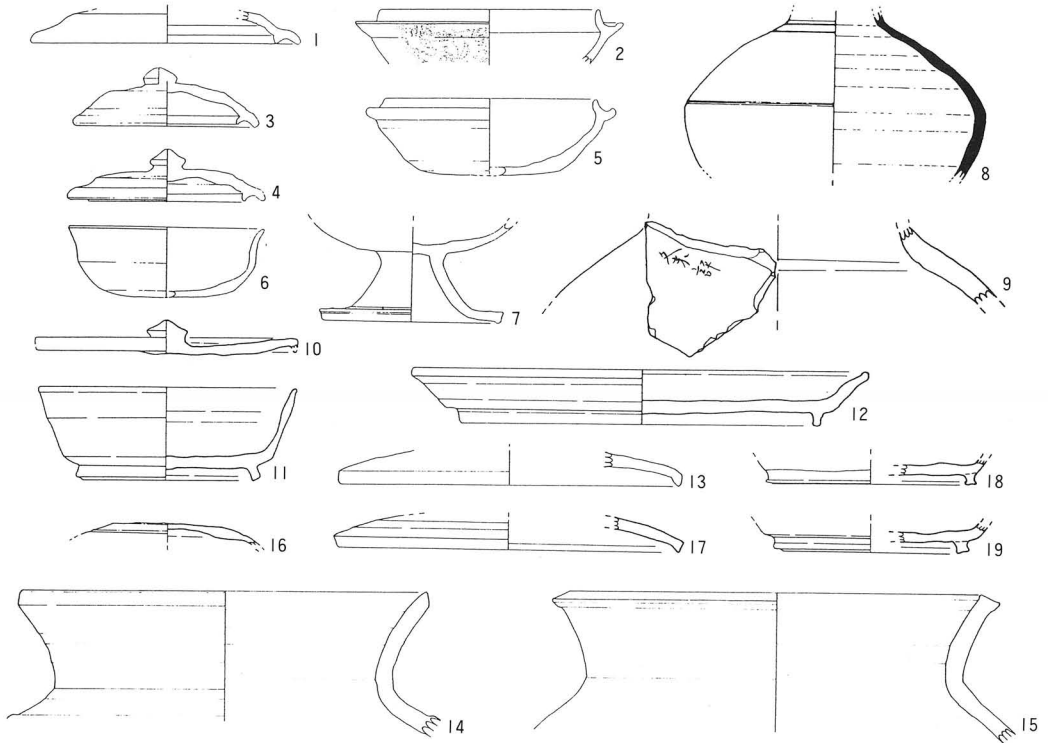
区画内の建物では、1次調査地（年報Ⅰ・1986）の区画内中央北部から2時期にわたる東西棟2棟の中心的建物や西北部から、南北棟の要素をもつ建物1棟などがある。11次調査の同区画内からは、掘立柱建物SB-30～37などを検出している。このうちSB-33、34以外は柵列SA-1・3と建物方向が共通するものである。柱穴はSB-30の柱掘り方が他のものと異なり、方形（1辺1m）で深くなる。区画外建物との関係では、SB-2・3と柵列SA-1・3を含め前述外の区画内建物と方向性が共通している。なお、SB-3に対してSB-1が先行する。建物規模では、SB-31とSB-2・3が梁行、桁行含め同一尺度の要素があり注目される。出土遺物では、11次調査地でSB-30の柱掘り方より7世紀前半代の蓋坏が出土している。今後において、1次調査検出遺構との関係やその時期を含め検討を要すが以然として柵、溝などの区画遺構、区画内建物の確認など多くの課題がある。

（西尾幸則・池田学）

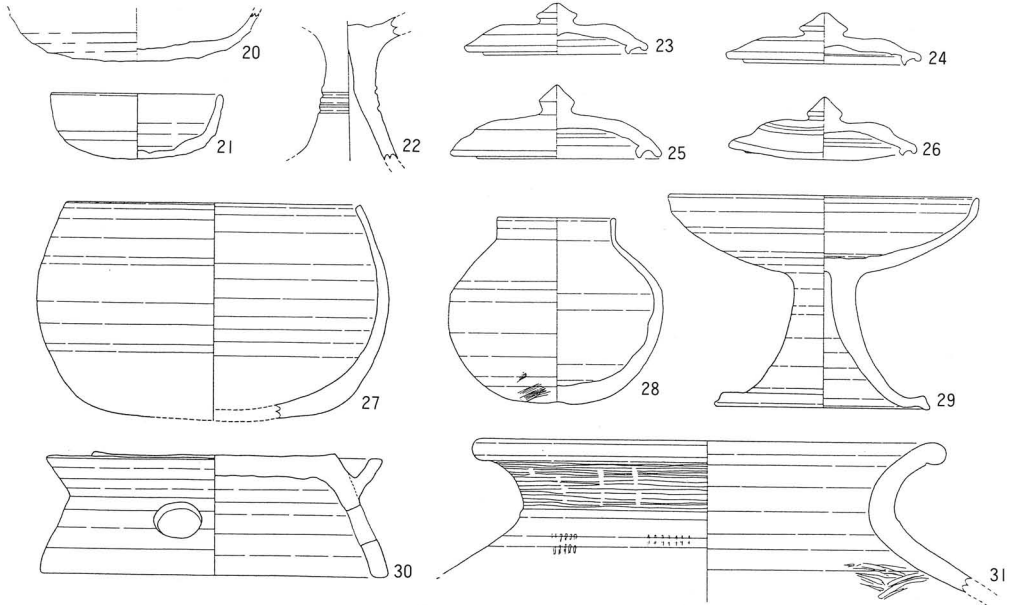


図11 久米高畑遺跡1次・11次検出遺構（中央北部方形区画地）

図12 官衙関係遺跡出土須恵器類

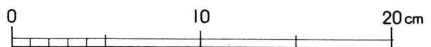


久米高畑1次(8)、久米高畑12次(1, 2)、久米高畑11次(3~7)、久米高畑7次(9)、
久米高畑10次(10~15)、久米高畑20次(16~19)



正殿の遺構(20)、南面回廊状遺構付随 SD-8(21)、SD-8

下層(2)北面回廊状遺構付随 SD-6 一括(23~31)



付編 松山市埋蔵文化財関係資料

例 言

1. 本編は、松山市教育委員会文化教育課・松山市立埋蔵文化財センターが実施した埋蔵文化財確認調査資料である。
 2. 今回は昭和63年度（申請番号120号～148号）、平成元年度（申請番号1号～188号）、平成2年度（申請番号1号～71号、平成2年12月末日までに申請分）の資料を取り扱う。
なお、昭和63年度以前の資料については、「松山市文化財調査年報Ⅰ（昭和60～61年度）」「同年報Ⅱ（昭和62～63年度）」を参照されたい。
 3. 資料作成（一覧表及び付録図）は、丹下道一・相原浩二・武田和高・水野勝弘・相良浩志・大廻誠が行った。
 4. 表中番号は、埋蔵文化財確認願いの申請番号に順ずるものである。また、地図1上には63年度を■印、平成元年度を●印とした。欠番は申請取り下げ等による。
 5. 付録図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図三津浜・松山北部・郡中・松山南部を使用した。
- ◇参考文献 松山市教育委員会「松山市文化財調査年報Ⅱ（昭和62～63年度）」平成元年3月発行。

昭和63年度確認調査一覧

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
120	下伊台町1045-15	70	145.0	私	試			
121	北齊院町250-2	981	8.7	私	試			
122	来住町913	656	37.5	私	試			久米高畑9次
124	鷹子町乙450	2,165	(200)	私				
125	鷹子町163-1	447	46.5	私	試	包、溝	須恵	土用干遺跡
126	南久米町182-1	454	37.2	私	試			
127	南江戸5丁目1544-1外	501	25.0	私	試	ビット	須恵	辻遺跡2次A区
129	山越3丁目15-15	4,632	20.1	私	試			
130	南江戸5丁目774-4	223	12.1	私	立			
131	東野5丁目719-6, 711-5	185	55.5	私	試	包		
132	来住町568-1, 574-1外	552	40.2	私	試			来住廃寺8次
133	権現町779-1	590	26.0	私	試			
134	天山町6-1, 6-5, 6-6	1,216	24.3	私	試	包,土壇,ビット	土師, 須恵	天山川附遺跡
135	谷町甲232-1, 231-11	1,112	11.2	私	試	包	土師, 須恵	
136	北久米町517-7	476	31.5	私	試	包	土師, 須恵	
137	朝美2丁目1200-4外	387	17.0	公	試	包, ビット	土師, 須恵	
138	東野5丁目711-9	840	56.0	私	試			
139	北井門町289-1, 291外	483		私				
140	太山寺甲474-3	251	3.1	私	試	包	縄文, 土師	大湖2次
141	道後緑台1324-1	778	35.0	私	試		須恵	
142	福音寺町4929-2	1,541	29.1	私	立	包, ビット	須恵	筋違H遺跡
143	辻町95-3	92	14.5	私	立			
144	来住町864	1,454	39.0	私	試	包,土壇,ビット	弥生,土師,須恵	
145	鷹子町33-6, -7	199	45.0	私	立			
146	鷹子町186-2	396	47.3	私	試	ビット, 溝	弥生	

〔注〕 ①面積 調査対象面積。小数点以下切捨て。②標高 () 調査区内平均値。
③調査目的 公一施主公共団体、私一施主一般。④調査方法 立一立会い、試一試掘調査、空白は未調査等

平成元年度確認調査一覧

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
1	小坂4丁目413-3, 414-5	191	25.2	私	立			
2	久米窪田330-3	429	48.8	私	試		土師、須恵	
3	東野4丁目569-3, 570-5	232	58.6	私	試			
4	南江戸5丁目1557-1	84	17.5	私	試		弥、陶磁器	
5	来住町909	138	(36.5)	公	試			久米高畑18次
6	北斎院	660	8.5	私	試	包、溝	弥、土師、須恵	朝本遺跡
7	今在家94-1	1,074	31.7	私	試		弥、須恵	
8	愛光町383-2	162	14.1	私	試		土師、石器	
9	小坂5丁目336-3, 338-3	1,208	23.0	私	試	包、土壌、ピット	弥、須恵	西天山遺跡
10	福音寺町720-3	266	23.8	私	試			
11	今在家293-3	354	31.0	私	試	包、溝	弥、土師、須恵	樋ノ向遺跡
12	平井町1457-2	314	67.1	私	立			
13	今在家67-4	372	32.0	私	立			
14	山越1-268-1	367	17.8	私	試	包、溝	弥	山越遺跡3次調査地
15	道後緑台9-29	700	40.8	私	試	包、土壌	弥、須恵、瓦	
16	南久米3-1, 2, 24-9	8,867	51.5	私	試			
17	道後北代1271-3	764	30.7	私	試		土師、須恵	
18	西石井町240-1, 240-2	964	20.1	私	試	包、ピット	弥、土師、須恵	
19	文京町4-2, 10, 清水町2-4-13	2,300	25.5	私	試	包、ピット	弥、須恵	松山大学構内遺跡2次調査地
20	山越1丁目588-1, 2, 3, 6	739	19.1	私	試			申請取り下げ
21	福音寺町455-1, 456	1,546	27.8	私	試	包、住居址、溝		筋違G遺跡
22	樽味4丁目178-1	480						申請取り下げ
23	南久米町344-6, 8	160	36.9	私	試			申請取り下げ
24	恵原町乙4, 5, 12, 13, 15, 16, 17, 18, 19	3,478	(85.0)	私	試			
25	南久米町195-1, 2	387	37.0	私	試	包、土壌、ピット	土師	南久米北野遺跡2次
26	鷹ノ子町180-1	821	48.8	私	試		陶磁	
27	来住町867	533	38.4	私	試	包、土壌、溝、ピット	弥、土師	久米高畑15次
28	枝松5丁目136-1	1,350						申請取り下げ
29	星岡町597, 601-1, 3, 4	912	27.5	私	試	包、土壌、溝、ピット	土師、須恵	星岡登立遺跡
30	南久米町乙24-50, 52, 54, 55, 125	514	48.9	私	立			
31	来住町906	333	37.4	私	試	土壌、ピット	弥	久米高畑14次
32	窪田町1167-3, 1168-3, 1169-3, 1170-1	770	41.7	私	立			
33	小坂5丁目328 他10筆	759	22.0	公	立			小坂5丁目遺跡
34	枝松5丁目	450	25.2	公	立			
35	南江戸4丁目1095, 1096	1,801	12.2	私	試	包、土壌	土師	園目2次
36	福音寺町429-1	462	29.4	私	試	土壌、溝、ピット	弥、土師、須恵	筋違I遺跡
37	北斎院町	817	8.0	公	×			
38	北久米町901-1	1,060	29.0	私	試		土師、須恵、陶磁	
39	松前町5丁目1-6	517	20.3	公	×			
40	食場町乙102-24	221	140.0	公	試			
41	上野町甲854-1	1,615	48.5	公	立			
42	高浜町4丁目1503-2	186	3.0	公	×			
43	北斎院町608	311	10.6	公	×			
44	来住町1319-4	225	33.5	公	×			
45	辰巳町3181-2	240	7.1	公	×			
46	谷町260-3	248	15.4	公	×			
47	北斎院町403-1	192	8.4	公	立	包、ピット	土師、須恵	
48	安城寺町341	536	9.5	公	×			
49	平井町2642	500	67.2	公	立			
50	注町221-9	209	14.4	私	立			
51	東石井町303-3	244	21.5	私	立			
52	来住町534-1	774	40.0	私	試	包、土壌、溝、ピット	弥、土師、須恵	来住町遺跡3次調査地
53	土居田82-1 他18筆	24,287	14.5	公	×			
54	来住町603-9	341	(41.0)	私	試	包、溝、ピット	土師、須恵	
55	南久米町438-2	231	35.0	私	立	包、溝、ピット	弥、土師、須恵	沖台遺跡B区
56	枝松3丁目310-1	348	33.5	私	試	包、土壌、ピット	弥、土師	枝松遺跡3次
57	南久米町438-1	343	35.0	私	立	包	土師	沖台遺跡A区

No	所在地	面積(㎡)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
58	北斎院町973-1, 973-2	596	7.8	私	試			
59	松末2丁目47-4	482のうち 162	27.5	私	立			
60	南久米町686-1, 2, 9	901	40.0	私	試			
61	久米窪田町861, 862	1,223	46.3	私	立	包、溝	須恵	久米窪田森Ⅱ遺跡
62	平井町2187-3	370	60.2	私	立			
63	南久米町373-1, 5	1,584	38.1	私	試	土塋、溝、ピット		
64	小坂4丁目282-5	95	25.5	私	立			
65	生石町北吉田弁天山	6	129.4	私	立			
66	桑原4丁目624-1	200	38.3	私	試			
67	祝谷東町乙656-12, 13	191	64.5	私	試		弥	
68	南土居町107-3	413	40.0	私	立	包、土塋、ピット	弥、須恵	
69	小坂4丁目285-1	412	25.5	私	立		須恵	
70	来住町595-1, 3	328	40.5	私	○			寺域調査
71	南江戸5丁目1538-1, 3, 4, 5	596	25.0	私	試			辻遺跡2次調査
72	南梅本町425-1 他7筆	2,000	83.5	公	立		石器	
73	別府町223-5	278	7.1	私	立			
74	北梅本町甲3271-3	231	75.2	私	立			
75	久米窪田町627-1	463	45.0	私	立			
76	南梅本町280-3	367	95.0	私	立			
77	朝美1丁目1383	390	(31.0)	私	試			
78	谷町甲325-1, 326-1	996	19.0	私	試	包、ピット	弥、土師、須恵	座坂坂遺跡
79	鷹ノ子町648-1, 649-3	498	46.5	私	試	包、土塋、溝、ピット	弥、土師、須恵	
80	南久米町727	848のうち 69	38.4	私	試	包、土塋、溝、ピット	弥、土師、須恵、石器	久米高畑16次(精舎2次)
81	南久米町723	4,905	38.4	私	試	溝、ピット	弥、土師	久米高畑17次
82	桑原7丁目6-1	361	37.7	私	試	溝		
83	衣山5丁目1567-12, 1568-12	662	19.5	私	立			
84	南久米町578-3 他6筆	2,356	(34.0)	私	試		土師	
85	祝谷2丁目298	399	46.0	私	立			
86	久米窪田町475-1	1,179	44.3	私	試			
87	鷹ノ子町582-2	331	49.0	私	試	包、住居址、溝、ピット	弥、須恵	鷹ノ子新畑遺跡
88	姫原1丁目230-2	472	22.5	私	試		須恵	
89	山西町159-1, 2, 3	529	6.5	私	試		土師	
90	道後鷲谷乙266, 427	1,629	55.8	私	試	包、土塋、溝、ピット	土師	
91	高井町560-1他64筆、久米窪田39他35筆	20,702	47.0	私	試		土師、須恵	
92	平井町甲2151-3	470	64.7	私	試			
93	来住町1156-5, 10	340	37.5	私	試	包、ピット		久米高畑20次
94	朝生田町432	375	17.9	私	試		土師、須恵、瓦、陶磁	
95	船ヶ谷町乙14-1, 他2筆	520	(50.0)	私	試	古墳	須恵	三ツ石古墳
96	南土居町340-3	427	37.8	私	試			中ノ子1遺跡
97	福音寺町570-1	50	24.0	私	立		土師	
98	平井町甲1278-2	382	74.0	私	試			
99	小坂町422-2, 7	708	25.7	私	試	包、住居址、土塋、ピット	弥	釜ノ口遺跡7次調査地
100	久米窪田町859-1, 860-1	1,330	46.8	私	試	包、土塋、溝、ピット	土師、須恵	本格待ち
101	鷹ノ子町85	444	44.0	私	立			
102	桑原4丁目339-2	559	38.5	私	立			
103	桑原4丁目639-1, 3	322	38.9	私	立			
104	星岡町318-2, 他4筆	531	24.8	私	立			
105	山越1丁目301-12	248	17.9	私	立			
106	久米窪田町656-1	1,457	46.1	私	章			
107	南久米町635-2, 4	319	40.2	私	試	包、ピット	弥	南久米寺院遺跡
108	今在家225-1, 227-1	682	31.0	私	試	包	弥	
109	東野5丁目甲832-1, 甲833-1	224	56.8	私	立		須恵、石器	
110	南久米町568-15	115	32.5	私	立			
111	御幸2丁目9-5	730						申請取り下げ
112	鷹ノ子町874-3	362	43.6	私	立			
113	小坂5丁目345-1	561	21.7	私	立			
114	別府町396-3	160	4.8	私	立			

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
115	北梅本町、上伊台町	38,000	(260)	公				包蔵地外
116	今在家町68-4	198	32.2	私	立	包		
117	立花6丁目232-7	180	20.9	私	試		土師	
118	平井町甲2384, 2385	1,589	60.3	私	試			
119	東大栗町651	3,600	112.0	公				包蔵地外
120	山西町54-4, 5	92	(35.0)	私	立			
121	桑原4丁目647-11	159	38.0	私	試	包	土師	
122	南江戸3丁目813-1	3,246	13.3	私	試			古照G4次
123	船ヶ谷町1-1	2,672	(10.0)	公	×			
124	久谷76号線, 三坂松山線	370	(96.6)	公	×			地図外
125	北久米町526~547 南久米町498~506	845	32.0	公	×			
126	市道久米25号線	3,240	37.4	公	×			
127	道後喜多町1018-6	23	33.8	公	立			
128	平井町937-2	396	81.4	私	試	包、ピット	須恵、土師	上刈屋遺跡
129	松末2丁目13-2, 5	473	27.7	私	試			
130	南久米町533-1, 他5筆	4,563	30.0	私	試	包、住居址、土贖	弥、土師、須恵	
131	星岡町596	763	26.4	私	試		土師	
132	南久米町750, 751, 752	901	34.5	私	試	土贖、ピット	須恵、土師	
133	来住町891-1	270	37.5	私	試			久米高畑19次A区
134	来住町891-2, 3	253	37.5	私	試			久米高畑19次B区
135	鷹ノ子町426-5, 6	266	57.2	私	試			
136	朝生田町449, 449-3	451	19.0	私	立			
137	道後今市998-1, -4	267	33.5	私	試			
138	天山町363-1	252	32.1	私	試			
139	道後北代1286-4	175	32.0	私	試			
140	津吉町	1,240	72.0	公				地図外、申請取り下げ
141	祝谷5丁目745-1, 253-2	578	44.5	私	試			祝谷本村遺跡
142	小坂2丁目203-1, 204-5	687	29.5	私	試			
143	谷町219-6	153	12.5	私	試			
144	桑原2丁目971	1,111	38.0	私	試			
145	来住町1139-1, 1140-1, 1141-1	410	35.5	私	×			
146	御幸町2丁目259-1	297	23.5	私	試			
147	来住町557	103	39.9	私	試			本格調査
148	谷町甲685-2, 5 689-3	637	21.5	私	試			
149	福角町甲1239-1	998	26.0	私	立			
150	久万ノ台乙169-1, 他30筆	14,734	14.0	私	立			
151	祝谷5丁目753-2	375		私	立			No141と合併、祝谷本村遺跡
152	南久米町325-1, 326, 327-1	2,385	(37.5)	私	試	ピット、溝	弥、石蔵	
153	山西町833-2 他	12,217	2.2	私	試		弥、土師	宮前川三本柳遺跡
154	山西町901-1, 902-1	565						申請取り下げ
155	道後一万775-1, 7, 8	380		私	立			道後今市7次
156	堀之内		20.0	公	立			
157	朝生田町			公	立			
158	小坂5丁目327-1	613	21.6	私	試		弥、須恵	
159	水尻町	1,250	55.0	公	立			
160	鷹ノ子町173~263-1	74	48.0	公	立			
161	北梅本町甲3280-11	216	75.2	私	立			
162	鷹ノ子町628-1	1,985						申請取り下げ
163	南久米町740, 741, 742, 来住町863-2	1,227	39.0	私	立			
164	山西町903-1	383	2.3	私	試			
165	衣山5丁目520, 他6筆	2,302		私	立			
166	桑原1丁目777-1	501	35.0	私	立			
167	福音寺町688-1	1,032	29.3	私	試			
168	南久米町609, 610, 611, 612, 613, 614	1,202	38.8	私	立			
169	今在家町56-1, 57-1	199	32.0	私	立			
170	福角町乙493-1, 乙494, 権現町乙235-1	428	54.0	私	試			
171	立花6丁目328-6	454		私	立			

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
172	来住町912	400	37.5	私	立			
173	久万ノ台乙346-1, 1741-2	149	(17.0)	公	立			
174	樽味町4丁目202-1, 203	2,234						申請取り下げ
175	来住町877	196	39.0	私	立			
176	桑原1丁目800-2	523	36.2	私	試			申請取り下げ
177								申請取り下げ
178	久米窪田町872-1	299	46.0	私	立			
179	御幸2丁目259-1	432						申請取り下げ
180	南江戸4丁目	359	12.0	公	立			闕日1次
181	鷹ノ子町110-2, 4	580	45.0	私	立			
182	久米窪田町118-2	532	44.5	私	立			
183	辻町545-1	1,187	15.0	私	試			
184	南久米町696-1	151	39.9	私	立			
185	南江戸4丁目1-1	13,000	13.0	公	立			古照遺跡第6次
186	来住町484-1, 3	801のうち 324	40.9	私	試			
187	山西町82-1, 7, 11, 12, 14	701	5.5	私	試			
188	衣山3丁目468	337	33.0	私	立			

平成2年度確認調査一覧

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
1	桑原1丁目988-5	156	38.5	私	試			
2	山越1丁目539-2	190	19.3	私	試			
3	南久米町419-10, 11	586	35.0	私	立			
4	桑原7丁目7-6, 6-4	363のうち 159	38.0	私	試		弥	
5	桑原4丁目11-1	367	35.0	私	試			
6	祝谷東町乙829-25, 乙816-4	709	(170.5)	公	立			踏査
7	祝谷699-1	64	34.0	私	立			
8	朝生田町222-2	331のうち 130	20.2	私	試			
9				私	立			
10				私	立			
11	桑原4丁目427-3, 430-4	1,194	36.0	私	試			
12	桑原4丁目410-1, 2	568のうち 168	39.6	私	試	包、溝	弥、土師、須恵	経石山古墳1次調査
13	鷹ノ子町195-1	287のうち 140	48.5	私	立			
14	久万ノ台乙170 他	52,540		私	立			本格待ち
15	南江戸2丁目634-1, 8	570のうち 120	14.1	私	立			
16	南江戸924-1	102のうち 42		私	立			
17	道後今市1051-1, 1054-5	404	31.2	私	試			
18	祝谷6丁目1277 他4筆	3,742のうち 1,400	(70.0)	私	試	ピット	弥、石包丁	祝谷アイリ遺跡
19	松末2丁目125番地14	202	24.9	私	試			
20	道後樋又1219-8	602のうち 275	30.2	私	試	溝	縄文	道後樋又遺跡2次
21	朝美2丁目114-1, 他7筆	1,360	24.0	私	試	包、ピット	縄文、弥、土師	朝美澤遺跡2次
22	中村2丁目118-1	331	27.0	私	立			
23				私	立			
24	清水2丁目21-5, 7	125	24.0	私	試			
25	辻町39-1	655	13.6	私	試			本格
26								申請取り下げ
27				私	立			
28	山越2丁目34	660のうち 250	16.0	私	試			
29	石風呂1079	707	35.0	私	立			
30	山越3丁目	40,000		公	踏			本格待ち
31	久米窪田町897-3	199	44.7	私	試			
32				私	立			
33	来住町798-1, 他9筆	3,174	36.8	私	試	包、ピット	弥、土師、須恵	本格待ち
34	道後今市1065-5	319のうち 142	32.0	私	試	溝	弥、土師、須恵	
35	来住町603-2	515		私	試	ピット	須恵	申請取り下げ

No	所在地	面積(m ²)	標高(m)	調査目的	調査方法	包含・遺構	遺物	備考
36	鷹ノ子町633-6, 7	136	48.5	私	立			
37	南江戸5丁目, 6丁目	41,500		公	踏			本格待ち
38	東石井町乙39-1, 50-1, 他	1,600		公	試	古墳		東山古墳4次
39	平田町乙393-1	210		公	立			
40	来住町845, 844, 843	1,864	38.3	私	立			本格待ち
41	来住町517-1, 524-2	808のうち 491		私	試			申請取り下げ
42	平井町甲442-3 他4筆	1,376	66.3 67.7	私	試			
43	太山寺町489-2他6筆,安城寺町1419他3筆	1,600のうち 1,300		公	立			
44	東垣生町762 他15筆	1,466	3.7	公	立			
45	久米窪田町856-1	903のうち 150	45.0	私				
46	衣山3丁目459-4, 5	506のうち 50	25.5	私	試			
47	南梅本町乙62-1 他6筆	845	96.0	私	試			
48	小坂5丁目312-3	1,064	23.6	私	試	溝	須恵	本格待ち
49	久米窪田町675-3 他21筆	2,100	43.0	公				
50	南久米町567-2, 4	657	32.7	私	試		弥、土師	
51	南久米町489	1,352	33.0	私	立			
52	鷹ノ子町50	656	43.1	私	立			
53	水泥町(市道小野20号線)	1,272		公	立			
54	太山寺町(市道和气104号線)	2,400		公	立			
55	北斎院町294-1, 2, 314	660	10.5	公				
56	南吉田町1877-2	320	4.8	公	立			
57	来住町603-2, 6	339	40.5	私	立			
58	畑寺町甲440-1他5筆,畑寺3丁目甲439他14筆	1,820	50.0	公				
59	南江戸4丁目1-1	2,850		公				下水処理場
60	朝生田町 他	5,242		公				
61	南梅本町乙67, 乙69-3	989のうち 225	96.0	私	試			
62	今在家41-82,来住町1301~1432	2,017	32.2	公	試			今在家遺跡
63	桑原4丁目14-1	698のうち 361	34.6	私	試			
64	北久米町561-1	638	31.0	私	試			
65	小坂5丁目341-4,5, 342-3	1,612	22.2	私	試	溝	弥	本格待ち
66	吉藤5丁目乙2515番地 他60筆	94,919						包蔵地外
67	文京町4-2	372		私	試			本格待ち
68	文京町4-2	622	26.6	私	試			
69	文京町4-10	1,600	25.8	私	試	包,住居址	弥,土師,須恵	本格待ち
70	水泥町548-1, 549-1	956	55.5	私	試			本格待ち
71	朝美2丁目1156-17	268	26.0	私	試			

平成元年・2年度本格調査一覧

No.	遺 跡 名	所 在 地	調査目的	時 代
143	南久米北野遺跡	南久米町411-12	緊急	古墳～平安
144	若草町遺跡	若草町8	〃	弥生中～近世
145	開遺跡	南土居町70-1	〃	古墳
146	久米高畑遺跡8次調査地	来往町568-17, 18	〃	弥生後～中世
147	南久米片廻り遺跡2次調査地	南久米町534-1	〃	縄文～古墳
148	久米高畑遺跡9次調査地	来往町913	〃	弥生(前)～奈良
149	繁成分遺跡	今在家町272-1	〃	弥生～古墳
150	久米高畑遺跡10次	南久米町782-1	〃	弥生～奈良
151	朝日谷古墳	南江戸6丁目1623・他	〃	弥生終末～古墳
152	鷹ノ子遺跡1次調査地	鷹ノ子町94番3	〃	古墳～中世
153	来往廃寺8次調査地	来往町568-1	〃	弥生～古墳
154	久米高畑遺跡11次	南久米758・来往町761他	〃	弥生～中世
155	桑原西稲葉遺跡1次調査地	桑原2丁目1他	〃	弥生～中世
156	筋違G遺跡	福音寺町455-1, 456	〃	弥生～中世
157	小坂5丁目遺跡	小坂5丁目	〃	古墳～中世
158	天山川附遺跡	天山町6-1, 5, 6	〃	古墳～近世
159	榎田遺跡	小坂5丁目, 295-1他	〃	古墳
160	久米窪田古屋敷C遺跡	久米窪田844-1他	〃	弥生中～中世
161	大測遺跡2次調査地	太山寺町甲474-3	〃	縄文～中世
162	七ノ坪遺跡	小坂2丁目471-1他	〃	奈良
163	来往町遺跡2次調査地	来往町535, 536	〃	弥生～古墳
164	筋違H遺跡	福音寺町4949-2	〃	弥生～中世
165	久米高畑遺跡12次	来往町1151-1	〃	古墳～中世
166	福音寺遺跡	福音寺町362-1他45筆	〃	弥生～中世
167	辻遺跡2次調査地	南江戸5丁目1544-1他	〃	古墳～中世
168	中村5丁目遺跡	中村5丁目193-3	〃	古墳
169	久米高畑遺跡13次調査地	来往町864	〃	弥生～中世
170	南久米北野遺跡2次	南久米町195-1, 2	〃	古墳～中世
171	道後今市遺跡6次調査地 (平形銅剣出土推定地)	道後今市1053-1	〃	古墳
172	御産所権現山遺跡	山西町1358-8他	〃	古墳
173	沖台遺跡B区	南久米町438-2	〃	古墳～中世
174	星岡登立遺跡	星岡町597他	〃	弥生後～中世
175	古照遺跡第5次調査	南江戸4丁目1-1	〃	縄文～古墳
176	西天山遺跡	小坂5丁目336-3, 338-3	〃	弥生～中世
177	久米高畑遺跡14次	来往町906	〃	弥生～中世
178	筋違I遺跡	福音寺町429-1	〃	弥生～古墳
179	鷹ノ子新畑遺跡	鷹ノ子町582-2	緊急国補	古墳
180	中ノ子I遺跡	南土居町304-3	〃	古墳～中世
181	来往廃寺9次調査地	来往町582, 583他	学術	弥生～平安
182	東山遺跡3次	山越1丁目268-1	緊急	弥生～古墳

遺 構 遺 物 等	調査面積 (㎡)	調査日数 (日)	調査後の措置	No.
掘立、須恵、宋銭	1,020	48	工事実施	143
周溝墓、住居址、日光鏡、弥、須恵	9,000	300	〃	144
竪穴、掘立	870	61	〃	145
掘立、溝、土壙、柱穴、弥、土師、須恵、石包丁	240	30	〃	146
土壙、溝、縄文	901	53	〃	147
竪穴、掘立	560	52	〃	148
土壙、集石、弥、須恵、石器	1,158	94	〃	149
周溝、掘立	1,118	31	〃	150
古墳、鏡、銅鏃、鉄鏃、須恵、鉄剣	23,000	123	〃	151
掘立、溝、土壙、柱穴、木棺墓、土師、鏡	289	25	〃	152
竪穴、須恵、石鏃	553	16	〃	153
竪穴、柵、掘立	1,904	48	〃	154
掘立、溝、流路、土壙、柱穴、弥、土師、須恵	2,300	116	〃	155
住居址、土師皿	1,546	52	〃	156
須恵、土師	759	37	〃	157
溝、土師、近世陶磁	1,217	30	〃	158
掘立、土壙、須恵	5,058	32	〃	159
溝、弥、土師、石包丁	1,035	52	〃	160
縄文、石器	251	27	〃	161
溝、土壙、須恵	848	41	〃	162
溝、土壙、井戸、須恵	1,666	71	〃	163
住居址、土壙、溝、石器	1,541	75	〃	164
溝、柵、住居址、土器	394	21	〃	165
濠、竪穴、壺棺、石器	23,238	263	〃	166
掘立、須恵、土壙	186	13	〃	167
溝、土壙、土師、須恵	350	15	〃	168
土壙、井戸、須恵	1,454	85	〃	169
土壙、井戸、須恵	387	22	〃	170
竪穴、柱穴、弥、須恵、石包丁	238	36	〃	171
石室、鉄器、須恵	87,700	302	〃	172
溝、掘立、土師	231	21	〃	173
溝、掘立、土師	113	38	〃	174
縄文～弥、須恵	652	40	〃	175
溝、柱穴、須恵、石鏃	1,208	58	〃	176
竪穴、溝、須恵	333	36	〃	177
竪穴、掘立	462	40	〃	178
竪穴、溝、須恵	45	14	〃	179
溝、掘立、土師	427	21	〃	180
石器工房址、掘立	520	44	保 存	181
須恵、土師	500	49	工事実施	182

No.	遺 跡 名	所 在 地	調査目的	時 代
183	来住町遺跡3次調査地	来住町534-1	緊急	弥生～古墳
184	山越遺跡3次調査地	山越1丁目268-1	〃	弥生～古墳
185	座 拜 坂 遺 跡	谷町甲325-1, 326-1	〃	弥生後～古墳・中世
186	松山大学構内遺跡2次調査地	文京町4-2	〃	弥生～古墳
187	久米高畑遺跡18次	来住町909	〃	古墳～中世
188	久米高畑遺跡19次	来住町891-1	緊急国補	弥生後～古墳後
189	南久米斎院遺跡	南久米町635-2他	〃	弥生前～古墳中
190	金 毘 羅 山 遺 跡	平田町824-1・2	緊急	弥生後・古墳・中世・近世
191	上 刈 屋 遺 跡	平井町937-2	緊急国補	古墳後
192	道後今市遺跡7次	道後一万775-1他	〃	弥生中～古墳
193	来住廃寺13次調査地	来住町557	〃	弥生中
194	久米高畑遺跡20次	来住町556-5他	〃	古墳～平安
195	船ヶ谷三ツ石古墳	船ヶ谷町乙14-1他	緊急	古墳
196	關 目 1 遺 跡	南江戸4丁目	〃	古墳～近世
197	關 目 2 遺 跡	南江戸4丁目10-15他	〃	中世
198	古 照 遺 跡 6 次	南江戸4丁目1-1	〃	古墳～近世
199	釜ノ口遺跡7次調査地	小坂町422-2, 422-7	〃	弥生後
200	古 照 G 遺 跡 4 次	南江戸3丁目813-1	〃	縄文～近世
201	祝 谷 本 村 遺 跡	祝谷5丁目745-1他	〃	弥生～中世
202	桑原西稲葉遺跡2次調査地	桑原2丁目971	〃	弥生
203	来住廃寺14次調査地	来住町855他	学 術	弥生中～奈良
204	経石山古墳1次調査	桑原4丁目410-1	緊急	古墳
205	今 在 家 遺 跡	今在家町71,55,70,72	〃	弥生後～古墳
206	祝 谷 ア イ リ 遺 跡	祝谷6丁目1277	〃	弥生中～古墳後
207	宮前川三本柳遺跡	山西町833-2他	〃	弥生後～中世・近世
208	東 山 遺 跡 4 次	東石井町250-1	〃	古墳中～古墳後

遺 構 遺 物 等	調査面積 (㎡)	調査日数 (日)	調査後の措置	No.
掘立、溝、須恵	774	63	工事実施	183
溝、弥	368	55	〃	184
柱穴、弥、土師	996	8	〃	185
住居址、弥、土師	2,300	70	〃	186
柱穴、須恵、瓦	138	35	〃	187
掘立、竪穴、溝、土壙、柱穴	A区 270 B区 253	66	〃	188
柱穴、弥、須恵	319	61	〃	189
墳丘、弥、竪穴	1,000	64	〃	190
古墳、須恵	396	44	〃	191
竪穴、溝、須恵、土師	380	52	〃	192
竪穴、土壙、石包丁	103	28	〃	193
掘立、溝、土壙	340	37	〃	194
周溝、須恵、土師	520	45	〃	195
掘立、土壙、溝、柱穴、瓦器、土師、石製品(縄文・弥)	922	45	〃	196
掘立、土壙、瓦器、土師、石製品	1,791	75	〃	197
水田址、土壙、河川、縄、弥、須恵、陶磁	13,000	354	〃	198
竪穴(焼失住居)、弥、石包丁、玉	708	74	〃	199
柱穴、土壙、水田遺構、掘立、石製品、木製品	869	85	〃	200
弥、土師、須恵、掘立、土壙、溝	578	55	〃	201
土壙、溝、柱穴、弥、須恵、石器、円形特殊遺構	1,110	61	〃	202
掘立、溝、柱穴、土壙、弥、須恵、瓦	1,088	150	一部保存	203
弥、土師、溝、鉄斧、鉄鏃、石斧	567	65	工事実施	204
弥、竪穴、溝、土壙、石包丁、石鏃	2,016	45	〃	205
竪穴	3,742	108	〃	206
井戸、弥、須恵	12,217	120	〃	207
古墳、須恵、土師	1,600	100	〃	208

圖 版



調査地全景（西より）



遺物出土状況



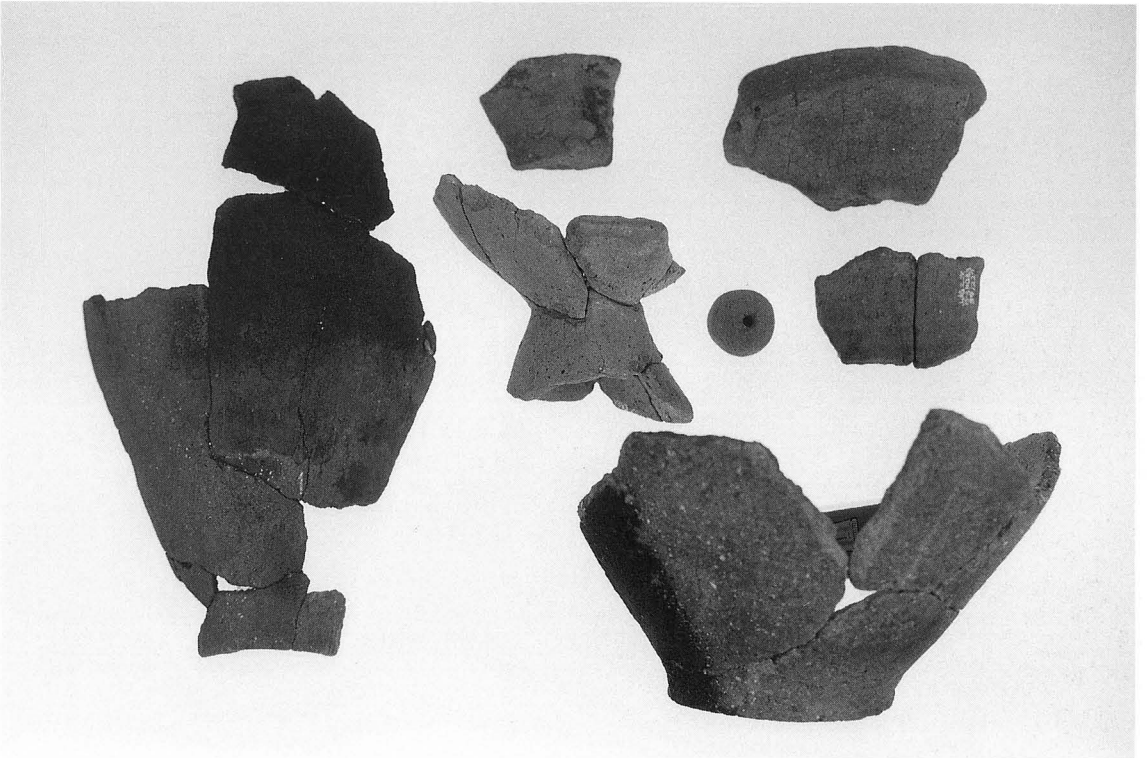
調査地全景（北より）



溝SD-2 掘出土状況



北区旧河川調査状況



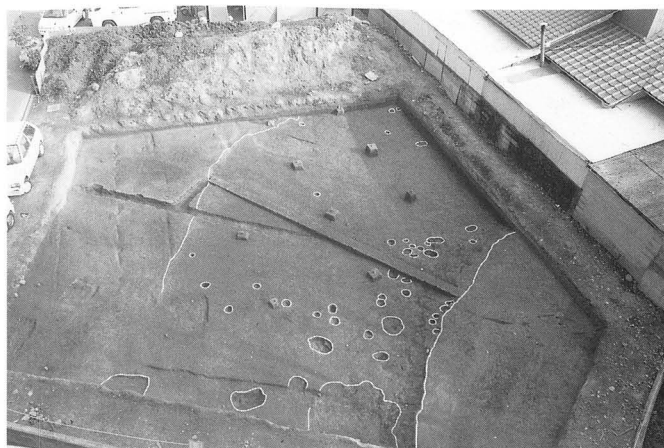
出土土器



1号墳横穴式石室



1号墳石室内遺物出土状況



周溝とピット検出状況（西方上より）



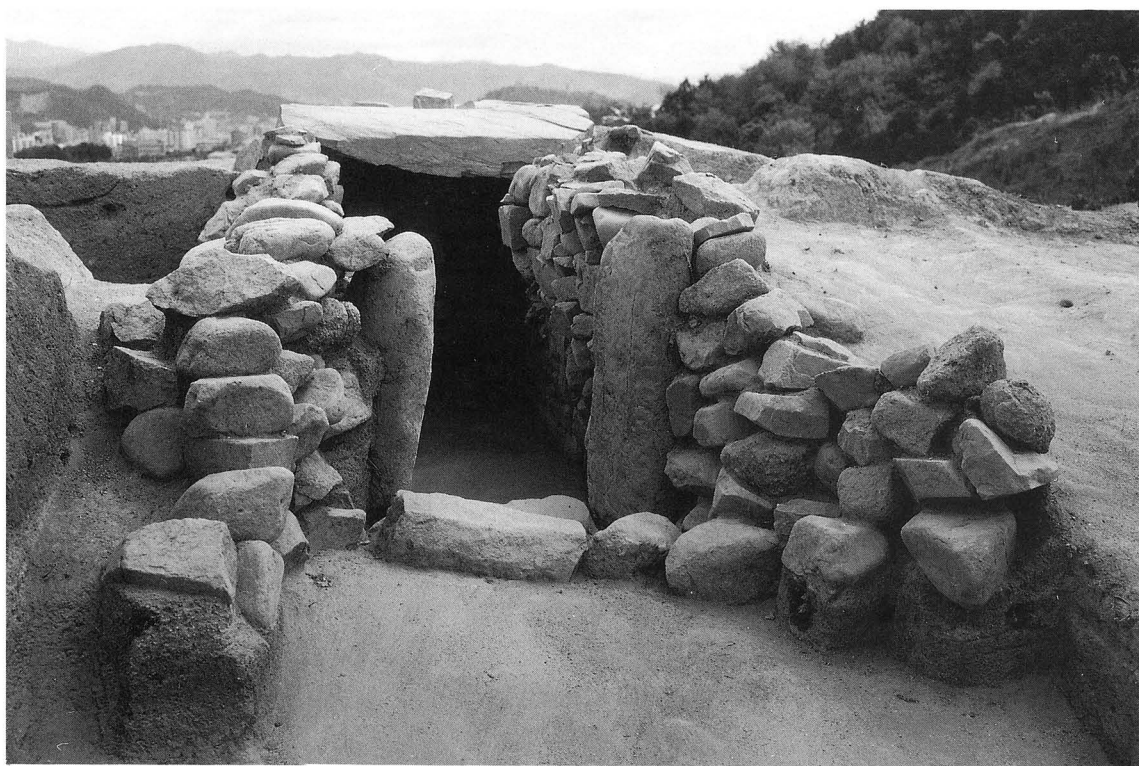
周溝とピット検出状況（北西上より）



周溝内遺物出土状況（東方より、
上部林は経石山古墳）



柵列検出状況（西方より）



1号墳横穴式石室（閉塞石撤去後，西より）



3号墳横穴式石室（南より）



1号墳出土脚付子持広口壺・蓋



1号墳出土須恵器



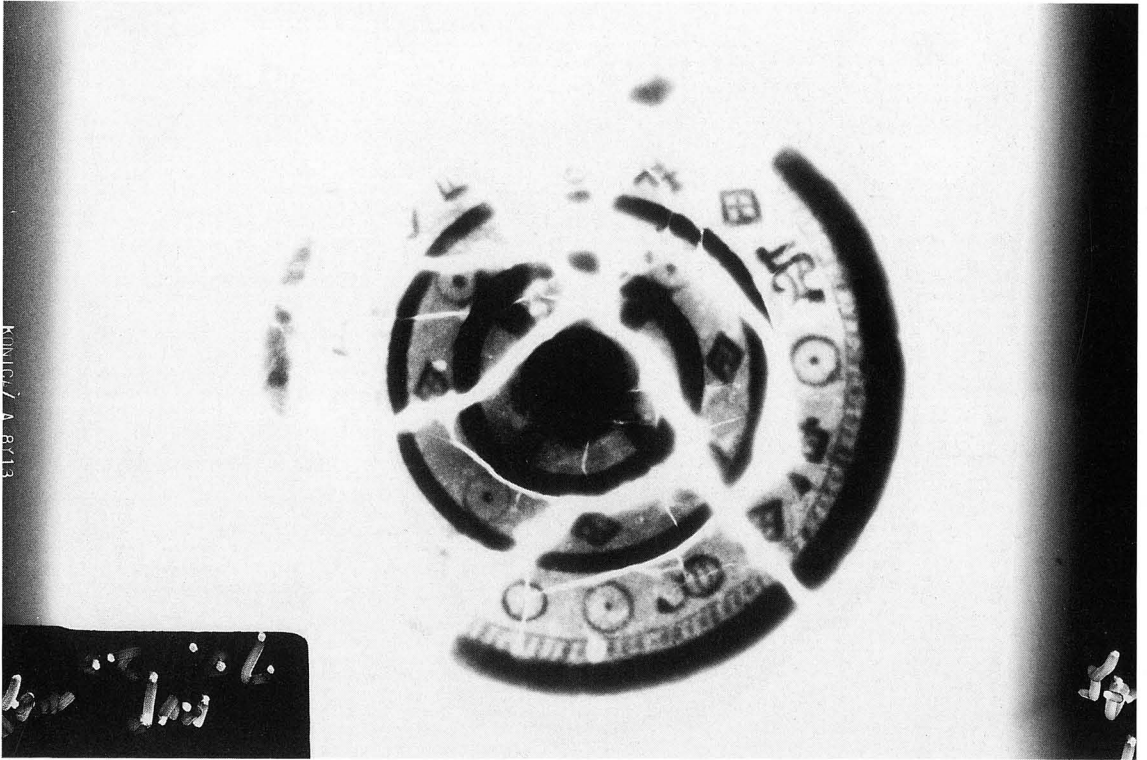
調査地西部 (南西より)



円形周溝 S D-24



壺棺群検出状況



重圈日光鏡×線写真



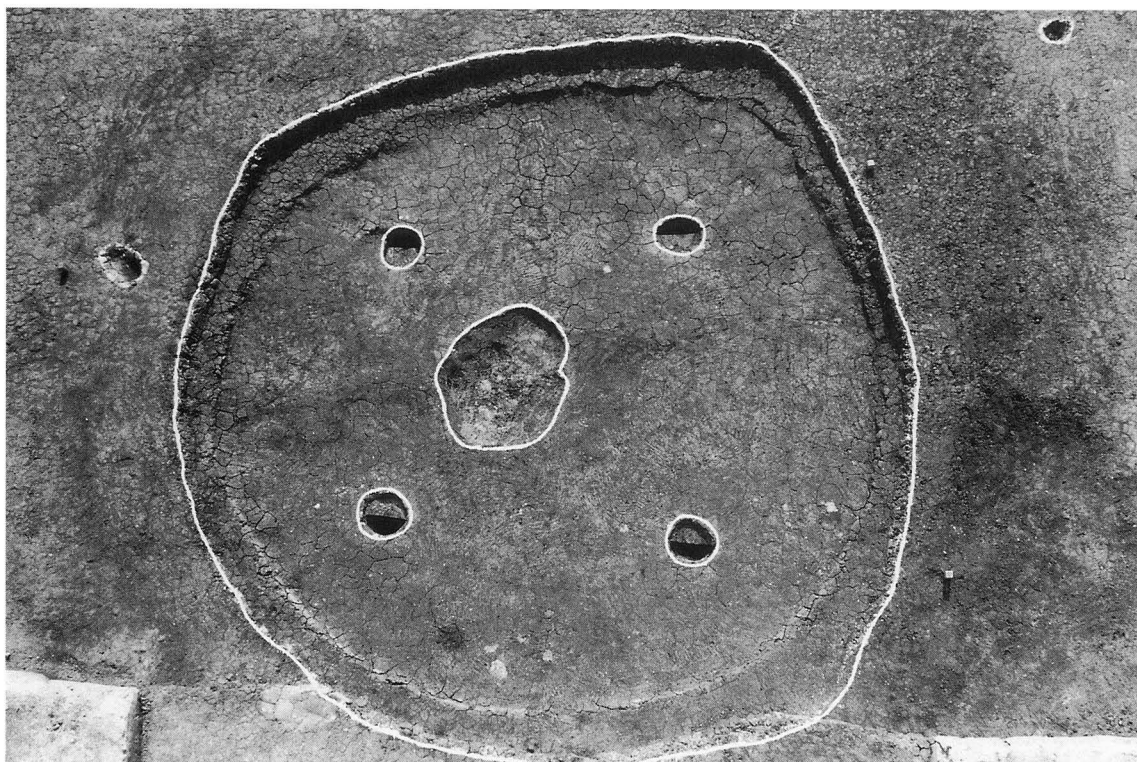
調査地全景（東より）



SD-1 土層断面（東より）



調査地全景（東より）



SB-1 完掘状況



調査地東半（南東より）



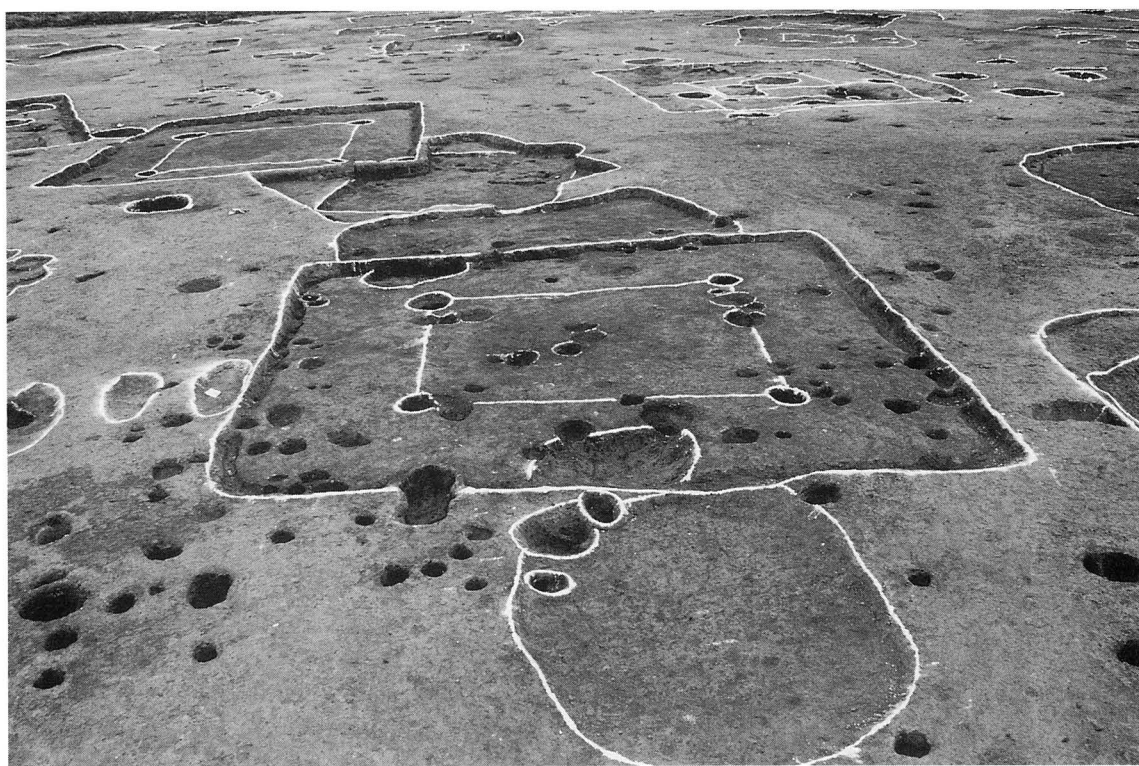
調査地西半（南東より）



掘立柱建物SB-1（手前），SB-2（奥）（東より）



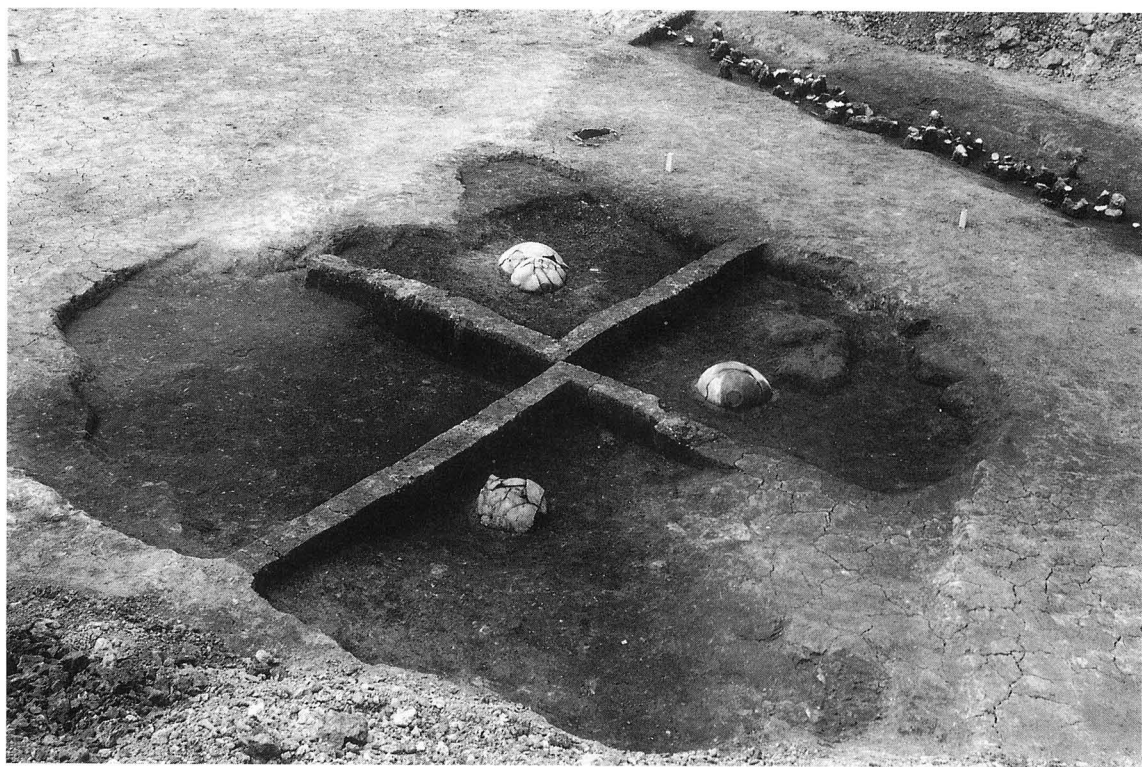
掘立柱建物SB-3（西より）



1区方形竪穴住居址群(南より)



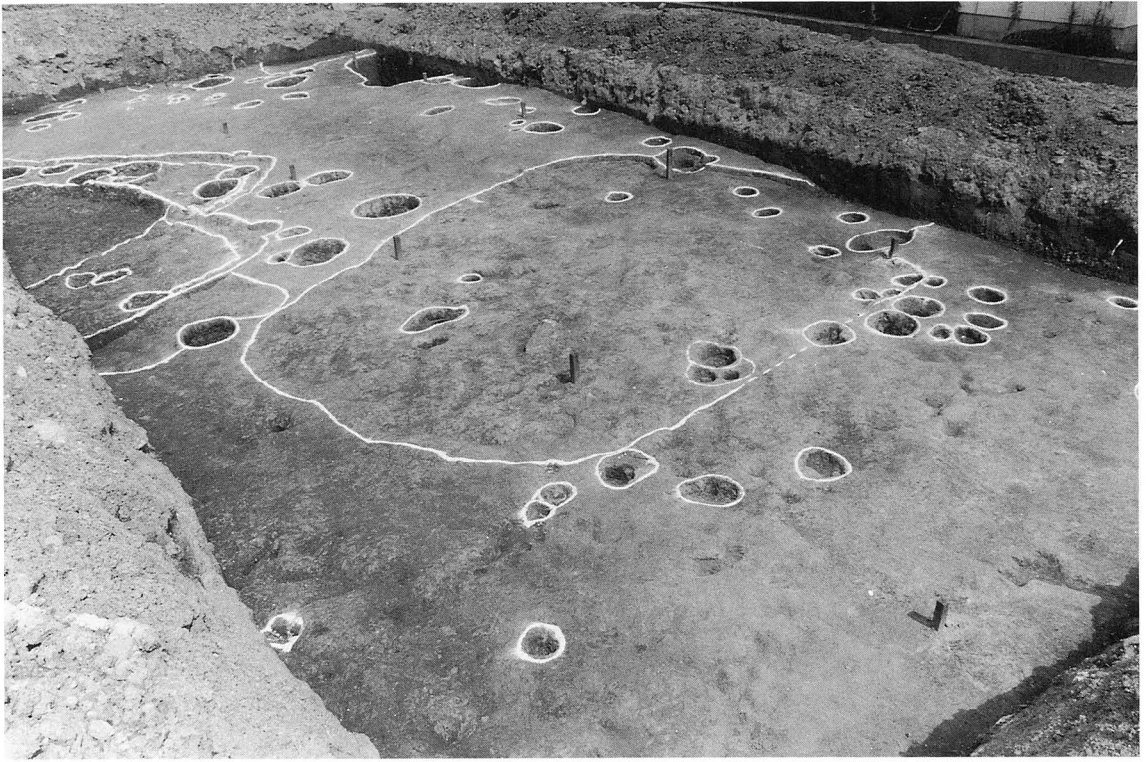
1区SK-29遺物出土状況



5区壺棺出土状況



子持勾玉出土状況



竪穴住居址 SB-2 (西より)



竪穴住居址 SB-1・3・4 (南より)



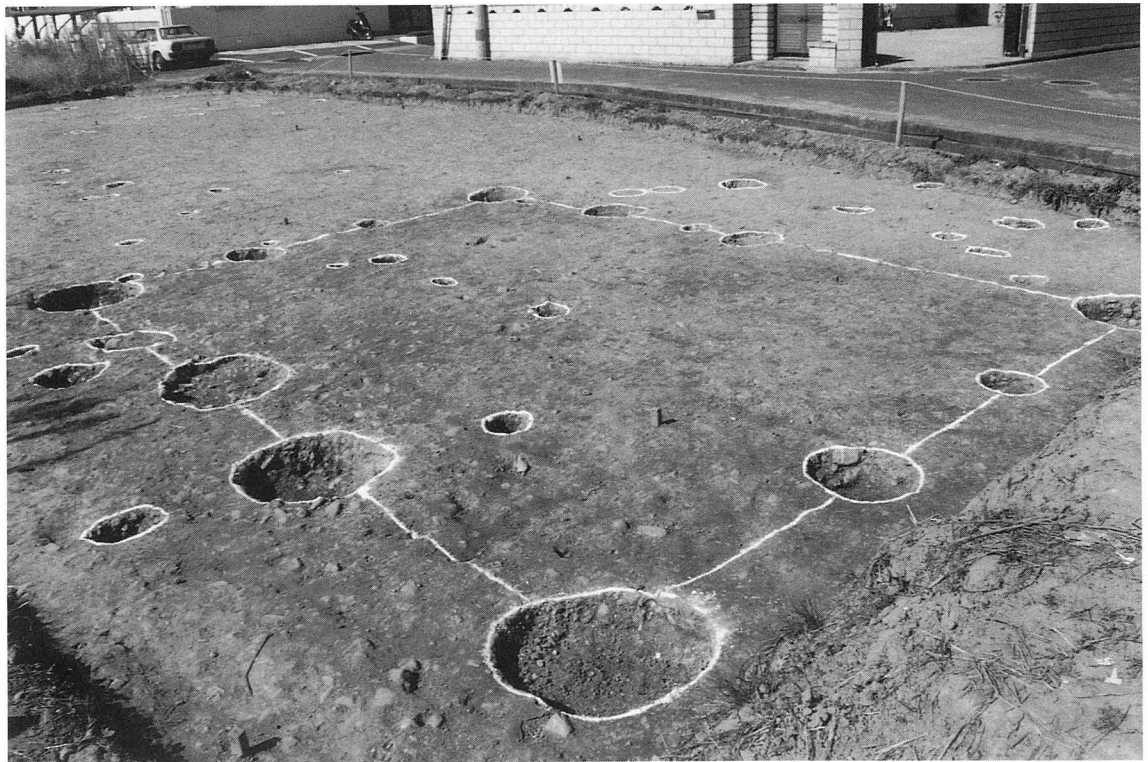
調査地北部遺構検出状況



調査地全景（東より）



調査地全景（北西より）



掘立柱建物1（北西より）



集石遺構 S X - 2 (北西より)



S K - 1 遺物出土状況 (東より)



調査地近景（南より）



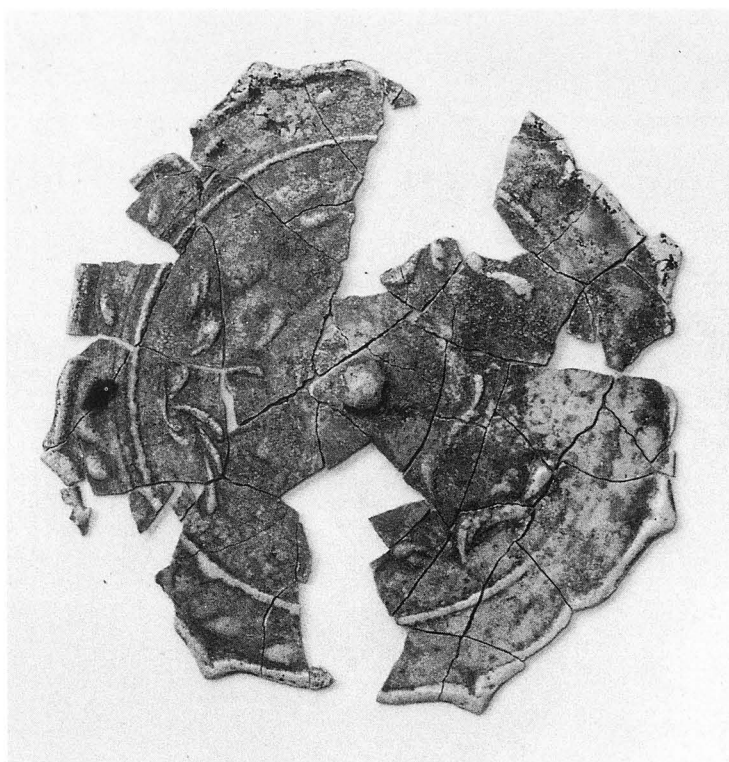
調査地近景（北より）



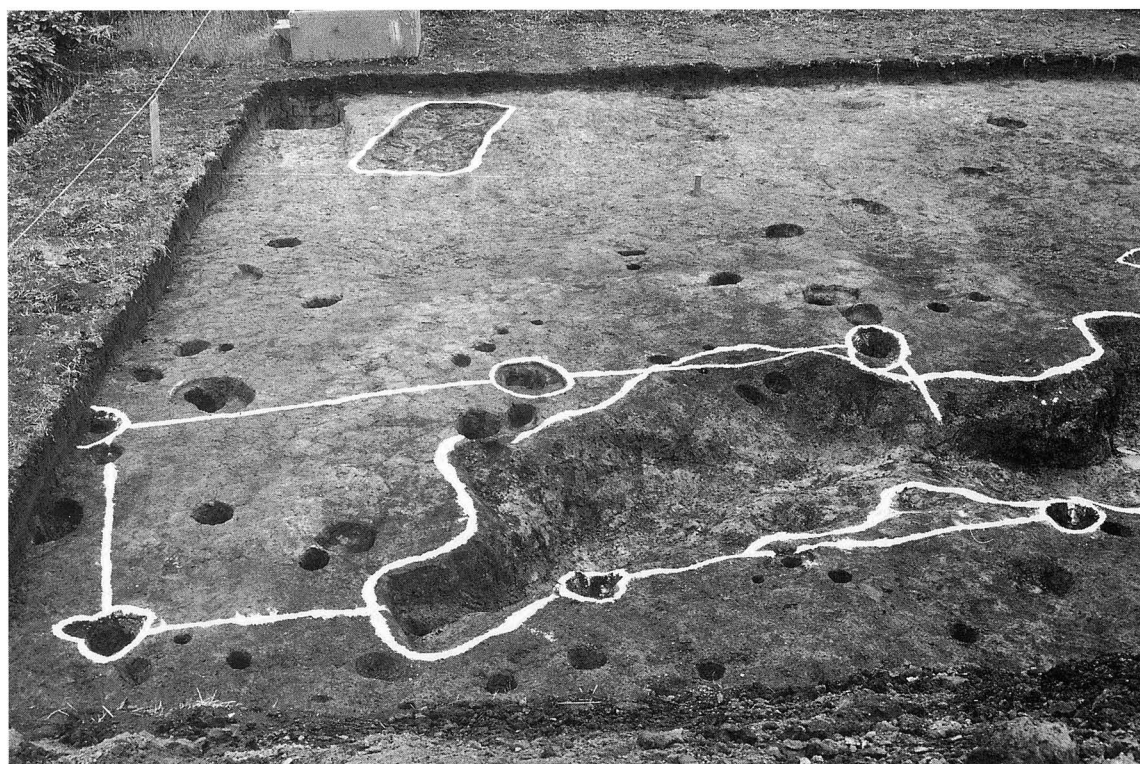
SB-1 (南より)



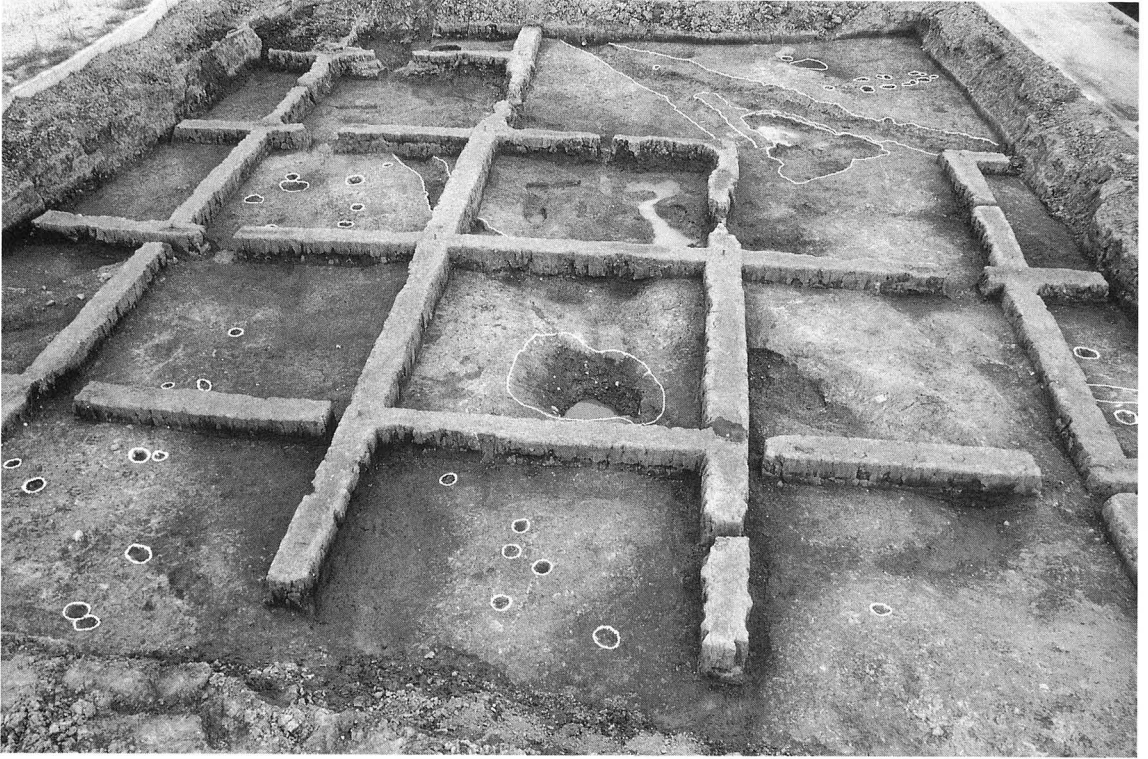
SK-2, SD-3 (北より)



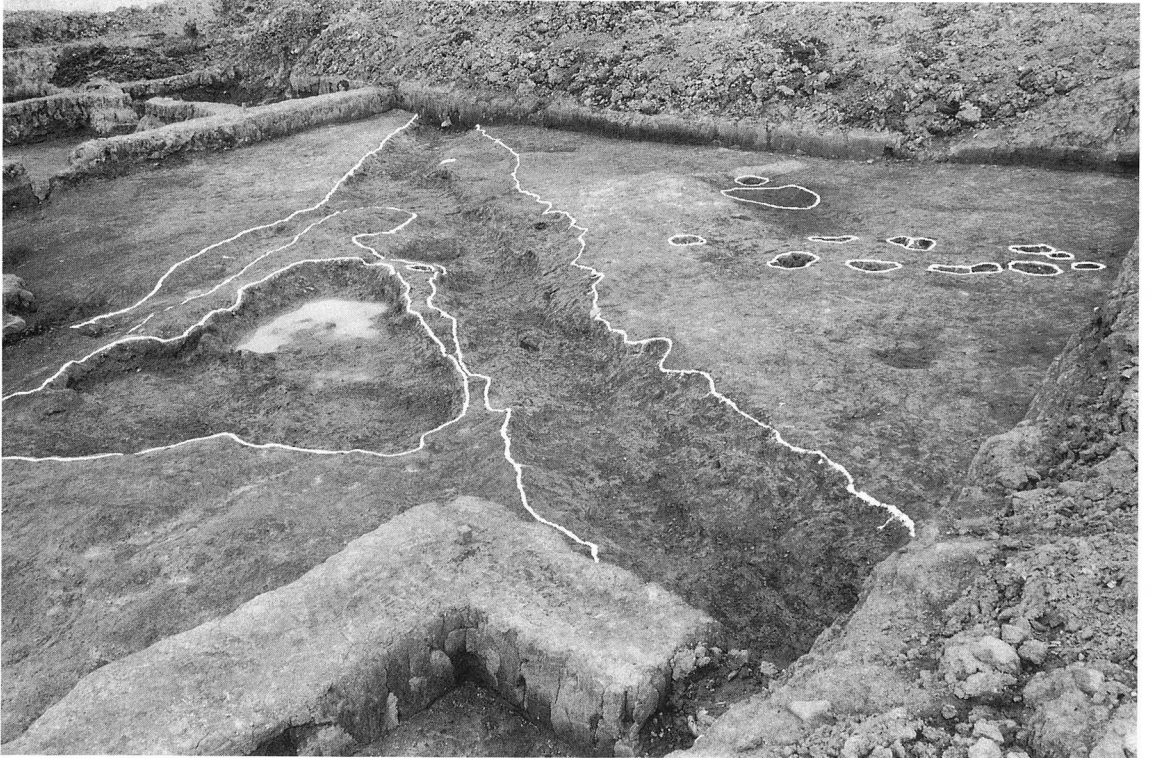
S K - 3 出土和鏡



東区完掘状況 (西より)



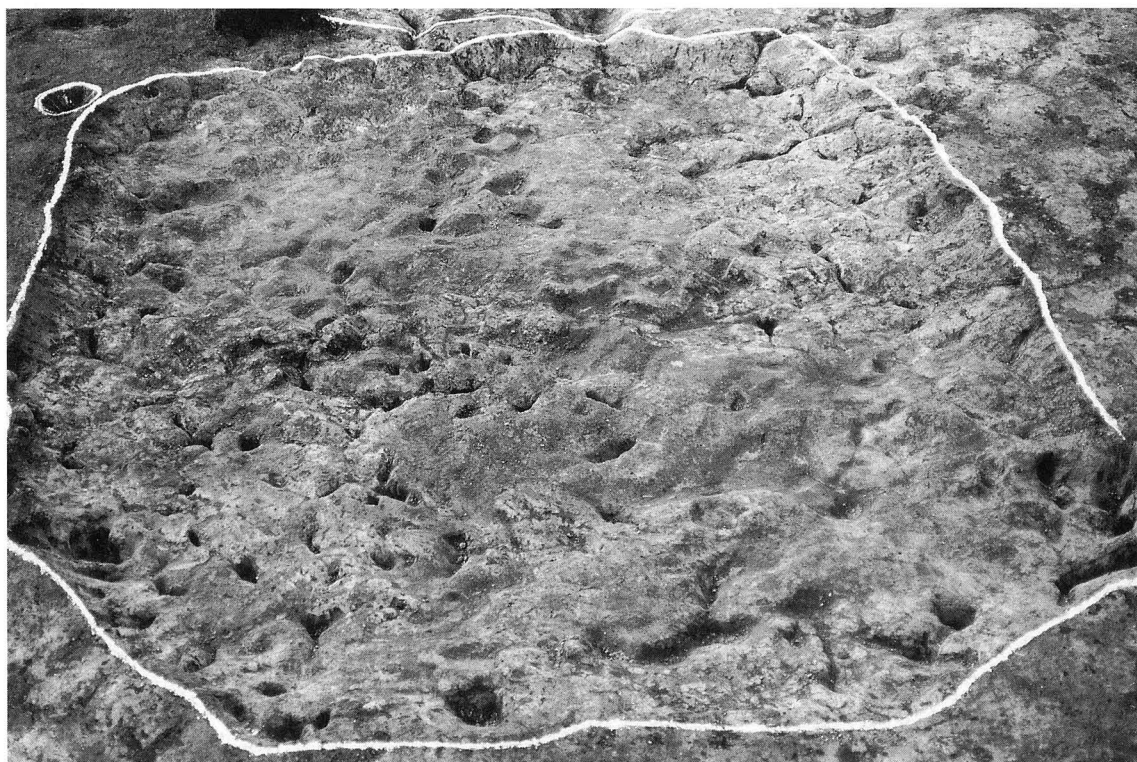
調査地全景（南より）



調査地北東部（南東より）



調査地全景（北より）



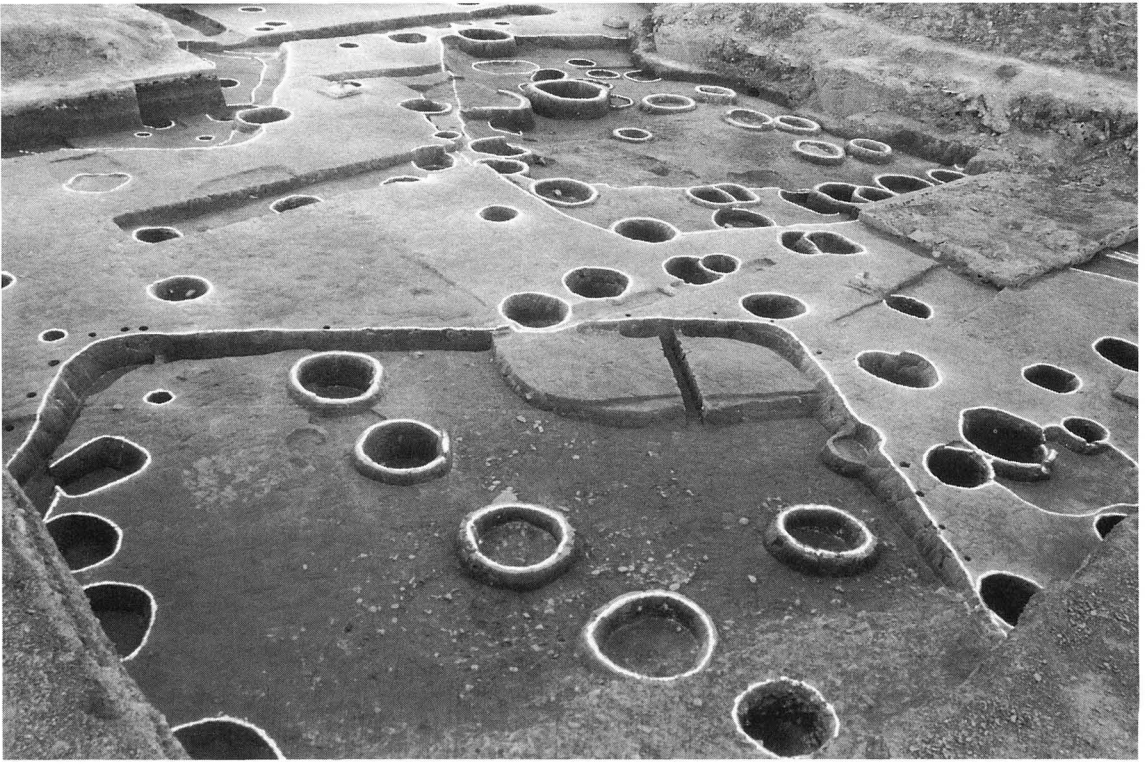
SX-1（東より）



包含層の掘り下げ



遺構検出状況（西より）



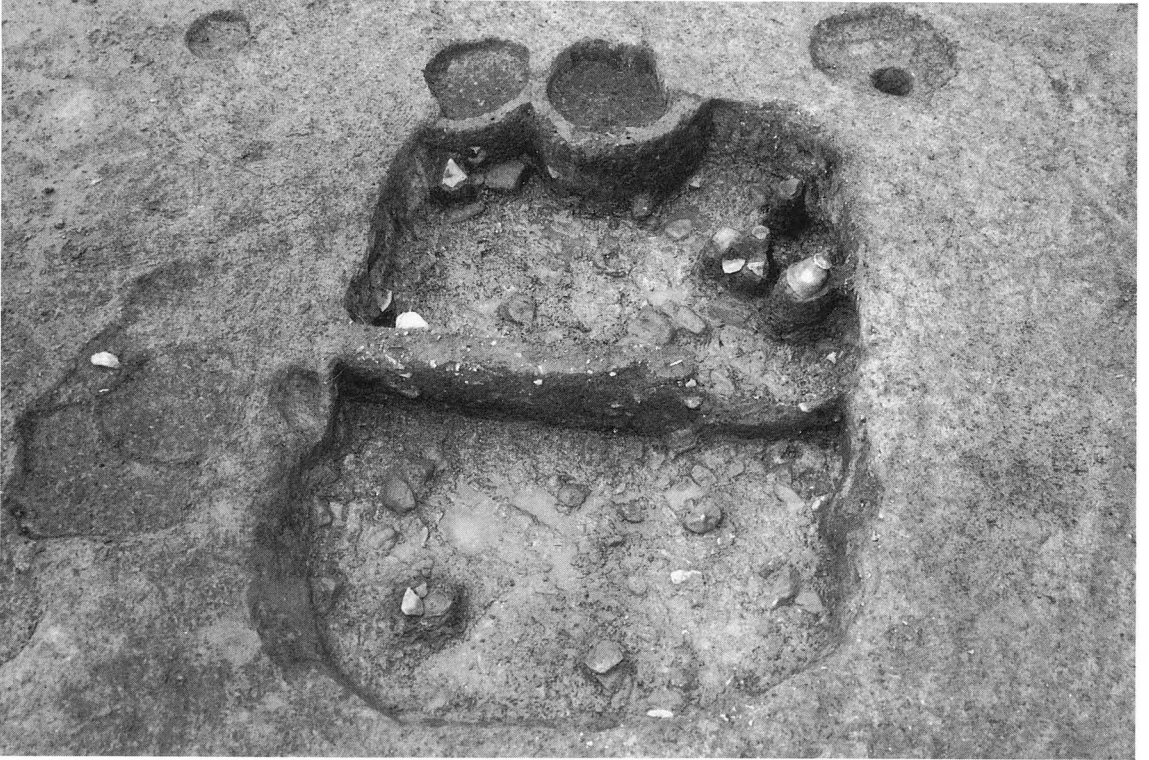
調査地全景（東北より）



SK-1 遺物出土状況



調査地全景（北より）



SK-7 遺物出土状況（東より）



A区全景 (東より)



B区全景 (東より)



SK-19遺物出土状況(西より)



SK-20遺物出土状況(西より)



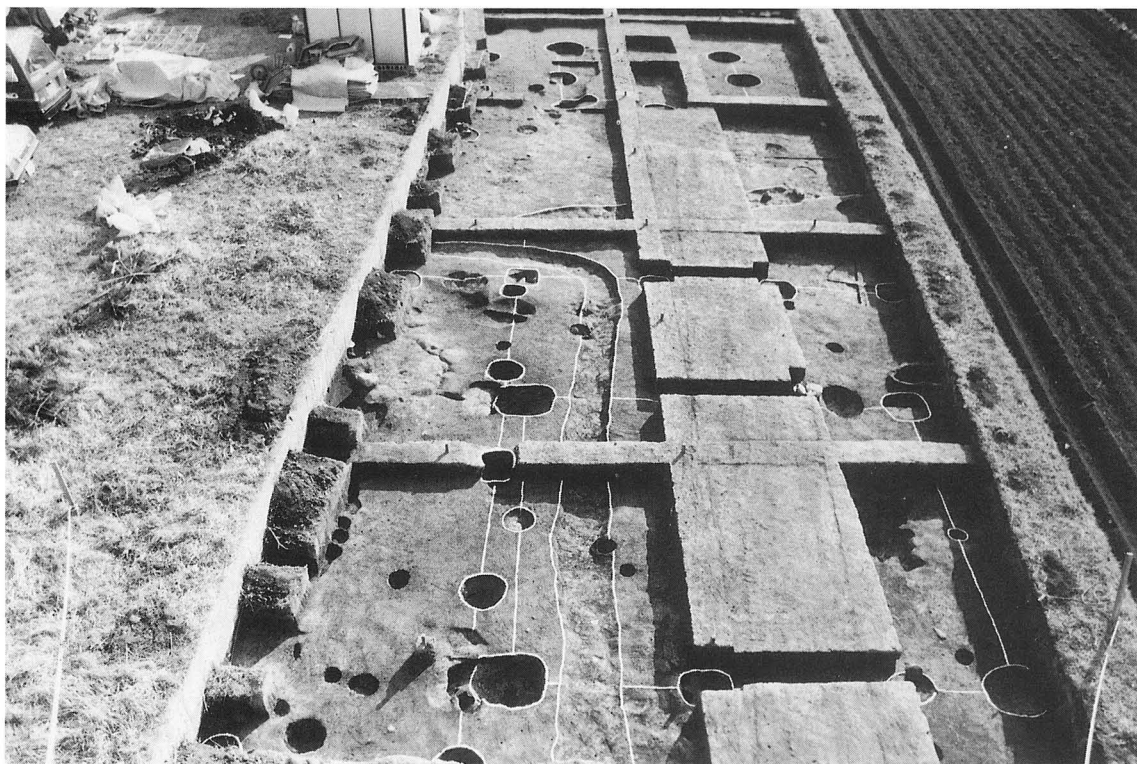
正殿の建物（回廊状遺構内北中央部）



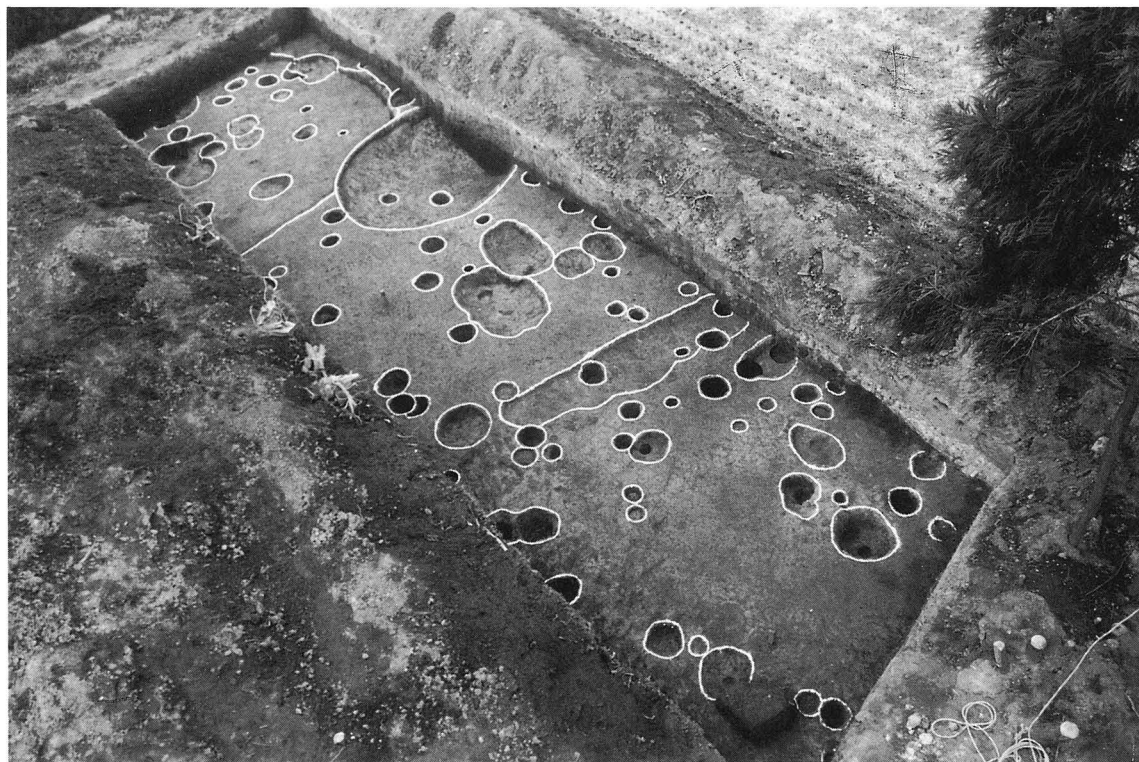
遺物出土状況（正殿の建物）



回廊状遺構区画C地区 (平成元年度寺域調査)



回廊状遺構区画B地区 (平成元年度寺域調査)



来住廃寺寺域調査D地区 (平成元年度)



柵列区画地内の掘立柱建物 (久米高畑遺跡第11次調査地)



遺物出土状況 (久米高畑遺跡第11次調査地)



柵列と掘立柱建物 (久米高畑遺跡第11次調査地)



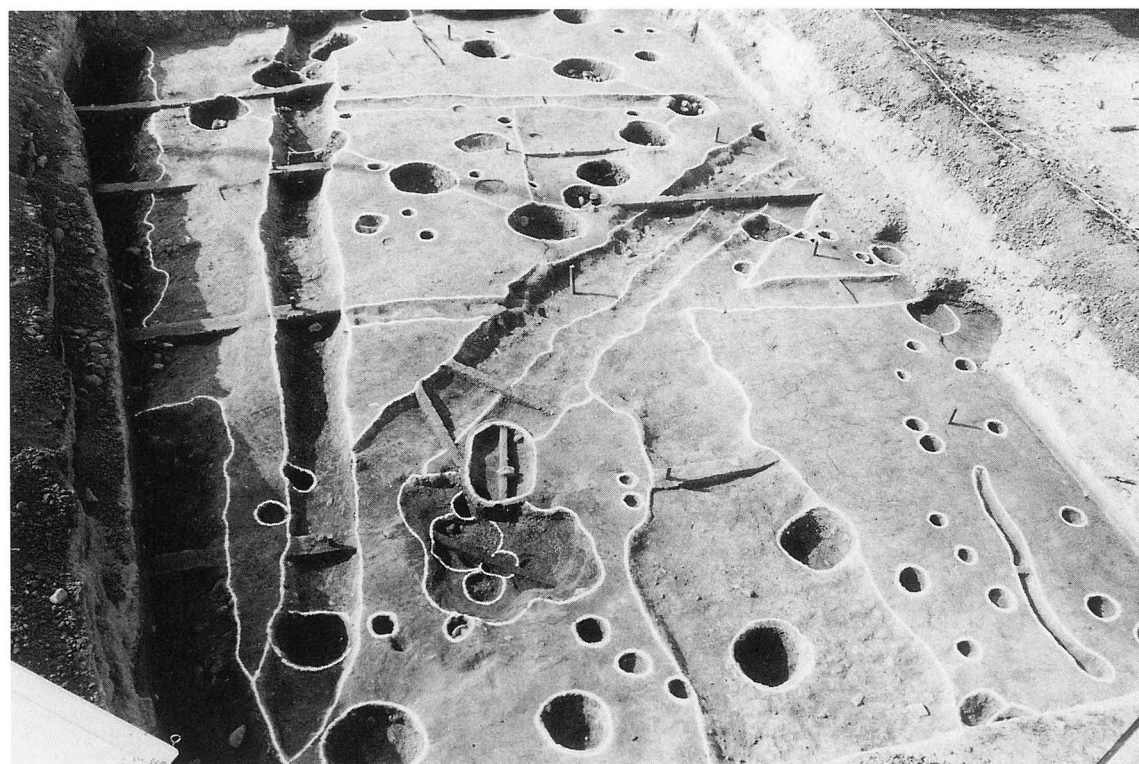
久米高畑遺跡第10次調査地



西北隅部区画溝 (久米高畑遺跡第10次調査地)



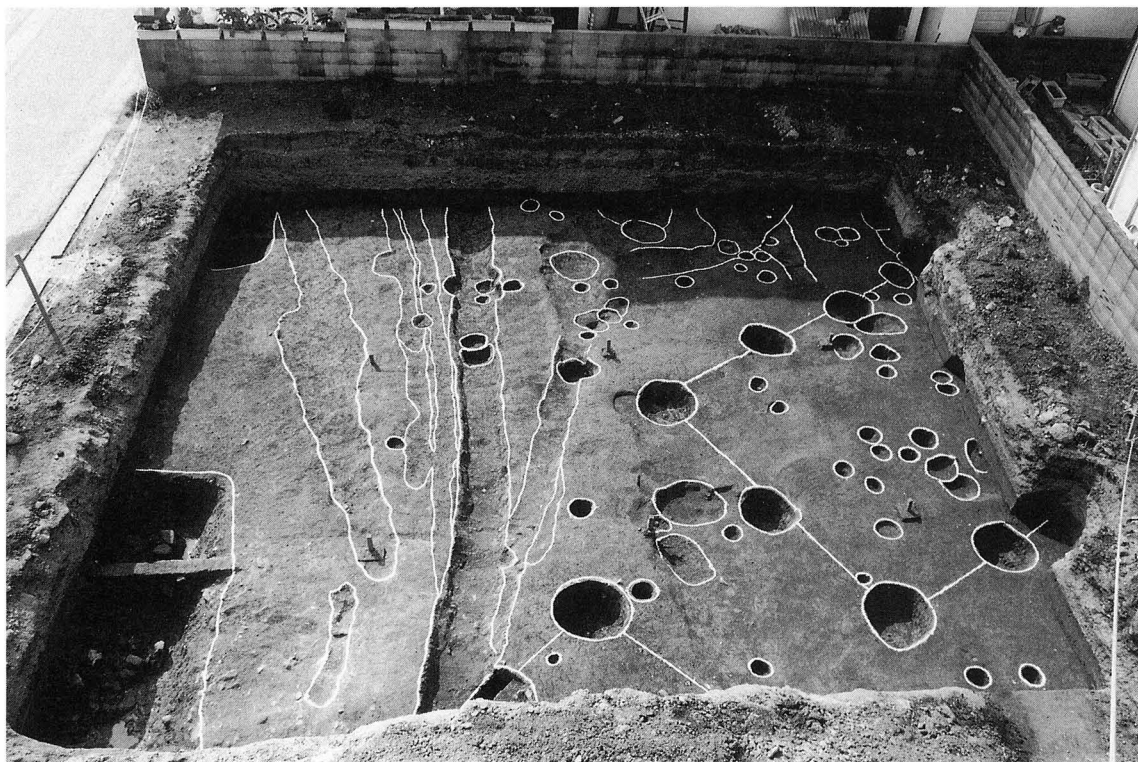
柵列と雨落ち溝 (久米高畑遺跡第12次調査地)



久米高畑遺跡第20次調査地 (北面)



遺物出土状況 (久米高畑遺跡第20次調査地)



久米高畑遺跡第20次調査地 (南面)

付図1 平成元年・2年度本格調査位置図



付図2 昭和63年・平成元年度確認調査位置図



付図3 平成2年度確認調査位置図



平成元年～2年度

松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ

平成3年3月31日発行

編集 発行／松山市教育委員会 文化教育課

松山市立埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67-6

T E L (0899) 23 - 6363

印 刷／原 印 刷 株 式 会 社

